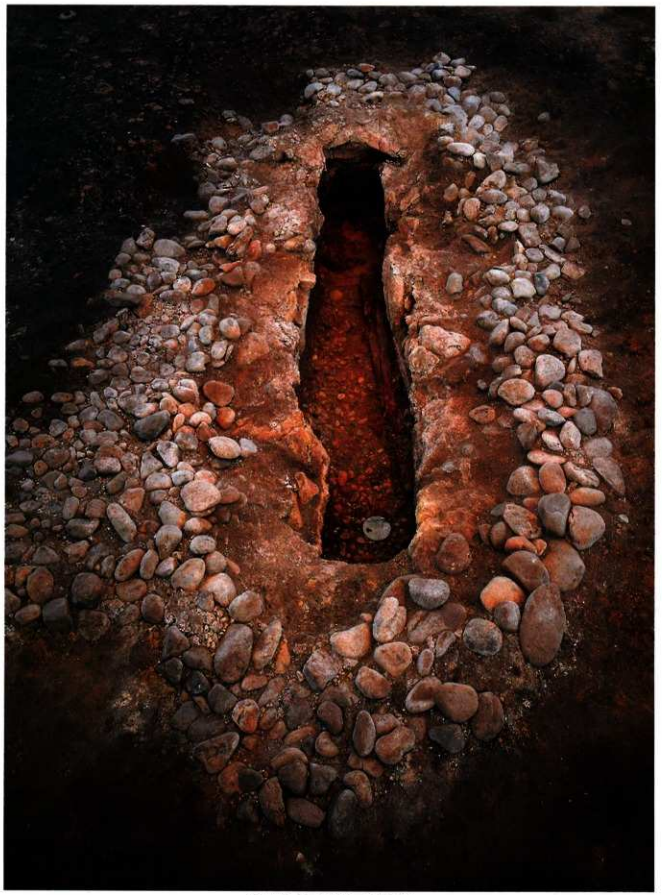
本村（ほんむら）遺跡

都市計画道路（産業通り）建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査

（弥生・古墳編）

平成16年３月

宇都宮市教育委員会

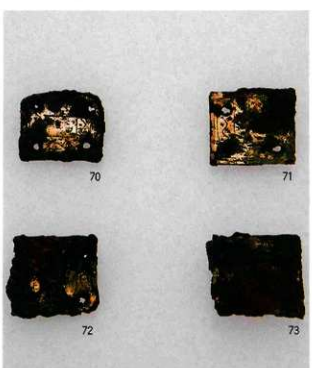


①本村2号墳主体部　箱式石棺

②「靫」出土状況（2号墳主体部副葬品）

③本村2号墳完掘状況（北方上空より俯瞰）

④乳文鏡（2号墳主体部副葬品）



⑤鉄地金銅張方形板状金具（2号墳主体部副葬品）

序

本遺跡は，戦前より弥生時代の遺跡として広く紹介されていました「東河田遺跡」に相当する位置にあります。弥生時代の遺跡が非常に少ない本市において，古くより弥生土器や土製紡錘車の出土が報告される当地は，貴重な遺跡であります。

今回の調査は，都市計画道路３・３・１０５（産業通り）の建設に伴い実施したものです。当該道路の建設にあたり，建設予定区域は周知の埋蔵文化財包蔵地にはなかったものの，当事業が大規模な公共事業であることに鑑み，改めて埋蔵文化財の分布調査を行いました。その結果，弥生時代の遺構を確認するとともにあらたに古墳の存在が確認され，本調査の実施にいたったものであります。

今回の本格的な調査によりまして，弥生時代後期の集落跡が確認され，古墳時代中期の円墳の埋葬施設からは，本市では発見例のきわめて少ない銅鏡を始めとする豊富な出土物を確認することができました。また，古墳に伴う大量の円筒埴輪と人物埴輪・馬型埴輪の存在や，それらを利用して周囲に造営された埴輪棺群も，当時の人々の埋葬理念や他界観を知るうえで貴重な発見例となりました。

現在，都市計画道路３・３・１０５（産業通り）は建設が進み，開通後は市民を始め多くの方々の交通に寄与するものとなります。当市及び教育委員会といたしましては，交通の安全と利便性を図るとともに，埋もれた郷土の歴史の一端を発掘調査によって掘り起こし，宇都宮の新たな歴史の一頁として書き加えられるよう，努力を積み重ねて参ります。本報告はその一環であり，多くの市民の方々に広くご活用いただければ幸いです。

末文になりましたが，今回の調査にあたり御指導を頂きました諸先生方並びに出土物の保存処理等に関しまして御指導，御協力をくださいました栃木県教育委員会，財団法人とちぎ生涯学習文化財団埋蔵文化財センター等の諸機関の方々に厚く御礼申し上げます。

平成16年３月

宇都宮市教育委員会
教育長　高梨　眞佐岐

例　言

1　本書は栃木県宇都宮市川田町1,387番地他に所在する，本村遺跡の発掘調査の報告書である。

2　調査は都市計画道路（産業通り）整備事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査として実施した。

3　調査は試掘調査を1995年10月18日～同年10月27日まで実施し，その結果を踏まえ，本調査として第１次調査を1994年７月20日～1995年４月11日，第２次調査を1996年７月17日～1997年６月11日，第３次調査を1997年６月13日～1998年３月30日，第４次調査を1998年５月19日～1999年４月８日，第５次調査を2001年９月５日～同年10月３日まで実施した。

4　調査は宇都宮市教育委員会が実施した。

5　本書の執筆及び編集は今平利幸の支援・助力を得て富川努が行った。

6　発掘調査から整理作業・報告書作成までの担当者は，以下の通りである。

平成６年度（第１次調査）

宇都宮市教育委員会教育長	藤田昌平
文化課長	横堀杉生
文化財保護係長	手塚英男
文化財保護係	富川　努
同	神野安伸

平成８年度（第２次調査）

宇都宮市教育委員会教育長	大塚一之
文化課長	横堀杉生
文化財保護係長	手塚英男
文化財保護係	梁木　誠
同	富川　努

平成９年度（第３次調査）

宇都宮市教育委員会教育長	大塚一之
文化課長	橘　晴征
文化財保護係長	手塚英男
文化財保護係	富川　努

平成10年度（第４次調査）

宇都宮市教育委員会教育長	大塚一之
文化課長	小野三男
文化財保護係長	手塚英男
文化財保護係	富川　努

平成13年度（第５次調査）

宇都宮市教育委員会教育長	高梨眞佐岐
文化課長	桜井敬朔
文化財保護係長	手塚英男
文化財保護係	富川　努

平成15年度（整理・報告）

宇都宮市教育委員会教育長	高梨眞佐岐
文化課長	北条和久
文化財保護係長	梁木　誠
文化財保護係	富川　努

7　第１図は国土地理院発行の５万分の１地形図「宇都宮」，第２図は２千５百分の１「宇都宮市都市計画図」を部分複製した。

8　経度・緯度は，Ｘ＝５８９７０・Ｙ＝４７６０（Ｅ－13杭）を基準としている（旧国家座標系）。

9　遺跡名の遺物の注記記号はＵＫＭ及びＵＫＨ－Ⅱ～Ⅴとした。

10　遺物及び図面・記録写真類は一括して宇都宮市教育委員会が保管・管理している。

11　発掘調査及び報告書作成においては，次の諸機関，諸氏のご協力を戴いた。記して感謝の意を表する。
（敬称略・順不同）

栃木県教育委員会文化財課，財団法人とちぎ生涯学習文化財団埋蔵文化財センター，栃木県立博物館，株式会社日本窯業史研究所，宮崎県埋蔵文化財センター，宇都宮市街路課，秋元陽光，海老原郁雄，大金宣亮，大川清，片平雅俊，鏑木理広，國井弘紀，車塚哲久，小森哲也，小森紀男，佐原眞，篠原祐一，大門和則，田熊清彦，田代隆，橋本澄朗，塙静夫，春成秀爾

12　発掘調査の参加者は次のとおりである。

赤羽郁美　阿久津正代子　井上征子　入江タカ子　入江つや子　入江文子　入江通子　入江光子
内海享　江俣律子　海老原友好　海老原幸子　大塚清子　大塚清　大塚まち子　金子君伊　金子清吾
北澤金次郎　小松寅雄　斉藤しのぶ　佐々木仁　篠崎安子　清水豊　杉山邦康　鈴木貴　高橋節子
玉木里子　円谷照夫　円谷みとり　手塚佳介　中島史江　中村カヨ子　西山孝子　浜崎陽子
福島広信　茂木真澄　吉澤良助

13　遺構・遺物の整理作業及び報告書作成における遺物実測・図面整理・遺物写真撮影等の参加者は次のとおりである。

大澤順子　大野節子　大森八重子　岡田有紀子　賀来孝代　君島朱美　鈴木道子　鈴木芳子
福田貴久栄　樋口静子

凡　例

1　挿図の縮尺は原則として，遺構1/60，カマド・炉1/30，遺物1/3で示した。また，遺物実測図番号と図版の遺物番号とは一致する。

2　断面図基準線は標高であり，平面図の方位は磁北を示す。

3　挿図中の[redacted]は焼土を示す。

4　文中及び図版中の略号は，ＳＩは住居跡，ＳＢは掘立柱建物跡，ＳＴは竪穴建物跡，ＳＫは土坑，ＳＤは溝，ＳＸは性格不明遺構を意味する。

5　遺構実測図の土層説明においては，次の略号を使用した。

ロームブロック＝ＬＢ　ローム粒子＝Ｌ粒　今市パミス＝ＩＰ　七本桜パミス＝ＳＰ　鹿沼パミス＝ＫＰ
炭化物粒子＝Ｃ粒　榛名山二ツ岳降下火山灰＝ＦＡ

※　なお，本報告（第１分冊）においては弥生時代及び古墳時代の遺構を記載するものとし，他の時代の遺構に関しては，別報告（第２分冊）するものとした。

目　次

序・例言・凡例

Ⅰ　調査の経過と方法
1　調査に至る経過 …… 1
2　調査の方法
①　調査の方針 …… 3
②　調査経過－発掘日誌抄－ …… 3

Ⅱ　位置と環境
1　地理的環境 …… 18
2　歴史的環境 …… 19

Ⅲ　調査結果
1　弥生時代
①　竪穴住居跡 …… 22
②　土坑 …… 48
③　遺構外遺物 …… 49
2　古墳時代
①　1号墳 …… 63
②　2号墳 …… 63
③　2号墳埋葬主体部 …… 72
④　埴輪棺 …… 90
⑤　周溝内遺物 …… 113
⑥　竪穴住居跡 …… 123
⑦　土坑 …… 125

Ⅳ　まとめ
1　弥生時代
①　二軒屋式・十王台式土器について …… 126
②　土製紡錘車・石製多孔円盤について …… 126
③　アメリカ式石鏃について …… 127
④　磨製石斧について …… 130
⑤　住居内施設「炉」について …… 130
⑥　本遺跡の弥生時代における諸問題 …… 130
2　古墳時代
①　遺構（墳丘及び周溝・埴輪）について …… 132
②　築造時期について …… 132
③　埋葬施設について …… 134
④　副葬品について …… 135
⑤　埋葬頭位及び副葬品の位置関係 …… 139
⑥　埴輪棺について …… 142

挿 図 目 次

第１図　調査区周辺地形及び調査地区図 …… 2
第２図　遺構配置図（弥生・古墳時代）…… 6
第３図　Ⅰ－A.C区全体図 …… 7
第４図　Ⅰ－B・Ⅲ－B区全体図 ……9・10
第５図　Ⅱ・Ⅲ-A・Ⅳ-A.D・Ⅴ区全体図……11・12
第６図　Ⅳ－B区全体図 ……13・14
第７図　栃木県中央部の地形分類図 …… 15
第８図　周辺の遺跡分布図 …… 16
第９図　SI01平・断・遺物平面図 …… 23
第10図　SI01出土遺物実測図 …… 24
第11図　SI02平・断面図 …… 24
第12図　SI02出土遺物実測図 …… 25
第13図　SI03平・断面図 …… 26
第14図　SI03出土遺物実測図（1）…… 27
第15図　SI03出土遺物実測図（2）…… 28
第16図　SI03遺物平面図 …… 28
第17図　SI04平・断・遺物平面図 …… 30
第18図　SI04出土遺物実測図 …… 31
第19図　SI05平・断・遺物平面図 …… 32
第20図　SI05出土遺物実測図 …… 33
第21図　SI06平・断面図 …… 34
第22図　SI06出土遺物実測図 …… 34
第23図　SI07平・断・遺物平面図 …… 36
第24図　SI07出土遺物実測図 …… 37
第25図　SI08出土遺物実測図 …… 37
第26図　SI08平・断・遺物平面図 …… 38
第27図　SI09出土遺物実測図 …… 39
第28図　SI09平・断面図 …… 40
第29図　SI10平・断面図 …… 41
第30図　SI11平・断面図 …… 42
第31図　SI11出土遺物実測図 …… 43
第32図　SI12平・断面図 …… 44
第33図　SI12遺物平面図 …… 45
第34図　SI12出土遺物実測図（1）…… 46
第35図　SI12出土遺物実測図（2）…… 47
第36図　SI13平・断面図 …… 48
第37図　SK75平・断面図 …… 48
第38図　SK75出土遺物実測図 …… 49
第39図　遺構外出土遺物（縄文土器）実測図 …… 50
第40図　遺構外出土遺物（弥生中期）実測図（1）… 53
第41図　遺構外出土遺物（弥生中期）実測図（2）… 54
第42図　遺構外出土遺物（弥生後期）実測図（1）… 55
第43図　遺構外出土遺物（弥生後期）実測図（2）… 56
第44図　遺構外出土遺物（弥生後期）実測図（3）… 57
第45図　遺構外出土遺物（弥生後期）実測図（4）… 58
第46図　遺構外出土紡錘車実測図 …… 58
第47図　遺構外出土石鏃・石器実測図 …… 59
第48図　1号墳現況図及びトレンチ調査図 …… 60
第49図　1号墳南側トレンチ平・断面図 …… 61
第50図　1号墳北側トレンチ平・断面図 …… 62
第51図　1号墳出土遺物実測図 …… 63
第52図　2号墳現況測量図 …… 65
第53図　2号墳平面図 …… 66
第54図　2号墳等高線図 …… 67
第55図　2号墳断面図（1）……69・70
第56図　2号墳断面図（2）…… 71
第57図　2号墳主体部出土状況図（1）…… 72
第58図　2号墳主体部出土状況図（2）…… 73
第59図　2号墳主体部出土状況図（3）…… 74
第60図　2号墳主体部平面図 …… 75
第61図　2号墳主体部断面図（1）…… 76
第62図　2号墳主体部断面図（2）…… 77
第63図　2号墳主体部断面図（3）…… 78
第64図　2号墳主体部展開図 …… 78
第65図　2号墳主体部遺物平面図 …… 79
第66図　2号墳主体部粘土状況図 …… 80
第67図　携帯式粘模式図 …… 81
第68図　2号墳主体部出土乳文鏡実測図 …… 81
第69図　2号墳主体部出土直刀実測図 …… 82
第70図　2号墳主体部出土鉄鏃実測図（1）…… 84
第71図　2号墳主体部出土鉄鏃実測図（2）…… 85
第72図　2号墳主体部出土鉄鏃実測図（3）…… 86

第73図　2号墳主体部出土鉄鏃実測図（4）・
　　刀子実測図 …… 87
第74図　2号墳主体部出土方形板状金具・弓弭・
　　臼玉・針状鉄製品実測図 …… 89
第75図　1号埴輪棺平・断面図 …… 90
第76図　1号埴輪棺構成埴輪実測図（1） …… 91
第77図　1号埴輪棺構成埴輪実測図（2） …… 92
第78図　2号埴輪棺平・断面図 …… 93
第79図　2号埴輪棺構成埴輪実測図 …… 94
第80図　3号埴輪棺平・断面図 …… 96
第81図　3号埴輪棺構成埴輪実測図（1） …… 97
第82図　3号埴輪棺構成埴輪実測図（2） …… 98
第83図　4号埴輪棺平・断面図 …… 99
第84図　4号埴輪棺構成埴輪実測図（1） …… 100
第85図　4号埴輪棺構成埴輪実測図（2） …… 101
第86図　5号埴輪棺平・断面図 …… 102
第87図　5号埴輪棺構成埴輪実測図（1） …… 103
第88図　5号埴輪棺構成埴輪実測図（2） …… 104
第89図　6号埴輪棺平・断面図 …… 105
第90図　6号埴輪棺構成埴輪実測図 …… 106
第91図　7号埴輪棺平・断面図 …… 107
第92図　7号埴輪棺構成埴輪実測図 …… 107
第93図　8号埴輪棺平・断面図 …… 108
第94図　8号埴輪棺構成埴輪実測図 …… 109
第95図　9号埴輪棺平・断面 …… 110
第96図　9号埴輪棺構成埴輪実測図（1） …… 111
第97図　9号埴輪棺構成埴輪実測図（2） …… 112
第98図　2号墳周溝内出土遺物（土師器）実測図 … 114
第99図　2号墳周溝内出土円筒埴輪実測図（1） …… 115
第100図　2号墳周溝内出土円筒埴輪実測図（2） …… 116
第101図　2号墳周溝内出土円筒埴輪実測図（3） …… 117
第102図　2号墳周溝内出土円筒埴輪実測図（4） …… 118
第103図　2号墳周溝内出土円筒埴輪実測図（5） …… 119
第104図　2号墳周溝内出土形象埴輪
　　（人物）実測図（1） …… 121
第105図　2号墳周溝内出土形象埴輪
　　（人物）実測図（2） …… 122
第106図　2号墳周溝内出土形象
　　（馬形）埴輪実測図 …… 122
第107図　SI14平・断面図 …… 123
第108図　SI14カマド平・断面図 …… 124
第109図　SI14出土遺物実測図 …… 124
第110図　Ⅰ－B区土坑平・断面図 …… 125
第111図　埋葬時復元想定図（第1案） …… 141
第112図　埋葬時復元想定図（第2案） …… 141
第113図　栃木県内古墳の埋葬頻位 …… 141

表目次

第1表　本村遺跡周辺遺跡一覧表 …… 17
第2表　本村遺跡周辺古墳一覧表 …… 18
第3表　2号墳土層内容一覧 …… 68
第4表　2号墳主体部出土鉄鏃観察表 …… 88
第5表　1号埴輪棺構成埴輪観察表 …… 93
第6表　2号埴輪棺構成埴輪観察表 …… 95
第7表　3号埴輪棺構成埴輪観察表 …… 99
第8表　4号埴輪棺構成埴輪観察表 …… 102
第9表　5号埴輪棺構成埴輪観察表 …… 105
第10表　6号埴輪棺構成埴輪観察表 …… 106
第11表　7号埴輪棺構成埴輪観察表 …… 107
第12表　8号埴輪棺構成埴輪観察表 …… 108
第13表　9号埴輪棺構成埴輪観察表 …… 113
第14表　2号墳周溝内出土円筒埴輪観察表 …… 120
第15表　アメリカ式石鏃・扁平片刃石斧
　　出土遺跡一覧（関東地方） ……128・129
第16表　県内竪穴系主体部古墳一覧（2～8期）…… 133
第17表　関東地方における竪穴系主体部内
　　出土鏡一覧（古墳時代中期）…… 136
第18表　関東地方における竪穴系主体部内
　　出土鏡一覧（古墳時代後期）…… 137
第19表　鞍出土一覧 …… 138
第20表　西都原・本村副葬品比較一覧 …… 139
第21表　県内出土埴輪棺一覧表 …… 143

写 真 図 版 目 次

PL1 ①本村遺跡周辺遠景（南上空から）

PL2 ①SI03～SI06完掘状況遠景（Ⅲ－B区・西上空から）

PL3 ①1号墳遠景（北上空から）
②1号墳周溝完掘状況（Ⅳ－C区・垂直上空から）

PL4 ①Ⅰ－A区完掘全景（北西から）
②Ⅰ－B区完掘全景（西から）
③Ⅰ－C区完掘全景（東から）
④Ⅲ－A区完掘全景（北から）
⑤Ⅲ－B区完掘全景（西から）
⑥Ⅳ－A（W）区完掘全景（南から）
⑦Ⅳ－A（E）区完掘全景（南から）
⑧Ⅳ－B区完掘全景（西から）

PL5 ①Ⅳ－D区完掘全景（北から）
②Ⅴ区完掘全景（西から）
③SI01完掘状況（南から）
④SI01完掘状況（北から）
⑤SI01炉完掘状況（南から）
⑥SI01遺物出土状況（南から）
⑦SI01遺物出土状況（西から）
⑧SI02完掘状況（西から）

PL6 ①SI02遺物出土状況（北から）
②SI03完掘状況（南から）
③SI03，SD06完掘状況（南から）
④SI03遺物出土状況（南東から）
⑤SI03土製紡錘車出土状況（南東から）
⑥SI03石鏃出土状況（南東から）
⑦SI04完掘状況（北から）
⑧SI04炉完掘状況（南から）

PL7 ①SI04土製紡錘車出土状況（南西から）
②SI05完掘状況（南から）
③SI05遺物出土状況（南から）
④SI05炉内遺物出土状況（南から）
⑤SI05・06完掘状況（北から）
⑥SI06遺物出土状況（北から）
⑦SI06炉完掘状況（南から）
⑧SI07完掘状況（南から）

PL8 ①SI07炉完掘状況（南東から）
②SI08完掘状況（南から）
③SI08遺物出土状況（南から）
④SI09完掘状況（南東から）
⑤SI09遺物出土状況（南東から）
⑥SI10完掘状況（南東から）
⑦SI11完掘状況（北から）
⑧SI11完掘状況（南東から）

PL9 ①SI12完掘状況（北西から）
②SI12完掘状況（北東から）
③SI12炉東西セクション（南東から）
④SI12炉完掘状況（南西から）
⑤SI13完掘状況（西から）
⑥SK75完掘状況（西から）
⑦石製多孔円盤出土状況（南から）
⑧1号墳遠景（南から）

PL10 ①1号墳南周溝完掘状況（南西から）
②1号墳南周溝遺物出土状況（東から）
③1号墳北周溝完掘状況（北東から）
④1号墳北周溝完掘状況（北西から）
⑤2号墳調査前状況・C区切り通しセクション（南西から）
⑥2号墳B区表土除去状況（南東から）
⑦2号墳B区墳丘裾部埴輪出土状況（南東から）
⑧2号墳墳頂部東西セクション（南から）

PL11 ①2号墳墳丘トレンチセクション（北から）
②2号墳D区サブトレンチNo1セクション(北から)
③2号墳D区土橋状遺構セクション及び
周溝内遺輸出土状況（北東から）
④2号墳A区サブトレンチNo1セクション(西から)
⑤2号墳周溝完掘状況及び南北セクション（西から）
⑥2号墳サブトレンチNo1セクション及び4号埴輪棺
出土状況（南西から）
⑦2号墳墳頂部東西セクション東部（南から）
⑧2号墳墳頂部東西セクション中央部（南から）

PL12 ①2号墳墳頂部東西セクション西部（南から）
②2号墳C区北トレンチセクション（西から）
③2号墳C区サブトレンチNo1セクション(北西から)
④2号墳主体部出土位置（南東から）
⑤2号墳主体部被覆粘土層確認状況（南西から）
⑥2号墳主体部取出土状況（北西から）
⑦2号墳主体部石棺被覆礫除去状況（北西から）
⑧2号墳主体部石棺天井石確認状況（北西から）

PL13 ①2号墳主体部石棺天井石除去状況（北東から）
②2号墳主体部石棺内部確認状況（北東から）
③2号墳主体部乳文鏡出土状況（北西から）
④2号墳主体部箱式石棺確認状況（北東から）

PL14 ①2号墳主体部石棺南壁（北東から）
②2号墳主体部石棺北壁（南西から）
③2号墳主体部床面礫除去状況（北東から）
④2号墳主体部箱式石棺本体（北西から）
⑤2号墳西周溝遺物出土状況（北西から）
⑤2号墳A区周溝内埴輪出土状況（北東から）
⑦2号墳A区周溝完掘状況（南東から）

PL15 ①2号墳西周溝完掘状況（西から）
②1号埴輪棺出土状況（北西から）
③1号埴輪棺被覆埴輪片出土状況（北から）
④1号埴輪棺本体出土状況（南から）
⑤1号埴輪棺本体出土状況（東から）
⑥1号埴輪棺下部敷設埴輪片出土状況（北から）
⑦2号埴輪棺被覆埴輪片出土状況及び
SD01セクション（北から）
⑧2号埴輪棺本体出土状況（南から）

PL16 ①3号埴輪棺被覆埴輪片出土状況（北東から）
②3号埴輪棺本体出土状況（北から）
③3号埴輪棺下部敷設埴輪片出土状況（北から）
④4号埴輪棺被覆埴輪片出土状況（北東から）
⑤4号埴輪棺本体出土状況（南東から）
⑥5号埴輪棺被覆埴輪片出土状況（北西から）
⑦5号埴輪棺本体出土状況（南から）
⑧6号埴輪棺被覆埴輪片出土状況（北西から）

PL17 ①6号埴輪棺本体出土状況（北西から）
②4・5・6号埴輪棺出土状況（南西から）
③7号埴輪棺被覆埴輪片出土状況（東から）
④7号埴輪棺本体出土状況（東から）
⑤8号埴輪棺被覆埴輪片出土状況（南東から）
⑥8号埴輪棺本体出土状況（南東から）
⑦9号埴輪棺被覆埴輪片出土状況（南東から）
⑧9号埴輪棺本体出土状況（南東から）

PL18 ①SK39側壁抉込状況（東から）
②SK39側壁完掘状況（西から）
③SK42側壁抉込状況（東から）
④SK42側壁完掘状況（西から）
⑤第4次調査発掘参加者

PL19 ①SI01出土遺物
②SI02出土遺物
③SI03出土遺物（1）

PL20 ①SI03出土遺物（2）
②SI04出土遺物
③SI05出土遺物
④SI06出土遺物

PL21 ①SI07出土遺物
②SI08出土遺物
③SI09出土遺物
④SI11出土遺物
⑤SI12出土遺物（1）

PL22 ①SI12出土遺物（2）
②SK75出土遺物
③遺構外出土遺物（縄文土器）
④遺構外出土遺物（弥生中期－1）

PL23 ①遺構外出土遺物（弥生中期－2）
②遺構外出土遺物（弥生後期－1）

PL24 ①遺構外出土遺物（弥生後期－2）

PL25 ①遺構外出土遺物（弥生後期－3）
②遺構外出土紡錘車
③遺構外出土石鏃・石器

PL26 ①1号墳出土遺物
②2号墳主体部出土直刀
③2号墳主体部出土鉄鏃（1）

PL27 ①2号墳主体部出土鉄鏃（2）
②2号墳主体部出土刀子
③2号墳主体部出土弓弭・両頭金具・臼玉・針状金具

PL28 ①1号墳輪棺構成埴輪

PL29 ①2号墳輪棺構成埴輪
②3号墳輪棺構成埴輪（1）

PL30 ①3号墳輪棺構成埴輪（2）

PL31 ①4号墳輪棺構成埴輪

PL32 ①5号墳輪棺構成埴輪

PL33 ①6号埴輪棺構成埴輪　③8号埴輪棺構成埴輪（1）
②7号埴輪棺構成埴輪

PL34 ①8号埴輪棺構成埴輪（2）　②9号埴輪棺構成埴輪（1）

PL35 ①9号埴輪棺構成埴輪（2）

PL36 ①周溝内出土埴輪（1）

PL37 ①周溝内出土埴輪（2）

PL38 ①周溝内出土埴輪（3）

PL39 ①2号墳出土人物埴輪

PL40 ①2号墳出土馬形埴輪破片　③SI14出土遺物
②2号墳周溝内出土遺物

調査風景

Ⅰ　調査の経過と方法

1　調査に至る経過

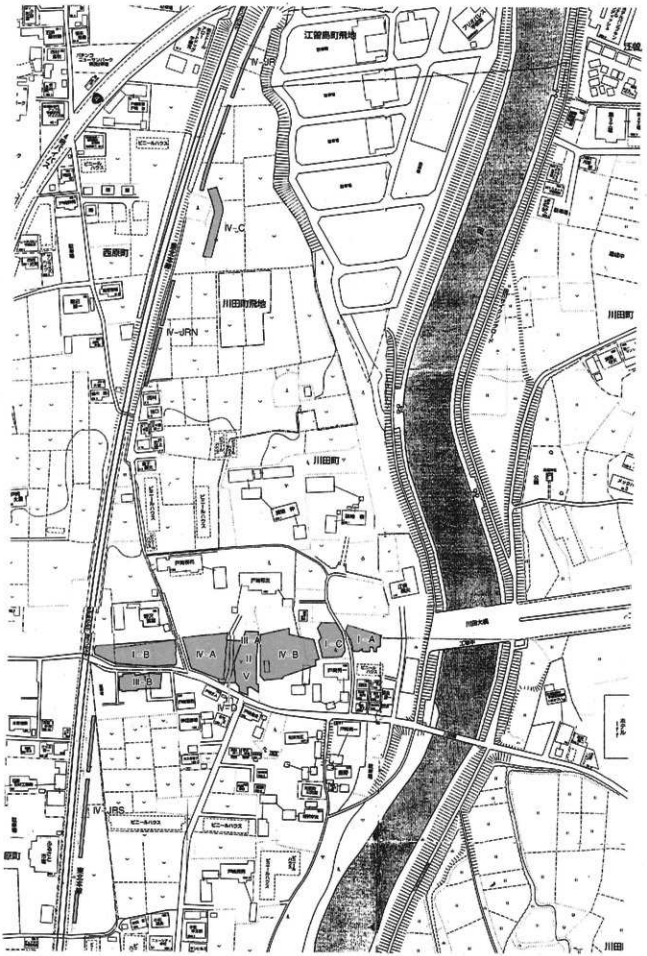
本遺跡は「宇都宮郊外東河田の弥生式土器」[1]に紹介されるなど，戦前から弥生時代後期の遺跡として知られており，田中国男の収集した弥生式土器片や土製紡錘車は，当該時期の出土遺物が希少な本市において貴重な資料である[2]。田中によって紹介された「東河田遺跡」は「遺跡の地点は下野国河内郡雀宮町大字東河田（東川田）小字本村1368番地である。即ち地図を開いてみると宇都宮方面から南下した110m等高線が東河田本村で西に曲がる付近に相当する。東方は40mにして崖下数mに田川（鬼怒川支流）を臨み，南は緩やかな谷になっている。」とあり，本遺跡南側に隣接する地点に相当すると思われ，一連の遺跡であると考えられる。

本遺跡周辺は，西側をJR宇都宮線が南北に通り，その以西は戦後急速に市街化が進み，現在はほぼ宅地となっているものの，調査地区周辺は市街化調整地区となっており，畑地の広がる中に農家が点在する状況であり，現在でも土器片の散在が認められる地域として残されている。宇都宮市遺跡台帳には，本遺跡北方に本村上野遺跡（弥生時代の集落跡・古墳）が，南方に西原境遺跡（縄文・古墳～平安時代の集落跡）の登録がある[3]。

平成元年９月に，栃木県教育委員会文化課より，平成２年度以降道路建設事業実施個所に係る遺跡所在調査の依頼があり，同年10月調査の結果，付近には周知の遺跡が多く現状保存が困難な場合には，発掘調査が必要であると回答した。続いて平成４年10月に，宇都宮市街路課より都市計画道路3・3・105（産業通り）建設計画に伴う埋蔵文化財の取り扱いに関する事前協議があった。当該道路建設予定地は周知の埋蔵文化財包蔵地ではなかったが，当事業が大規模な公共事業であることに鑑み，改めて埋蔵文化財の分布調査を行った結果，古墳１基が確認されるとともに土器片の散在が認められたため，平成５年度に遺跡の確認調査を実施することとなった。

平成５年10月18日～27日の期間において，当該建設予定地区8,200㎡のうち買収済みの約2,300㎡についての遺構確認調査を実施したところ，古墳及び住居跡等の遺構と土器及び埴輪片を確認した。このため，宇都宮市街路課と当教育委員会が協議を重ねた結果，当地を現状で保存することは不可能であるとの結論に達し，平成６年度から記録保存のための発掘調査を実施することとなった[4]。

註(1)田中国男　1939　「宇都宮郊外東河田の弥生式土器」(『考古学』第10巻第２号)
註(2)宇都宮市史編纂委員会　1979『宇都宮市史』第１巻　原始・古代編
註(3)宇都宮市教育委員会　1983『宇都宮市埋蔵文化財等遺跡詳細分布確認調査報告書－宇都宮の遺跡－』
註(4)宇都宮市教育委員会　1993『宇都宮市文化財年報第10号』



第1図　調査区周辺地形及び調査地区図（1:3,000）

2　調査の方法

①　調査方針

都市計画道路3・3・105（産業通り）は，平成2年度に事業認可を受け，翌平成3年度より用地取得を実施していたが，本調査に着手した平成6年度当時未取得用地が多く，調査区の設定にあたっては，既取得用地のうち家屋等の移転工事等の終了した地区より随時調査を実施することとした。また，計画地内を南北に縦断する生活道路3路線及び調査区東端は田川低地に落ち込む斜面となっていることなどから，当該部分は調査区より除外することとなった。以上の状況から，開発対象面積11,000㎡に対し，調査面積は10,500㎡となった。

確認調査は，重機により幅約1.5mのトレンチを5m間隔で掘削して表土を除去し，人力によって遺構の探査を実施した。その結果，古墳1基・住居跡4軒・土坑36基・溝3条の所在と弥生土器・埴輪・土師器を確認した。

本調査にあたっては，確認調査時に確認した古墳（2号墳）が東西に長い調査区のほぼ中央に位置することから，墳丘西側裾部分を起点とし，南北軸（磁北）を基準とする10m方眼の設定を行った。南北軸の方向はN－6°－Wである。この設定は第1次から第3次調査まで使用したが，第4次調査時には国家座標に基づく計測を実施したため，本報告書の記載は国家座標系に統一するものとした。

標高点は，「栃木県宇都宮市西原町461番地の口先」所在の一等水準点（国道4号線西原交差点の北方約70m）第2050号（112.0138m）より移動して設定した。

調査は原則として重機による表土除去をまず実施し，その後人力による遺構確認作業，遺構の排土を実施したが，2号墳においては全て人力による遺構確認作業及び遺構の排土とした。遺構の測量は，原則として調査補助員の協力を得てオフセット測量で実施したが，1号墳調査においては航空測量，2号墳の墳丘測量においては平板測量を用いた。調査後の埋め戻しは，重機によって実施した。

②　調査経過－発掘日誌抄－

調査地区内は宅地及び農地（畑地）として利用されていたが，調査に先立って移転・伐採等の終了していた調査区東端において，平成6年7月20日～22日に重機による表土の排除を実施し，7月25日に基準杭を打設，調査作業に取りかかった。以下，5次にわたる調査経過の概要については，調査日誌抄に記すとおりである。

【第1次調査－平成6年度－】

'94. 7.27.　SD01調査開始。
'94. 8. 4.　SD02調査開始。
'94. 8. 9.　SD03調査開始。
'94. 8.11.　SD04，西部遺構調査開始。
'94. 8.23.　北西部遺構調査開始。
'94. 9. 9.　SD03北端部等高線図作成。
'94. 9.19.　Ⅰ-B区表土除去。Ⅰ-A区完了。
'94. 9.22.　Ⅰ-B区ジョレンがけ，グリッド設定。
　　弥生時代の住居跡1軒を確認。
'94.10.11.　SI01調査開始。
'94.10.19.　SD05調査開始。
'94.10.21.　SI01地床炉調査後，完掘。
'94.11. 4.　SD05,06調査完了。
'94.11. 7.　Ⅰ-B区調査終了。
'95. 2.20.　Ⅰ-C区表土除去。グリッド設定。
'95. 2.23.　Ⅰ-C区ジョレンがけ。
　　古墳時代の住居跡検出。
'95. 3. 2.　調査区南部に溝を検出。

'94.10. 7. 調査区南端に溝を確認。
'95. 3. 7. SI02プラン確認。
'95. 3. 9. 方形竪穴遺構を確認。
'95. 3.13. 西部SK群調査開始。
'95. 3.15. 北部遺構調査開始。

【第2次調査－平成8年度－】

'96. 9.17. 2号墳調査開始。墳丘上グリッド設定。
'96. 9.18. 墳丘南東部より墳丘測量開始。
'96. 9.24. 墳丘測量完了。
'96.10.14. 表土除去開始。下草刈り作業。
'96.10.15. 墳丘裾部より線刻埴輪確認。
'96.10.16. 埴輪片多数検出。
'96.10.18. 周溝調査開始。二畔屋式土器を検出。
'96.10.22. 墳丘中段部に配石遺構を確認。
'96.10.23. 墳丘裾部に平坦部を確認。
'96.10.25. 墳丘裾部をめぐる埴輪列を確認。
'96.10.28. 周溝埋土下層より土師器片及び銀杏葉線刻埴輪片を検出。
'96.10.29. 周溝埋土上層より磨製石斧出土。
'96.11. 5. 周溝底確認。
'96.11. 6. 2号墳北部に弥生期の遺構を確認。
'96.11.20. 墳丘上層調査開始。
'96.11.21. 墳丘中層調査開始。
'96.11.22. 周溝外縁に1号埴輪棺を検出。
'96.11.26. 周溝中層に密集する埴輪片を確認。
'96.11.28. 1号埴輪棺測量開始。
'96.11.29. 2号埴輪棺を検出。
'96.12. 2. 周溝を撹乱するSD01を検出。
'96.12. 3. 3号埴輪棺を検出。
'96.12.12. 周溝下層検出作業開始。

【第3次調査－平成9年度－】

'97. 6.16. 2号墳北側調査区表土除去開始。
'97. 7. 7. 墳丘下層盛土除去開始。
'97. 9.18. 旧表土除去作業開始。石製多孔円盤検出。
'97. 9.29. 5号埴輪棺を検出。Ⅲ－A区調査開始。
'97.10. 1. 弥生時代の竪穴住居跡を検出。
'97.10. 2. 6号埴輪棺を検出。
'97.10. 8. 5・6号埴輪棺採り上げ作業実施。
'95. 3.20. 中央部～東部遺構調査。
'95. 3.27. 調査区東部の溝調査。
'95. 4. 7. SI02竈調査。
'95. 4.10. 井戸の断ち割り作業。
'95. 4.11. Ⅰ-C区埋め戻し作業。

'96.12.16. 周溝最下層にFAの堆積を確認。
'96.12.24. 周溝外縁部に4号埴輪棺を検出。
'97. 1.14. 墳丘等高線図作成。
'97. 1.28. 墳頂部より盛土の除去作業開始。
'97. 2.28. 主体部上層の粘土層を確認。
'97. 3. 5. 主体部築造時の整地層を確認。
'97. 3. 7. 主体部の礫層を確認。
'97. 3. 8. 第1回現地説明会実施。
'97. 3.12. 主体部を覆う粘土層に槨を検出。
'97. 3.26. 主体部西出土「鍬」保存処理。
'97. 4. 3. 天井部凝灰岩取り外し開始。
'97. 4. 8. 「鍬」の保存処理作業実施。
'97. 4.14. 石棺天井石の取り外し作業開始。
'97. 4.15. 組合せ式箱式石棺の構造を確認。漆塗りの丸木弓を検出。
'97. 4.16. 銅鏡（乳文鏡）を検出。
'97. 4.17. 副葬品（太刀,鉄鏃,刀子,金銅製金具,白玉）を検出。
'97. 4.24. 主体部写真撮影。
'97. 5. 1. 鉄鏃採り上げ作業実施。
'97. 5. 9. 2号墳航空撮影。
'97. 5.10. 第2回現地説明会。
'97. 6. 3. 石棺本体の解体作業開始。
'97. 6.11. 主体部堀方写真撮影。調査終了。

'97.10.20. 住居内より土製紡錘車を検出。
'97.11. 4. 2号墳周溝東端追加調査実施。
'97.11. 5. SI02（弥生時代）調査開始。2号墳周溝東端より形象埴輪を検出。
'97.11. 6. SI02より十王台式壺型土器を検出。
'97.11.25. Ⅲ-B区確認調査開始。
'97.12. 3. 1号墳周溝（JR-N区）調査開始。

'97.10.17. SI01（弥生時代）調査開始。
'98. 2.10. SI03・SI04（弥生時代）を検出。
'98. 2.13. SK39/42（傾壁抉込土坑墓）を検出。
'98. 2.19. SI03より土製紡錘車を検出。
'98. 2.23. SI05・SI06（弥生時代）を検出。
'98. 3. 5. SK58（方形竪穴遺構）を検出。

【第4次調査－平成10年度－】

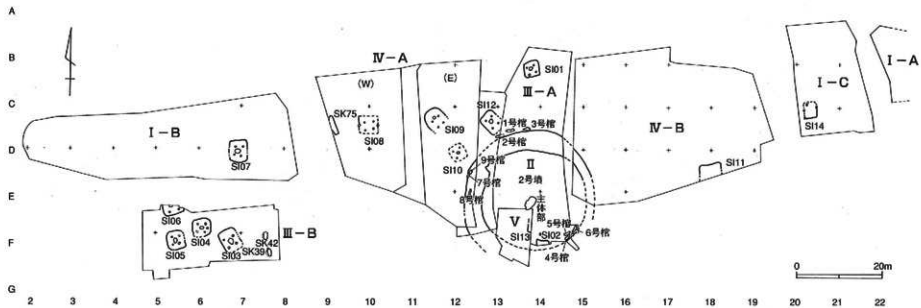
'98. 5.19. Ⅳ-A区表土除去作業。Ⅲ-B区航空撮影。
'98. 5.21. 2号墳周溝西側部分を確認。
'98. 6. 8. SI07（弥生時代）を検出。
'98. 7. 2. SI08（弥生時代）を検出。
'98. 7. 7. SK75（弥生時代）を検出。
'98. 7. 8. SI08・SI09（弥生時代）を検出。
'98. 7. 9. SI08より土製紡錘車を検出。
'98. 7.14. A-W区完掘。A-E区遺構調査開始。
'98. 8. 5. SD13に木橋跡を確認。
'98. 8.17. SI09調査開始。2号墳周溝調査開始。
2号墳周溝埋土より7号埴輪棺を検出。
'98. 8.25. 2号墳周溝埋土より8号埴輪棺を検出。
'98. 9. 2. 2号墳周溝埋土より9号埴輪棺を検出。
'98. 9. 3. 9号埴輪棺本体の馬型埴輪を確認。
'98. 9. 4. 9号埴輪棺本体の朝顔型埴輪を確認。
'98. 9. 9. A-E区完掘。
'98. 9.11. Ⅳ-A区航空撮影。
'98. 9.25. Ⅳ-B区表土除去作業開始。
'98. 9.26. 第3回現地説明会実施。
'98.10. 2. 中世の集落跡を確認。
'98.10. 5. Ⅳ-B区遺構調査開始。
'98.10.29. 方形竪穴遺構を検出。
'98.11. 6. SI11（弥生時代）を検出。
'98.11.18. SK143は（有段土坑）を検出。
'98.11.26. 横川西小学校6年生遺跡見学。
'98.12. 3. SK150（工房跡）に多量の鉄滓を検出。

【第5次調査－平成13年度－】

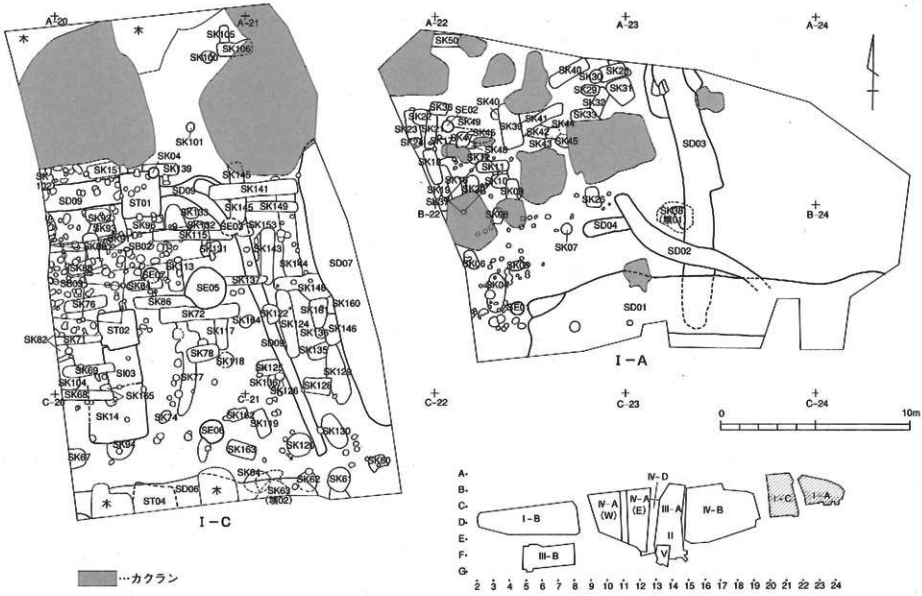
'01. 9. 5. 南西周溝の表土除去作業開始。
'01. 9.13. SI13を検出，調査開始。
'01. 9.17. 周溝底埋土よりFAを検出。
'98. 2. 5. Ⅲ-B区本調査開始。表土除去作業。
SI03よりアメリカ式石鏃を検出。
'98. 3. 6. SI04より土製紡錘車を検出。
SK53（地下式壙）を検出。
'98. 3.25. Ⅲ－B区遺構全景撮影終了。
'98. 3.30. Ⅲ－B区調査終了。

'98.12. 7. 1号墳現況航空撮影。
'98.12. 8. SK159,173,174（地下式壙）を検出。
'98.12.16. SK173（地下式壙）に土師質土器多量検出。
'98.12.17. 2号墳周溝部調査継続。
'98.12.21. SE03～08検出。
'99. 1.11. Ⅳ-C区（1号墳）調査開始。
'99. 1.13. 1号墳周溝を検出。
'99. 1.28. SK205（地下式壙）に土師質土器多量検出。
'99. 2. 2. 1号墳周溝調査開始。
'99. 2.10. Ⅳ-B区及び1号墳航空撮影。
Ⅳ-D区（2号墳西周溝）調査開始。
'99. 2.15. SE02～07断割り調査。
'99. 2.16. SE01より銅銭多量検出。
2号墳周溝埋土より馬形埴輪破片を検出。
'99. 2.17. JR-S区調査開始。
'99. 2.22. Ⅳ-D区よりSI12（弥生時代）を検出。
'99. 3. 2. SI12調査開始。
2号墳西周溝より多量の埴輪片を検出。
'99. 3. 5. 2号墳西周溝より土製紡錘車を検出。
'99. 3. 9. 2号墳西周溝より人物埴輪を検出。
SI12より石鏃を検出。
'99. 3.10. SD01より洪武通宝（明銭）を検出。
'99. 3.18. SI12より土製紡錘車を検出。
'99. 3.30. 2号墳周溝及びSI-12航空撮影。
'99. 4. 5. 埋戻し作業及び事務所解体作業開始。
'99. 4. 8. 第4次調査終了。

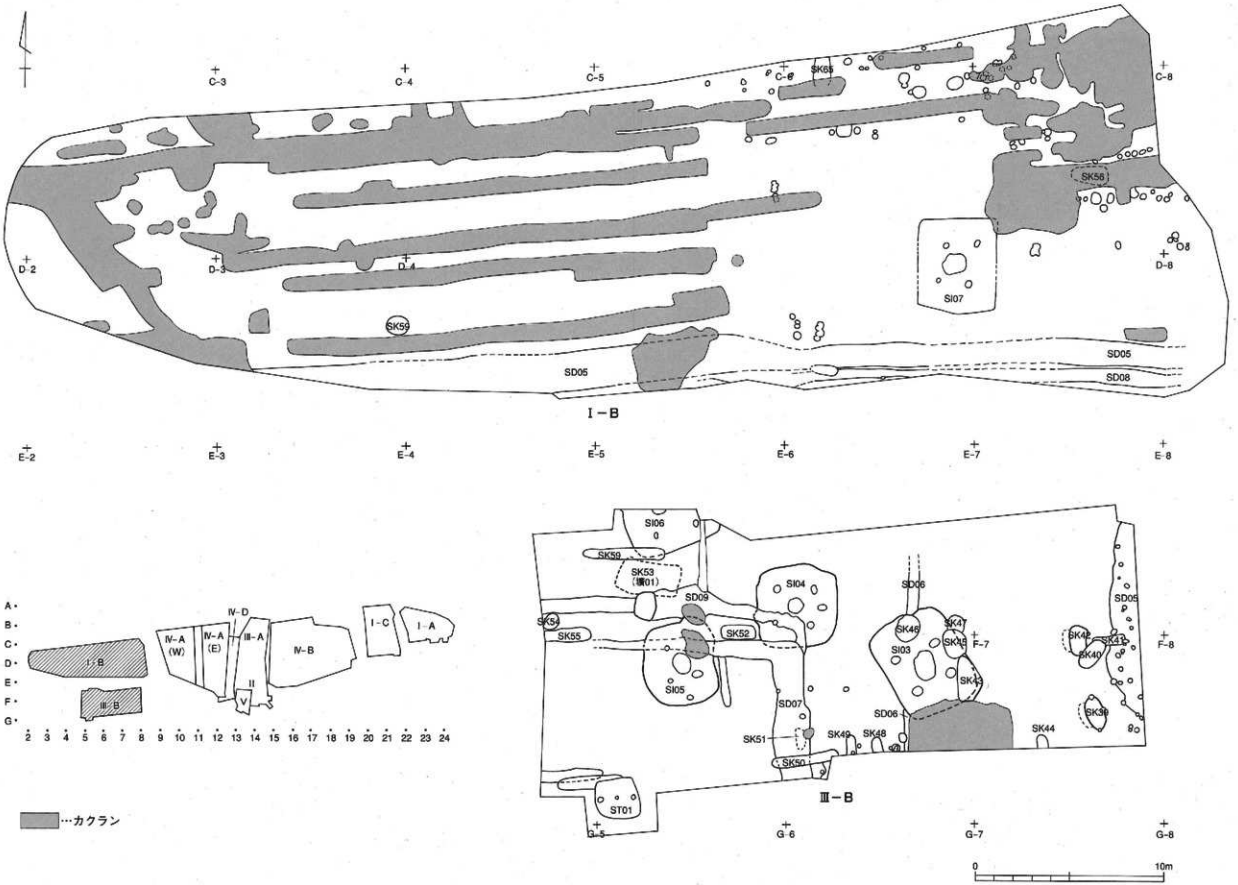
'01. 9.26. 調査区完掘，全景撮影。
'01. 9.28. 周溝等高線図作成。
'01.10. 3 .埋戻し作業終了。



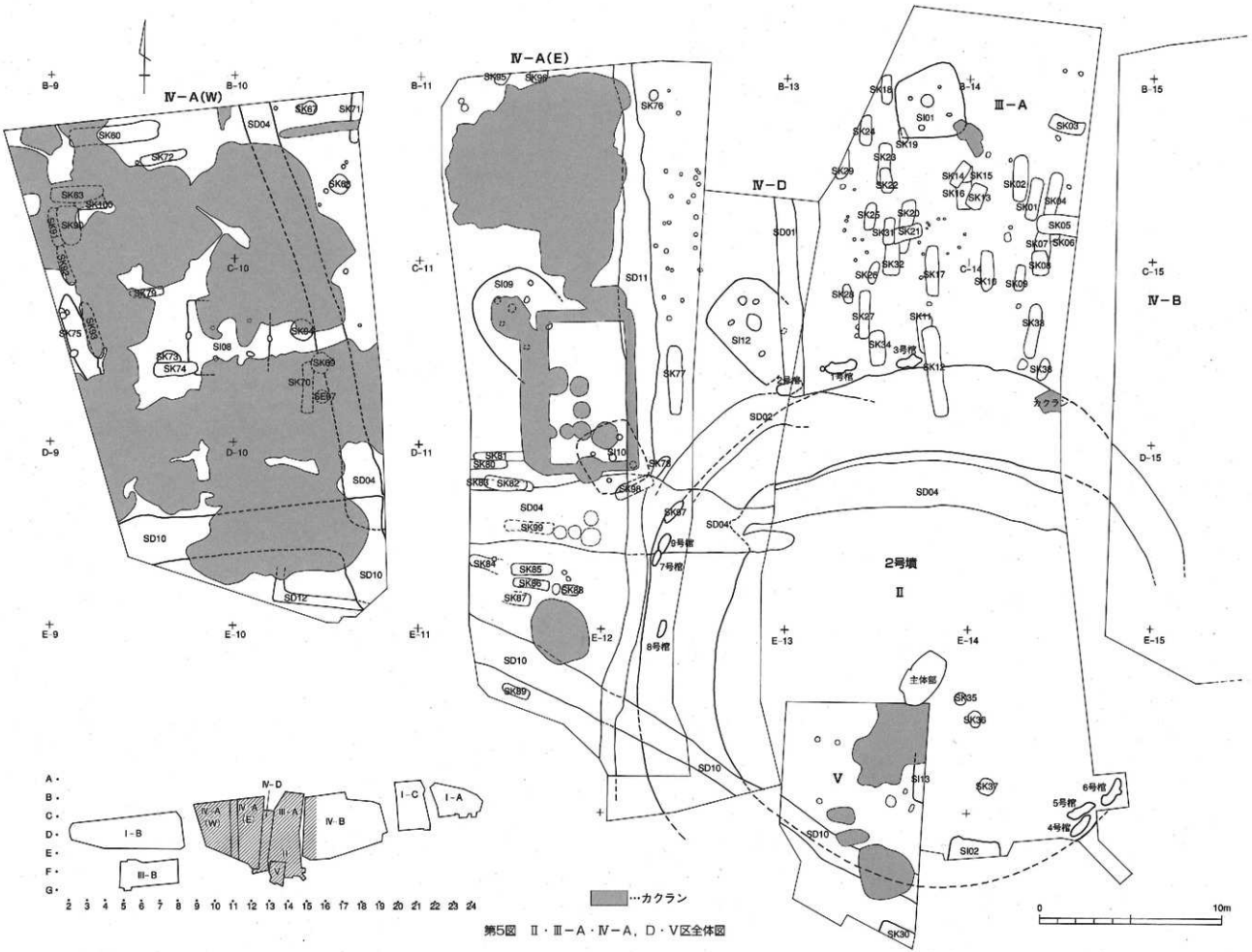
第2図　遺構配置図（弥生・古墳時代）


A-20
A-21
A-22
A-23
A-24
B-22
B-24
C-20
C-21
C-22
C-23
C-24
I－A
I－C
0
10m
…カクラン
I-B
III-B
IV-A (W)
IV-A (E)
III-A
II
IV-B
V
I-C
I-A
IV-D

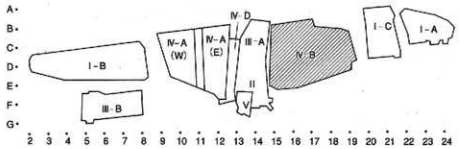
第3図　Ⅰ－A，C区全体図



第4図　Ⅰ－B・Ⅲ－B区全体図

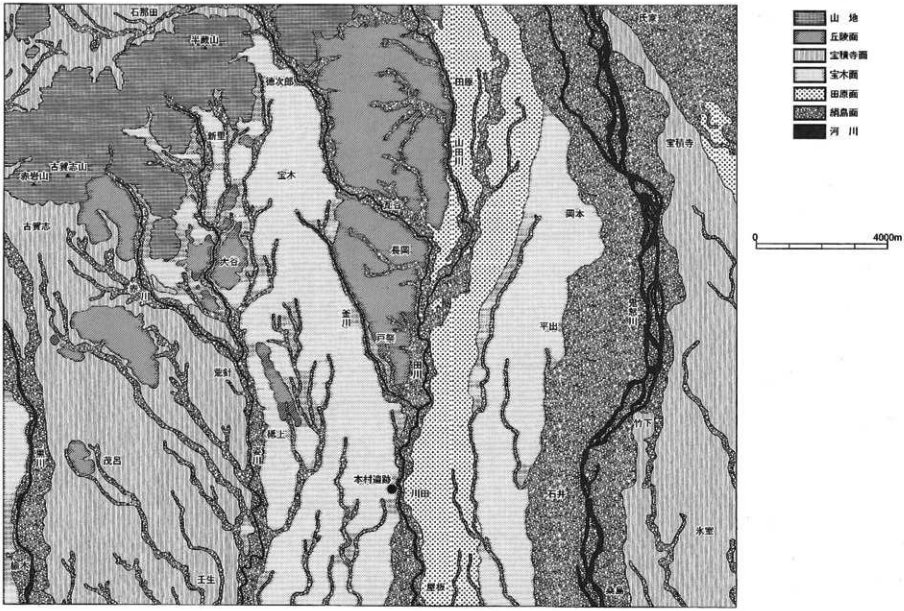


第5図　Ⅱ・Ⅲ－A・Ⅳ－A，D・Ⅴ区全体図

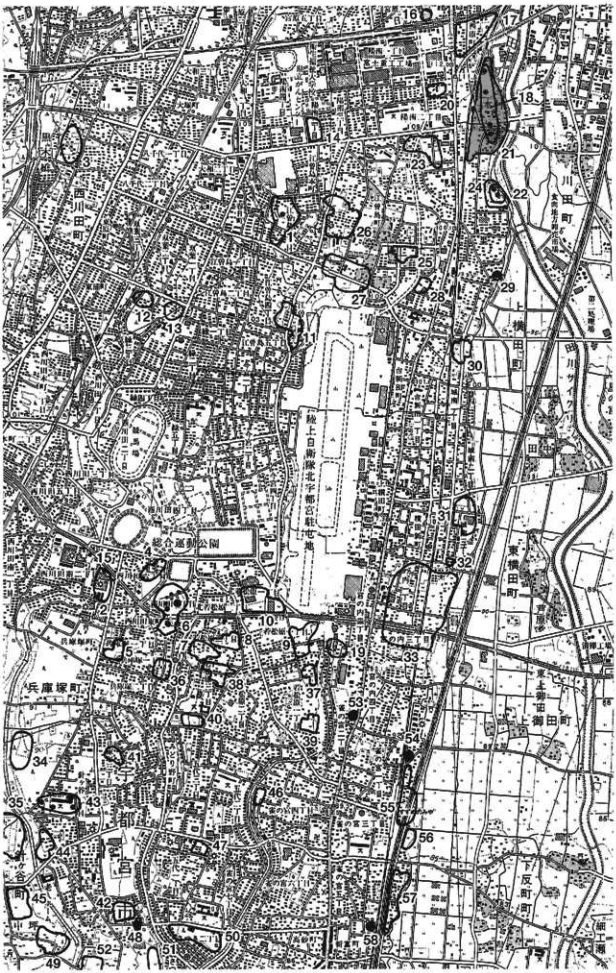


…カクラン

第6図　Ⅳ－B区全体図



第7図　栃木県中央部の地形分類図



第8図　周辺の遺跡分布図（1:25,000）

No.	県No.	市No.	遺跡名	所在地	時代	種別	備考
1	2228	254	雷電山遺跡	江曽島3−754−1	古墳・戦国	集落跡	石製模造品・鏡の出土
2	3204	483	旭マーケット前遺跡	兵庫塚町	縄文（加E）	集落跡	
3	3207	504	ヤジカ遺跡	西川田町	縄文	集落跡	
4	3220	392	塚山北遺跡	兵庫塚町1807−5他	古墳	集落跡	
5	3221	197	旭ヶ丘団地北遺跡	兵庫塚町309−3他	縄文	集落跡	
6	3222	196	塚山古墳群	西川田町1663−1他	古墳	古墳	前方後円墳3、円墳5
7	3223	205	二軒屋遺跡	雀宮町1117−5他	弥生・古墳	集落跡	
8	3224	203	若松原遺跡	雀宮町1118−1他	縄文〜古墳	集落跡	
9	3225	204	一向寺別院付近遺跡	雀宮町1665−3他	古墳	集落跡	
10	3226	202	北若松原遺跡	雀宮町1665−14他	古墳・奈良	集落跡	平成3・5年度調査
11	3227	258	おしめ尽遺跡	江曽島町124他	古墳〜平安	集落跡	
12	3229	502	自動車教習所北遺跡	緑3丁目	縄文（中期）	集落跡	
13	3230	501	緑ヶ丘小北遺跡	緑3丁目	奈良	集落跡	
14	3231	182	ガンセンター東遺跡	陽南3−12−914−137	奈良・平安	集落跡	
15	3254	503	小野測器北遺跡	西川田町	縄文（中期）	集落跡	
16	3270	180	不動前5丁目遺跡	不動前5−1−743−4他	奈良・平安	集落跡	
17	3271	500	陽南荘付近A遺跡	西原町	縄文・古墳	集落跡	
18	3272	467	本村古墳群	川田町44他	弥生・古墳	古墳	本遺跡・円墳4
19	3273	511	本田技研西遺跡	雀宮2丁目	縄文	集落地	
20	3274	181	陽南1丁目遺跡	陽南1−2−691他	奈良〜鎌倉	集落跡	
21	3275	251	本村遺跡	川田町44他	弥生・古墳	集落跡	本遺跡
22	3278	471	台内手古墳群	江曽島町台内手1277	古墳	古墳	円墳2基
23	3280	512	河原ヶ沼遺跡	江曽島町	奈良	集落跡	
24	3282	376	台内手遺跡	江曽島町台内手1277	古墳・奈良	集落跡	
25	3283	256	江曽島北原遺跡	江曽島町1324−19他	古墳〜平安	集落跡	
26	3284	255	並松遺跡	江曽島町1057他	古墳〜奈良	集落跡	
27	3285	257	関道遺跡	江曽島町1152他	古墳〜奈良	集落跡	昭和61年度調査
28	3286	381	江曽島北原南遺跡	江曽島町北原1402−1	縄文・奈良	集落地	
29	3287	259	大山祇神社古墳	上横田町707他	古墳	古墳	円墳（直径30m）
30	3288	260	大房林遺跡	上横田町828−4他	古墳〜平安	集落跡	
31	3289	391	城南3丁目遺跡	城南3−15−6他	奈良・平安	集落跡	平成4年度調査・円墳2
32	3290	433	城南3丁目南遺跡	城南3−6−3他	奈良・平安	集落跡	平成5年度調査
33	3291	427	宮の内遺跡	宮の内1−580他	古墳〜平安	集落跡	平成3・4・5年度調査
34	4185	434	兵庫塚西原遺跡	兵庫塚町西原230	古墳・奈良	集落地	
35	4187	215	上坪遺跡	針ヶ谷町1257他	弥生〜奈良	集落跡	
36	4189	198	旭ヶ丘団地遺跡	兵庫塚町164−28	縄文	集落跡	
37	4192	207	留西遺跡	雀宮町1080−43他	古墳	集落跡	
38	4193	206	西原北遺跡	雀宮町1115−2他	縄文〜古墳	集落跡	
39	4194	401	留西南遺跡	雀宮町留西1072−1	古墳〜奈良	集落跡	
40	4195	400	若松原南遺跡	雀宮町若松原1109−1	古墳	集落跡	
41	4196	426	下原遺跡	兵庫塚2−52−1他	古墳〜奈良	集落跡	平成4年度調査
42	4197	407	二子塚北遺跡	針ヶ谷町二子塚410	弥生	集落跡	平成5年度調査
43	4198	356	針ヶ谷新田古墳群	針ヶ谷町583−1他	古墳	古墳	昭和58年度調査
44	4200	216	上坪新田遺跡	針ヶ谷町520他	縄文〜奈良	集落跡	
45	4202	218	立海遺遺跡	針ヶ谷町985他	古墳・奈良	集落跡	
46	4203	402	雀の宮4丁目遺跡	雀宮4−742−12	古墳	集落跡	
47	4204	403	大谷田遺跡	雀宮町大谷田986−60	奈良・平安	集落跡	
48	4206	220	二子塚古墳	針ヶ谷町410−19	古墳	古墳	前方後円墳（帆立貝形）
49	4207	219	見明遺跡	針ヶ谷町911−2他	縄文・弥生・奈良	集落地	
50	4208	225	天狗原雀宮中前遺跡	雀宮町1010−1他	縄文〜古墳	集落地	平成4年度調査
51	4209	226	島の前遺跡	針ヶ谷町350他	縄文・古墳・奈良	集落地	
52	4210	227	赤岩遺跡	針ヶ谷町371−2他	縄文・古墳	集落跡	
53	4299	208	十里木古墳	雀宮町226−1他	古墳	古墳	前方後円墳？
54	4300	209	鍬女塚古墳	雀宮町125−18他	古墳	古墳	前方後円墳
55	4301	212	雀宮東浦遺跡	雀宮町329−13他	奈良	散布地	
56	4303	213	雀宮駅東遺跡	雀宮町401−2他	奈良	集落跡	
57	4304	214	牛塚東遺跡	雀宮町444−2他	古墳・奈良	集落跡	平成2年度調査
58	4305	221	牛塚古墳	新宮町17他	古墳	古墳	前方後円墳（帆立貝形）

第1表　本村遺跡周辺遺跡一覧表

No.	県No.	市No.	遺跡名	所在地	墳形	規模	埋葬施設	備考
1	2228	254	雷電山遺跡	江曽島3−754−1	不明			石製模造品・鏡
6	3222	196	塚山古墳	西川田町1663−1他	前方後円墳	98m		埴輪・須恵器 土師器
〃	〃	〃	塚山西古墳	〃	帆立貝形	63.1m		埴輪・須恵器 土師器
〃	〃	〃	塚山南古墳	〃	帆立貝形	58m		埴輪・須恵器 土師器・白玉
18	3272	467	本村古墳群	川田町44他	円墳4基	25m (2号墳)	箱式石棺 (2号墳)	埴輪・鏡・直刀・鉄鏃・刀子・臼玉・穀・弓・金銅製金具
22	3278	471	台内手古墳群	江曽島町台内手1277	円墳2基			
29	3287	259	大山祇神社古墳	上横田町707他	円墳	30m		
31	3289	391	城南3丁目遺跡	城南3−15−6他	円墳2基	12m	主体部2基	鏡・直刀・土師器 鹿角装刀子
43	4198	356	針ヶ谷新田古墳群	針ヶ谷町583−1他	円墳4基		横穴式石室 (1・3号)	直刀・土師器・鉄鏃 (1号)、須恵器(3号)
48	4206	220	針ヶ谷二子塚古墳	針ヶ谷町410−19	帆立貝形	27m		須恵器
53	4299	208	十里木古墳	雀宮町226−1他	不明		横穴式石室	
54	4300	209	観女塚古墳	雀宮町125−18他	前方後円墳			女子人物埴輪
58	4305	221	雀宮牛塚古墳	新宮町17他	帆立貝形	56.7m	木棺直葬	埴輪・鏡・馬具・式具・武器・装身具

第2表　本村遺跡周辺古墳一覧表

Ⅱ　位置と環境

1　地理的環境

本村遺跡は県央部，宇都宮市の中央やや南寄りにあり，宇都宮中心市街地から南方約3km，JR雀宮駅から北方約5kmに位置する。東方約6kmに鬼怒川，西方約4.5kmに姿川が，遺跡の東直近を田川がそれぞれ南流する。遺跡周辺の現況は水田，畑地及び宅地として利用されており，東に新4号国道，西にJR宇都宮線及び4号国道，南に宇都宮環状線が位置し，交通の要衝として発展する環境の中に立地している。本遺跡は旧来の本村上野遺跡（弥生時代の集落跡・古墳）と西原境遺跡（縄文・古墳〜平安時代の集落跡）の範囲を統合した遺跡である。

まず，宇都宮中南部の地形を大観すると，大別して東部山地，中央部低地，西部山地からなる栃木県の地形のうち中央部低地に位置する。この中央部低地は，第7図に示す通り関東平野の北端部にあたり，北西の山地より延びる丘陵地及び南流する河川によって開析された低地と台地が東西に交互に繰り返す地形を成している。地形分類を概観すれば，東より鬼怒川低地（絹島面），岡本台地（宝木面），田原台地（田原面），田川低地（絹島面），宝木台地（宝木面），姿川（絹島面），鹿沼台地（宝積寺面）に分類される。（表層地質図による）

次に，本遺跡周辺の地形を概観すれば，鬼怒川の支流である田川と思川の支流である姿川が南流し，両河川に挟まれた地域は宝木台地と，小河川により開析された微細な沖積低地とが交互に形成されている。本遺跡は田川右岸に展開する宝木台地の東縁辺部に位置する。本台地は宝木段丘礫層を宝木ローム，田原ロームの順で覆っており，田原ロームの上部層である七本桜軽石層及び今市軽石層は薄く，表土層との境界に点在する程度である。本遺跡の標高は約108m，田川に向かって緩やかに落ち込む東斜面に立地し，沖積地との比

高差は約８ｍである。東方約50ｍには田川が南流する。

遺跡東側の沖積地は市街化調整区域となっており，水田耕作がなされる農村地帯が広がり，遺跡周辺の台地は畑作地及び疎らな宅地となっているが，JR宇都宮線以西の台地は市街化区域であるため，早くから商工業の活動が盛んになるとともに市街地化が進み，現在は多数の宅地が建ち並んでいる。

本遺跡地内は，その大半が農家の宅地として利用されていたため緩斜面の平地及び古墳部分においては削平を受け，前述の市街化調整区域と市街化地域を東西に横断する都市計画道路を建設するための宅地移転等の整地作業により調査区中央部分は第５図から第６図に示したように，大きく撹乱を受けていることが確認できた。

2　歴史的環境

本村遺跡の周辺には，第８図から分かるように，南北に展開する地形に沿って，田川右岸の宝木台地上に各時代にわたる多数の遺跡の存在が認められる。特に，本遺跡の調査で確認された弥生時代後期及び古墳時代中期における遺跡の存在は注目すべき所があり，それぞれの時代における中心地域の一つと考えることができる。以下，時代ごとに周辺遺跡について概観してみることとする。

(1)　縄文時代

本遺跡周辺においては，雷電山遺跡（1），旭マーケット前遺跡（2），ヤジカ遺跡（3），旭が丘団地北遺跡（5），二軒屋遺跡（7），若松原遺跡（8），自動車教習所北遺跡（12），小野測器北遺跡（15），陽南荘付近A遺跡（17），本田技研西遺跡（19），本村遺跡（21），江曽島北原南遺跡（28），旭が丘団地遺跡（36），西原北遺跡（38），上坪新田遺跡（44），見明遺跡（49），天狗原雀宮中前遺跡（50），島の前遺跡（51），赤岩遺跡（52）が所在する。

（1）は遺構の確認はないものの，早期～中期にかけての遺物が出土している。(2）は加曽利E式が確認されている。(12)・(15）は中期の遺物が確認されている。(5)・(36）及び（7）・(8)・(38）はそれぞれやや離れているものの，谷を挟んで一連の遺跡と位置づけることが可能であると考えられる。(7）は下野考古学研究会による調査によって，中期の袋状土坑等が確認されている。本村遺跡（21）においては，磨製石斧・打製石斧が確認されている。(50）は前期（諸磯a式）・後期（堀之内2式）及び打製石斧が確認されている。

(2)　弥生時代

前期及び中期の遺跡は確認されていない。後期の遺跡としては，二軒屋遺跡（7），若松原遺跡（8），本村遺跡（21），上坪遺跡（35），西原北遺跡（38），二子塚北遺跡（42），上坪新田遺跡（44），見明遺跡（49），天狗原雀宮中前遺跡（50），が所在する。天狗原雀宮中前遺跡では，本市教育委員会の調査（平成４年度）によって，竪穴住居跡が１軒確認されている。

前述したように，（7）・(8)・(38）は一連の遺跡と位置づけられる。二軒屋遺跡（7）は本県における弥生時代後期の標識遺跡となっているものである。本遺跡群のほかに，宇都宮南部の田川右岸における低台地上には，本村遺跡（21）や天狗原雀宮中前遺跡（50）など，二軒屋式土器の表採される地域が多数確認されており，二軒屋式文化圏の中心を成すものと考えることができる。

(3)　古墳時代

二軒屋式文化圏をその素地とする本地域は，古墳時代の遺跡も数多く分布する。本村古墳群（18）にお

いても４基の円墳が確認されたが，この田川右岸の宝木台地東縁辺上には多くの古墳の分布が確認されている。本古墳群の南方約500mの台内手古墳群（22）内に円墳２基，その南方約500mに直径約30mの大山祇神社古墳（29），さらにその南方約1.5kmの城南３丁目遺跡地内に，円墳１基・方墳（推定）１基が確認されている。このうち，円墳主体部からは変形獣形鏡１面・鹿角装刀子１口・直刀１口が出土している。

JR雀宮駅の北方約300mには，明治17年のＪＲ線工事の際に，２体の女子人物埴輪が出土した前方後円墳の綾女塚古墳（54）が，南方約１kmには同じく前方後円墳で，画文帯神獣鏡や変形獣形鏡，鉄製品・玉類等豊富な副葬品が出土したことで知られる牛塚古墳（58）が存在した。また，綾女塚古墳の北西約500mには横穴式石室のみ露頭し現存する（前方後円墳か？）十里木古墳（53）が所在する。さらに，十里木古墳の南西約２kmには二子塚古墳（48）が，またその北西約１kmには本市教育委員会の調査（昭和58年度）によって４基の円墳が確認された針谷新田古墳群（43）が所在する。これらの古墳以外にも，本台地周辺には小円墳が散在していたと伝えられている。

宇都宮市内においは，本市南部に所在する笹塚古墳（全長約100m）が最古の前方後円墳となる。笹塚古墳は前方部周溝の削平を一部受けているものの，均整のとれた中期古墳の姿をよくとどめている。年代は５世紀前半と考えられ，この笹塚古墳を画期として本地域の首長の墓制が茂原古墳群（権現山・大日塚・愛宕塚）にみられる前方後方墳から前方後円墳へ変容するとともに，この築造を契機として畿内の中央集権体制と，より密接な関係を築くようになったものと考えられる。後続して築造されるのが，笹塚古墳に次ぐ規模（全長98m）をもつ塚山古墳を主墳とする塚山古墳群（６）であり，本村古墳群の南西約４kmに所在する。前述した牛塚古墳はこれと平行する時期（５世紀末～６世紀初頭，塚山西古墳に相当か？）と考えられる。

以上のように，本地域は古墳時代中期において，栃木県内の他地域を圧倒する規模をもってその勢力を誇示していたと考えられ，同時代の集落跡は周辺に多数存在している。その遺跡を概観すれば，まず前期には，前代に引き続く遺構が確認された天狗原雀宮中前遺跡（50），パレス壺の出土した方形周溝墓２基が確認された牛塚東遺跡（57）がある。中期の遺跡としては，長方形プランの住居が整然と配置され，通常の集落跡との違いが指摘される雷電山遺跡（1）や，塚山古墳群に関わる集落跡と考えられる北若松原遺跡（10）がある。北若松原遺跡は５世紀後半の集落跡と考えられ，間仕切り溝をもつ住居が12軒確認されている。また，弥生時代の標識遺跡として前述した二軒屋遺跡（7）では，石製模造品が多数出土していることから，中期集落の存在もあるものと推定される。後期の遺跡として，竪穴住居跡の遺構が確認されたものは，関道遺跡（27）や，北若松原遺跡（10），天狗原雀宮中前遺跡（50）などが挙げられる。

(4) 奈良・平安時代

奈良時代の遺跡は，田川右岸の宝木台地上に数多く分布しているが，この時代の集落跡は，おしめ尽遺跡（11），江曽島北原遺跡（25），関道遺跡（27），江曽島北原南遺跡（28），下原遺跡（41）などの宝木台地内部の小河川流域に立地を認める一群と，大房林遺跡（30），城南３丁目遺跡（31），城南３丁目南遺跡（32），宮の内遺跡（33），雀宮東浦遺跡（55），雀宮駅東遺跡（56），牛塚東遺跡（57）などの田川右岸台地縁辺部に立地を認める一群とに大別できる。

（31）・（32）・（33）の各遺跡は一連の遺跡と考えることができる。城南３丁目遺跡（31）からは，平安時代の竪穴住居跡６軒と掘立柱建物跡２棟などが確認され，また城南３丁目南遺跡（32）からは，奈良時代の竪穴住居跡４軒が確認されている。宮の内遺跡（33）においては，平成３年度調査の区域からは竪穴住居跡24軒，掘立柱建物跡17棟が確認され，遺物として灰釉・緑釉陶器105点が出土した他，石帯も出土し

ている。平成５年度調査の区域からは竪穴住居跡74軒，掘立柱建物跡５棟が確認され，遺物として石製丸鞆や鋼製巡方が出土している。これらを同一地域内の集落と考えれば，数時期に渡るものと考えても大規模な集落である可能性は極めて高いものと考えられる。また，雀宮東浦遺跡（55），雀宮駅東遺跡（56）も同一の集落範囲と考えられ，近接する牛塚東遺跡（57）からは奈良時代の竪穴住居跡１軒が確認されている。

一方の群である田川右岸縁辺部においては，下原遺跡（41）で奈良時代の竪穴住居跡10軒が確認されている。

(5) 中世

周辺の中世の遺跡（城館跡）としては，本遺跡の南西約1.5kmに位置する雷電山遺跡（1）が挙げられる。この遺跡は中世宇都宮氏の家臣，江曽島氏の居城と伝えられている。この他には中世の遺跡の報告はないが，日光街道の周辺にあたるこの地域内には中・近世の集落が存在した可能性は否定できない。

【参考文献】

栃木県史編纂委員会　1976『栃木県史』通史編１　原始・古代１

宇都宮市史編纂委員会　1979『宇都宮市史』第１巻　原始・古代編

経済企画庁・栃木県　表層地質図『宇都宮』

栃木県教育委員会・(財)栃木県文化振興事業団　1996　栃木県埋蔵文化財調査報告第175集『宮の内A遺跡・宮の内B遺跡』

宇都宮市教育委員会　1983『宇都宮市埋蔵文化財等遺跡詳細分布確認調査報告書－宇都宮の遺跡－』

宇都宮市教育委員会　1987～2000『宇都宮市文化財年報第３号～第15号』

宇都宮市教育委員会　1984　宇都宮市埋蔵文化財調査報告第１集『牛塚古墳』

宇都宮市教育委員会　1988　宇都宮市埋蔵文化財調査報告第25集『関道遺跡』

宇都宮市教育委員会　1993　宇都宮市埋蔵文化財調査報告第32集『牛塚東遺跡』

宇都宮市教育委員会　1994　宇都宮市埋蔵文化財調査報告第34集『天狗原遺跡』

宇都宮市教育委員会　1994　宇都宮市埋蔵文化財調査報告第35集『雷電山遺跡』

宇都宮市教育委員会　1996　宇都宮市埋蔵文化財調査報告第39集『城南３丁目遺跡』

Ⅲ　調査結果

1　弥生時代

弥生時代の遺構は，竪穴住居跡13軒・土坑１基が確認された。竪穴住居跡は，調査区のほぼ中央から西部に位置する（２号墳の墳丘下のⅡ・Ⅴ区に２軒，２号墳北西のⅢ－Ａ・Ⅳ－Ａ・Ⅳ－Ｄ区に５軒，調査区西部のⅠ－Ｂ・Ⅲ－Ｂ区に５軒）が，１軒のみ東部（Ⅳ－Ｂ区）に位置する。土坑は，２号墳北西の竪穴住居付近に位置する。

①　竪穴住居跡

ＳＩ０１

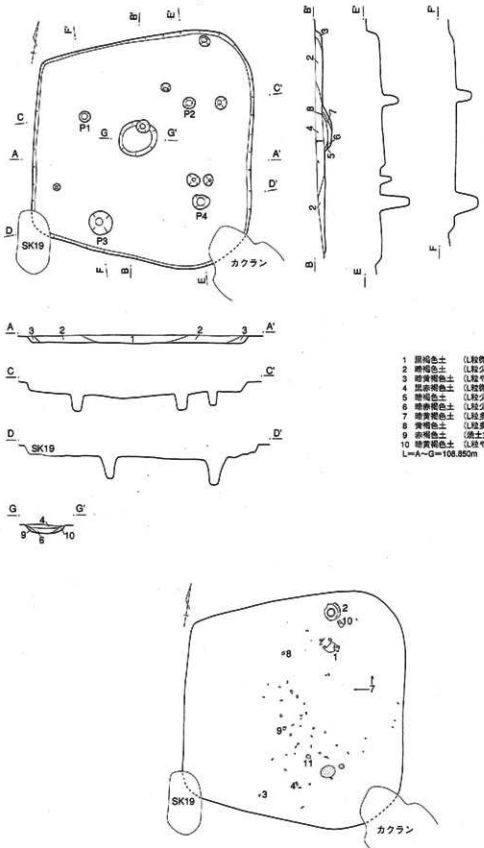
位置　Ⅲ－Ａ区・Ｂ－14杭西側　**主軸方向**　Ｎ－６°－Ｗ　**平面形**　隅丸方形　**規模**　東西3.5m×南北3.5m　**覆土の状況**　自然堆積　**床面**　全面に，小ロームブロック混入の暗黄褐色土による貼床が５cm程度施されており，中央部がやや硬化している。　**壁面**　ローム層への掘り込みが極めて浅く，住居南側は特に不明瞭であるが，やや内湾しつつ外傾して立ち上がる。　**柱穴**　主柱穴が４本確認される。ほぼ正方形の柱間。平面形に対し西方向に８°の軸の振れが確認できる。　**炉**　中央部に地床炉が１カ所確認される。平面形は円形で中央部が窪み，底面・壁面ともに被熱による赤色化・硬化が観察できる。炉の北壁沿いにピットを伴う。　**備考**　竪穴の平面形は隅丸方形であるが不整形で，主軸方向とのぶれが著しい。遺物は大半が小破片として埋土中より多数出土しているが，住居やや北寄りに，頸部より口縁部にかけての甕が倒立状態で，ほぼ半形の甕が横倒状態で，いずれも床面直上より出土した。土製紡錘車が床面直上より出土した。

遺物（第10図、図版PL19①）　１は，推定口径16cmの壺である。口縁部は2段になり，段部に押捺がめぐる。頸部は無文帯で，頸部から胴部上半にかけて付加条１種，胴部下半は付加条２種が施される。外面全体にススが付着している。２は，口径24.8cmの口縁部片である。口縁部と頸部に薄い隆帯を２条貼り付け，その上を指頭による押捺がなされる。その間に４～５本の波状文が施される。胎土に砂粒，金雲母を含む。３は，口唇に刻み目が施された甕の口縁部片である。４は，複合口縁部片で，口唇にヘラ状工具による刻み目をもち，外面に縄文を施す。５と６は，頸部片で，梯描縦線文と波状文が施される。７も頸部片で，上から波状文―梯描横線文―付加条２種が施される。８は単節。９は付加条１種。10は，付加条２種が施される。11は，布目痕の残る底部片で，付加条１種が施される。

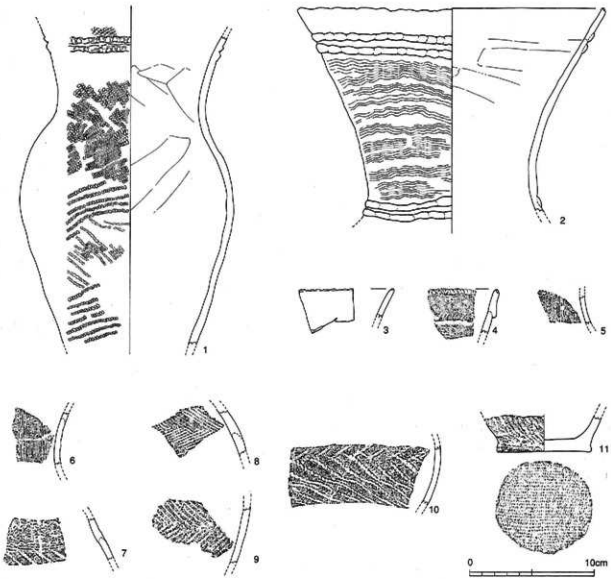
ＳＩ０２

位置　Ⅱ区・Ｆ－１４杭南側　**主軸方向**　Ｎ－５°－Ｗ　**平面形**　不明　**規模**　東西2.75m×－m　**覆土の状況**　自然堆積と思われる。　**床面**　北側の約1/3のみの確認であるが，小ロームブロック混入の暗黄褐色土による貼床が施されており，全体に軟弱である。　**壁面**　ほぼ直線的に垂直に立ち上がる。　**柱穴**　住居内には確認されないが，住居外北側に小ピットが確認された。　**炉**　調査区内には確認されなかった。　**備考**　竪穴の平面形は南側の大半が調査区外であるため不明であるが，方形であると推定される。２号墳の墳丘下に位置するため，墳丘盛土を排土した段階で確認された住居。調査区南端の住居内より，胴部以下が残存する十王台式の甕（№６）が正立状態で床面直上より出土した。内部より炭化物が確認された。

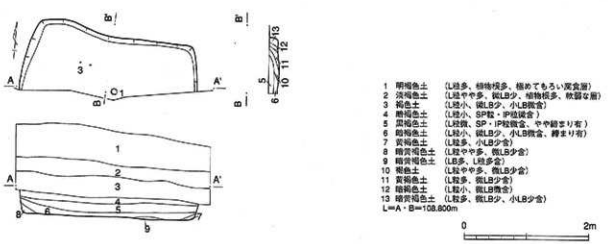
遺物（第12図、図版PL19②）　１は，底径6.4cmの壺の胴部下半である。底部は布目痕がみられ，胴部は付加条２種が施される。また，頸部に波状文と梯描縦線文が施される。２は口縁部片で，付加条１種が施さ



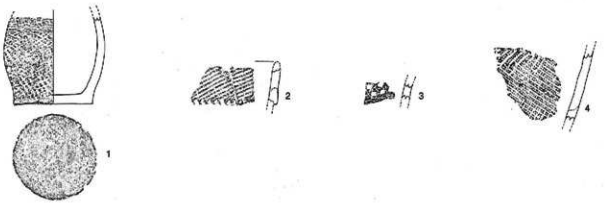
第9図 SI01平・断・遺物平面図



第10図　SI01出土遺物実測図



第11図　SI02平・断面図



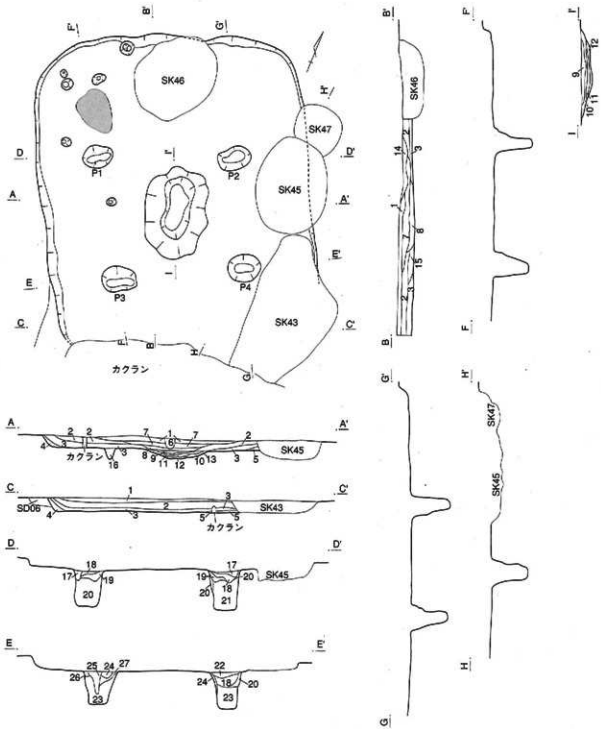
第12図　SI02出土遺物実測図

れ，段部に縄文原体による押捺がめぐる。3は，頸部片で棒状工具による刺突文が施される。4は，付加条1種の胴部片である。

SI03

位置　Ⅲ－B区・F－7杭西側　**主軸方向**　N－6°－W　**平面形**　隅丸長方形　**規模**　東西4.3m×南北(5.5) m　**覆土の状況**　自然堆積　**床面**　全体にローム面を直接床面としており，硬化が認められるが，周辺部は散在的に小規模な貼床が認められ，やや軟弱である。　**壁面**　ローム層への掘り込みは15cm～20cmと浅く，床面より内湾しつつ外傾して立ち上がる。　**柱穴**　主柱穴が4本確認される。ほぼ正方形の柱間。4本とも東西方向に楕円形の掘り方を有することから，補強用の添柱が付属した構造であったと考えられる。**炉**　中央部に地床炉が1カ所確認される。底面・壁面ともに被熱による赤色化・硬化が観察できる。平面形は南北方向に長軸をとる楕円形で，焼土は中央部で3～5cmの堆積を確認した。20片程度の土器片の包含が見られた。　**備考**　住居北側1基，西側3基の土坑による攪乱を受け，南側は直近の攪乱を受けている。北西部の床面直上に粘土塊が検出された。灰白色の生粘土であり，土器制作用途の材料と考えられる。遺物は大半が小破片として埋土中より多数出土（約530点），土製紡錘車1点，アメリカ式石鏃1点，石器（磨石）1点が確認された。土器片は住居内の埋土に散在するが，地床炉南側のP3－P4間に特に集中する状況が確認された。

遺物（第14・15図，図版PL19③・PL20①）　1は，2段の輪積み痕が見られる口縁部片である。その上に単節の縄文が施される。2～8は，複合口縁部片である。口唇部もしくは段部に縄文原体による押捺がめぐり，付加条1種の縄文が施される。9～19は，頸部片である。9と10は，薄い隆帯が貼付され，波状文が施される。11・13・14は，重四角文に斜線が施されている。弥生中期の混入物と考えられる。12は，簾状文が施される。15・17・19は，簾状文もしくは櫛描横線文と波状文の組み合わせである。20～33は，胴部片である。20・22・25・27は，付加条2種の縄文が施される。21・23・24・26・28・29・30・33は，付加条1種の縄文が施される。31は，付加条2種と付加条1種を羽状に施している。32は，直前段多状の縄文が施される。34～41は，底部片である。34～36は，木葉底で付加条1種の縄文が施される。39は，布目痕で付加条2種の縄文が施される。40は，布目痕で付加条1種の縄文が施される。41は，木葉底である。38は，底径5.0cmと小型で，台付鉢の可能性が考えられる。この他に磨石（42），紡錘車（43），石鏃（44）が出土している。紡錘車の径は3.6cm，厚さ2.5cmである。石鏃の材質はチャートで，長さ2.4cm，幅1.6cm，厚さ0.4cmを測る。

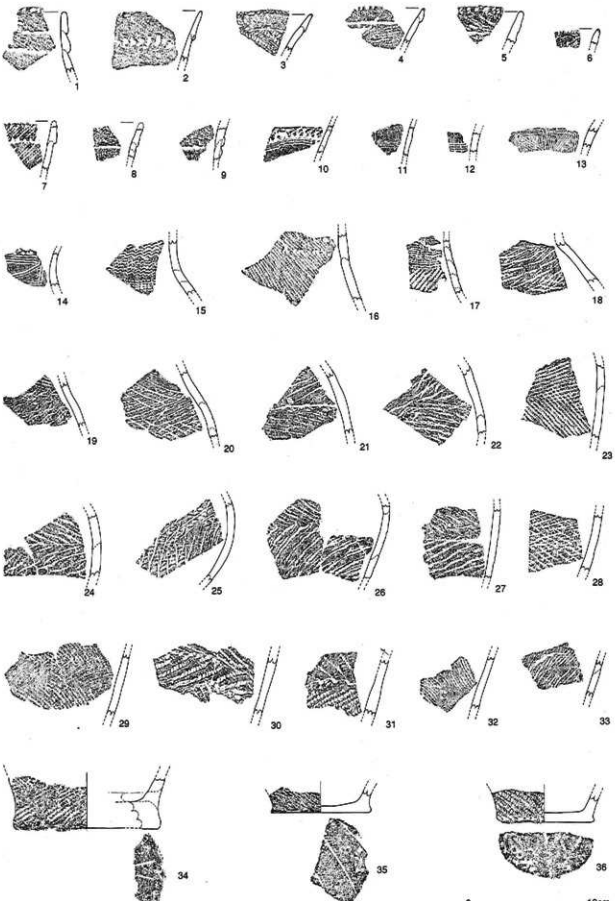


1 黒褐色土 (L粒微、IP粒微含)
2 暗褐色土 (L粒少、IWLB微、IP粒微含)
3 暗褐色土 (L粒少、小LB微、第2層よりL粒多)
4 褐色土 (L粒やや多、IP粒微含)
5 暗黄褐色土 (L粒多、IWLB少含、しまり有)
6 黒褐色土 (L粒極含、極めて軟質)
7 暗褐色土 (L粒少なく第2・3層より比率は多い、小LB少含)
8 黒褐色土 (L粒・焼土粒少、やや軟質な層)
9 黒褐色土 (L粒・焼土粒微含)
10 暗赤褐色土 (L粒・焼土粒微含)
11 赤褐色土 (L粒少、焼土粒多)
12 赤黄褐色土 (L粒極微、焼土粒多、焼土主体の層常に硬い層)
13 暗黄褐色土 (L粒多、焼土粒微含)
14 暗黄褐色土 (小LBやや多、微LBやや多、焼土粒極微含)
15 黄褐色土 (小LB・微LB多、焼土粒微含)
16 黄褐色土 (L粒多)
17 暗褐色土 (L粒少、微LB微、SP粒極微含)
18 暗褐色土 (L粒やや多、IWLB少、小LB微含)
19 淡黄褐色土 (L粒多、微LBやや多含)
20 淡黄褐色土 (L粒多、微LB多含)
21 黄褐色土 (L粒主体)
22 暗褐色土 (L粒少、微LB微含)
23 黄褐色土 (L粒・微LB多、小LB少)
24 褐色土 (L粒やや多、微LB少含)
25 暗褐色土 (L粒少、微LB微、IP粒極微含)
26 褐色土 (L粒多、微LB少含)
27 暗黄褐色土 (L粒多、微LB少含)

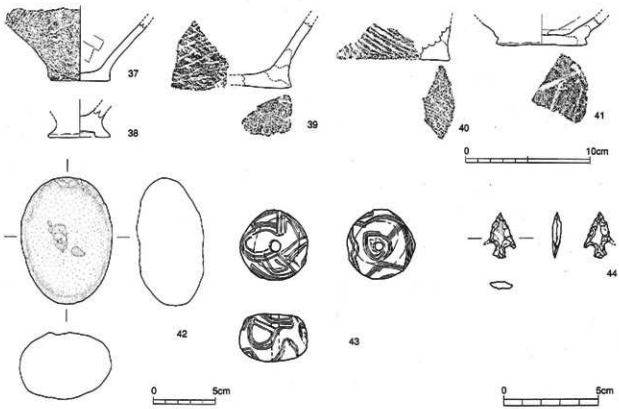
L=A~H=108.800m
I=108.500m

0 2m

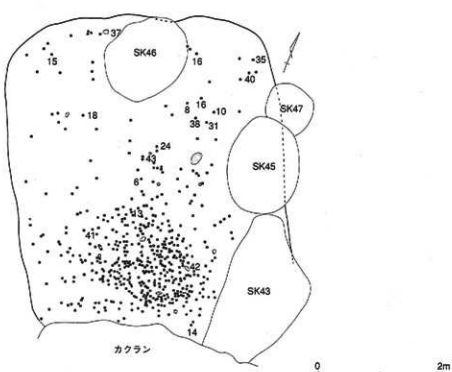
第13図 SI03平・断面図



第14図　SI03出土遺物実測図（1）



第15図　SI03出土遺物実測図（2）



第16図　SI03遺物平面図

S I 0 4

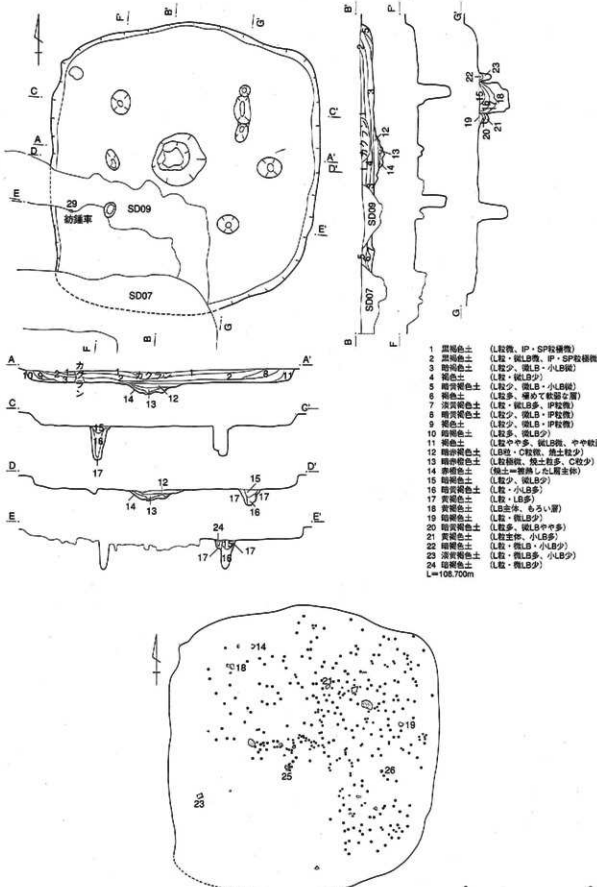
位置 Ⅲ－B区・F－6杭付近 **主軸方向** N－5° －W **平面形** 隅丸方形 **規模** 東西4.3m×南北4.6m **覆土の状況** 自然堆積 **床面** 徴ロームブロック混入の淡黄褐色土による貼床が施されており，やや軟弱である。 **壁面** ローム層への掘り込みは20cm程度で，床面より内湾しつつやや外傾して立ち上がる。 **柱穴** 主柱穴が4本確認されたほか，住居中央の地床炉をはさむ東西軸上に，棟持柱と考えられる1対のピットが確認される。主柱穴は，ほぼ正方形の柱間。北東の柱穴は楕円形の掘り方を有し，南北に小ピットを伴う。 **炉** 中央部に地床炉が1カ所確認される。底面・壁面ともに被熱による赤色化・硬化が観察できる。平面形は円形で中央部が窪む。焼土は中央部で5cm程度の堆積を確認した。若干の土器片を包含する。 **備考** 住居南西部分，全体の約1/4が中世の溝状遺構に攪乱される。SD09下層埋土より土師質土器（カワラケ）がまとまって出土する。遺物は小破片として埋土中より多数出土。地床炉周辺に集中する傾向が認められる。土製紡錘車1点が出土，直径約5cmで中心より放射状に5条の櫛描きが施される。

遺物（第18図，図版PL20②） 1～5，8・9は，複合口縁部片である。口唇部もしくは段部に縄文原体による押捺がめぐる。1は，付加条2種の縄文。2は，無節の縄文。9～19は，付加条1種の縄文。8は，無文である。5～7は，同一個体で，口縁部，頸部～胴部にかけて付加条2種の縄文が施されている。10～16・22は，頸部片である。10は，簾状文。11・12・22が，波状文。14・15が，櫛描横線文。16が，無文である。18～21，23・24は，胴部片である。18～21は，付加条1種の縄文。23・24は，付加条2種の縄文が施されている。25～27は，底部片である。25は，底径6.0cmで胴部外面ナデ調整。26は，底径3.7cmで，外面に縄文を施す台付鉢。27は，木葉底で，直前段多状の縄文を施されている。この他に剥片（28），土製紡錘車（29）が出土している。土製紡錘車の径は5.0cm，厚さ1.6cmである。

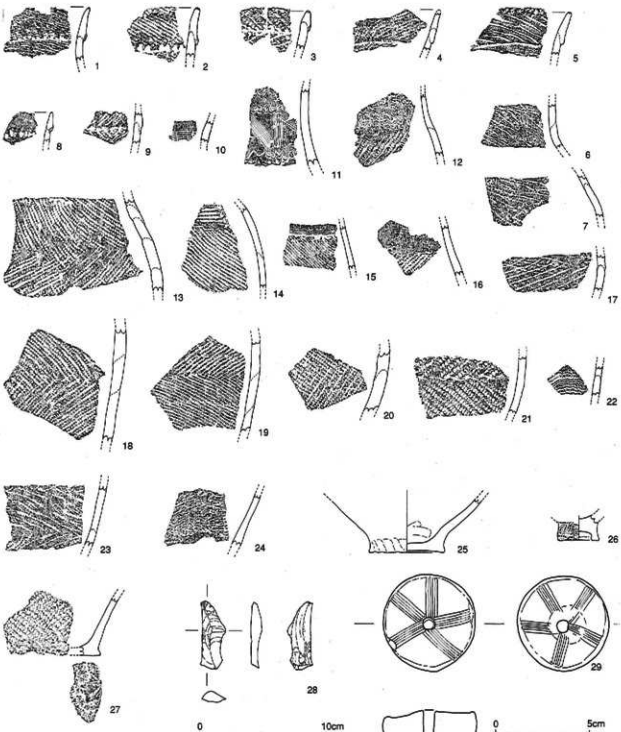
S I 0 5

位置 Ⅲ－B区・F－5杭東側 **主軸方向** N－6° －W **平面形** 隅丸方形 **規模** 東西4.05m×南北4.6m **覆土の状況** 自然堆積 **床面** 全体にやや軟弱。周辺部に徴ロームブロック混入の暗黄褐色土による薄い貼床が施されている。 **壁面** ローム層への掘り込みは20～25cm，全体的には床面よりやや内湾しつつほぼ垂直に立ち上がるが，傾斜は一様でなく，コーナー付近及び南側壁面はやや外傾する。 **柱穴** 主柱穴は3本が確認される。北東の柱穴は後世の攪乱により失われているものと考えられる。主柱穴は，ほぼ正方形の柱間。住居中央の地床炉南側にピットが確認される。南北軸上に，棟持柱が配されていたが，北側のピットはSD07により攪乱されたものと認められる。南面中央部に出入り口に関係すると考えられるピットを有する。底面には土器片1点及び河原石1点を確認する。 **炉** 中央部に地床炉が1カ所確認される。上層埋土全体に広く攪乱されるものの，底面・壁面ともに強い被熱による赤色化・硬化が確認できる。平面形は円形で中央部がやや窪む。焼土は全体に5～10cm程度の堆積を確認した。土器片多数と共に，石器制作の際のフレークと見られる小破片が多数包含される。 **備考** 北東主柱穴周辺を深く攪乱されるほか，中世の溝状遺構SD07に，住居北寄りを東西方向に攪乱される。遺物は小破片として埋土中より多数出土。地床炉周辺及び南面中央部ピット周辺に集中する傾向が認められる。

遺物（第20図，図版PL20③） 1～8は，口縁部片である。1と2は，複合口縁で，口唇部もしくは段部に縄文原体による押捺がめぐり，無文である。3は，ヘラ状工具による山形文？が施される。混入品の可能性がある。4・5は付加条1種の縄文が施されている。6は，複合口縁で，口縁部に付加条1種の縄文が，頸部に6条の櫛描横線文が施されている。7・8も複合口縁で，7が口縁部に波状文，8は頸部に波状文が施されている。9～15は，頸部片である。9・15が波状文＋横線文，10は波状文＋簾状文，12・13は波状

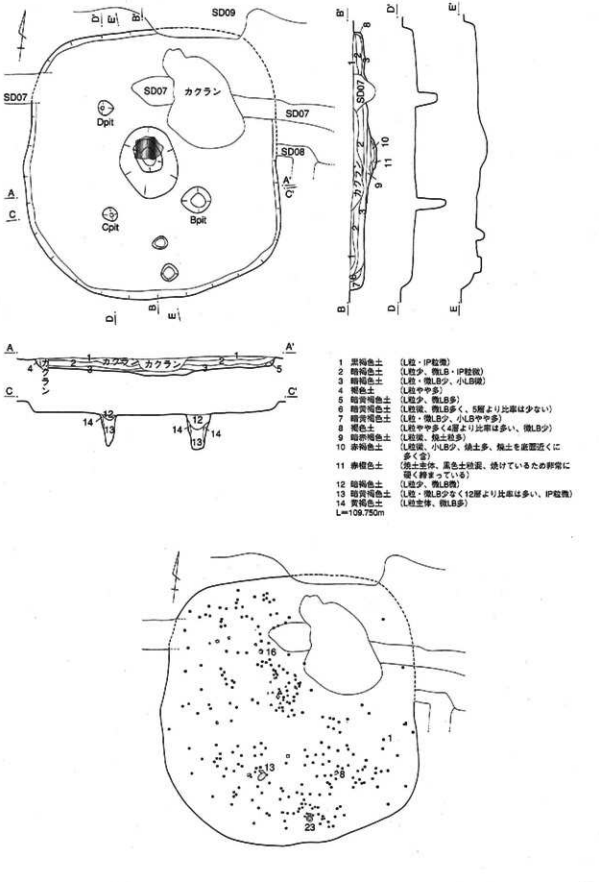


第17図 SI04平・断・遺物平面図

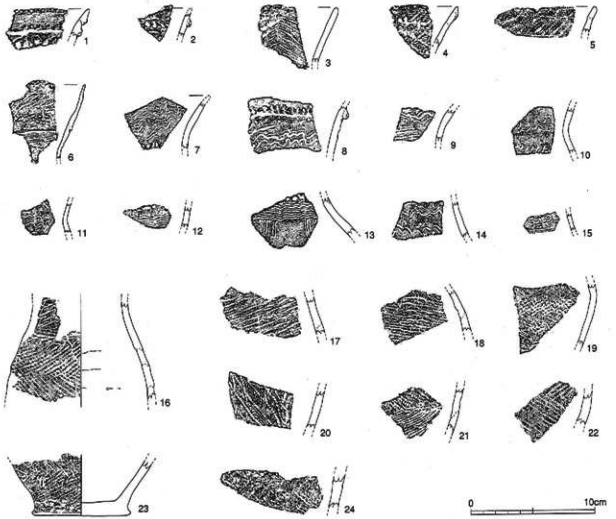


第18図　SI04出土遺物実測図

文＋縦線文が施されている。16～22・24は，胴部片である。16は，頸部と胴部が櫛描横線文により区画され，頸部には縦区画充填斜格子文が，胴部には付加条1種の縄文が施されている。17・18・21・22は，付加条1種の縄文。19は，上段が付加条1種，下段が付加条2種の組み合わせ。22・24は，付加条2種の縄文が施されている。23は，底部片である。底径7.8cmで付加条2種の縄文が施されている。



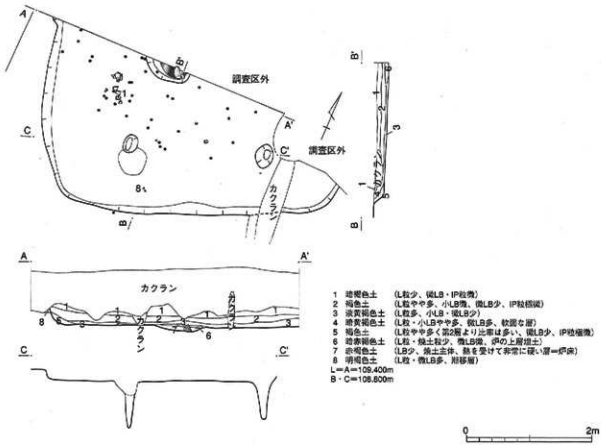
第19図　SI05平・断・遺物平面図



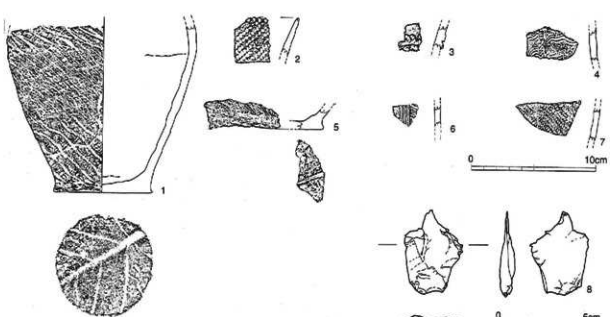
第20図　SI05出土遺物実測図

S I 0 6

位置　Ⅲ－B区・E－5杭南東側　**主軸方向**　N－7°－W　**平面形**　不明（隅丸方形）　**規模**　東西(5.0) m×南北－m　**覆土の状況**　自然堆積　**床面**　南西側約1/2～1/3のみの確認であるが，微少なロームブロック混入の淡黄褐色土による２～３㎝程度の薄い貼床が施されており，全体に軟弱である。　**壁面**　ローム層への掘り込みは約20㎝，全体的には床面より内湾しつやや外傾して立ち上がるが，傾斜は一様でなく，南西コーナー付近ではほぼ垂直に立ち上がる。**柱穴**　主柱穴は南側の２本が確認される。南西の柱穴は，南側上層を攪乱される。柱穴の底面からの掘り込みは深く，65～75㎝である。　**炉**　住居中央部やや西寄りに，地床炉が１カ所確認される。炉の北側は調査区外の道路下に存在するものと思われる。底面・壁面ともに強い被熱による赤色化・硬化が確認できる。平面形は楕円形と推定され，中央部がやや窪む。焼土は全体に５～７㎝程度の堆積を確認した。熱変成を受けた河原石１点が炉の南東壁沿いに検出されることから，石囲炉である可能性も認められる。　**備考**　柱穴の北側２本は調査区外の道路下に存在し，方形の柱間を形成するものと思われる。平面形は不明であるが，調査区内に確認されたプランより推定すると，隅丸方形ないし隅丸長方形の１辺５m超の平面形を有する住居と推定される。住居内に土器の小破片が散在する。炉の南西に胴部下約1/2残存の甕を検出。底部木葉痕。



第21図 SI06平・断面図



第22図 SI06出土遺物実測図

遺物（第22図，図版PL20④） 1は，底径7.8cmの木葉底で，付加条2種の縄文が施されている。2と3は，口縁部片である。2はLRの単節縄文を施し，口唇部に縄文原体による押捺がめぐる。3は段部に縄文原体による押捺がめぐる。4と6は，頸部片で，4は波状文，6は縦区画充填斜格子文？を施す。7は，付加条1種の縄文が施された胴部片である。5は，木葉底の底部片で，付加条1種の縄文が施されている。この他に剥片（8）が出土している。

S I 0 7

位置 I－B・D－7杭付近 **主軸方向** N－7°－W **平面形** 長方形 **規模** 東西4.1m×南北4.95m **覆土の状況** 自然堆積 **床面** 住居中央部には硬く締まったローム粒を多量に含む暗黄褐色土の貼床が施されている。周辺部には貼床は殆ど施されることなく，ローム層を以て床面と成す。 **壁面** ローム層への掘り込みが極めて浅く，住居東側は特に不明瞭な傾向にあるが，床面よりやや内湾しつつほぼ垂直に立ち上がる。 **柱穴** 主柱穴が4本確認されたほか，住居中央の地床炉をはさむ南北軸上に，棟持柱と考えられる1対のピットが確認される。主柱穴は，東西軸にやや長い長方形の柱間。平面形に対し東方向に9°の軸の振れが確認できる。北西の柱穴を除き，柱穴は楕円形の掘り方を有する。南面中央部の壁面よりに，出入り口に関係すると考えられるピットを有する。**炉** 中央部に地床炉が1カ所確認される。平面形はほぼ円形で中央部が窪み，焼土が厚く堆積していた。底面・壁面ともに被熱による赤色化・硬化が観察できる。炉の南東壁沿いにピットを伴う。 **備考** 北東コーナー付近に撹乱を受けている。遺物は小破片として埋土中より約100点が出土している。

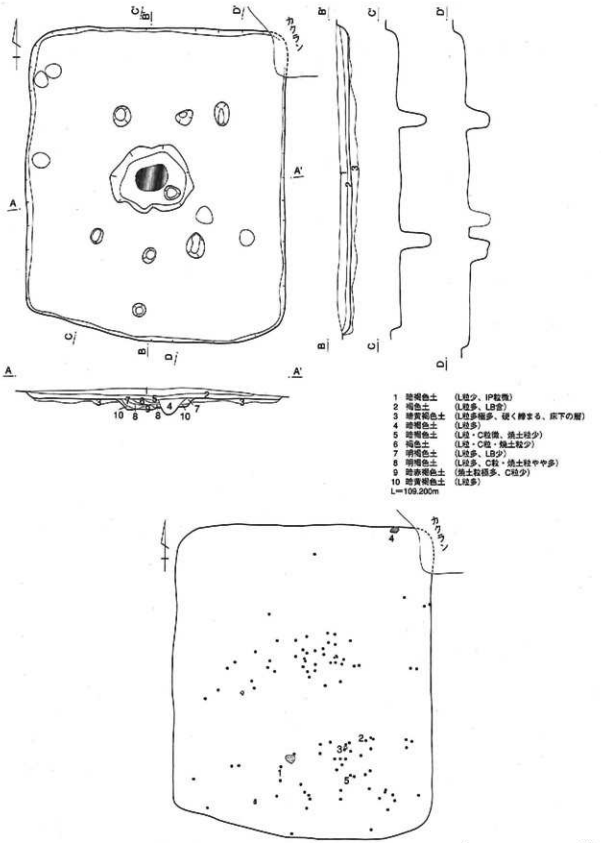
遺物（第24図，図版PL21①） 1は，口縁部片で，口唇部に縄文原体による押捺がめぐり，付加条2種の縄文が施されている。2・3は，頸部片である。2は波状文，3は頸部と胴部が擬描横線文により区画され，頸部には縦区画充填波状文が，胴部には付加条2種の縄文が施されている。4と5は，胴部片である。4は胴部に付加条2種の縄文が横位に施され，頸部に同様の原体を縦位に施文している。5は付加条1種の縄文が施されている。

S I 0 8

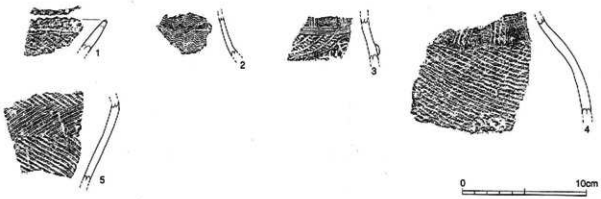
位置 Ⅳ－A（W）・C－10杭南側 **主軸方向** N－5°－W **平面形** （方形） **規模** 東西4.5m×南北4.1m **覆土の状況** 自然堆積と思われるが，覆土の大部分が抜根に伴う撹乱により失われている。 **床面** 硬く締まったローム粒を多量に含む，明褐色土の極めて薄い貼床が施されている。固く締まりのある床面。 **壁面** 撹乱が激しく，西壁・東壁の一部と南壁のごく一部を検出するのみ。ローム層への掘り込みも約10～15cmと極めて浅く，全体に不明瞭であるが，床面よりやや外傾して立ち上がる。 **柱穴** 主柱穴が4本確認されたほか，東壁・西壁に1対の壁柱穴を有する。南東の主柱穴において柱痕が確認された。 **炉** 中央部に地床炉が1カ所確認される。一部が撹乱されていたが，平面形はほぼ円形で中央部が窪み，10cm程度堆積の焼土の堆積が確認できた。底面・壁面ともに被熱による赤色化・硬化が観察できる。炉の西側にピットを伴う。石器製作に伴う剥片が炉の覆土中に確認された。 **備考** 南西コーナー付近を中世の遺構であるSK74に撹乱される。遺物は住居内の覆土の大部分を撹乱により失っていたため土器は極めて少量の小破片を検出するのみであったが，覆土中より土製紡錘車1点を検出する。直径約3.8cm・厚さ3.2cmで，両面とも中心より放射状に6条の擬描文が，側面にも全体に擬描文が施される。土器の小破片は炉の周辺に多く分布する傾向が認められる。

遺物（第25図，図版PL21②） 1は，口縁部片で，口唇部に擬描波状文がめぐり，その下に格子文？が施されている。2は，その下に位置する同一個体である。3・4は，頸部片である。3は波状文，4は薄い隆

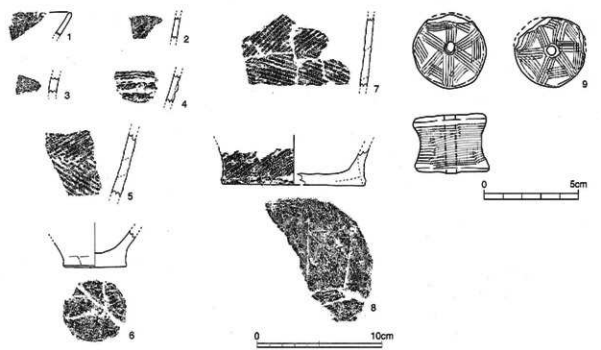
帯が貼付けられている。5・7は，胴部片である。両者とも付加条1種の縄文が施されている。6・8は，木葉底の底部片である。6は底径5.0cm，8は底径11.4cmで，付加条1種の縄文が施されている。この他に径3.9cm，厚さ3.1cmの土製紡錘車（9）が出土している。



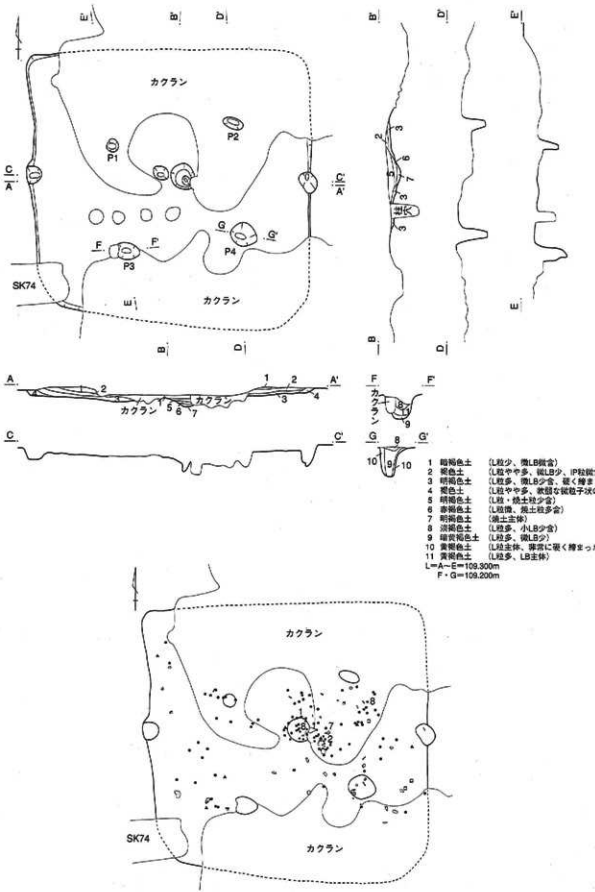
第23図　SI07平・断・遺物平面図



第24図　SI07出土遺物実測図



第25図　SI08出土遺物実測図

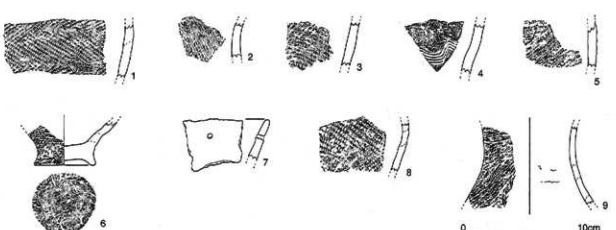


第26図 SI08平・断・遺物平面図

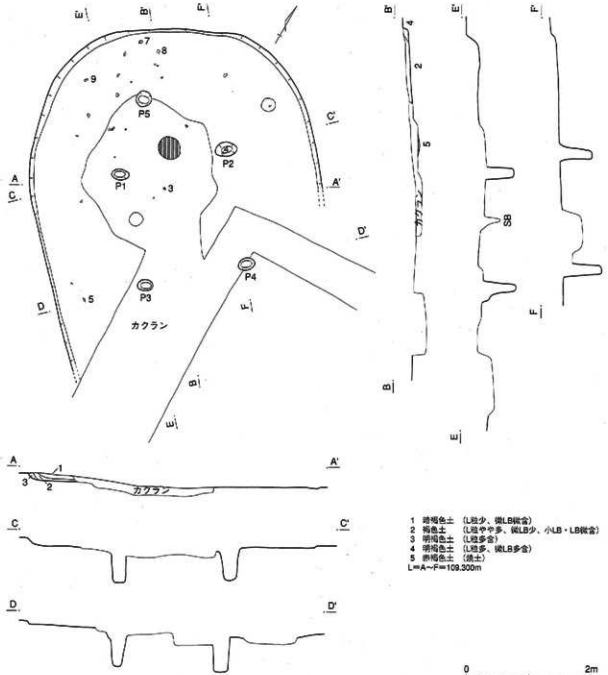
SI09

位置 Ⅳ－A（E）・C－11杭南東側 **主軸方向** N－45°－W **平面形** （楕円形） **規模** 東西4.6m×南北－m **覆土の状況** 自然堆積と思われるが，覆土の大部分が後世の石倉建築の際の撹乱により消失。 **床面** 住居の周辺部のみの確認であるが，全体にローム面を直接床面としており，硬化が認められる。散在的に小規模な貼床も認められ，部分的にやや軟弱である。 **壁面** 撹乱が激しく，平面型の確認できた北西部分約1/2についてもローム層への掘り込みが約5～10cmと極めて浅く，全体に不明瞭である。床面より僅かに内湾してほぼ垂直に立ち上がる。 **柱穴** 主柱穴が4本確認されたほか，南北軸に棟持柱が配されていたと考えられ，地床炉北側に柱穴1本が確認されたが，南側は石倉の基礎による撹乱のため消滅していると思われる。主柱穴は，南北軸にやや長い長方形の柱間。 **炉** 住居北寄りの南北軸線上に地床炉が1カ所確認される。撹乱により，炉の覆土の大部分が消失していたが，平面形はほぼ円形で中央部が窪み，僅かに焼土の堆積が確認できる。底面は被熱による赤色化・硬化が観察できる。 **備考** 地床炉が北寄りに配されていることや主軸方向の差異より，時期差が想定できる。底面レベルは西側に行くに従い，低くなる特徴を有する。遺物は住居内の覆土の大部分を撹乱により失っていたため土器は極めて少量の小破片を検出するのみであった。土器の小破片は住居内に散在する。

遺物（第27図，図版PL21③） 1・3・5・8は胴部分で，付加条1種の縄文が施される。2・9は頸部片で，付加条1種の縄文が施される。4は頸部片で，波状文が施される。6は底部片で，底径4.8cm，木葉痕をナデ消している。胴部は付加条1種の縄文が施される。7は口縁部片で，口唇部にヘラ状工具による刻み目が施され，直径3㎜の円孔が穿たれる。



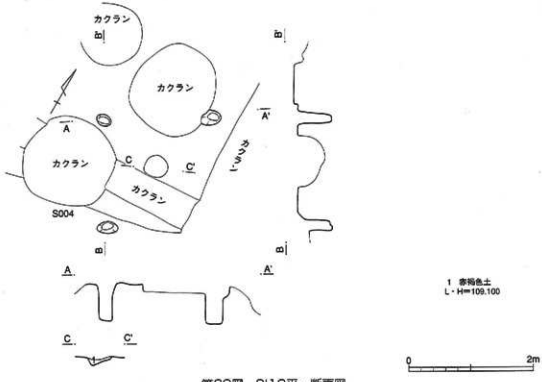
第27図 SI09出土遺物実測図



第28図　SI09平・断面図

SI10

位置　Ⅳ－A（E）・D－12杭付近　**主軸方向**　N－31°－W　**平面形**　不明　**規模**　東西－m×南北－m　**覆土の状況**　覆土の全てが後世の石倉建築の際の撹乱により消失。　**床面**　ローム面に達する撹乱により，確認できない。　**壁面**　ローム面に達する撹乱により，確認できない。　**柱穴**　主柱穴が4本配されているものと推定できるが，南東部の柱穴は深く撹乱された結果，消失したものと思われ，3本が確認される。ほぼ正方形の柱間を持つものと考えられる。柱穴は全て，東西方向にやや楕円形の形状を呈する。**炉**　住居中央に地床炉が1カ所確認される。撹乱により，炉の覆土の大部分が消失していたが，平面形はほぼ円形で中央部が不成形に窪み，僅かに焼土の堆積が確認できる。底面は被熱による赤色化・硬化が観察で



第29図　SI10平・断面図

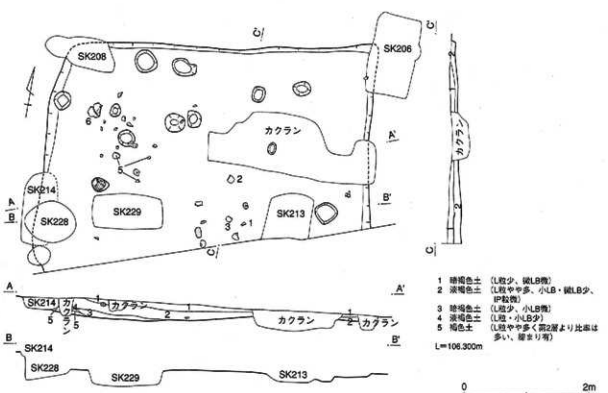
きる。　**備考**　柱間は約1.7mで，北西約５mに位置するＳＩ０９と同様であることから，これに類似した規模の住居と考えられる。　**遺物**　遺物は住居覆土が撹乱により消失しているため，検出されない。

ＳＩ１１

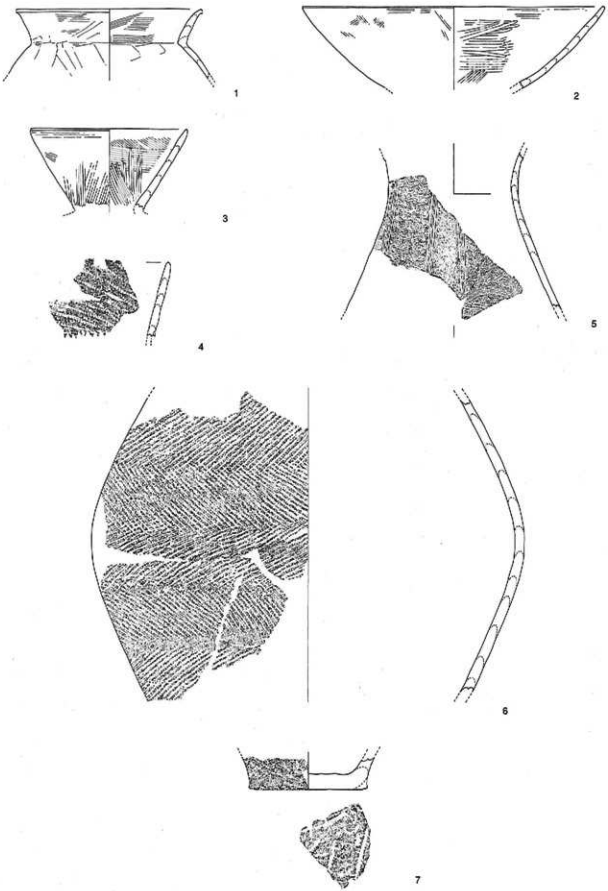
位置　Ⅳ－Ｂ・Ｄ－１８杭北側　**主軸方向**　Ｎ－５°－Ｗ　**平面形**　長方形　**規模**　東西5.15m×南北－m　**覆土の状況**　覆土の大部分が撹乱を受け，また中世の土坑多数が切り合う。下層に僅かに自然堆積が認められる。　**床面**　撹乱により，確認が困難である。全体にはローム面を以て床面としていると考えられるが，住居西側にローム粒混入の締まりのある褐色土の貼床面が観察される。　**壁面**　壁面は多数の土坑による撹乱のため検出が困難であるが，ローム層への掘り込みは東壁で約５cm，全体的には床面よりやや外傾して立ち上がるが，傾斜は一様でなく，北壁・東壁ではほぼ垂直に立ち上がる。　**柱穴**　主柱穴は不明。北西部分に複数のピットを検出するが，中世の掘立柱建物跡に伴うものである可能性が高い。　**炉**　住居中央に若干の焼土を検出する。地床炉が設けられていた可能性有り。　**備考**　南側が調査区外であるため，平面形の南北規模は不明。中世の遺構による撹乱が著しく，中層以上の堆土からは土師質土器が多量に検出される。二軒屋式・十王台式の土器片を床面直上付近より検出する。

遺物（第31図，図版PL21④）　１は，土師器甕の口縁部片である。推定口径15cmを測る。「く」の字口縁で口唇部に面取りがなされている。調整は，口縁部内外面ハケ後横ナデ，胴部外面ハケ後ヘラケズリ，内面ヘラナデ。胎土に砂粒を多く含む。焼成は良好。色調は暗褐色。外面にスス付着。２は，土師器高坏の坏部片である。推定口径24.4cmを測る。坏部は内湾気味に立ち上がり，口縁部にいたる。調整は，坏部内外面ハケ後ヘラミガキ。胎土に砂粒を含む。焼成は良好。色調は淡褐色。３は，土師器壺の口縁部片である。推定口径12.6cmを測る。口縁部は直線的に開く。調整は，口縁部内外面ハケ後ヘラミガキ，口唇部横ナデ。胎土に砂粒を含む。焼成は良好。色調は淡褐色。４は，弥生土器壺の口縁部片である。口縁部外面に付加条１種

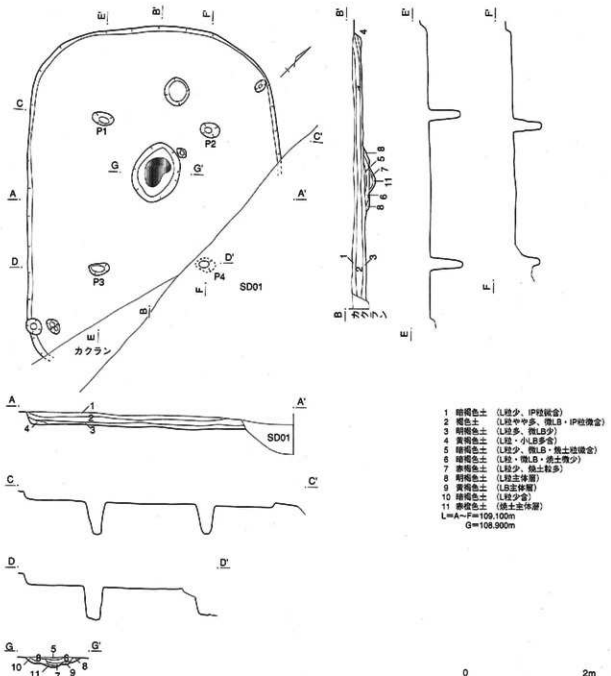
の縄文が施される。胎土に砂粒を含む。焼成は良好。色調は暗褐色。5は，弥生土器壺の頸部片である。胴部上半の横区画は連弧文，縦区画は2条を単位とする直線文（8本），区画内には波状文（6本）が施される。胎土に砂粒，金雲母を含む。焼成は良好。色調は乳白色。6は，弥生土器壺の胴部片である。胴部に付加条1種の縄文が羽状に施される。胎土に砂粒を含む。焼成は良好。色調は暗褐色。7は，弥生土器壺の底部片である。底径9.4cmを測る。胴部は付加条2種が施され，底部に木葉痕が見られる。胎土に砂粒を含む。焼成は良好。色調は暗赤褐色。



第30図　SI11平・断面図



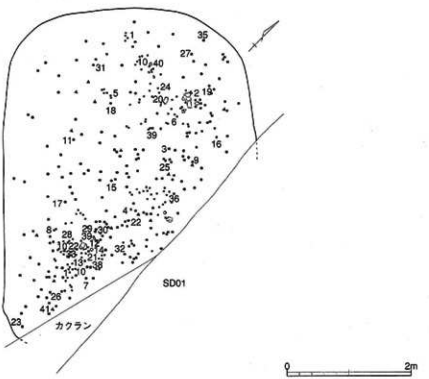
第31図　SI11出土遺物実測図



第32図　SI12平・断面図

SI12

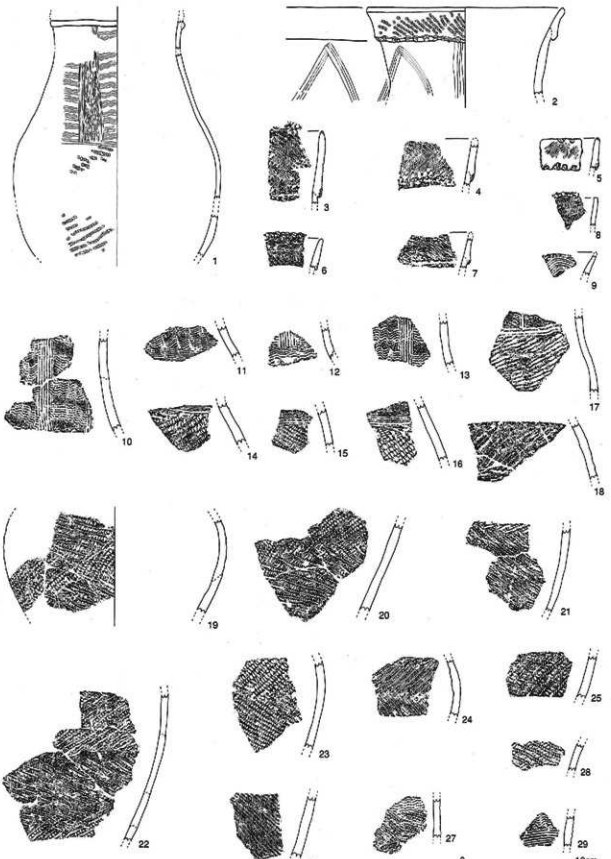
位置　Ⅳ－D区・C－13杭南側　**主軸方向**　N－42°－W　**平面形**　隅丸長方形　**規模**　東西4.0m×南北（5.5）m　**覆土の状況**　自然堆積　**床面**　全体にローム面を直接床面としており，硬化が認められる。部分的に小規模な貼床が認められ，やや軟弱である。　**壁面**　ローム層への掘り込みは約20cm～25cm。床面僅かに外傾してほぼ垂直に立ち上がるが，南コーナー付近においてはやや内湾して立ち上がる。　**柱穴**　主柱穴が4本確認される。南東の柱穴はSD01に攪乱されるため下端のみ確認できた。1.75m×2.3mの長方形の柱間。4本とも東西方向に楕円形の掘り方を有することから，補強用の添柱が付属した構造であったと考えられる。　**炉**　中央部，柱間のやや北寄りに地床炉が1カ所確認される。底面・壁面ともに被熱による赤色化・硬化が観察できる。平面形は南北方向に長軸をとる楕円形で，焼土は中央部で約10cmの堆積が確認でき



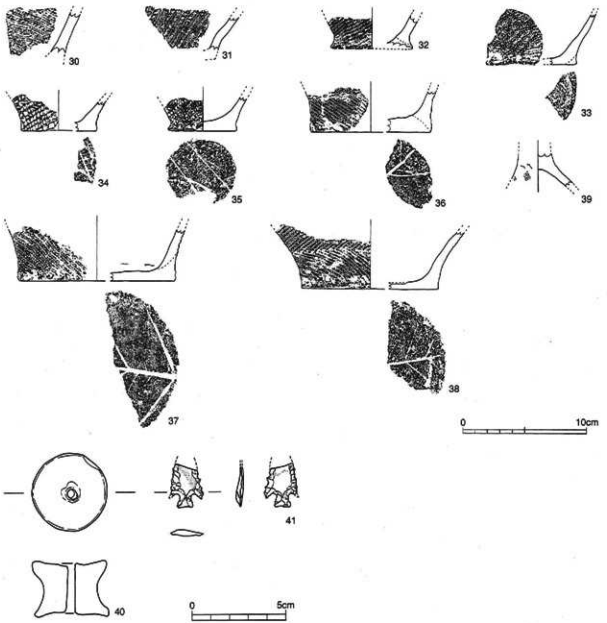
第33図　SI12遺物平面図

た。　**備考**　竪穴平面形の約1/3にあたる南東部をSD01に撹乱される。遺物は大半が小破片として埋土中より多数出土（約350点），土製紡錘車１点，アメリカ式石鏃１点が確認された。土器片は住居内の埋土に散在するが，Ｐ３南側に集中する状況が確認された。土製紡錘車は，地床炉北西の土坑埋土中より検出。直径約4.0cm・厚さ3.0cmで，櫛描文は施されていないが，形状・規模ともにSI08出土の紡錘車に類似する。

遺物（第34・35図，図版PL21⑤・PL22①）　１は，十王台式の壺である。頸部と胴部が櫛描横線文により区画され，頸部には隆帯がめぐり，その下に縦区画充填波状文が，胴部には付加条２種の縄文が施されている。２は，複合口縁で，段部に縄文原体による押捺がめぐり，口縁部には付加条１種の縄文が施されている。頸部は櫛描縦線文で区画され，その間を同一の工具による山形文が施文される。３～７も，複合口縁部片である。口唇部もしくは段部に縄文原体による押捺がめぐり，３～６は付加条１種の縄文が，７は付加条２種の縄文が施されている。８は，単口縁で，口唇部に縄文原体による押捺がみられる。９は，口縁部に波状文が施されている。10～16は，頸部片である。10・12・13は縦区画充填波状文，11は波状文，14・16は横線文，15は簾状文，27・29は波状文＋横線文，17は縦線文＋横線文が施されている。尚，17は２と同一の可能性が考えられる。18～26は，胴部片である。18・24・26は付加条１種の縄文，19・21・22・25は付加条２種の縄文，20は上段が直前段多条，下段が付加条２種の縄文，23は単節の縄文が施されている。30～38は，底部片である。30・33は付加条２種の縄文，34～38は付加条１種の縄文で木葉底，34は直前段多条で木葉底である。底径は，32が6.4cm，34が6.0cm，35が5.5cm，36が9.6cm，37が12.4cm，38が11.0cmである。39は，高坏の脚部で，外面は縄文が部分的にみられる。この他に土製紡錘車（40），石鏃（41）が出土している。紡錘車の径は3.9cm，厚さ2.9cmである。石鏃の材質はチャートで，切っ先を欠き，現存長2.2cm，幅1.7cm，厚さ0.4cmを測る。



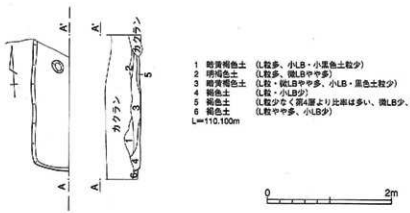
第34図　SI12出土遺物実測図（1）



第35図　SI12出土遺物実測図（2）

SI13

位置　V区・F14杭南側　**主軸方向**　N－4°－E　**平面形**　不明　**規模**　不明　**覆土の状況**　自然堆積と思われる。　**床面**　小ロームブロック混入の褐色土による薄い貼床が認められ，全体に軟弱である。**壁面**　やや外傾して直線的に垂直に立ち上がる。ローム層への掘り込みは約5cm。　**柱穴**　住居内柱穴1本が確認された。　**炉**　調査区内には確認されなかった。　**備考**　確認できたプランは南西コーナー付近部分のみであり，平面形の大半は調査区外。SI02に類似する。　**遺物**　検出されなかったが，周辺の旧表土層より，棒状浮文を有す二軒屋式土器の頸部が出土している。



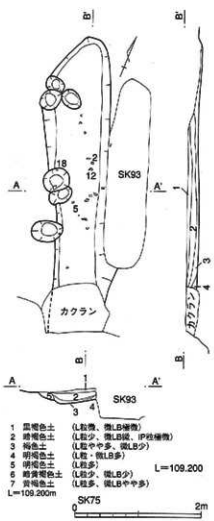
第36図 SI13平・断面図

② 土坑

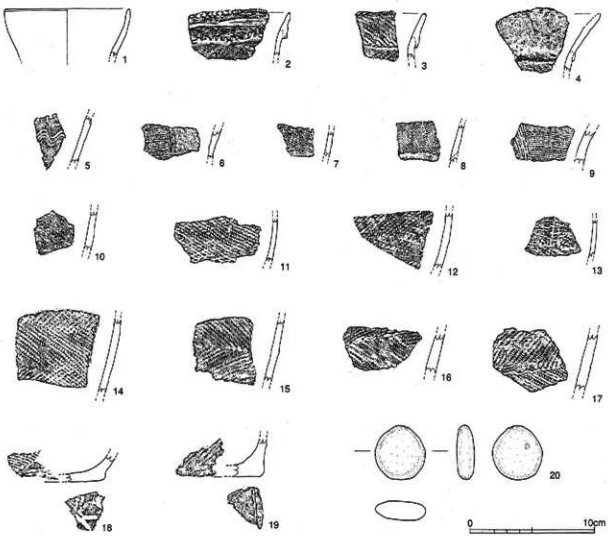
SK75

位置 Ⅳ－A（W）区・C９杭南側 **平面形** 隅丸長方形 **規模** 短軸1.1m・長軸4.8m以上 **覆土の状況** 自然堆積，軟弱な埋土 **床面** 長軸方向になだらかに窪む舟形 **壁面** 内湾しつつ外傾して立ち上がる。 **備考** 西壁沿いにピット２本を検出。南壁を撹乱される。二軒屋式土器の破片が遺構全体に散在する。

遺物（第38図，図版PL22②） １は，土師器小型壺の口縁部片である。口径10cmを測る。２以降は弥生土器片である。２～４は，複合口縁部片である。２は，口唇部と段部に縄文原体による押捺がめぐる。口縁部は無文で，頸部に縄文が施される。３は，口唇部に縄文原体による押捺がめぐる。口縁部及び頸部に付加条１種の縄文が施される。４は，口縁部が無文で，頸部に縄文が施される。５～９は，頸部片である。５・８は波状文，６・９は縦区画充填波状文，７は斜格子文である。10～17は，胴部片である。11・12は，付加条２種の縄文，14は直前段多条の縄文，15～17は付加条１種の縄文が施されている。18・19は，木葉底の底部片で，付加条１種の縄文が施されている。この他に，磨石？（20）が出土している。



第37図 SK75平・断面図

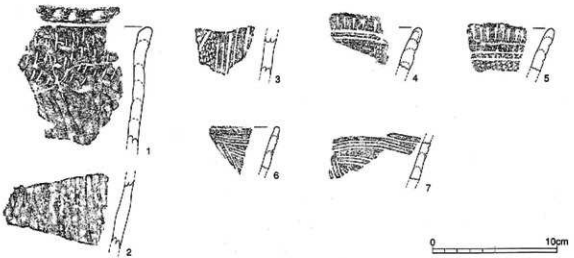


第38図　SK75出土遺物実測図

③　遺構外遺物

縄文時代の土器（第39図，図版PL22③）

1と2は，同一個体である。深鉢形の縄文土器で，口縁部に爪形文が4段，口唇部を指による押捺がなされている。胴部中位から下半にかけてヘラ状の工具による縦方向のナデが施されている。胎土に雲母，長石を多く含み，焼成は良好，色調は暗褐色。3は，深鉢形の縄文土器の胴部片で，地文にLRの縄文を施し，その後縦方向の集合沈線を施す。4・5は，深鉢形の縄文土器の口縁部片で，連続刺突文が複数段施され，その後数条の沈線がめぐる。6・7は，深鉢形の縄文土器の口縁部片で，半截竹管による沈線文が施されている。



第39図　遺構外出土遺物（縄文土器）実測図

弥生時代中期の土器（第40・41図、図版PL22④・PL23①）

1～11は，甕の口縁部片である。1は，疎な撚糸文を施し，棒状の浮文が貼り付けされている。2は，口唇部に指頭による押圧が施され，瘤状の浮文が貼り付けされている。3は，付加条縄文が施され，口唇部に刻みをもつ。口縁部内面には平行沈線文がめぐる。4は，外面に付加条縄文を施し，棒状工具による口唇部に刻みをもつ。5は，横位の櫛描横線文，6と7は，口縁部無文で口唇部に縄目の押圧が施される。8は，地文に撚糸文が施され，その後棒状工具による沈線が5条めぐり，口唇部に刻みをもつ。9は，下垂する櫛描連弧文を施し，口唇部にヘラ状工具による刻みを持つ。10は，折り返し口縁で下端に棒状工具による刺突文がめぐる。頸部には下垂する棒状工具による連弧文が施されている。

11は，竹管状工具による平行沈線が施され，口唇部にヘラ状工具による刻みが施される。12と同様の工具により方形の区画文が施され，同一個体と考えられる。13は，縦位と横位に2本の平行沈線が施される。14は，口縁部片で口唇部に縄文を施文し，頸部には棒状工具による波状文が施される。15と16は，頸部片で棒状工具による山形文が施される。17は，短く屈曲する口縁部をもち，口唇部にはヘラ状工具による刻みが施される。胴部上半に下垂する櫛描連弧文，下半に斜位の櫛描文（4本）が施される。18は，ほぼ直立する口縁部片で，櫛描横線文と下垂する櫛描連弧文が施される。19と20は，胴部片で斜位の櫛描文（4～5本）が施される。

21は，地文に撚糸文，その上に棒状工具による2列の列点文が施される。22は，棒状工具による2列の列点文が施される。23は，横位多段の連続刺突文が施されている。24と25は，壺の口縁部片で同一個体と考えられる。4本の横線に縦位の線を入れる短冊文が2段に施文され，その下に渦巻文が施される。26は，壺の口縁部片である。内湾する口縁で，外面に下垂する連弧文（三重弧）が施され，口唇部の弧線文の支点となる個所に貼瘤が付加される。また，円形の透孔が穿たれる。27は，壺の頸部から胴部上半にかけての破片である。頸部文様帯は，上から4本の横線に縦位の線を入れる短冊文－突帯－横線文（3段）－重四角文，肩部文様帯は，横線文－鈎状文－下垂する連弧文（四重弧），胴部文様帯は渦巻文が施される。28・31・32は，同一個体と考えられる。

33～43は，頸部片である。33は，ヘラ描きによる山形文。34・35は櫛描きによる山形文。36は，櫛描きに

よる連弧文。37は，櫛描きによる重四角文？と直線文。39・40は，櫛描きによる2段の横線文。

41は，棒状工具による3本の直線文。42は，櫛描きの横線文。43は，地文に撚糸文を施し，その後ヘラ描きを施す。44～47は，胴部片である。44は，3本のヘラ描きによる三角文。45は，地文に撚糸文を施し，一本描きの沈線による重四角文。46は，一本描きの沈線による重四角文。47は，ヘラ描きによる沈線文。48は，地文に縄文施文後，沈線文。49は，鉢形土器片である。体部に一本描きによる沈線が施される。また，外面が赤彩されている。口縁部は欠けているが，外側に開く形状と考えられる。

50は，底部片で付加条縄文が施され，一部にヘラ状工具による沈線が見られる。底部には網代痕が見られる。

弥生後期の土器（第42～45図、図版PL23②・PL24①・PL25①）

1～24は，口縁部片である。1は，2段の複合口縁で，外面に付加条1種の縄文を羽状に施す。また，口唇部及び口縁下端には縄文による押捺がめぐる。2個1対の棒状浮文が5ヶ所見られる。頸部は無文帯である。2は，付加条2種の縄文を口縁部から頸部にかけて施文し，頸部には3条の隆帯が廻る。隆帯には，指頭による押捺が施される。3は，複合口縁で口唇部及び口縁下端に縄文原体による押捺がなされる。また，頸部に縄文が施される。4は，複合口縁で口唇部及び口縁下端に押捺がなされる。口縁部外面は無文である。5は，付加条2種の縄文を口縁部から頸部にかけて施文し，頸部には3条の隆帯が廻る。隆帯には，指頭による押捺が施される。6は，2段の複合口縁で外面に付加条1種の縄文を施す。また，口唇部及び口縁下端に縄文による押捺がめぐる。1段目と2段目の間に棒状浮文を貼りつけている。7は，2段の複合口縁で外面に付加条1種の縄文を施す。また，口唇部及び口縁下端に縄文による押捺がめぐる。8は，複合口縁で外面に付加条1種の縄文を施す。また，複合口縁部下端に棒状工具による刺突がめぐる。また，頸部にも付加条1種の縄文を施す。

9は，複合口縁で外面に付加条1種の縄文を縦位に施す。また，口唇部及び口縁下端に縄文による押捺がめぐる。10は，複合口縁で，外面に縄文を施す。また，口縁下端に縄文による押捺がめぐる。頸部外面に付加条1種の縄文を施す。

11は，複合口縁で外面に縄文を施す。口唇部はヘラ状工具による刻み，口縁下端に縄文による押捺がめぐる。12は，複合口縁で外面に付加条1種の縄文を施す。口縁下端に櫛状工具による刺突がめぐる。頸部外面は無文帯である。13は複合口縁で，外面にＬＲの縄文を施す。口唇部及び口縁下端に縄文による押捺がめぐる。14は，複合口縁で外面に付加条1種の縄文を施す。口唇部に縄文による押捺がなされる。15は，単口縁で口縁部外面に縄文が施され，口唇部に縄文による押捺がなされる。16は，単口縁で口縁部と頸部の間に縄文原体による押捺がなされ，頸部文様帯は，縦区画文の間を格子目文が施される。17は，複合口縁で外面に付加条1種の縄文を施す。口唇部に縄文による押捺がなされ，棒状浮文3個と円形浮文2個が貼りつけされる。18は，複合口縁で頸部に直線文と波状文が施される。19は，頸部片で櫛状工具による刺突と波状文が施される。20は，単口縁で外面に直前段多条の縄文と刺突が施される。

21は，複合口縁で外面に直前段多条の縄文を施す。口唇部はヘラ状工具による刻み，口縁部下端は棒状工具による刺突がめぐる。22は，複合口縁で外面に縄文を施す。口縁部下端は棒状工具による刺突がめぐる。頸部は櫛描横線と波状文が施される。23は，頸部片で櫛状工具による刺突と連弧文が施される。24の口縁部は，縦区画充填波状文が施される。頸部に4条の隆帯が廻る。隆帯には，指頭による押捺が施される。

25～45は，頸部片である。25は，頸部に櫛状工具による刺突と波状文が施される。26は，頸部に波状文と

櫛描横線が施される。27は，頸部に縦区画充填波状文と刺突が施される。28は，複合口縁で外面に付加条1種の縄文を施す。口縁部下端に縄文による押捺がなされる。頸部は無文帯である。29は，頸部無文帯で胴部上半にRLの単節縄文が施される。30は，頸部に波状文，胴部上半に付加条1種の縄文が施される。

31は，頸部に波状文と櫛描横線，胴部上半に付加条1種の縄文が施される。32は，頸部に簾状文，胴部上半に付加条1種の縄文が施され，2個1対の円形浮文が貼りつけられる。33は，頸部に櫛描横線，胴部上半に付加条1種の縄文が施され，2個1対の円形浮文が貼りつけられる。34・35・43は，縦区画充填波状文が施される。36は，複合口縁で外面に付加条1種の縄文を施す。口縁部下端に縄文による押捺がなされる。頸部は櫛描横線文後櫛描縦線文である。37は，頸部に3条の隆帯が廻る。隆帯には，指頭による押捺が施される。その下段に縦区画充填波状文が施される。38は，簾状文が施される。39は，櫛描横線文が3段施される。

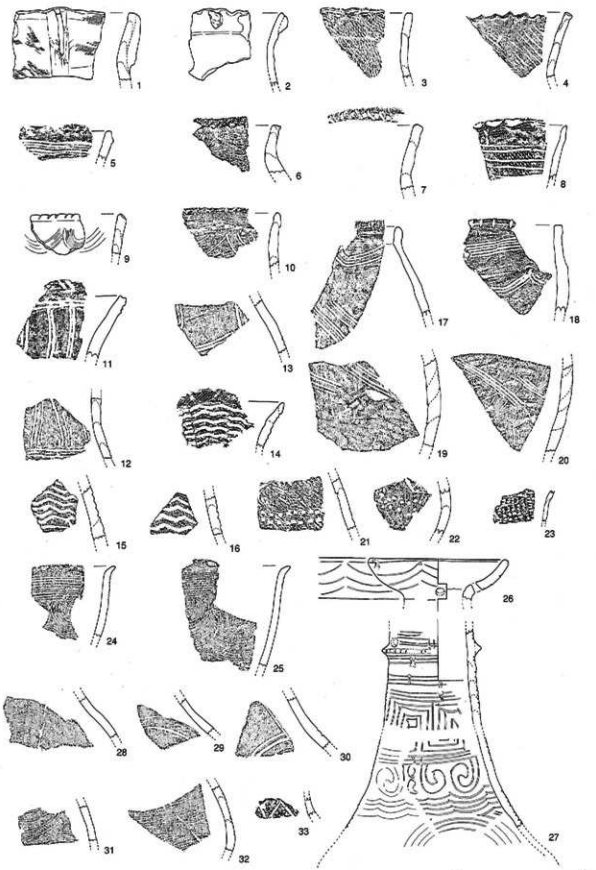
40・41・44は，波状文が施される。42・50は，頸部に簾状文，胴部上半に付加条1種の縄文が施される。45は，連孤文の後縦区画充填波状文が施され，胴部上半が付加条2種の縄文が施される。46は，頸部に波状文，胴部上半に付加条1種の縄文が施される。47は，頸部に縦区画充填波状文後波状文，胴部上半に付加条2種の縄文が施される。48・49は，胴部上半にS字状結節文が施される。51は，頸部から胴部にかけての破片で，頸部に隆帯がめぐり，それ以下は付加条2種が羽状に施される。

52～73は，胴部片である。52は，上半が付加条1種，下半に付加条2種が施される。53は，頸部が縦区画波状文，胴部上半に付加条2種が施される。54は，胴部上半で櫛描横線文－波状文－櫛描横線文が施される。55は，縦位のLRの単節縄文が施される。56・60・61・62・64は，付加条1種の縄文を羽状に施す。57・59は，RLの単節縄文が施される。58は，上段がLRの単節縄文，下段がRLの単節縄文が施される。63・65～72は，付加条2種の縄文が施される。

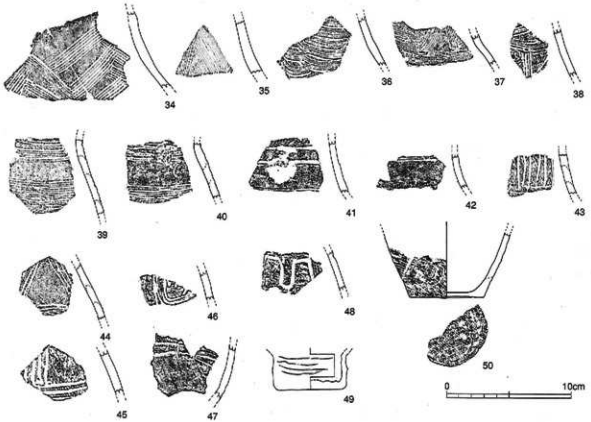
74～90は，底部片である。74は，底径が7.9cmで木葉底である。胴部に付加条1種縄文が施される。75は，底径が5.5cmで木葉底である。胴部に付加条1種縄文が施される。76は，底径が推定7.0cmで木葉底である。胴部に付加条1種縄文が施される。77は，底径が推定7.0cmで木葉底である。胴部に付加条2種縄文が施される。78は，底径が8.3cmで木葉底である。胴部に付加条1種縄文が施される。79は，底径が推定11.1cmで木葉底である。胴部に付加条1種縄文が施される。80は，底径が推定12.1cmで木葉底である。胴部に付加条1種縄文が施される。

81は，底径が推定6.9cmで木葉底である。胴部に直前段多条縄文が施される。82は，底径が推定12.0cmで木葉底である。胴部に付加条1種縄文が施される。83は，底径が推定8.4cmで木葉底である。胴部に付加条1種縄文が施される。84～87は，木葉底である。88は，底径が9.0cmで布目底である。胴部は直前段多条縄文が施される。89は，底径が7.5cmで布目底である。胴部に付加条2種縄文が施される。90は，底径が推定10.0cmで木葉底である。胴部に付加条2種縄文が施される。

91は，高坏の脚部片である。92は，蓋で口径が10.7cmで，外面はハケ後ナデ，内面はハケ後口縁部横ナデ。色調は暗褐色である。



第40図　遺構外出土遺物（弥生中期）実測図（1）



第41図　遺構外出土遺物（弥生中期）実測図（2）

紡錘車（第46図，図版PL25②）

1は，長軸4.2cm，短軸3.8cmの楕円形の石製紡錘車で，径0.6cmの円形の孔を5つ穿つ。両面穿孔。2は，2号墳の墳丘下，E14杭南西約5mの旧表土中より出土。径3.8cmの土製紡錘車で，櫛描文が施される。中央に0.5cmの円形の孔を穿つ。

石鏃（第47図，図版PL25③）

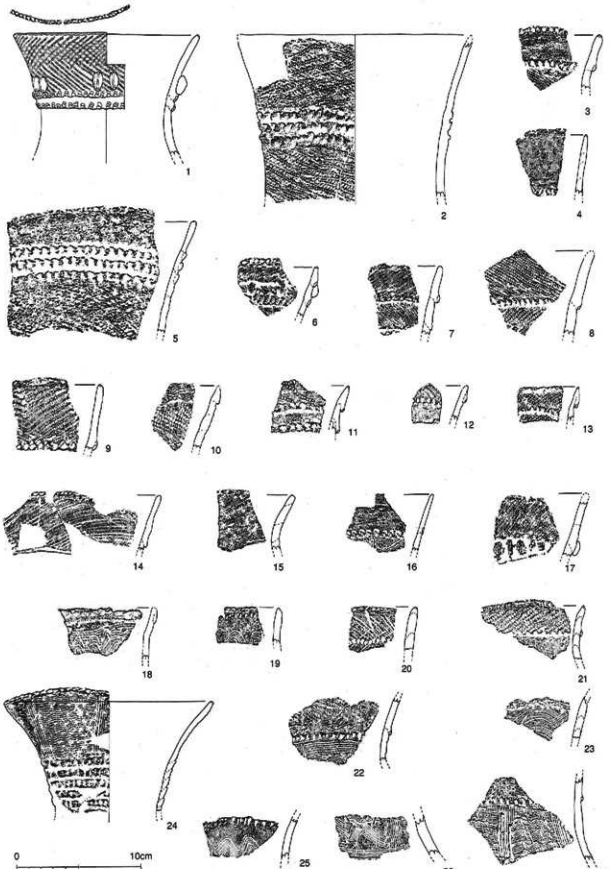
1は，基部が突出する菱形タイプのもので，最大長が2.2cm，最大幅が1.2cm，最大厚が0.4cmを測る。石質はチャート。2は，有茎鏃で，最大長が1.8cm，最大幅が1.3cm，最大厚が0.3cmを測る。石質は流紋岩質凝灰岩。

石器（第47図，図版PL25③）

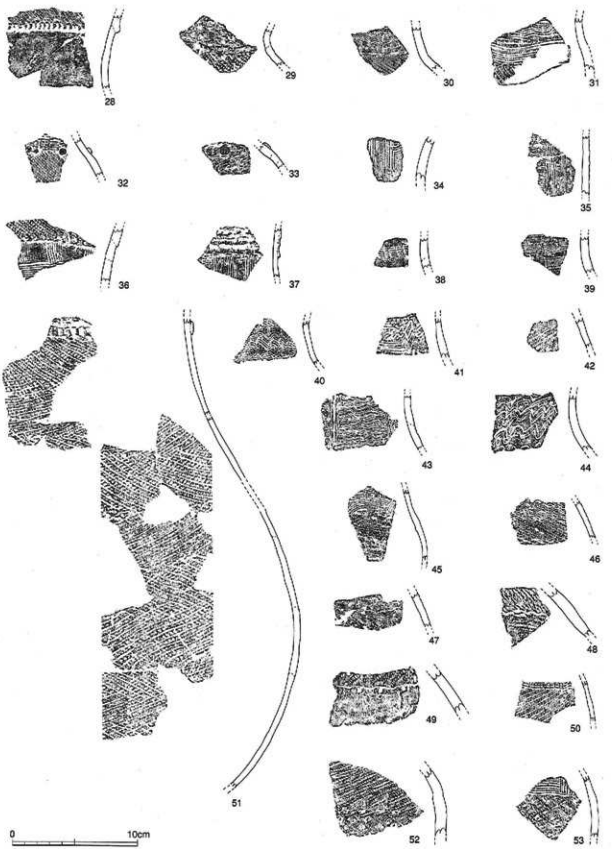
3は，剥片で，2号墳の盛土内より出土した。

石斧（第47図，図版PL25③）

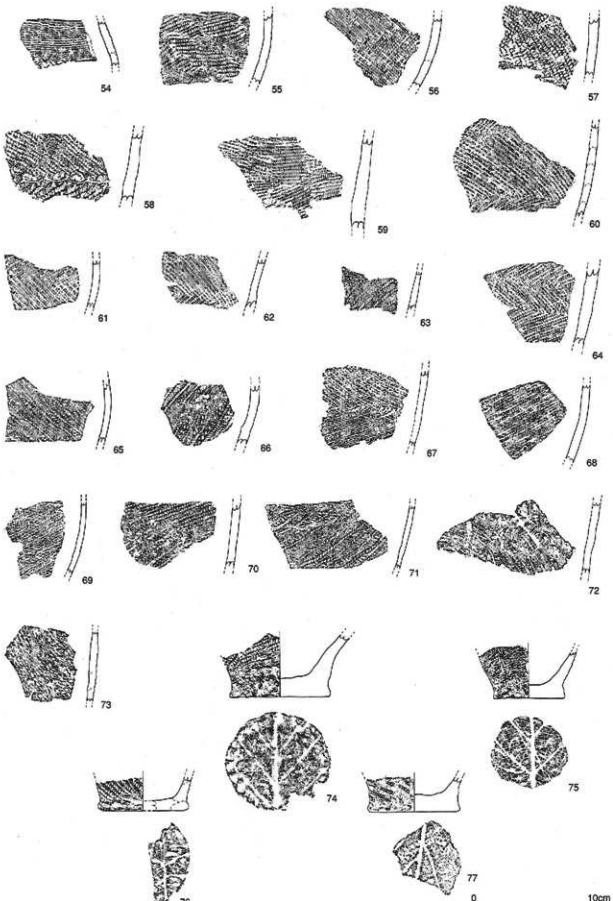
4は，磨製石斧で，2号墳の盛土内より出土した。最大長が11.0cm，最大幅が4.2cm，最大厚が1.4cmを測る。5は，2号墳の封土中，F14杭付近より出土。扁平両刃石斧で，一部欠損している。最大長が8.6cm，最大幅が推定5.3cm，最大厚が1.2cmを測る。6は，分胴形の打製石斧で，最大長が11.8cm，最大幅が推定7.8cm，最大厚が2.1cmを測る。



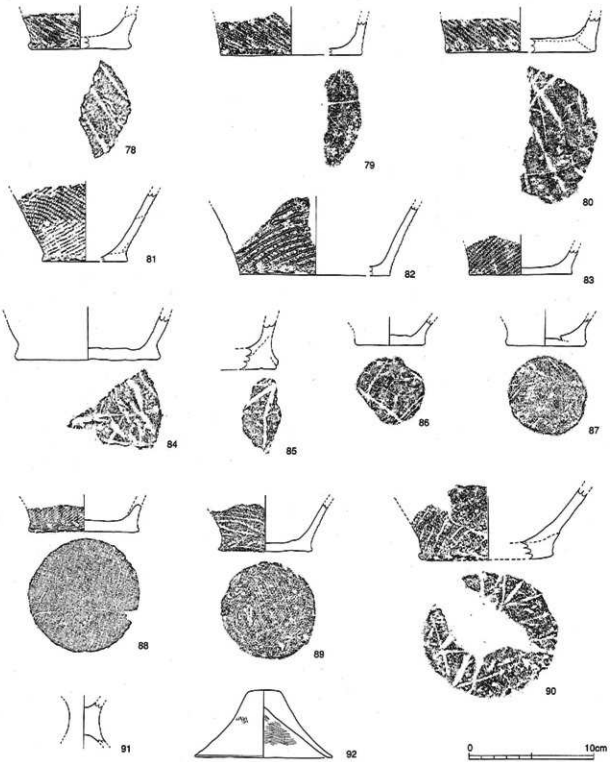
第42図　遺構外出土遺物（弥生後期）実測図（1）



第43図　遺構外出土遺物（弥生後期）実測図（2）

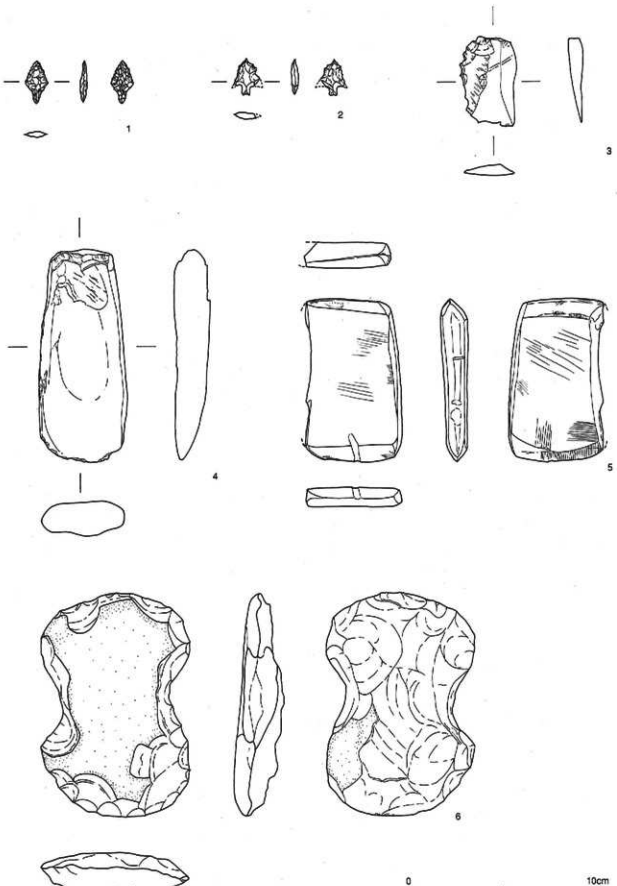


第44図　遺構外出土遺物（弥生後期）実測図（3）

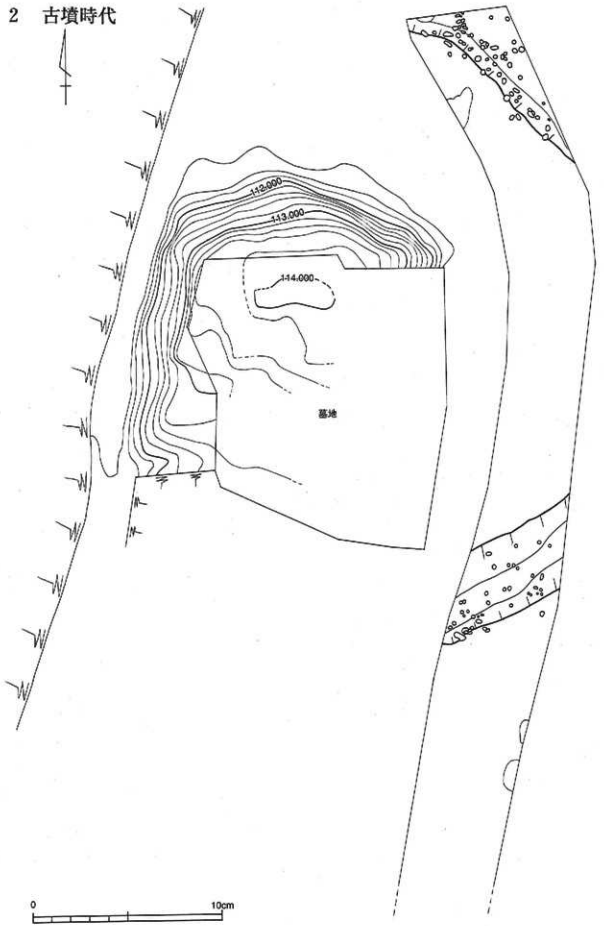


第45図　遺構外出土遺物（弥生後期）実測図（4）

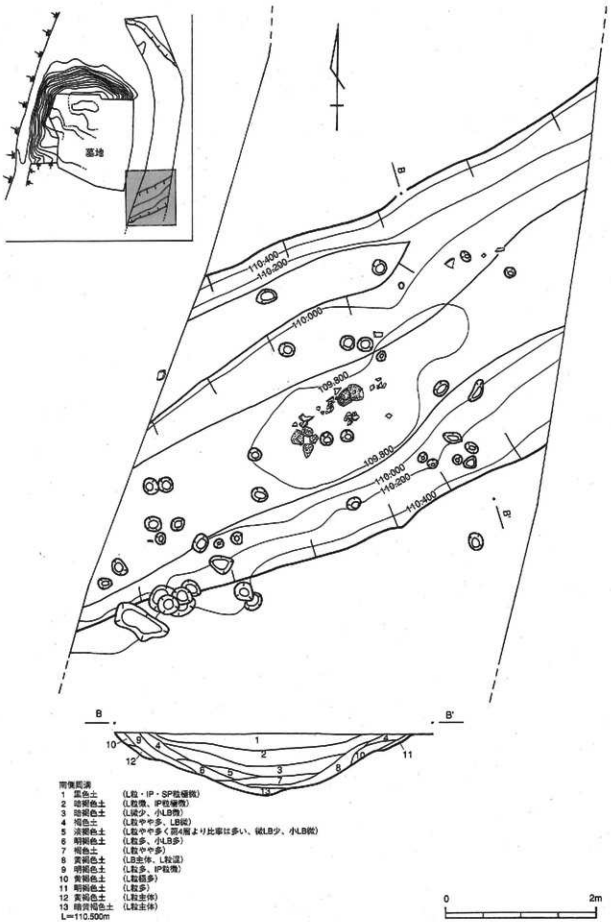
第46図　遺構外出土紡錘車実測図



第47図　遺構外出土石鏃・石器実測図

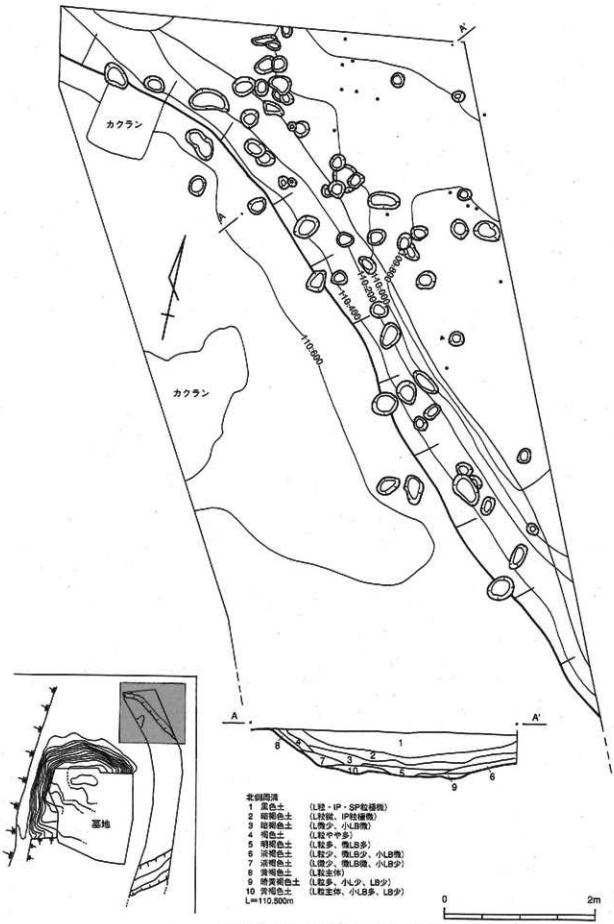


第48図　1号墳現況図及びトレンチ調査図



周溝断面
1 黒色土 (L粒・IP・SP粒極微)
2 暗褐色土 (L粒微、IP粒極微)
3 暗褐色土 (L微少、小LB微)
4 暗色土 (LBやや多、LB微)
5 淡褐色土 (L粒やや多く第4層より比率は多い、微LB少、小LB微)
6 明褐色土 (L粒多、小LB多)
7 暗色土 (LBやや多)
8 黄褐色土 (LB主体、L粒混)
9 明褐色土 (L粒多、IP粒微)
10 黄褐色土 (L粒精多)
11 明褐色土 (L粒多)
12 黄褐色土 (L粒主体)
13 暗茶褐色土 (L粒主体)
L=110.500m

第49図　1号墳南側トレンチ平・断面図



第50図　1号墳北側トレンチ平・断面図

竪穴住居跡１軒が調査区東部（Ⅰ－Ｃ区）から，倒壁挟込土坑２基が調査区西部（Ⅲ－Ｂ区）から確認された。古墳は２基確認された。２号墳は調査区のほぼ中央（Ⅱ区）に位置し，周溝の北部～西部と主体部１基を確認，２号墳に伴う埴輪棺９基を確認した。１号墳は２号墳の北方約340m，JR宇都宮線沿いに位置し，東側周溝の一部を確認した。

①　１号墳

位置　Ⅳ－Ｃ区　**墳形と規模**　直径約32mの円墳と推定　**墳丘**　墳丘は西部をJR宇都宮線による大規模な削平を受け，また北部・東部・南部も畑地耕作による削平を受けており，墳形は歪んでいる。墳頂部は墓地として利用されており，主体部が残存しているかは不明。現存する墳丘の高さは現地表より約２m60cm。**周溝**　墳丘の南東部及び北東部で確認される。南東部における周溝は幅約4.0m，深さ約0.8mで，浅いU字形を呈する。北東部における周溝は深さ約0.6mで逆台形を呈する。幅不明。　**埋葬施設**　不明。　**備考**　周溝埋土に弥生土器片が包含されることから，周辺に弥生時代の遺構の存在が考えられる。周溝埋土から少量の土師器片・須恵器片が出土した。

遺物（第51図，図版PL26①）　１～３は，須恵器の甕片である。調整は，胴部外面格子叩き後カキ目仕上げ，内面に同心円文を残す。胎土に白色砂粒を含む。焼成は良好。色調は灰色。４は，土師器の甕片である。推定口径13.2cm。球胴で，口縁部は「く」字を呈する。調整は，胴部外面ハケ後ナデ，内面ハケ後ヘラナデが施されている。胎土に石英，赤色スコリア粒，小石を含む。焼成は良好。色調は暗褐色。1/3残存。外面に炭化物が多く付着している。

第51図　１号墳出土遺物実測図

②　２号墳

位置　Ⅱ区　**墳形と規模**　直径約25.4mのやや不整形な円墳　**墳丘**　墳丘裾部は東部を民家・南部を市道・西部を民家の私道・北部を樹木の抜根によりそれぞれ撹乱を受けており，墳形に歪みが確認できる状態であった。また，墳頂部には氏神が鎮座，東裾部にかけて凝灰岩切石の階段が敷設され，鳥居が建立されていた。

削平を受けて現存する墳丘は，現地表より約３m。 **周溝** 幅1.8m～5.1m，深さ0.8m～1.8mで，断面逆台形を呈する。周溝北西部において周溝幅狭小部分が確認される。 **埋葬施設** 現存する墳丘頂上部より1.86mに凝灰岩の割石で構成された箱式石棺で構築される主体部を確認した。 **出土遺物** 周溝埋土から大量の円筒埴輪が出土した。出土レベルは，周溝底から50cm～80cmにの層に集中する。埴輪の詳細については，**⑤周溝内遺物**の項のとおり。

墳丘に関して

墳丘埋土中には二軒屋式土器が散在し，本墳周辺に弥生時代後期の住居跡が存在することを示唆していた。第３次調査以降に，その存在が明らかになる。周溝底から墳頂部までの高さは約５mを測り，当初の想定規模を上回るものであった。墳丘裾部は旧表土層のレベルにおいて平坦面を有する状況が観察できた。

墳頂部下，約220cmレベルに若干の河原石が混じる。盛土層１層墳丘中央部は，ロームブロックを多量に含む堅く締まった盛土層。墳丘は北に行くにしたがって，黒色土の堆積が厚い。墳丘盛土除去時，北東部において粘土粒混入の小礫が検出される。主体部構築の際の作業時に流出したものと考えられる。

墳丘下旧表土層の黒色土中より，弥生土器片（頸部から口唇部）及び多孔円盤（石製品）が出土する。周辺に同時期の遺構が存在していた可能性を示す。墳丘下の旧表土層は，固く締まりがある黒褐色土であるとともに，非常に脆くブロック状に剥離する。IP・SP粒を微量含む。

Ｂ－Ｃ区墳丘裾部付近に多量の埴輪片を確認。裾部に円筒埴輪列が廻っていたものと考えられる。墳丘裾部は硬く締まった明褐色土で，墳丘に敷設された埴輪列の第１次崩落層が確認できた。

周溝及び周溝埋土中遺物（埴輪）に関して

【第２次調査北側周溝部】

周溝の堀方は，西から東にかけて深くなる。埋土中に大量の埴輪片が包含されるが，中層（第182層）より集中して検出され，一時期に人為的に投棄された可能性を示す。Ｄ区サブトレンチ（D-ST2）の観察より，調査区西端に人為的に埋め戻されている部分の存在を確認。周溝内をまず墳丘側より，次いで周溝外縁より人為的に埋め戻している状況が観察できた。埋土はロームブロック主体の黒色土混入層で，数度にわたって埋め戻している。また，埋土上層は自然堆積層となっており，さらにSD02に攪乱される。

周溝下層からは，埴輪片は殆ど検出されない。周溝底の最下層には水性堆積状の灰白色粒子が観察された。KP層まで達する周溝底直上に，最大約10cm程度の堆積が観察できた。化学分析により，FA（二ツ岳降下火山灰層）と確認できた。塚山南古墳においては，周溝内埋土に降下が確認されていることから，塚山古墳群築造に次ぐ時期の造営と考えられる。

【第４次調査西側周溝部】

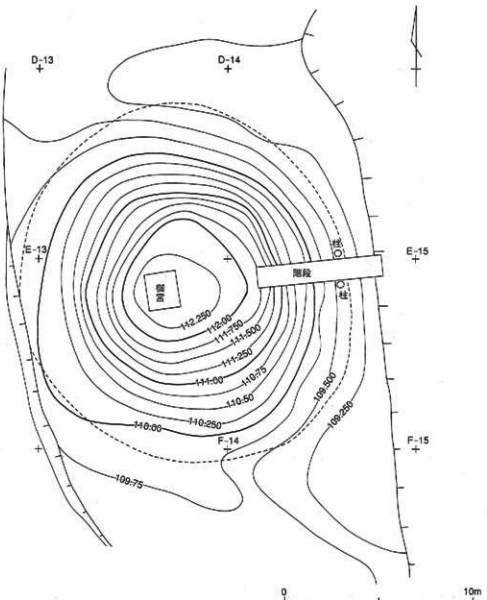
西側周溝中層において，埴輪片が多量に出土する（約1,100点）。第２次調査の北側周溝調査時の状況と同様の状況を示す。また，墳丘裾部及び外縁部漸移層にも，人為的に廃棄された様相を示す埴輪片の散在を確認する。上～中層埋土にて，馬形埴輪の鼻先部分及び脚部の破片を検出する。９号埴輪棺検出地点の西側付近に３群にわたり，形象埴輪（人物）を検出する。

【第４次調査東側周溝部】

２号墳側東周溝をセクション観察で確認。周溝底を僅かに検出するが，ローム層にまで達する攪乱により大きく破壊されている。

【第５次調査周溝南西部】

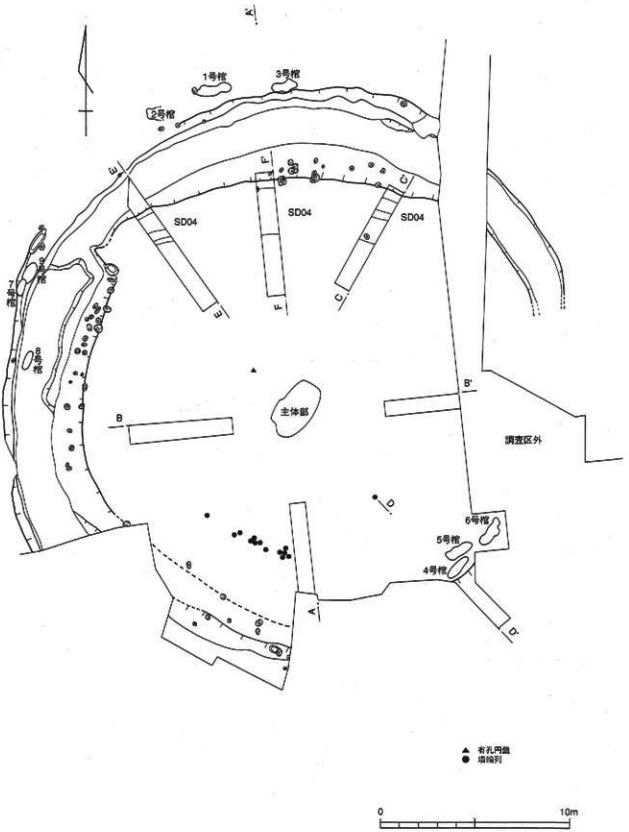
形象埴輪片を確認する。第４次調査時に確認された西側周溝埋土中の人物埴輪もしくは馬形埴輪（９号埴



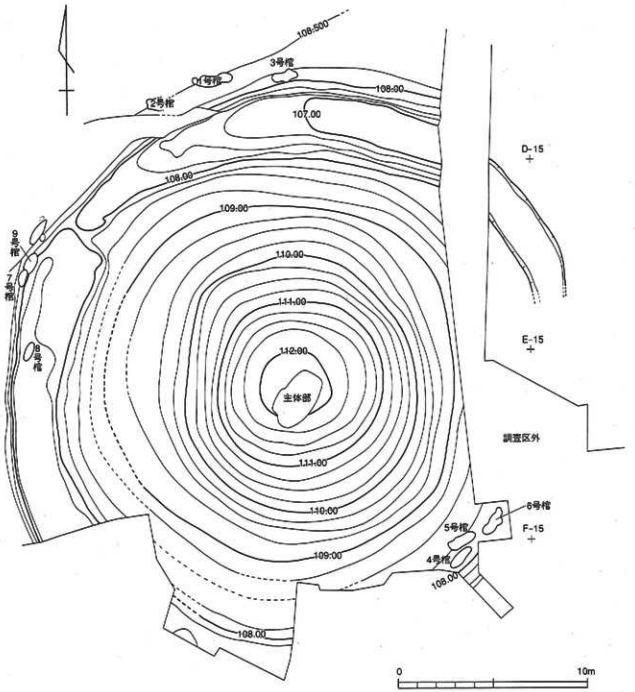
第52図　2号墳現況測量図

輪棺付近）と関連を示す。土師器片の検出があり，葬祭儀礼が行われた可能性を示す。須恵器は確認されなかった。埋土中に弥生土器片が検出されることから，弥生集落を攪乱しつつ古墳の造営が成されていたことが明らかになった。

周溝底の検出により，調査区西南端の下端幅は150㎝以上を有することを確認。調査区東端にて，墳丘裾部よりの転落による自然堆積と考えられる埴輪片を多量検出。


1号棺
2号棺
3号棺
4号棺
5号棺
6号棺
7号棺
8号棺
SD04
SD04
SD04
主体部
調査区外
A
A'
B
B'
C
C'
D
D'
E
E'
F
F'
G
G'
▲ 有孔円盤
● 埴輪列
0
10m

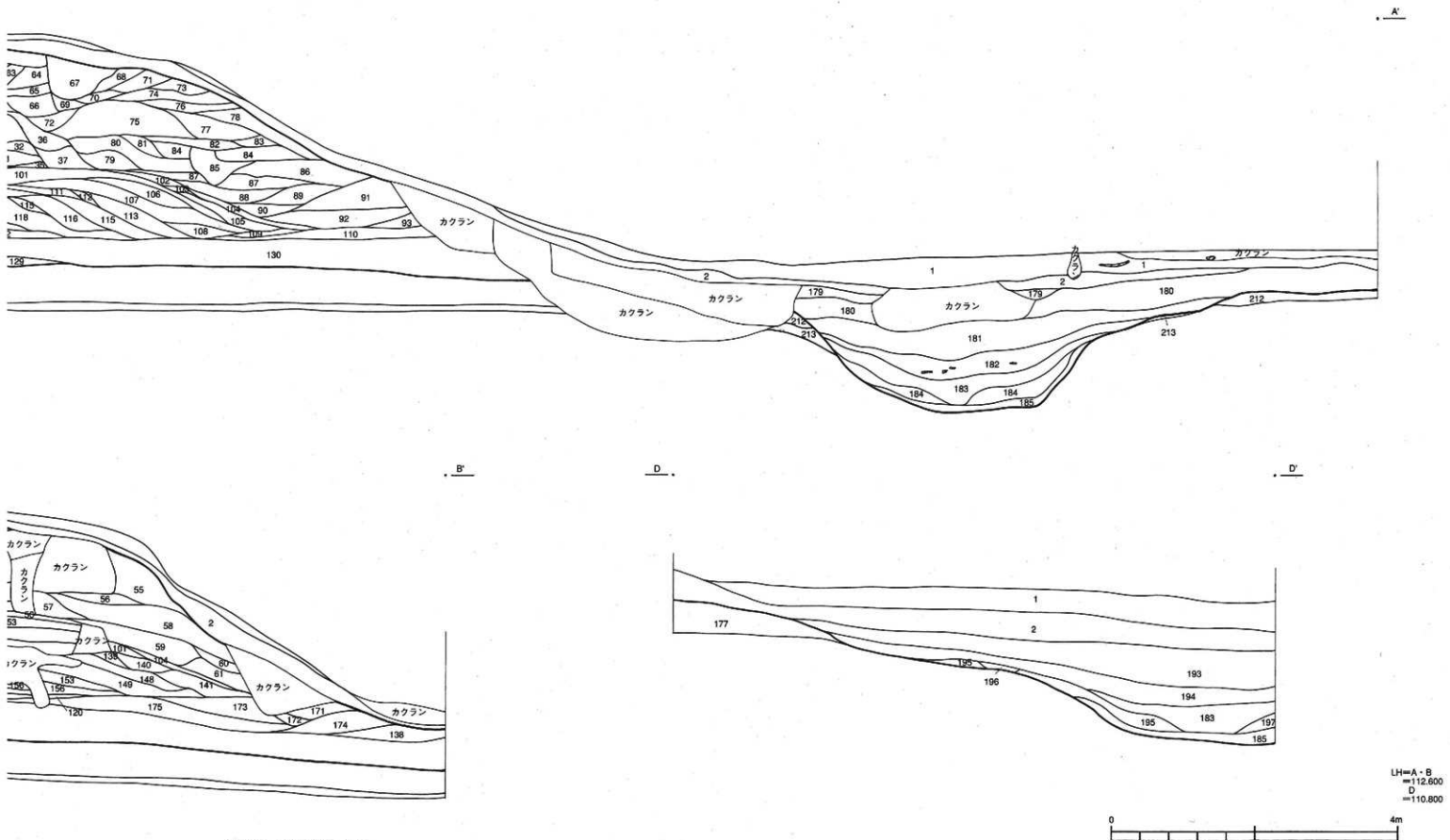
第53図　2号墳平面図



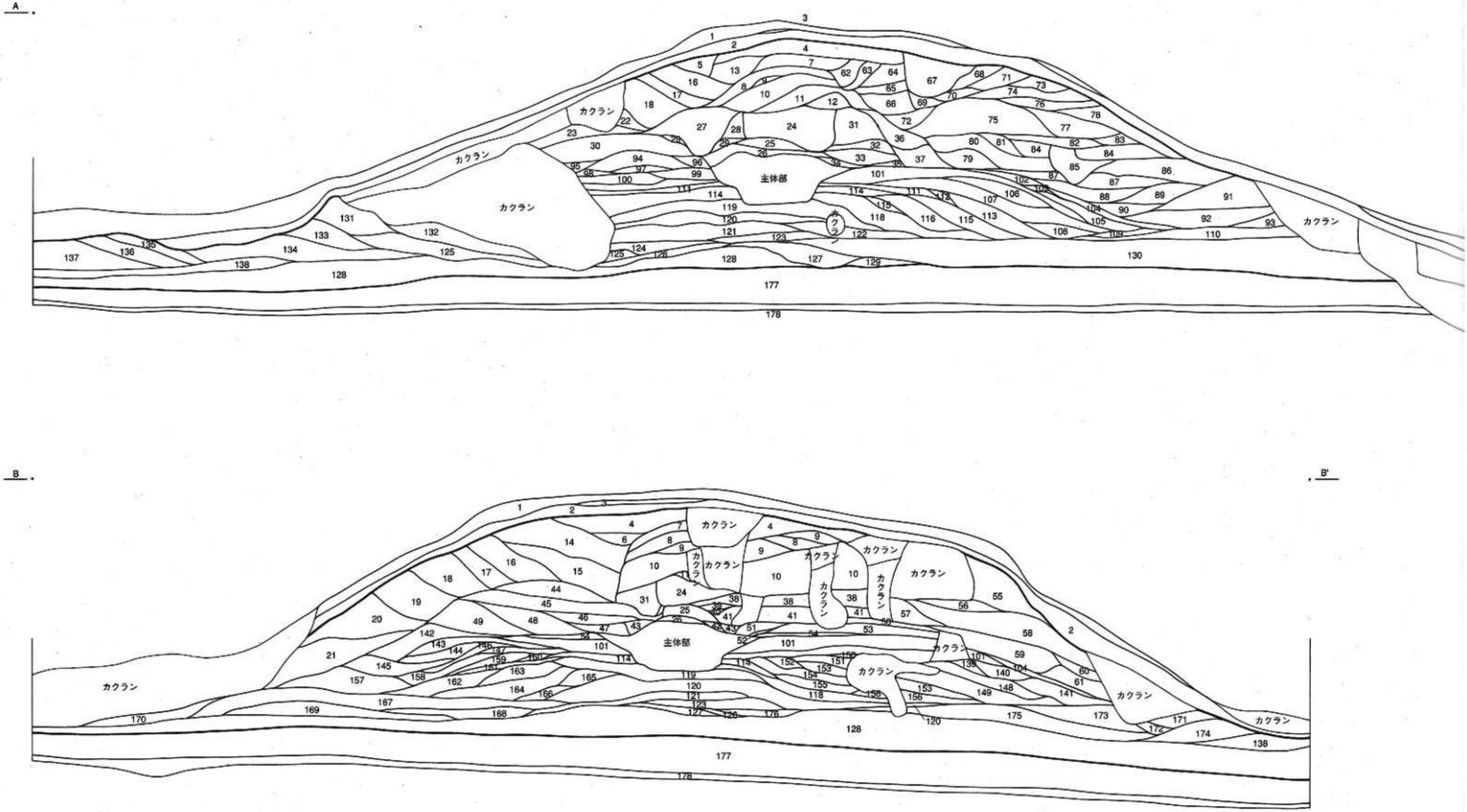
第54図　2号墳等高線図

1 黒色土 (植物根極多)
2 暗褐色土 (植物根多)
3 凝灰岩層
4 茶褐色土 (L粒混、小LB少、微LB滲)
5 黄褐色土 (小LB主体、微L粒・植物根多、脆い層)
6 暗黄褐色土 (L粒・微LB多、小LB混)
7 明黄褐色土 (LB主体、小L多、黒色土粒少)
8 黄褐色土 (LB主体、小L混、黒色土粒)
9 黒褐色土 (黒色土・LBの混合層、小LB・微LB少)
10 暗黄色土 (LB主体、微LB多、黒色土粒)
11 黒褐色土 (黒色土・LBの混合層、小LB・微LB少)
12 暗黄褐色土 (LB主体、小LB多、LB少)
13 明黄褐色土 (LB主体、L粒多、小L・黒色土粒少)
14 褐色土 (L粒混、小LB粒、微LB滲、黒色土粒)
15 暗黄褐色土 (L粒主体、小LB多、黒色土粒少)
16 暗褐色土 (L粒混、小LB粒、微LB少)
17 褐色土 (L粒混、小LB・微LB滲)
18 明褐色土 (L粒主体、植物根多、脆い層)
19 黄色土 (LB主体、植物根多)
20 黄褐色土 (LB多、褐粒状)
21 明黄褐色土 (LB主体、植物根多)
22 黄褐色土 (LB主体、L粒・小LB多)
23 暗黄褐色土 (L粒多、LB・黒色土粒の混合層)
24 淡黄褐色土 (小LB主体、L粒多)
25 暗褐色土 (L粒多、小LB少、微LB多、極めて硬い層)
26 暗灰褐色土 (L粒・粘土粒混、軟固層)
27 淡黄褐色土 (小LB主体、L粒多、極めて脆い層)
28 黒褐色土 (L粒褐機、LB微)
29 明黄褐色土 (LB主体、黒色土粒微)
30 黄褐色土 (LB主体、黒色土粒の混合層)
31 明黄褐色土 (LB主体、黒色土粒)
32 暗黄褐色土 (LB主体、黒色土粒の混合層、粘土粒少)
33 褐色土 (L粒多、LB少、黒色土粒少)
34 黄褐色土 (LB主体、L粒多、LB・黒色土粒)
35 暗黄褐色土 (LB主体、L粒多、小LB・黒色土粒少)
36 褐色土 (L粒混、小LB多、LB少)
37 褐色土 (L粒主体、植物根多、極めて硬い層)
38 明褐色土 (L粒主体、植物根多、極めて脆い層)
39 淡黄褐色土 (黒LB主体、小LB多、IP粒褐機、極めて硬い、締まりのある層)
40 黒褐色土 (LB微、粘土粒少)
41 暗黄褐色土 (L粒主体、LB多、締まりのある層、整地面？)
42 灰褐色土 (L粒混、小LB少、粘土粒混)
43 褐色土 (L粒・小LB混、粘土粒少、軟弱層)
44 褐色土 (L粒・小LB多、KP微)
45 暗黄褐色土 (L粒多、LB混、小LB混)
46 黄褐色土 (LB主体、黒色土粒少)
47 暗黄褐色土 (LB主体、黒色土粒少)
48 暗黄褐色土 (L粒混、LB褐、小LB・微LB少)
49 黒黄褐色土 (L粒少、小LB微)
50 黒褐色土 (L粒微、小LB少)
51 黄褐色土 (LB主体)
52 暗灰色土 (硬く締まった粘土層)
53 暗黄褐色土 (小LB・黒色土粒の混合層)
54 褐色土 (L粒混、微LB少)
55 褐色土 (L粒主体、植物根多、脆い)
56 明褐色土 (L粒多、微LB混)
57 暗黄褐色土 (LB主体、黒色土粒少)
58 黒黄褐色土 (LB・黒色土粒の混合層、L粒少)
59 褐色土 (L粒混、小LB少、微LB滲)
60 明褐色土 (L粒・LB多、IP粒褐)
61 明褐色土 (L粒・小LB少、LB微)
62 黄色土 (LB主体、L粒混、黒色土粒少)
63 黄褐色土 (L粒主体、小LB混、微LB多)
64 明黄褐色土 (小LB主体、L粒多、微LB混、黒色土粒微)
65 暗黄褐色土 (LB主体、L粒混、黒色土粒少)
66 淡黄褐色土 (L粒・LB多、黒色土粒混)
67 褐色土 (L粒主体、植物根多、脆い層)
68 明黄褐色土 (LB主体、植物根多、極めて脆い層)
69 褐色土 (L粒主体、締まりのある層)
70 褐色土 (LB主体、黒色土粒微)
71 明褐色土 (LB主体、LB・植物根多、極めて脆い層)
72 明褐色土 (L粒主体、微LB多)
73 明褐色土 (L粒主体、微LB多、褐粒状多、脆い層)
74 暗黄褐色土 (LB主体、L粒混、黒色土粒少)
75 淡黄褐色土 (L粒・LB・小LB多、脆い層)
76 暗褐色土 (L粒多、LB微多、小LB多、黒色土粒混)
77 黄褐色土 (L粒主体、植物根)
78 明褐色土 (L粒多、褐粒状)
79 黄褐色土 (LB主体、黒色土粒少)
80 黒褐色土 (小LB混、微LB少)
81 暗黄褐色土 (L粒少、LB混、微LB少)
82 黒色土 (LB微)
83 褐色土 (L粒・微LB多、小LB混)
84 明黄褐色土 (LB主体、L粒多、小LB・黒色土粒少)
85 褐色土 (微LB主体、L粒・小LB多、黒色土粒)
86 明褐色土 (L粒多、微LB混)
87 褐色土 (L粒・微LB少、小LB微)
88 黒褐色土 (黒色土主体、L粒微、LB多、小LB少)
89 暗黄褐色土 (L粒混、LB多、小LB混、黒色土との混合層)
90 黄色土 (LB主体、小LB多、黒色土粒少)
91 明黄褐色土 (LB主体、L粒・微LB多)
92 黄褐色土 (LB主体、L粒混、微LB少、IP粒微)
93 淡黄褐色土 (小LB多、微LB混、IP粒褐)
94 黄褐色土 (小LB主体)
95 黄褐色土 (LB主体)
96 暗褐色土 (小LB・黒色土粒の混合層)
97 黄褐色土 (LB主体)
98 暗褐色土 (小LB・黒色土粒の混合層)
99 褐色土 (L粒少、LB混)
100 明褐色土 (L粒混、LB多)
101 明褐色土 (L粒混、小LB混、微LB少)
102 黄褐色土 (L粒多、微LB混)
103 黒褐色土 (LB微)
104 淡黄褐色土 (砂粒を含んだ粒主体の層。
本宮に軽く検まっている。整地層？)
105 明黄褐色土 (LB主体、小LB混、黒色土粒)
106 暗黄褐色土 (L粒多、LB混、小LB多)
107 黄褐色土 (L粒多、小LB多、LB混、IP粒褐)
108 黄褐色土 (LB7層より粒多)
109 暗黄褐色土 (L粒混、LB少、IP粒褐)
110 暗褐色土 (L粒少、微LB滲)
111 茶褐色土 (L粒・LB少・小LB混、微LB少)
112 暗褐色土 (L粒少、小LB滲)
113 明黄褐色土 (LB主体、小LB混)
114 黄褐色土 (L粒・LB混、小LB・微LB多)
115 黄褐色土 (L粒少、小LB混、微LB微)
116 黒褐色土 (L粒褐、小LB少、微LB微)
117 黄褐色土 (L粒混、LB少、IP粒微)
118 暗褐色土 (L粒・LB多、小LB混)
119 黄褐色土 (LB多、小LB混)
120 黄褐色土 (LB主体、L粒混、小LB・微LB少、
黒色土粒混入、IP粒褐微)
121 暗黄褐色土 (12D層より粒多、IP粒微)
122 明黄褐色土 (LB主体、L粒混)
123 暗黄褐色土 (L粒多、微LB混、黒色土粒混入)
124 暗褐色土 (L粒褐、微LB機微)
125 褐色土 (L粒少、小LB微)
126 明褐色土 (L粒混、小LB・微LB少)
127 暗黄褐色土 (L粒多、LB少、小LB混、微LB多)
128 黒褐色土 (L粒・IP粒褐機)
129 黒褐色土 (L粒微)
130 黒褐色土 (L粒褐機、IP粒微、盛土層)
131 暗茶褐色土 (L粒多、微LB混、植物根多)
132 淡黄褐色土 (L粒混、小LB微、微LB少)
133 褐色土 (L粒少、微LB微)
134 褐色土 (L粒混、小LB少、盛土)
135 暗黄褐色土 (L粒多、LB少、微LB多)
136 黄褐色土 (L粒極多、LB多、脆い層)
137 褐色土 (L粒少、微LB微)
138 黒褐色土 (L粒微、盛土)
139 黒褐色土 (L粒・微LB微)
140 黄褐色土 (L粒微、LB混、小LB少)
141 黄褐色土 (L粒主体、微LB多)
142 暗黄褐色土 (L粒・LB多、小LB混)
143 黄褐色土 (L粒多、小LB・黒色土粒混)
144 黄褐色土 (LB・小LB多)
145 明褐色土 (L粒多、LB混、IP粒褐)
146 明黄褐色土 (LB・小LB多)
147 暗褐色土 (L粒少、微LB混、IP粒微)
148 暗黄褐色土 (L粒多、小LB混、IP粒微)
149 明黄褐色土 (LB主体、L粒多)
150 淡黄褐色土 (L粒少)
151 暗黄褐色土 (L粒混、LB・小LB少)
152 淡黄褐色土 (L粒混、LB・小LB少、微LB混)
153 黄褐色土 (LB主体、L粒減)
154 暗褐色土 (L粒少、LB微、小LB・微LB少)
155 黒黄褐色土 (黒色土砕主体、LB微、小LB少、
微LB微、IP粒褐微)
156 暗黄褐色土 (L粒少、LB減、小LB滲)
157 茶褐色土 (L粒混、LB多、小LB滲)
158 褐色土 (L粒多、LB・黒色土粒少)
159 暗黄褐色土 (L粒多、LB混、微LB滲)
160 褐色土 (L粒混、微LB少)
161 茶褐色土 (L粒混、IP粒褐減)
162 黒黄色土 (LB・黒色土粒の混合層)
163 茶褐色土 (LB主体、L粒混、小LB混)
164 明黄褐色土 (LB主体、L粒少、小LB混)
165 茶褐色土 (LB主体、L粒少、小LB混、IP粒微)
166 黒褐色土 (LB主体、L粒微)
167 暗黄褐色土 (L粒・LB混、小LB少、IP津谷褐微)
168 茶褐色土 (L粒少、LB減)
169 茶褐色土 (L粒少、微LB・IP粒減)
170 黒褐色土 (L粒微)
171 明褐色土 (L粒多、小LB混、微LB多)
172 暗褐色土 (L粒・LB混、IP粒褐機)
173 茶褐色土 (L粒混、LB少、微LB減)
174 暗褐色土 (L粒少、LB減、IP粒褐機)
175 茶褐色土 (IP褐機、旧表土層)
176 暗茶褐色土 (L粒少、IP粒微、薄移層)
177 暗褐色土 (L粒微、植物根機)
178 黒褐色土 (L粒微、IP粒褐微)
181 暗褐色土 (L粒微、微LB機褐減)
182 褐色土 (L粒・LB多、小LB混、IP粒褐)
183 茶褐色土 (L粒微、微LB褐減)
184 暗褐色土 (L粒少、茨LB褐、IP粒機微)
185 暗黄褐色土 (L粒混、少LB微、微LB少、IP粒褐微)
186 暗茶褐色土 (L粒混、LB多、小LB滲)
187 暗黄褐色土 (L粒微、小LB微、微LB少、IP粒褐微)
188 褐色土 (L粒混、小LB少)
189 茶褐色土 (L粒混、IP粒褐微)
190 褐色土 (L粒少、微LB褐)
191 茶褐色土 (L粒微、IP粒褐微)
192 暗褐色土 (L粒少、微LB褐)
193 茶褐色土 (L粒褐機、微LB減)
194 暗褐色土 (L粒少、微LB褐)
195 茶色土 (LB少、小LB、土師？)
196 黄褐色土 (LB多、黒色土多、土師？)
197 褐色土 (L粒多、小LB微、微LB減)
200 明色土 (L粒混、小LB・微LB少)
201 暗褐色土 (L粒主体、小LB・微LB多)
202 暗褐色土 (L粒少、小LB微、微LB少)
203 明黄褐色土 (LB主体、小LB・微LB多)
204 黒褐色土 (L粒少、微LB微)
205 褐色土 (L粒混、小LB・微LB少)
206 暗褐色土 (L粒主体、小LB・微LB多)
207 暗褐色土 (L粒少、小LB微、微LB少)
208 明黄褐色土 (LB主体、L粒多)
209 黒褐色土 (L粒少、微LB微)
210 暗黄褐色土 (LB主体、小LB混)
211 茶褐色土 (L粒混、植物根)
212 暗褐色土 (L粒少、微LB微、薄移層)
213 暗茶褐色土 (L粒混、微LB少、薄移層)

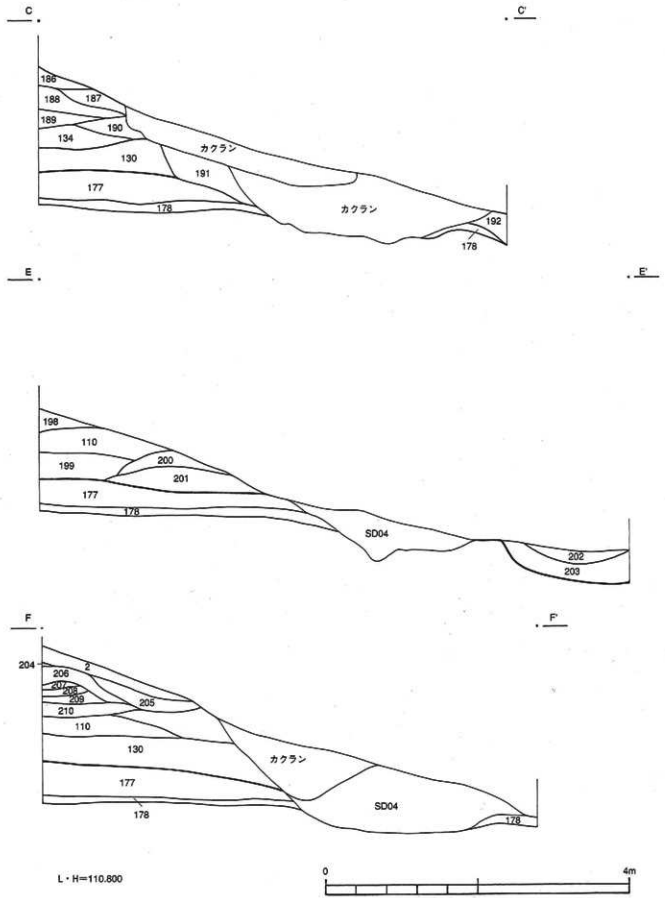
第3表　2号墳土層内容一覧



第55図　2号墳断面図（1）



第55図　2号墳断面図（1）

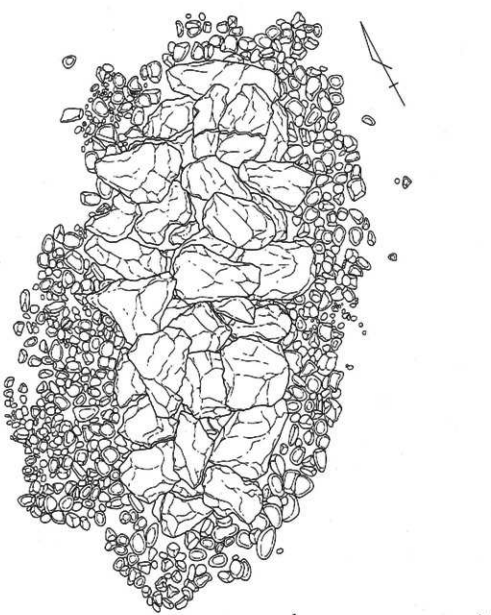


第56図　2号墳断面図（2）

③　2号墳埋葬主体部

墳丘を覆う表土を除去した状態では，墳頂部に削平を受けていたものの主体部に達する撹乱はないものと想定されていた。盛土の状況を確認しながら掘り下げたところ，墳頂下168.8cmレベルにて固く締まった砂粒混入の整地層が確認された。墳丘の盛土作業において，一時平面的に整地した上で主体部を構築している。墳頂下170cmレベルにて埴輪片が出土，撹乱を示す。墳頂下180cmレベルにて粘土層及び直下に礫の存在を確認。竪穴式の主体部を検出する。主体部堀方には裏込めの礫が詰め込まれ，凝灰岩（割石）の石棺が組み合わされた後，同材で天井部を載せる。さらにその上部に礫を敷いた後，粘土で覆う重層的な構成となっている。

主体部上面粘土層南西部において，漆片がまとまって検出される。木質或いは皮革製の楯もしくは胡簶を，主体部を構築した後にその上面に置いたものと推定，塗布された漆のみが残存し，検出されたものと考えら

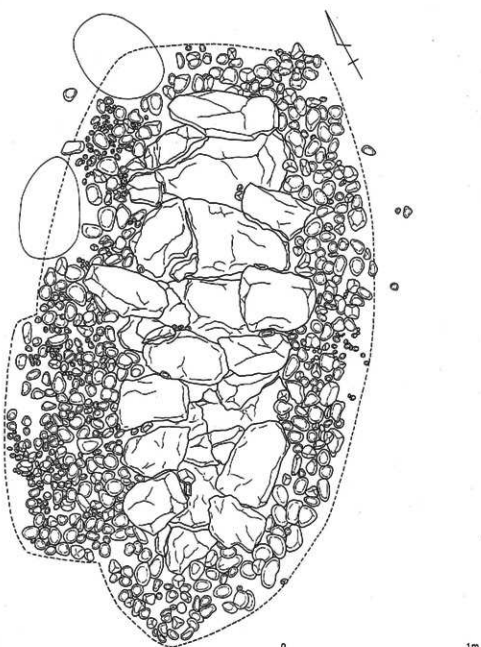


第57図　2号墳主体部出土状況図（1）

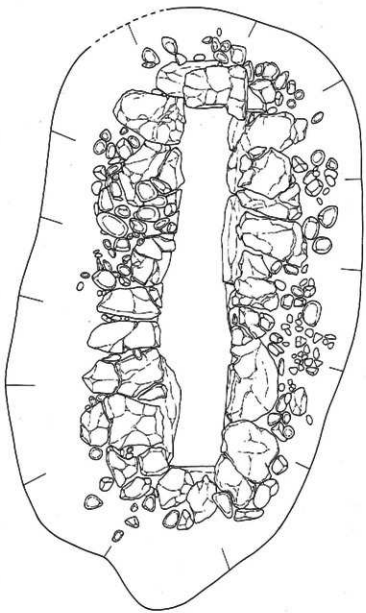
れる。

主体部天井を覆う礫及び凝灰岩割石の一部を除去したところ，舟形に配置された石棺天井部の平面形が確認できた。中央やや南寄りの天井石１枚が陥没しており，側壁の凝灰岩の一部が露呈していた。内部に堆積する砂礫層はローム粒を多量に含み，非常に乾燥した状態を保っていた。このため，遺物の残存状況は良好。石棺は全長約２m，幅約40cm，深さ約30cm。

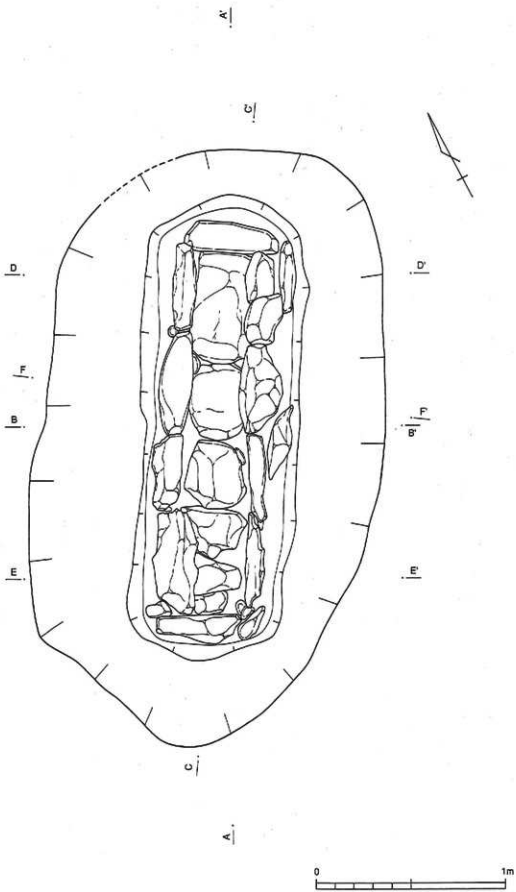
天井部の凝灰岩を除去したところ，割石を組み合わせた箱式石棺と確認。石棺内部の表面及び組合せ部分の隙間を粘土で覆い，赤色顔料（ベンガラ）を塗布している。石棺北壁の凝灰岩は整状工具による加工跡が明瞭に確認できる。組合せた凝灰岩割石の隙間に充填されている粘土は，ドーム状に残存している。主体部内に確認された遺物は第65図～第74図，図版PL26②～PL27③・カラー口絵②・④・⑤に示すとおり。



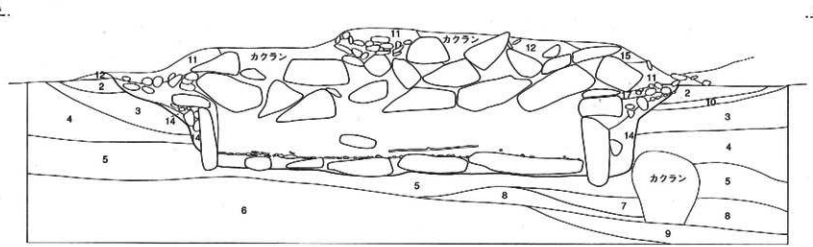
第58図　2号墳主体部出土状況図（2）【舟形に装飾された礫及び天井石の状況】



第59図　2号墳主体部出土状況図（3）【天井石除去後の状況】



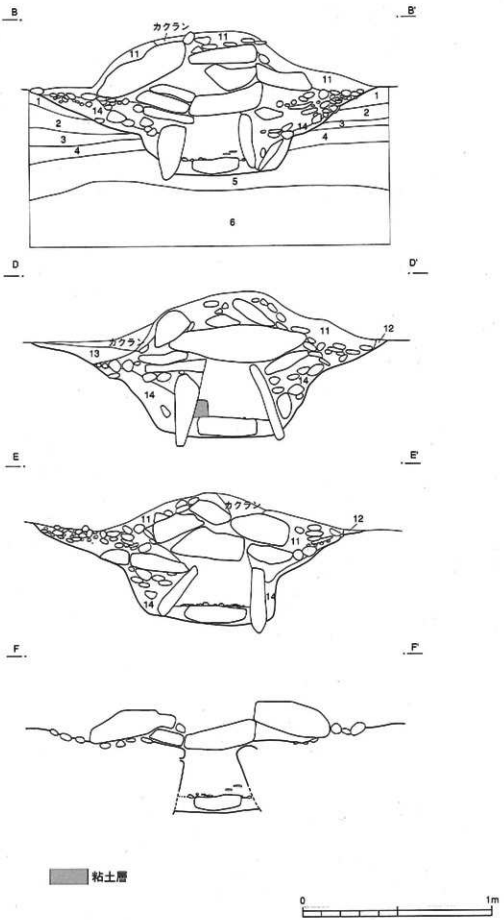
第60図　2号墳主体部平面図【箱式石棺及び掘り方の状況】



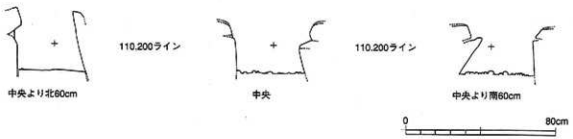
(1) (2) 共通土層
1 褐色土 (ローム粒混、小ロームB少)
2 暗褐色土 (ローム粒少、ロームB混)
3 暗黄褐色土 (ローム粒・小ロームB多、ロームB少、黒い層)
4 黒褐色土 (ローム粒微、微ロームB粒微)
5 明褐色土 (ローム粒多、小ロームB少、微ロームB混)
6 淡黄褐色土 (ローム粒・小ロームB混、ロームB多)
7 黒褐色土 (ローム粒微)
8 黄褐色土 (ローム粒主体、黒色土粒微)
9 黒褐色土 (ローム粒極微)
10 黒色土 (ローム粒極微)
11 灰白色土 (軽石主体)
12 黄褐色土 (ローム粒主体、粘土粒多)
13 暗黄褐色土 (小ロームB多)
14 黒色土 (ローム粒混じり、黒い)
15 褐色土 (ローム粒多、粘土粒多)
16 黄淡色土 (ロームB多)
17 小砂利層
L・H=110.800

0 1m

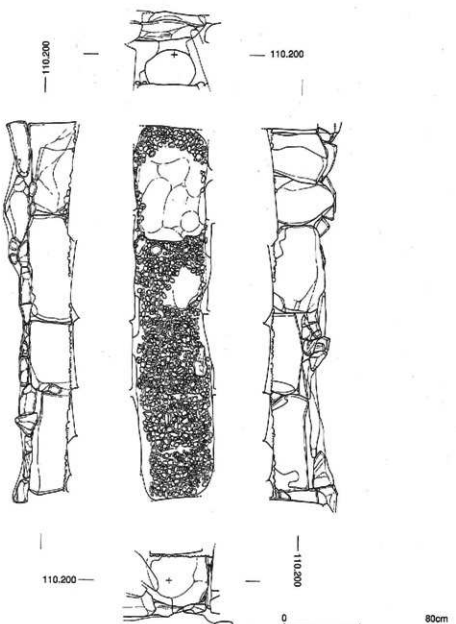
第61図 2号墳主体部断面図 (1)



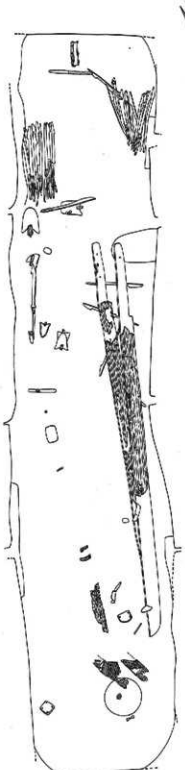
第62図　2号墳主体部断面図（2）



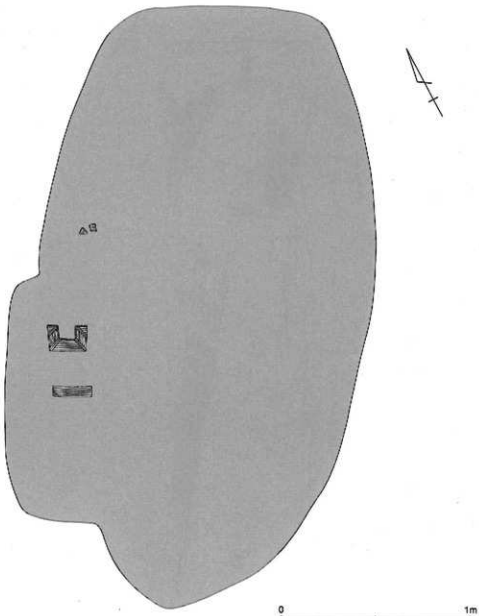
第63図　2号墳主体部断面図（3）



第64図　2号墳主体部展開図



第65図　2号墳主体部遺物平面図

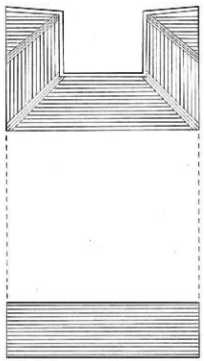


第66図　2号墳主体部靫出土状況図

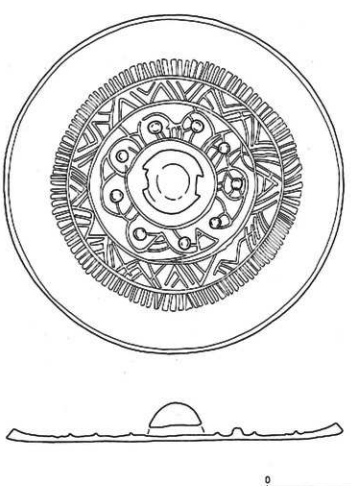
【主体部石棺外出土遺物】

靫（第66・67図，図版カラー口絵②）

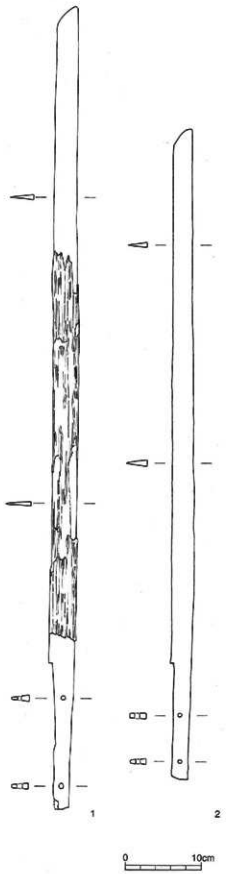
主体部石棺上部を舟形に装飾する礫群の西脇突出部の礫床上に，北を上位に配置されるように膜状に残存する漆製品を確認した。皮革ないしは木質の本体に漆を塗布した製品が，漆膜を残して腐食したものと考えられる。縦約37.5cm，横約20.5cmの筒状と推定され，その上部のコの字型部分と底部のみに漆の装飾が施されていたものと推定。主体内部に丸木弓及び鉄鏃が副葬されたことから，「靫」と考えられる。



第67図　携帯式鞍模式図



第68図　2号墳主体部出土乳文鏡実測図



第69図　2号墳主体部出土直刀実測図

【主体内部に副葬された遺物】

銅鏡（第68図，図版カラー口絵④）

乳文鏡。石棺内部南端より，鏡面を表にして出土。面径8.9cm，鈕径1.5cm，乳の径0.3～0.35cm，乳数９個。腐食が少なく，銀白色。錫の含有率が高く，保存状態は良好。外区は素縁で鋸歯文・綾杉文が巡る。内区は９個の乳がほぼ均等に配され乳間に文様が描かれている。背部表面に紐より伸びる絹と思われる繊維質の付着物が認められることから，布製の袋に包装されて埋納されたものと思われる。

直刀（第69図，図版PL27②）

東壁沿いに重なって埋納される状況で，２振が検出される。目釘孔は２本穿たれている。身部は平造り。鞘と思われる木質部が残存しており，直下には鉄鏃が２本置かれている。１は，全長105.0cm，刀身長85.9cm，身元幅3.3cm，背幅0.5cm，茎長14.1cm，茎中央幅2.3cm，茎尻幅2.0cm，目釘穴孔径0.6cm。２は，全長84.9cm，刀身長69.7cm，身元幅2.8cm，背幅0.8cm，茎長15.2cm，茎中央幅2.1cm，茎尻幅2.0cm，目釘穴孔径0.6cm。

丸木弓（弓弭部分）及び両頭金具（第74図，図版PL27③）

北壁の際より，漆が塗布された木質部（弓弭）を検出。リベット状の金属（鉄地金銅張）が３対付着する。幅1.9cm，金具頭径0.8cm，金具太さ0.35～0.5cm，孔径0.7cm。

銅鏡付近には留金具状の両頭金具を２個体検出。木質部を失った弭部分と推定。鏡の上面に載った状態で検出された玉状に固着した金銅製品も同様の金具であり，弓に関連する遺物と考えられる。１は，長さ0.8～1.0cm，太さ0.3～0.35cm，頭径0.5～0.75cm，５個体の金具が固着している。２は，長さ1.0cm，太さ0.35cm，頭径0.6cm。３は，長さ0.6cm，太さ0.4cm，頭径0.6cm。

棺内に差し渡す状態で丸木弓が置かれていたものと思われ，長さは約1.8mと推定される。

鉄鏃（第70～73図，図版PL26③・PL27①）

石棺内部北端の西壁沿い（22本）及び東壁沿い（33本）に密集する長茎鏃２群を検出。矢柄の有機質が残存する。鉄鏃が検出される周辺のみ礫床とならず，凝灰岩の板石が敷かれる。長茎鏃群のやや南寄りに短茎鏃が散在する。詳細は「第４表　２号墳主体部出土鉄鏃観察表」のとおり。

刀子（第73図，図版PL27②）

現存長11.1cm，刃部最大幅0.7cm。棺中央部，西壁付近において検出する。柄木として巻いたものと見られる木質部が残存する。

方形板状金具（第74図，図版カラー口絵⑤）

70は，縦2.6cm，横2.9cm，厚さ0.25～0.3cm，留金具孔径0.35cm，絹・麻と見られる繊維の付着が認められる。71は，縦2.9cm，横3.1cm，厚さ0.2cm，留金具孔径0.3cm，絹・麻と見られる繊維及び木片の付着が認められる。72は，縦2.9cm，横3.2cm，厚さ0.25cm，留金具孔径0.35cm，木片の付着が認められる。73は，縦2.7cm，横3.1cm，厚さ0.3cm，留金具孔径0.55～0.65cm，留金具により皮革製品に留められていたものと考えられる。

4個体が確認された方形板状金具は，銅鏡周辺及び上面において検出された。鉄地金銅張。四隅を鋲状の金具で留め，二重に区画した波状列点文が施されている。金銅張は表面のみ，鉄地は2㎜程度の折り返しを成す。裏面に木質及び革状の有機物の残存が認められることから，木質ないし有機質の武具等の金具と推定される。また，比較的粗い繊維質（麻と推定）と緻密な繊維質（絹と推定）の2種の付着物が認められることから，織物等の製品が伴っていた可能性がある。

臼玉（第74図，図版PL27③）

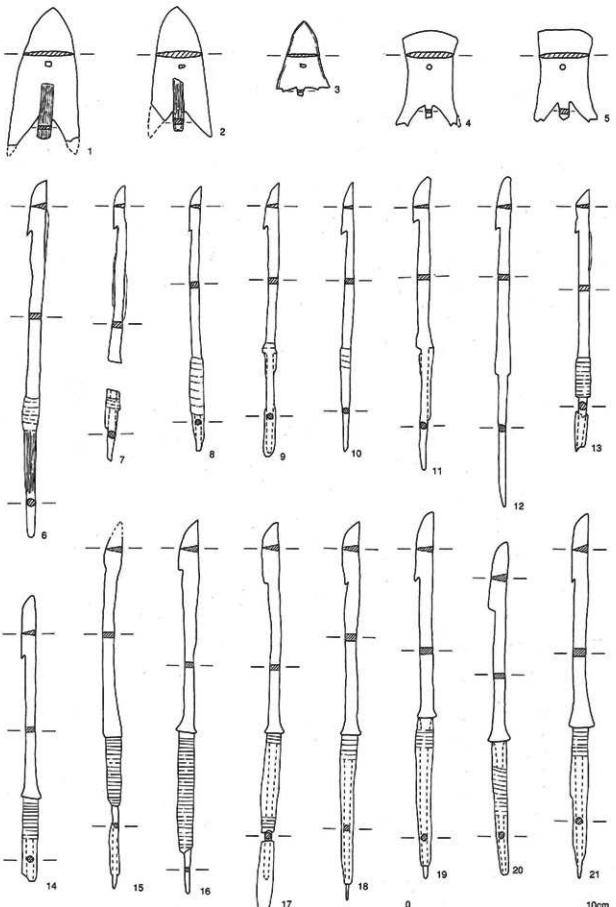
直径0.6cm，最大厚0.3cm，孔径0.2cm，滑石製。色調は，78が両面とも淡灰褐色，79が片面淡灰褐色・片面黒褐色。主体部中央，西壁付近に2点を検出する。

針状鉄製品（第74図，図版PL27③）

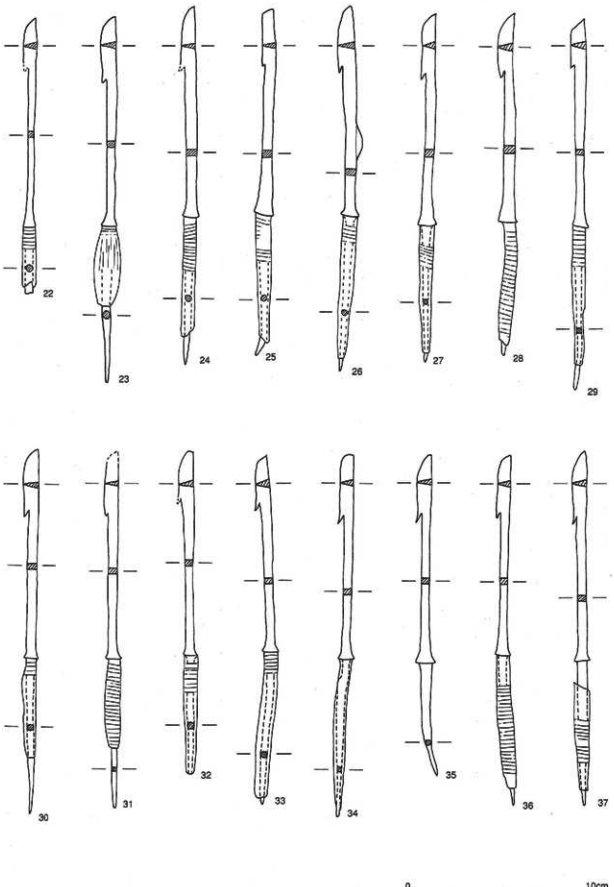
長さ2.9cm，太さ0.15cm，捻り込みのある針状の鉄製品。太刀の切先（北端）付近にて検出する。

朱

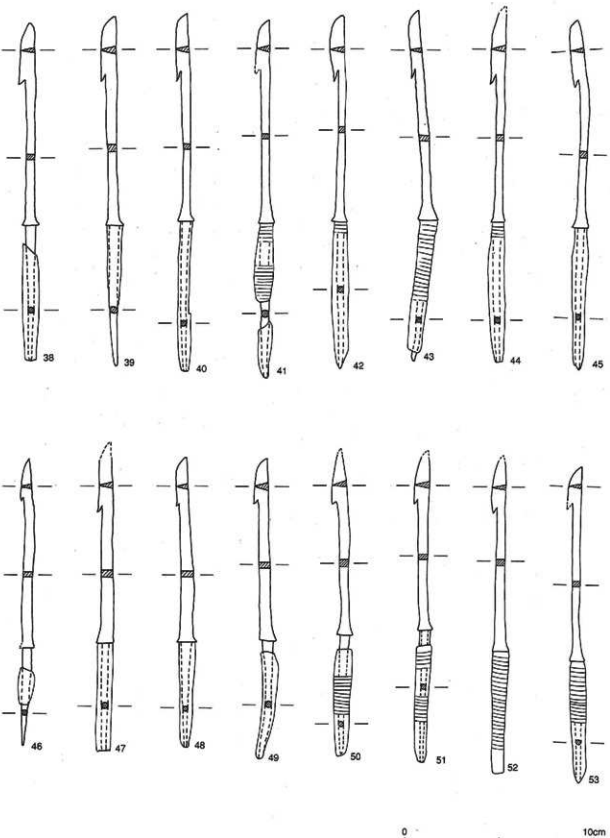
割石の組み合わせ部分には白色粘土が封入されており，棺内部に崩落した粘土塊部分にも顔料の痕跡が認められることから，凝灰岩の割石を組み合わせた石棺内面の全面にわたって，赤色顔料が塗布されていたものと推定される。石棺内部に埋納された副葬品周辺においても顔料が塗布または散布されていたと見られるが，銅鏡周辺と鉄鏃周辺の2カ所に特に顕著に認められる。



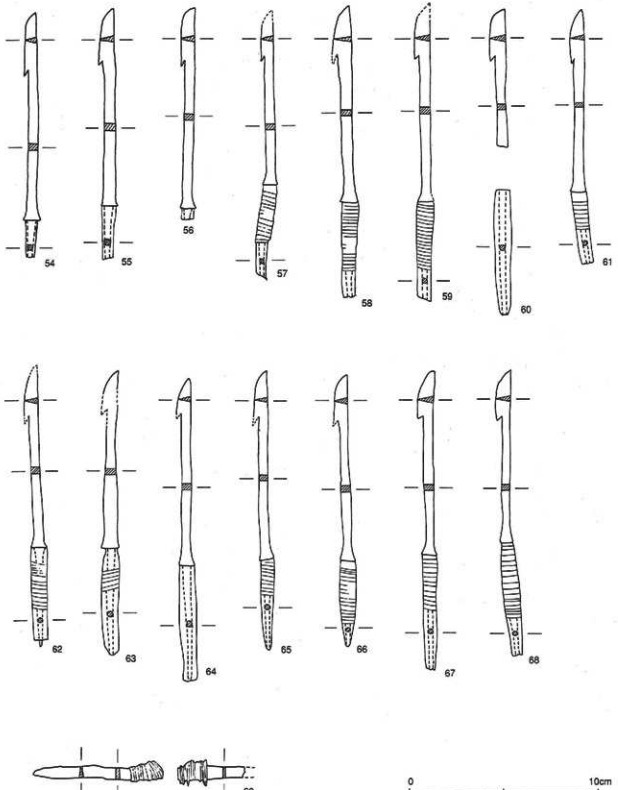
第70図　2号墳主体部出土鉄鏃実測図（1）



第71図　2号墳主体部出土鉄鏃実測図（2）



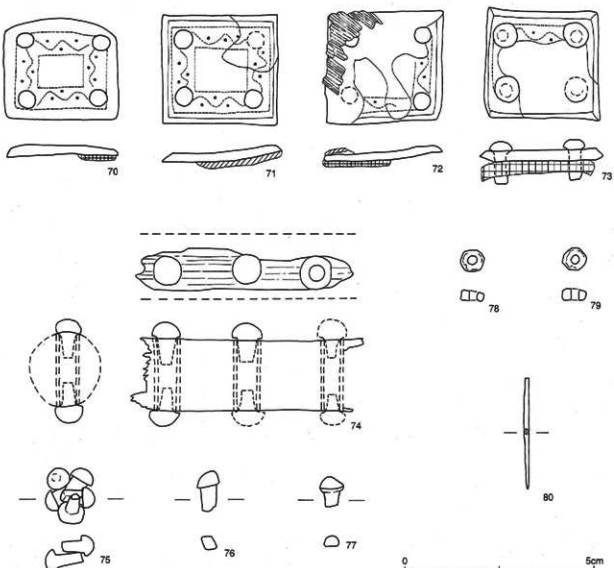
第72図　2号墳主体部出土鉄鏃実測図（3）



第73図　2号墳主体部出土鉄鏃実測図（4）・刀子実測図

No.	種類	現存長(cm)	鏃身長(cm)	厚さ(cm)	備　　考
1	鍬茎鏃		7.6	0.2	
2	短茎鏃		6.8	0.35	
3	鍬茎鏃	3.9	3.6	0.1	
4	短茎鏃		5.1	0.3	
5	鍬茎鏃		4.7	0.3	杉山B－II－B類　逆刺が浅い
6	長茎鏃	18.8	2.9	0.3	逆刺の形状が鋭角
7	長茎鏃	13.2	2.3	0.25	茎に比して鏃身長が短小
8	長茎鏃	14.0	2.4	0.3	全体に小型
9	長茎鏃	（全長）14.5	2.5	0.3	逆刺の形状が鋭角
10	長茎鏃	14.2	2.7	0.3	小型の鏃身
11	長茎鏃	15.5	2.4	0.25	鏃身の幅広く、先端部に丸みを帯びる
12	長茎鏃	（全長）17.5	2.8	0.3	鏃身先端部が丸みを帯びる
13	長茎鏃	13.0	2.3	0.25	鏃身幅に比して鏃身長が短い
14	長茎鏃	15.0	3.3	0.3	鋭利な逆刺、鏃身幅が狭い
15	長茎鏃	（推定）19.3	（推定）2.5	0.3	逆刺なし
16	長茎鏃	19.65	2.7	0.3	C形式－第II形式－第I形式　鋭利な鏃刃先端
17	長茎鏃	（全長）20.6	3.2	0.3	鏃身先端部が丸みを帯び、小型
18	長茎鏃	20.0	3.4	0.35	鏃身長く逆刺が短い、鋭利な鏃刃先端部
19	長茎鏃	（全長）19.2	3.6	0.35	鏃身長く鋭利な逆刺
20	長茎鏃	（全長）17.5	3.6	0.3	鏃身長く断面厚大、逆刺に鋭利さが見られない
21	長茎鏃	19.2	3.6	0.4	篦被部分の幅が広い
22	長茎鏃	14.5	2.8	0.35	全体に細身、鏃身先端部が鋭利で断面は厚い
23	長茎鏃	19.3	3.5	0.4	鏃身長く断面厚い、逆刺及び鏃身先端部が鋭利、木質部に膨らみを有す
24	長茎鏃	18.9	3.3	0.4	逆刺が外反する
25	長茎鏃	18.2	3.0	0.4	鏃身先端部がなだらか
26	長茎鏃	19.25	3.1	0.3	逆刺が長く鋭利、茎中央部に銅による膨張が見られる
27	長茎鏃	（全長）18.4	3.5	0.4	鏃身を含め全体に長大
28	長茎鏃	（全長）18.0	3.4	0.4	鏃身形が中央部で膨らむ、鋭利な逆刺
29	長茎鏃	（全長）19.2	2.6	0.3	鏃身が短小
30	長茎鏃	（全長）19.2	3.5	0.3	鏃身先端部に丸みを帯びる
31	長茎鏃	（全長）18.9	（推定）3.5	0.3	逆刺が短小
32	長茎鏃	17.0	（推定）2.7	0.3	鏃身幅が広い、逆刺部分の欠損
33	長茎鏃	（全長）18.4	3.0	0.3	全長に比して鏃身が短小、鏃断面が厚い
34	長茎鏃	（全長）19.1	3.6	0.3	鏃身長く先端部に丸みを帯びる
35	長茎鏃	（全長）16.9	3.5	0.3	鏃身は幅狭く鋭利な逆刺、鏑状の逆刺
36	長茎鏃	（全長）18.5	3.3	0.3	鋭利な逆刺
37	長茎鏃	（全長）18.7	3.8	0.3	鏃身長く中央部が膨張する、鋭利な逆刺
38	長茎鏃	17.8	3.2	0.3	逆刺長に比して鋭利さにかける
39	長茎鏃	（全長）18.4	3.4	0.4	鋭利な逆刺、鏃身の幅が厚い
40	長茎鏃	18.9	3.5	0.3	鏃身及び逆刺が長大
41	長茎鏃	18.9	2.8	0.3	鏃刃鋭小、肉厚の木質部
42	長茎鏃	（全長）18.6	3.5	0.3	逆刺長く、鏃身中央部が膨張する
43	長茎鏃	（全長）18.5	3.6	0.3	逆刺長く幅が厚い、鏃身細く長大
44	長茎鏃	（推定）18.8	（推定）4.1	0.35	鏃身細く幅が広い、逆刺長大
45	長茎鏃	18.5	3.6	0.35	茎部分が湾曲
46	長茎鏃	（全長）15.2	2.2	0.3	鏃身短小
47	長茎鏃	（推定）16.2	（推定）3.7	0.4	茎幅広い、腸挟部長大
48	長茎鏃	15.3	2.6	0.3	茎中央部幅広い、鏃身短小
49	長茎鏃	15.8	2.4	0.3	鏃身短小であるが厚みがある
50	長茎鏃	（全長）15.9	2.9	0.45	木質部一部欠損
51	長茎鏃	（全長）16.5	（推定）2.9	0.5	鏃身先端部欠損
52	長茎鏃	（全長）15.8	（推定）3.1	0.5	鏃身先端部欠損
53	長茎鏃	16.7	（推定）2.2	0.4	逆刺部欠損
54	長茎鏃	12.9	3.3	0.35	鏃身長く鋭利な逆刺
55	長茎鏃	13.3	（推定）3.0	0.35	鏃身上前部になだらかな形状が観察できる
56	長茎鏃	11.1	3.1	0.3	鋭利な腸挟部を有す
57	長茎鏃	14.0	（推定）2.6	0.3	鏃身短小
58	長茎鏃	15.4	（推定）3.1	0.3	鏃身幅が広い
59	長茎鏃	15.8	（推定）3.0	0.55	鏃刃先端部及び木質下部欠損
60	長茎鏃	16.8	2.8	0.5	鏃刃断面厚大、中央部欠損
61	長茎鏃	13.5	2.9	0.5	鏃下部及び木質部一部欠損
62	長茎鏃	14.8	（推定）3.0	0.45	鏃刃先端部・逆刺・木質部欠損
63	長茎鏃	15.0	（推定）2.3	0.55	逆刺欠損
64	長茎鏃	（全長）16.0	（推定）2.1	0.5	逆刺欠損
65	長茎鏃	14.7	（推定）2.9	0.45	逆刺欠損
66	長茎鏃	14.4	（推定）2.7	0.5	逆刺欠損
67	長茎鏃	15.7	2.5	0.55	鏃身先端部に丸みを帯びる
68	長茎鏃	15.0	2.7	0.45	茎部分が湾曲

第4表　2号墳主体部出土鉄鏃観察表

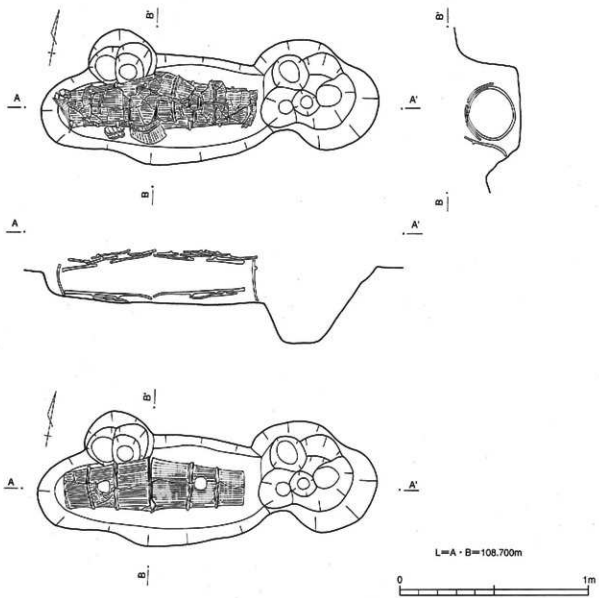


第74図　2号墳主体部出土方形板状金具・弓弭・臼玉・針状鉄製品実測図

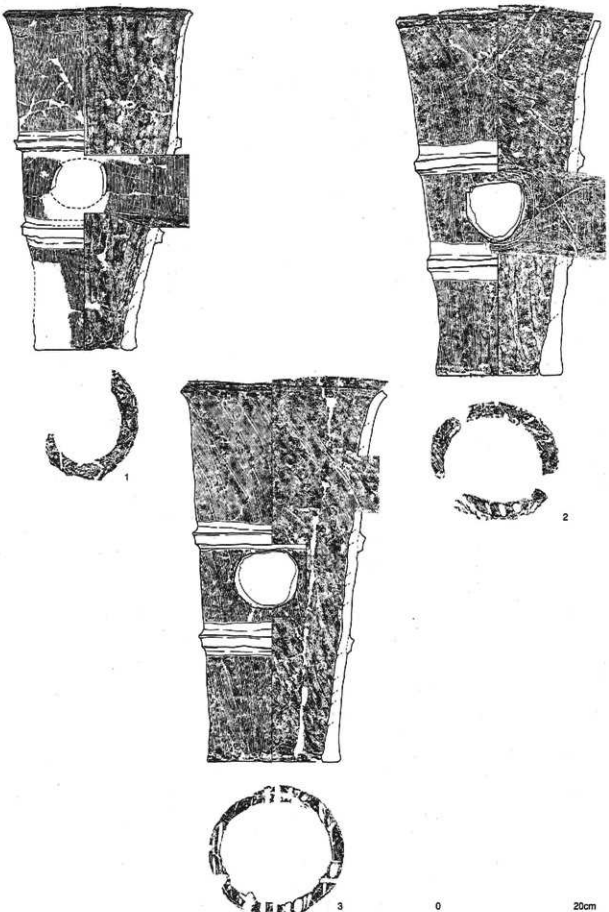
④ 埴輪棺

1号埴輪棺（第75～77図、図版PL28①）

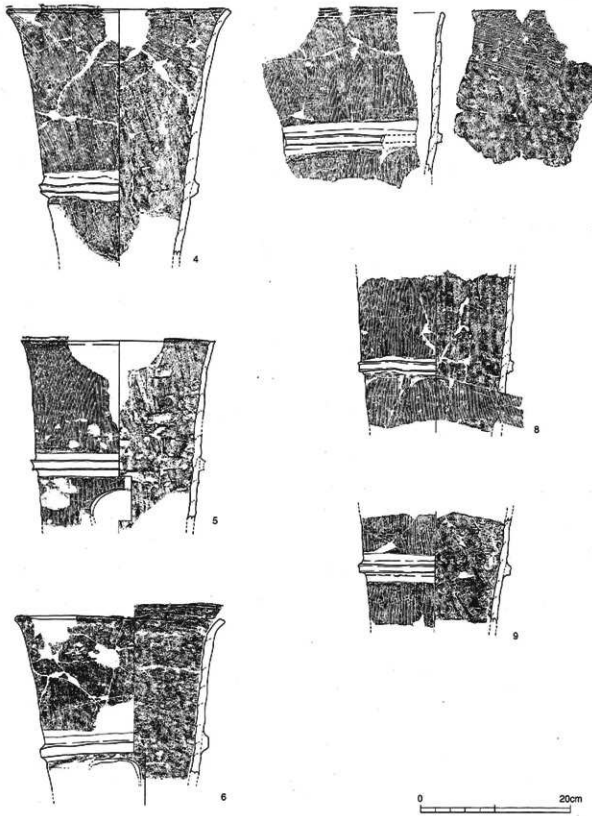
周溝北西部外縁，D－13杭北西付近に確認。東西幅約１m80cm，南北幅約60cmの堀方。２本の円筒埴輪を口縁部で組み合わせる。東部棺は円形透孔，西部棺は半円形透孔で銀杏葉文の線刻を有し，灰褐色を帯び須恵質を呈する。ともに２条突帯。棺の合わせ口部分には周溝側に埴輪片を差し込み，棺を固定している。棺本体下に埴輪片を敷設する。棺の堀方東部及び北部にピットを伴う。円筒埴輪は口縁部にかけて，径に若干の拡がりを有する。口縁部から突帯までの距離，径の拡がり，肉厚等の状況より，塚山古墳よりやや後の時期と考えられる。棺内部の埋土は，下面にやや粘性が観察できることから，有機質が存在する可能性を示唆する。



第75図　1号埴輪棺平・断面図



第76図　1号墳棺構成埴輪実測図（1）



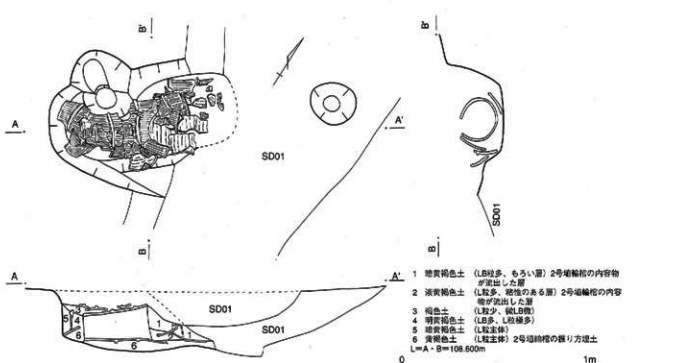
第77図　1号墳輪棺構成墳輪実測図（2）

No.	器種	寸法（cm）				口縁形態	透孔	調整の特徴（括弧内の筋は2cm当たりの本数）	色調	胎土	焼成	出土位置	備考
		口径	器高	底径	突帯高								
1	円筒	24.5	44.5	13.8	0.7		円	a 4 (12)	赤褐色	砂粒、金雲母	良好		4／5残存、第２段外面に「≡」線刻
2	円筒	26.0	47.6	16.2	0.7		半円	a 2 (10)	淡褐色		良好		完形、透孔縁に「∧」線
3	円筒	26.2	49.4	17.0	0.8		円	a 2 (12)	淡褐色		良好		完形、内面に「二」線刻
4	円筒	29.5			0.9			a 3 (13)	淡褐色	小石、砂粒、赤色スコリア粒	良好		2／5残存
5	円筒	25.0			0.6		円	e (12)	橙褐色	砂粒、赤色スコリア粒	良好		2／5残存、第２段外面に線刻
6	円筒	26.8			0.8		半円？	b (17)	淡褐色		良好		1／3残存、第２段外面に「×」線刻
7	円筒				0.5			a 3 (15)	赤褐色	砂粒、金雲母	良好		破片
8	円筒				0.6		円	e (12)	赤褐色	砂粒、金雲母	良好		破片、透孔縁に線刻あり
9	円筒				0.7			f (14)	赤褐色	砂粒、金雲母	良好		

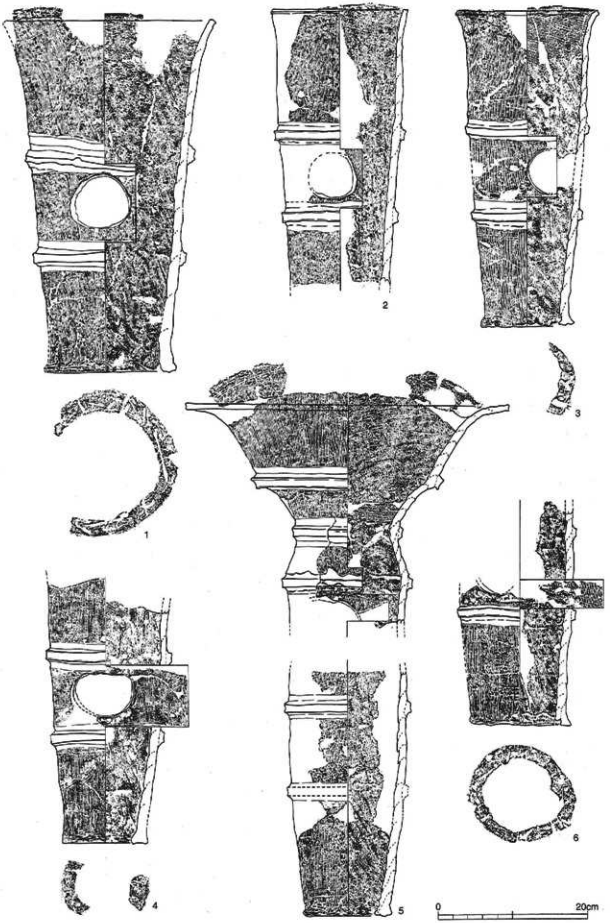
第5表　1号埴輪棺構成埴輪観察表

2号埴輪棺（第78・79図，図版PL29①）

1号埴輪棺の西約２ｍの周溝北西部外縁に確認。東西幅約１ｍ60㎝（推定），南北幅約70㎝の堀方。口縁部を合わせ，１対の円筒埴輪が組み合わされていたと思われるが，SD01によって東部棺を掘乱される。西部棺は円形透孔・２条突帯を有す。棺本体の上部を被覆する埴輪片には朝顔形埴輪を使用している。棺の合わせ口部分には，周溝側に埴輪片を差し込み，棺を固定している。本体下に埴輪片を敷設する。西部棺堀方の北側にピットを伴う。西部棺の端部を２枚の埴輪片で支えている。



第78図　2号埴輪棺平・断面図



第79図　2号墳輸棺構成埴輪実測図

No.	器　種	寸法（cm）				口縁形態	透孔	調整の特徴（括弧内の筋は2cm当たりの本数）	色　調	胎　土	焼成	出土位置	備　考
		口径	器高	底径	突帯高								
1	円筒	28.0	45.9	17.2	0.9		円	a 3 (12)	暗赤褐色	砂粒、小石、赤色スコリア粒	良好		4／5残存
2	円筒	17.8			0.5	A2	円	e (13)	明褐色	白色砂粒、赤色スコリア粒、小石	良好		1／3残存
3	円筒	19.0	41.4	12.3	0.6		円	a 3 (11)	赤褐色	砂粒、赤色スコリア粒	良好		1／2残存
4	円筒			11.1	0.7		半円	a 3 (12)	淡褐色	砂粒、小石、赤色スコリア粒	良好		2／3残存、第1段外面に「×」線刻
5	朝顔形	42.5	62.0	12.0	0.9		円	e (12)	赤褐色	砂粒、金雲母、赤色スコリア粒	良好		1／3残存、第2段外面に「Ⅴ」線刻
6	円筒			13.4	0.4		円？	e (12)	赤褐色	砂粒、金雲母、赤色スコリア粒	良好		1／3残存、第1段外面に「Ⅴ」線刻

第6表　2号埴輪棺構成埴輪観察表

3号埴輪棺（第80～82図、図版PL29②・PL30①）

1号埴輪棺の東約2mの周溝北西部外縁に確認。東西幅約1m35cm，南北幅約50cmの堀方。2本の埴輪を口縁部で組み合わせる。東部棺は半円形透孔で銀杏葉文の線刻を有する2条突帯の円筒埴輪。西部棺は3条突帯，透孔2対の朝顔形埴輪を使用。棺の周囲に埴輪片を敷設し，棺を固定している。棺上部は大量の埴輪片で被覆されている。堀方の周囲に3本のピットを伴う。棺の合わせ口付近，周溝側のピットは棺の固定用と考えられる。

4号埴輪棺（第83～85図、図版PL31①）

2号墳の墳丘東南裾部，F－14杭西側に確認。東西幅約1m55cm，南北幅約50cmの堀方。3本の円筒埴輪で構成される。2本の円筒埴輪を口縁部で組み合わせ，さらに東側埴輪の底部に口縁部を東に向けて差し込んでいる。棺は全て円形透孔・2条突帯を有す。棺の周囲を埴輪片で被覆する。西部棺・中央棺下部に埴輪片が敷設される。周溝側は棺の支えとして埴輪片を堀方底面に向けて配置し，棺上部を被覆する埴輪片に朝顔形埴輪を使用している。

5号埴輪棺（第86～88図、図版PL32①）

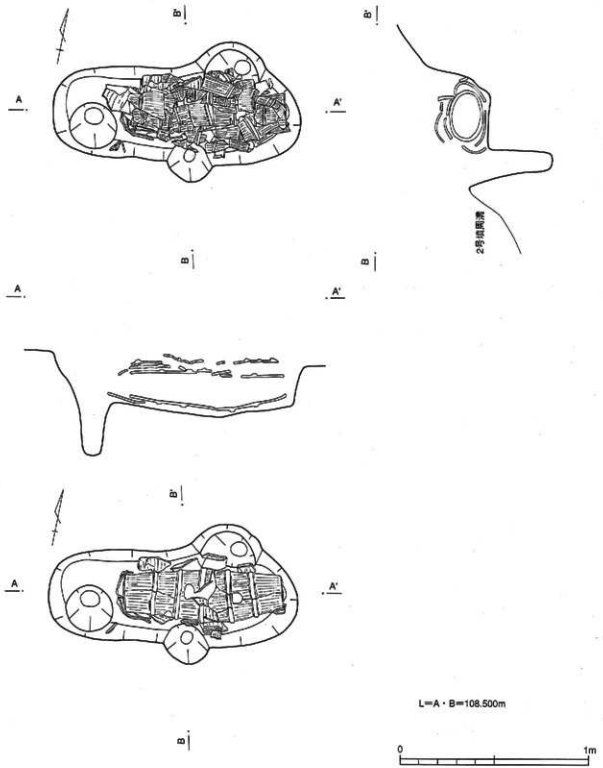
4号埴輪棺の北側に隣接する墳丘東南裾部に確認。東西幅約1m50cm，南北幅約60cmの堀方。平面形，底面形ともにやや不整形。2本の円筒埴輪を口縁部で組み合わせる。ともに円形透孔・2条突帯を有す。棺の周囲を埴輪片で被覆する。周溝側は棺の支えとして埴輪片を堀方底面に向けて配置し，棺上部を被覆する埴輪片に朝顔形埴輪を使用している。

6号埴輪棺（第89・90図、図版PL33①）

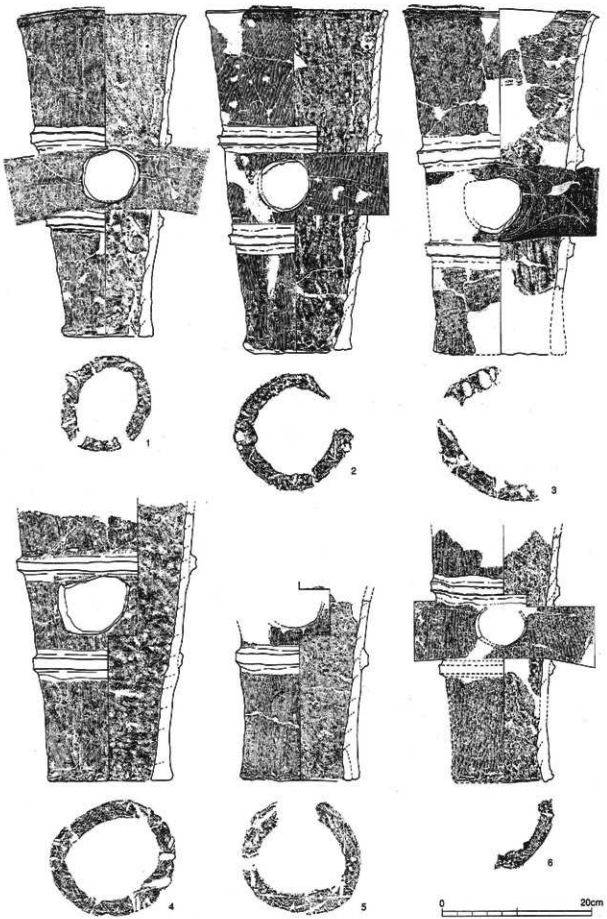
4号埴輪棺の北東約1mの墳丘東南裾部に確認。南北幅約1m55cm，東西幅約50cmの堀方。口縁部を合わせ，1対の円筒埴輪が組み合わされていたと思われるが，北部棺は撹乱により失われたものと思われる。南部棺は半月形の透穴，2条突帯を有す。堀方は約45cm，不整形に掘られ，ロームブロックで埋め戻して床を調整している。棺の周囲を被覆する埴輪片は南部棺の底部・口縁部合わせ口周辺・底部に配している。堀方の周囲に4本のピットを伴う。

7号埴輪棺（第91・92図、図版PL33②）

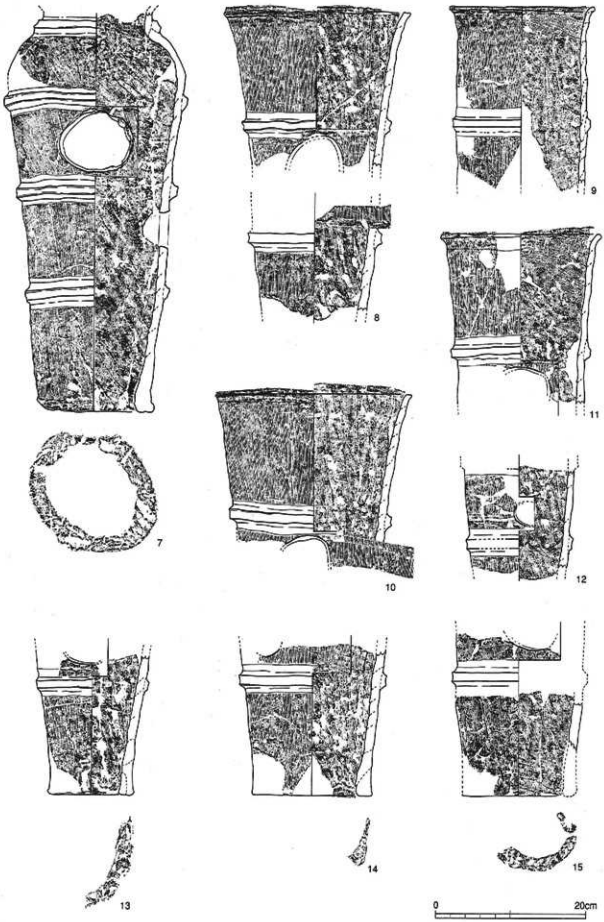
E－12杭北東方向約4m50cm，周溝西最縁部の上層埋土中に確認。南北幅約80cm，東西幅約45cmの堀方。1対の円筒埴輪を組み合わせているが，棺の両端を塞ぐ埴輪片や棺本体下部に敷設される埴輪片は確認されず，棺本体も欠損のある円筒埴輪を使用している。円形透穴・2条突帯を有する。古墳周溝が自然堆没した時期以降に造営した埴輪棺。



第80図　3号墳輪棺平・断面図



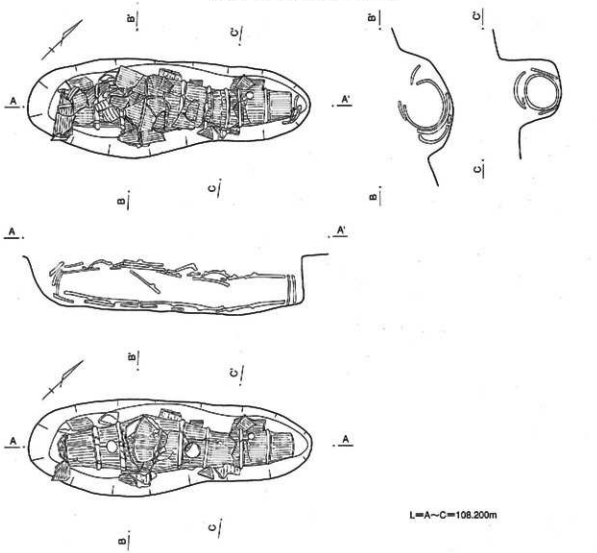
第81図　3号墳輪棺構成埴輪実測図（1）



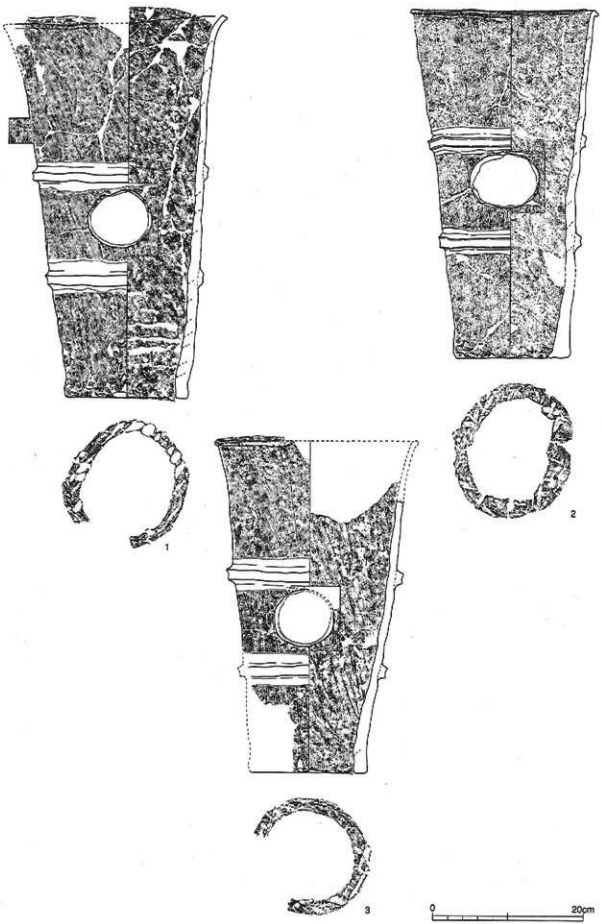
第82図　3号埴輪棺構成埴輪実測図（2）

No.	器種	寸法（cm）				口縁形態	透孔	調整の特徴（括弧内の筋は2cm当たりの本数）	色調	胎土	焼成	出土位置	備考
		口径	器高	底径	突帯高								
1	円筒	23.6	42.7	11.9	0.6	A2	円	e（12）	淡褐色	砂粒、小石	良好		突形、第1段外面に[ミ][ミ]線刻
2	円筒	23.8	44.9	14.3	0.6	A2	円	e（11）	赤褐色	砂粒、金雲母、赤色スコリア粒	良好	A区調査中層目土破片と接合	3／5残存、第1段外面に[ミ]線刻
3	円筒	25.6	45.2	17.2	0.7	A1	半円	a3（14）	暗灰褐色	砂粒、小石	良好	A区調査中層目土破片と接合	4／5残存、第1段外面に[△]線刻
4	円筒			16.0	0.9		半円	a3（15）	褐色	砂粒、小石	良好		4／5残存、第2段外面に[△]線刻
5	円筒			15.6	0.8			e（14）	橙褐色	砂粒、小石を多く含む	良好	A区調査中層目土破片と接合	1／3残存
6	円筒			13.0	0.6		円	e（12）	灰褐色	砂粒、小石	良好	A区層溝出土破片と接合	1／2残存、第1段外面に[ミ][ミ]線刻
7	鍔状形			17.2	0.9		円	e（12）	赤褐色・淡褐色	砂粒、小石	良好		4／5残存
8	円筒	24.8			0.7	A2	円	e（12）	赤褐色	砂粒、金雲母、赤色スコリア粒	良好	A区調査出土破片と接合	1／6残存、第1段外面に[ミ]線刻
9	円筒	19.6			0.5	B1		a3（12）	赤褐色	砂粒、金雲母、赤色スコリア粒	良好		1／8残存、第1段外面に[△]線刻
10	円筒	24.8			0.5	A2	円	e（12）	赤褐色	砂粒、金雲母、赤色スコリア粒	良好	A区遺物中層目土破片と接合	1／3残存、第1段外面に[ミ]線刻
11	円筒	21.4			0.7	B1	円	a3（11）	赤褐色	砂粒、金雲母、赤色スコリア粒	良好		1／3残存
12	円筒				0.5		円	e（14）	赤褐色	砂粒、金雲母、赤色スコリア粒	良好		破片
13	円筒			15.0	0.6		円	e（15）	暗赤褐色	砂粒、小石	良好		1／3残存
14	円筒			15.7	0.6			e（13）	赤褐色	砂粒、金雲母、赤色スコリア粒	良好		1／8存、第1段外面に[ミ]線刻
15	円筒			11.3	0.4			e（10）	赤褐色	砂粒、金雲母、赤色スコリア粒	良好		1／8存、第1段外面に[△]線刻

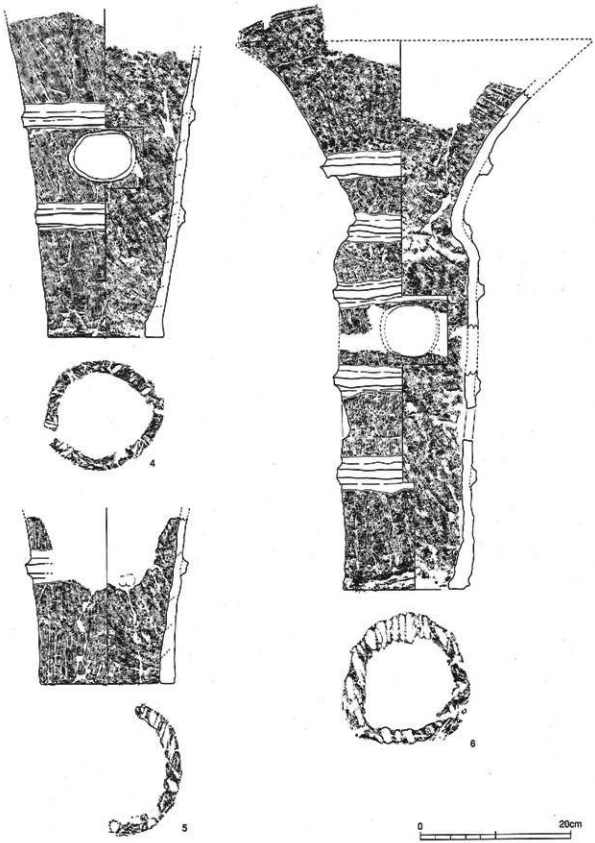
第7表　3号埋輪棺構成埴輪観察表



第83図　4号埴輪棺平・断面図　0　1m



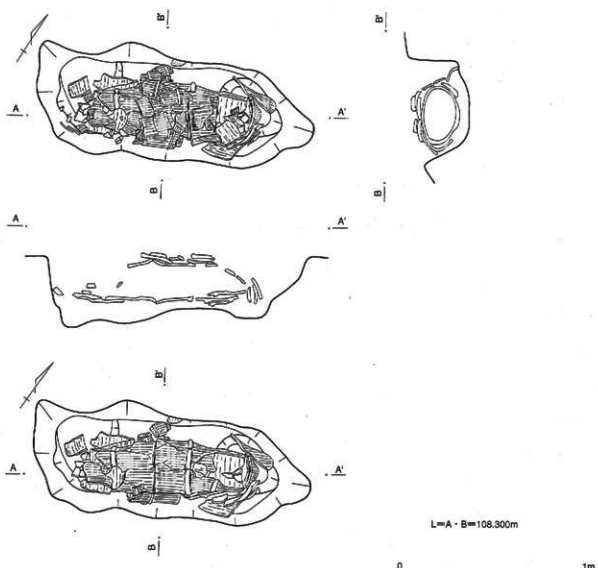
第84図　4号墳輪棺構成埴輪実測図（1）



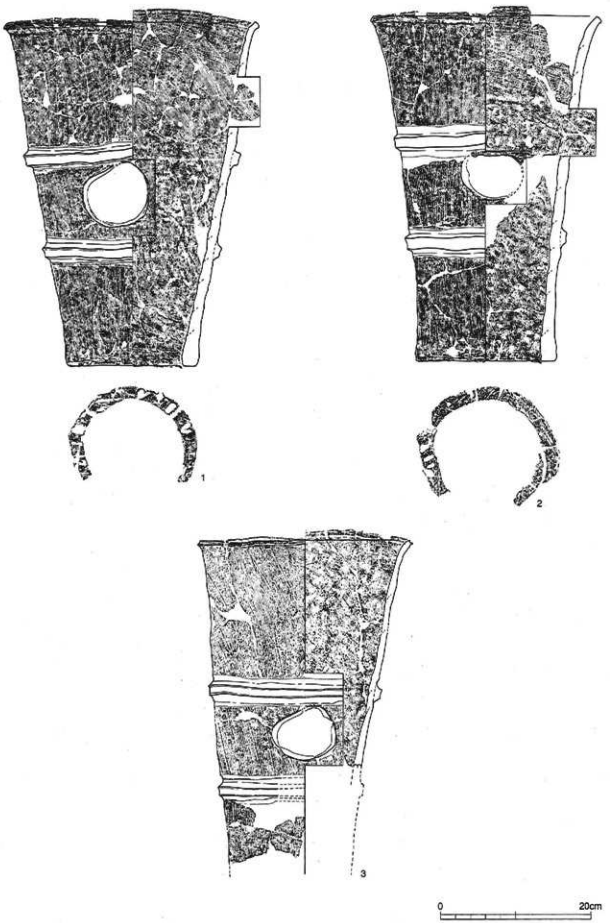
第85図　4号墳輪棺構成埴輪実測図（2）

No.	器種	寸法（cm）				口縁形態	透孔	調整の特徴（括弧内の筋は2cm当たりの本数）	色調	胎土	焼成	出土位置	備考
		口径	器高	底径	突帯底								
1	円筒	29.8	50.0	16.0	0.5	A1	円	e（15）	暗赤褐色	砂粒、小石	良好		4／5存、第2段外面に「〜」線刻
2	円筒	24.3	45.5	17.3	0.6	A1	円	a3（12）	淡褐色	砂粒、小石、赤色スコリア粒やや多い	良好		一部欠損
3	円筒	27.0	43.5	15.0	0.8	B1	円	e（12）	暗褐色	砂粒、小石	良好		2／3存、第2段内面に「≡」線刻
4	円筒			15.0	0.8		円形	a3（12）	赤褐色	砂粒、小石	良好		4／5残存
5	円筒			15.0	0.7			e（16）	褐色	砂粒、小石	良好		1／8残存
6	楕円形	47.0	72.0	16.0	0.7		円		淡褐色	砂粒、小石	良好		4／5残存

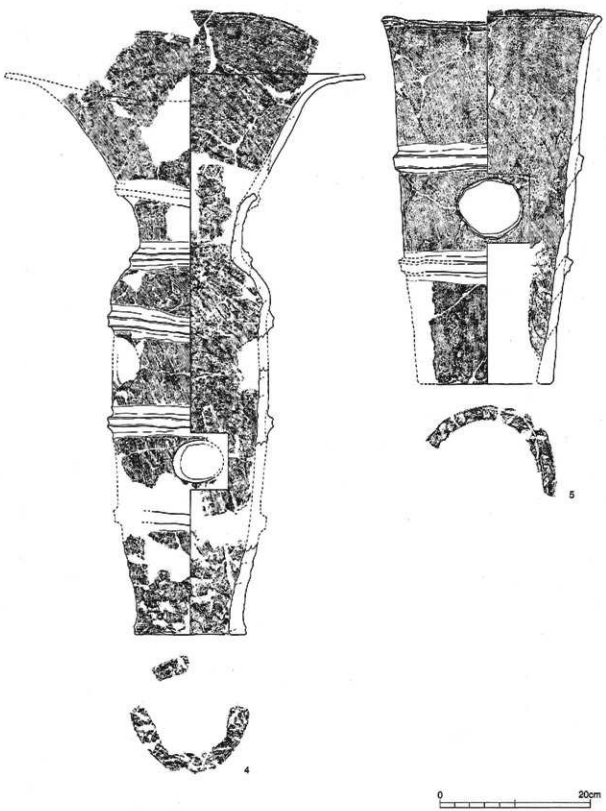
第8表　4号埴輪棺構成埴輪観察表



第86図　5号埴輪棺平・断面図



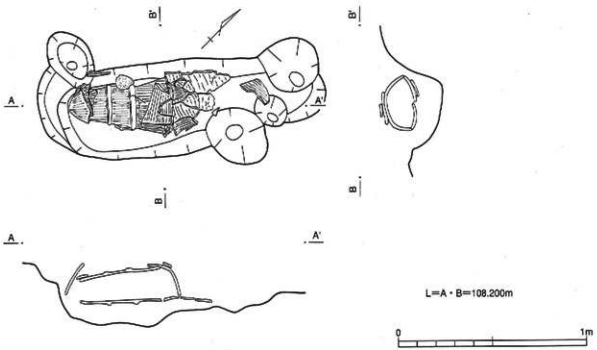
第87図　5号墳墳棺構成墳輪実測図（1）



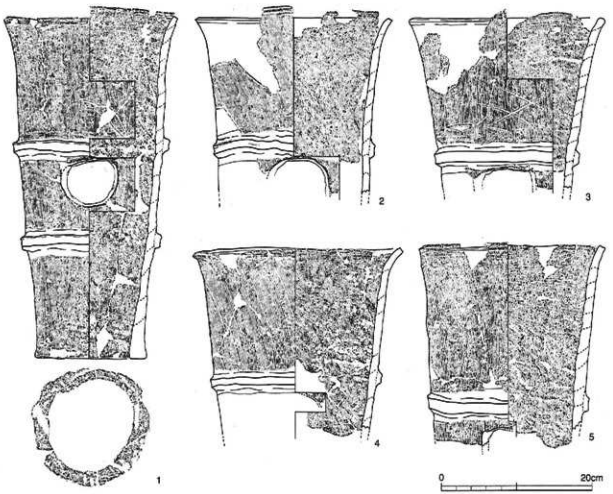
第88図　5号墳輪棺構成墳輪実測図（2）

No.	器種	寸法（cm）				口縁形態	透孔	調整の特徴（括弧内の数は2cm当たりの本数）	色調	胎土	焼成	出土位置	備考
		口径	器高	底径	突帯高								
1	円筒	32.6	45.0	16.6	0.8	B1	円	a 1（17）	褐色	砂粒、小石	良好		2／3存、第２段内面に「ミ」線刻
2	円筒	29.5	45.1	18.2	0.5	C	半円	a 3（12）	赤褐色	砂粒、小石、赤色スコリア粒	良好		4／5存、第２段内面に「ミ」線刻
3	円筒	27.4			0.7	A1	半円？	e（12）	赤褐色	砂粒、小石、赤色スコリア粒	良好		2／3存残存
4	楕円形	47.0	73.6	13.6	0.7		円形	（12）	褐色	砂粒、小石、赤色スコリア粒	良好		2／3残存
5	円筒	29.1	28.0	17.1	0.6	B1	円	a 1（11）	乳白色	砂粒、小石、赤色スコリア粒やや多い	良好		3／4残存

第9表　5号埋輪棺構成埴輪観察表



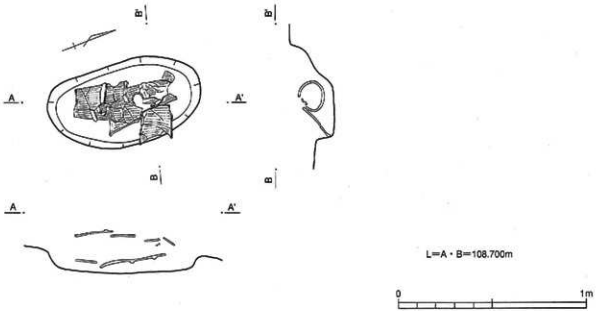
第89図　6号埴輪棺平・断面図



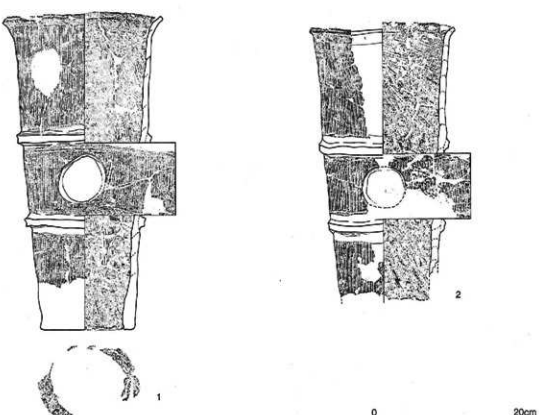
第90図　6号埴輪棺構成埴輪実測図

No.	器　種	寸法（cm）				口縁形態	透孔	調整の特徴（括弧内の筋は2cm当たりの本数）	色　調	胎　土	焼成	出土位置	備　考
		口径	器高	底径	突帯高								
1	円筒	23.0	45.0	14.7	0.8	A2	半円	a 4（15）	淡褐色	砂粒、小石、赤色スコリア粒	良好		完形、第2段外面に「ハ」線刻
2	円筒	26.1			0.6	A1	円	a 3（15）	赤褐色	砂粒、小石	良好		1／6存残存
3	円筒	26.0			0.6	B1	半円？	a 4（13）	褐色	砂粒、小石、赤色スコリア粒	良好		1／6存残存、第2段外面に「ヲ」線刻
4	円筒	24.7			0.5	A2	半円？	a 4（13）	赤褐色	砂粒、小石、赤色スコリア粒	良好		1／5存残存
5	円筒	27.7			0.6	A1		a 4（12）	赤褐色	砂粒、小石	良好		1／3存残存

第10表　6号埴輪棺構成埴輪観察表



第91図　7号墳轜柩平・断面図



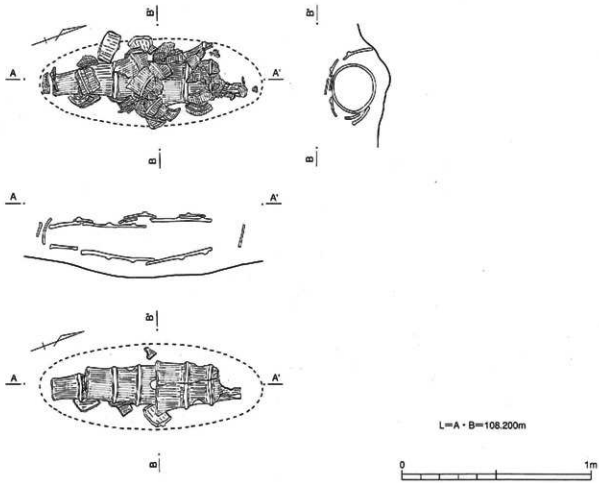
第92図　7号墳轜柩構成墳輪実測図

No.	器種	寸法（cm）				口縁形態	透孔	調整の特徴（括弧内の筋は2cm当たりの本数）	色調	胎土	焼成	出土位置	備考
		口径	器高	底径	突帯高								
1	円筒	21.3	40.9	12.6	0.7	B2	円	a 1（10）	褐色	砂粒、小石、赤色スコリア粒	良好		2／3存残存、第1段外面に［ハ］様刷
2	円筒	19.2			0.5	B2	円	a 3（11）	赤褐色	砂粒、金雲母、赤色スコリア粒	良好		2／3存残存、第1段外面に［ハ］様刷

第11表　7号墳轜柩構成墳輪観察表

8号埴輪棺（第93・94図，図版PL33③・PL34①）

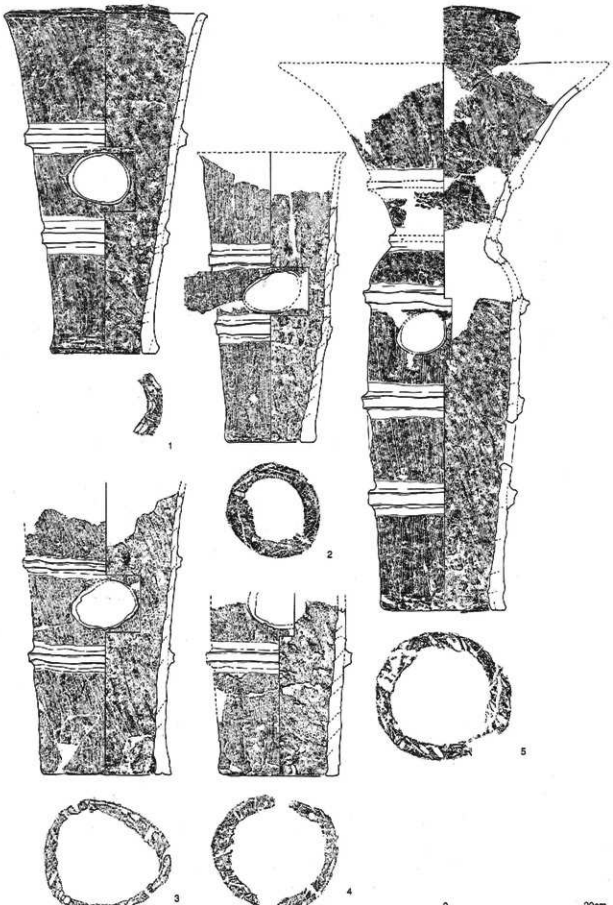
E－12杭東側約3m，周溝下層埋土中に確認。堀方は埋土中であったため不明瞭であるが，南北幅約1m15cm，東西幅約45cmと推定。2本の埴輪を口縁部で組み合わせる。北部棺は円形透孔・条突帯を有する円筒埴輪。南部棺は3条突帯，透孔2対の朝顔形埴輪の胴体下部を使用し，底部付近にさらに円筒埴輪を差し込んでいる。棺の両端を塞ぐ埴輪片や棺側面を支える埴輪片の構造が強固。被覆部の埴輪片の個体数も多い。本体下部には埴輪片の敷設はない。周溝底面に最も近いレベルで検出され，周溝埋没以前の，古墳造営に近い時期に造営された埴輪棺。



第93図　8号埴輪棺平・断面図

No.	器種	寸法（cm） 口径	器高	底径	突帯高	口縁形態	透孔	調整の特徴（括弧内の数は2cm当たりの本数）	色調	胎土	焼成	出土位置	備考
1	円筒	25.5	44.5	13.8	1.1	A1	円	a 3（16）	赤褐色	砂粒，小石，赤色スコリア粒	良好		4／5存残存，第2段外面に沈線が残る
2	円筒			12.5	0.4		楕円？	a 3（10）	橙褐色	砂粒，金雲母，赤色スコリア粒	良好		3／5存残存，第1段外面に「×」線刻
3	円筒			16.6	0.8		楕円	e（12）	褐色	砂粒，小石やや多，赤色スコリア粒	良好		4／5存残存
4	円筒			15.7	0.8		円	（12）	褐色	砂粒，小石やや多，赤色スコリア粒	良好		1／6存残存
5	朝顔形	43.4	71.8	16.8	0.8		円	（12）	暗赤褐色	砂粒，小石，赤色スコリア粒	良好		5／6存残存

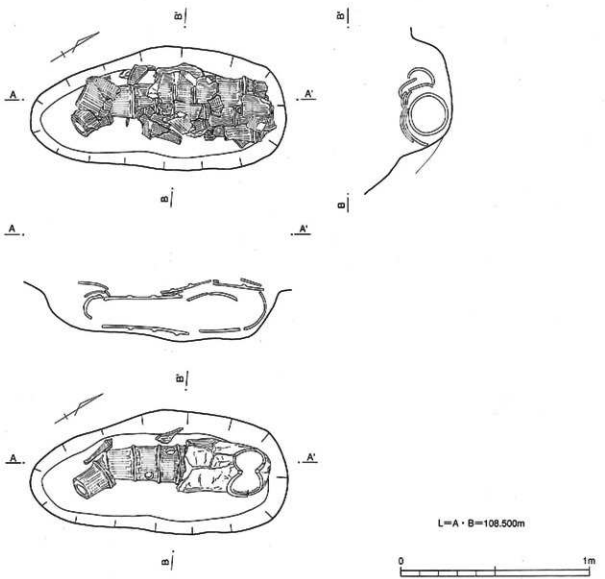
第12表　8号埴輪棺構成埴輪観察表



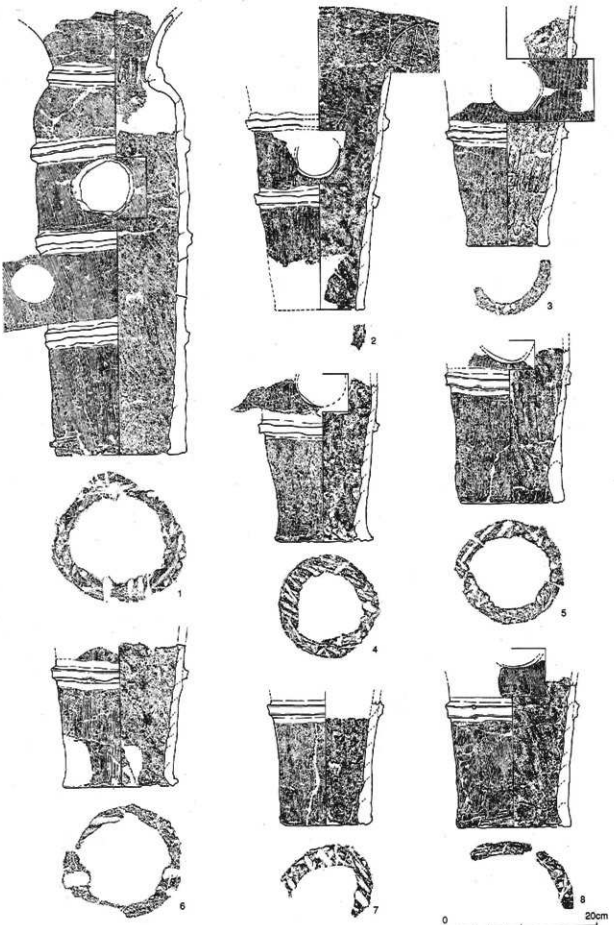
第94図　8号埴輪棺構成埴輪実測図

9号埴輪棺（第95～97図，図版PL34②・PL35①）

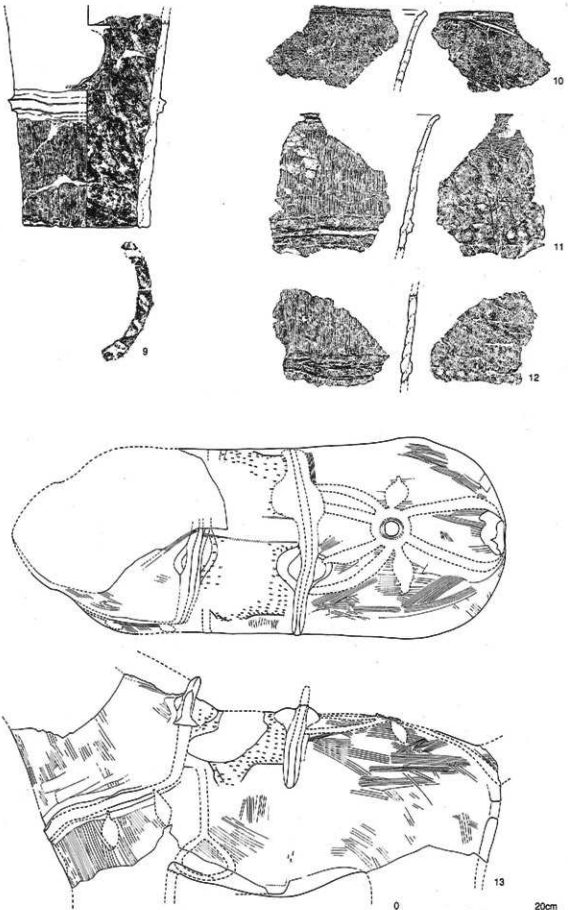
E－12杭北東方向約5m50cm，周溝西最縁部の中層埋土中に確認。南側に近接して7号埴輪棺が上層埋土に造営され，切り合い関係にある。南北幅約1m40cm，東西幅約65cmの堀方。埴輪棺の両端及び側面を埴輪片で支え込み，上部を大量の埴輪片で被覆している。北部棺は形象埴輪（馬形埴輪）の胴部を倒立状態で使用，脚部及び頸部以上の頭部は失われているが，胴体はほぼ完形，鐙部分以下が欠損するものの，被覆部の埴輪に一部利用されている。南部棺は3条突帯，透孔2対の朝顔形埴輪の胴体下部を使用し，底部付近にさらに円筒埴輪を差し込んでいる。本棺の造営される周溝埋土層は，埴輪片が集中して包含される層に相当する。



第95図　9号埴輪棺平・断面図



第96図　9号墳輪棺構成埴輪実測図（1）



第97図　9号墳輸棺構成遺輪実測図（2）

No.	器種	寸法（cm）				口縁形態	透孔	調整の特徴（括弧内の筋は2cm当たりの本数）	色調	胎土	焼成	出土位置	備考
		口径	器高	底径	突帯高								
1	朝顔形			17.0	0.8		円	(13)	暗赤褐色	砂粒、小石	良好		4／5存残存
2	円筒		38.0	11.6	0.8	B1	円?	a1（12）	明褐色	砂粒、赤色スコリア粒	良好		2／3存残存、第2段内面に[ハ]縄紋
3	円筒			11.0	0.7		円	(12)	明褐色	白色砂粒やや多い、小石	良好		1／3存残存、第1段外面に[ミ]縄紋
4	円筒			12.8	0.6		円?	(12)	明褐色	砂粒、小石	良好		1／3存残存、第1段外面に[ミ]縄紋
5	円筒			13.8	0.5		円?	(12)	赤褐色	砂粒、金雲母、赤色スコリア粒	良好		1／3存残存、第1段外面に[ミ]縄紋
6	円筒			15.2	0.7		円?	(11)	赤褐色	砂粒、金雲母、赤色スコリア粒	良好		1／3存残存
7	円筒			12.0	0.6			(12)	明褐色	白色砂粒やや多い、赤色スコリア粒	良好		1／6存残存
8	円筒			15.2	0.6			(13)	明褐色	砂粒、赤色スコリア粒	良好		1／6存残存
9	円筒			16.4	0.7		円?	a1（12）	灰褐色	砂粒、小石	良好		1／4存残存
10	円筒					B1		f（11）	暗赤褐色	砂粒、小石、赤色スコリア粒	良好		口縁部破片、第2段内面に[ハ]縄紋
11	円筒					B1		a3（11）	赤褐色	砂粒、金雲母、赤色スコリア粒	良好		口縁部破片、第1段外面に[ハ]縄紋
12	円筒							(12)	褐色	砂粒、赤色スコリア粒	良好		破片

第13表　9号埴輪棺構成埴輪観察表

⑤　周溝内遺物

円筒埴輪（第99～103図・図版PL36①～PL38①）

第2次調査時の北側周溝埋土中に大量の埴輪片が包含されていた。埴輪片は中層埋土層より集中して検出され，一時期に人為的に投棄された可能性がある。周溝下層からは，埴輪片は殆ど検出されない。第4次調査時の西側周溝中層においても，埴輪片が多量に出土した。確認された埴輪片は約1,100点を数え，北側周溝調査時の出土状況と同様であった。墳丘裾部及び外縁部流移層においても，人為的に投棄された埴輪片の散在を確認した。円筒埴輪の詳細は第14表のとおり。

形象埴輪（第104～106図・図版PL39①・PL40①）

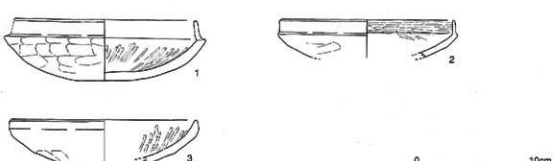
上～中層埋土に形象埴輪（馬形）の鼻先部分及び脚部の破片を，9号埴輪棺検出地点の西側付近に形象埴輪（人物）を検出した。なお，第5次調査時の周溝南西部においても形象埴輪片を確認した。形象埴輪（人物・馬形）の詳細は以下のとおり。

人物埴輪：本墳からは，2個体分以上の人物埴輪が出土している。1は，周溝埋土中より出土。左肩以上および右腕が欠損している。また，帯および褌を表現した貼付け部分が剥がれている。現存高47cm，現存幅22cm，基底部径16cmを測る。基底部に円形の透孔を穿つ。2は，周濠埋土中より出土。右側半分が欠損している。左手を腰にあて，褌の一部も観察できる。帯を表現した貼付け部分は剥がれている。現存高　45.2cm，現存幅20cmを測る。3は，周溝埋土中より出土。頭部片で，目の部分の表現が辛うじて観察できるほか，頭部を一周するような線刻が見られる。現存高16.6cm，現存幅12.3cmを測る。4は，周溝埋土中より出土。頭部片で，丸顔，切れ長の目である。鼻は一部欠損している。髷の部分に何か巻いていたのか，剥がれた痕跡が見られる。また，耳の部分にも剥がれた痕跡が見られ，美豆良もしくは耳環が付いていた可能性が考えられる。現存高13.2cm，現存幅17.6cmを測る。5は，周溝埋土中より出土。頭部片で，口の部分が辛うじて残っているほか，美豆良も右側のみ残る。頭部に何か載せたのか，「く」の字に屈曲し，その上に続く状況が窺える。現存高14cm，現存幅15.7cmを測る。6は，周溝埋土中より出土。左手部分と考えられる。

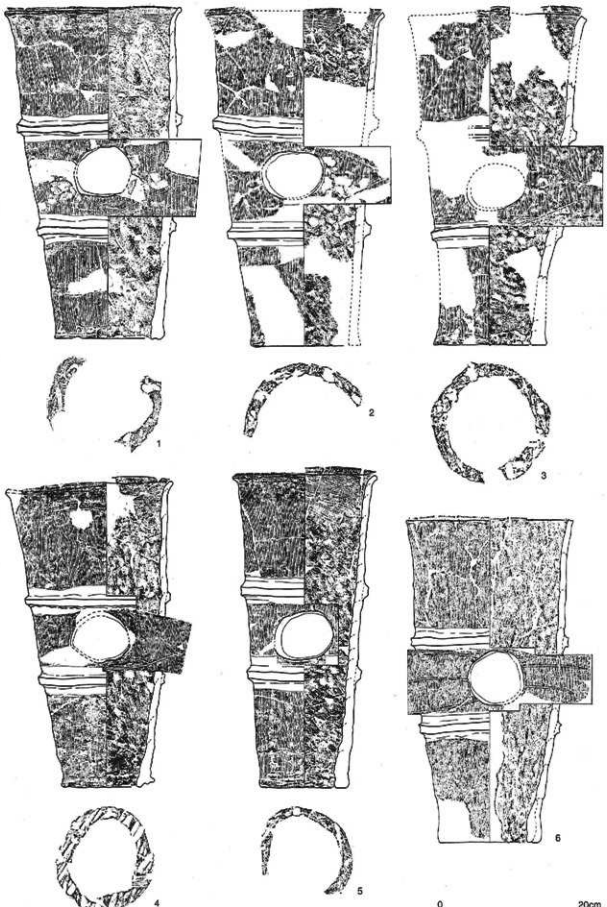
馬形埴輪：第95図13は9号埴輪棺として使用されたものである。頭部・脚部・尻尾の部分が欠損し，現存長65cm，現存高18.5cm，幅14.2cmである。また，胸繋・尻繋・輪鐙・鈴もしくは杏葉を表現した貼付け部分が剥がれている。杏葉はその剥がれ面から剣菱形杏葉と考えられる。鞍の部分は櫛状工具による刺突文により表現されている。尚，前輪と後輪の一部が欠損している。全体にハケ調整がみられ，色調は褐色である。第104図1から9は馬形埴輪の部品と考えられる埴輪片である。1と2は鞍部，3は鼻先部分，4から9は鈴と考えられる。何れも2号墳の周溝内から出土している。

土師器（第98図・図版PL40②）

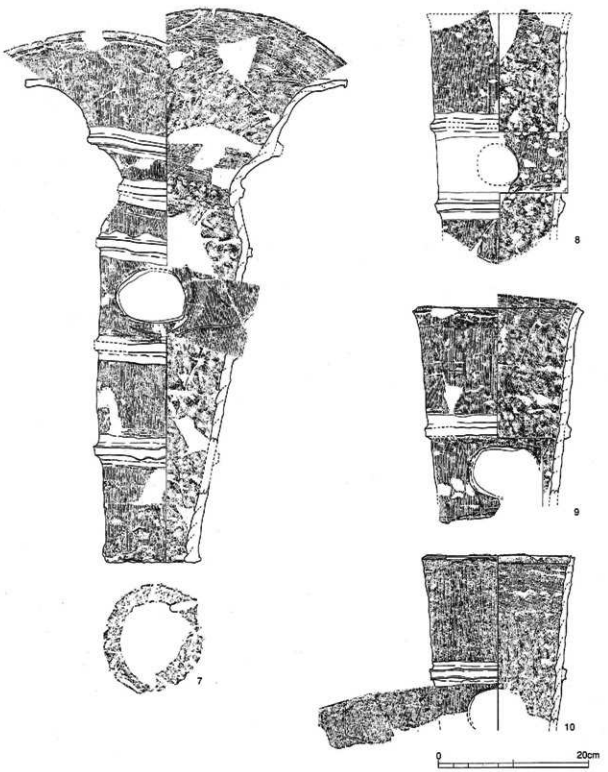
周溝南西部において土師器片が出土した。1は，土師器坏片である。周溝北西側より出土。推定口径14.5cmで，体部外面に稜を有し口縁部は直立する。調整は，口縁部横ナデ後内面ヘラミガキ，体部外面ヘラ削り，内面ヘラミガキが施されている。胎土に砂粒・赤色スコリア粒を含む。焼成は良好。色調は橙褐色。2は，土師器坏片である。周溝北側より出土。推定口径14.0cmで，体部外面に稜を有し口縁部はやや内傾気味に立ちあがる。調整は，口縁部横ナデ，体部外面ヘラ削り，内面放射状のヘラミガキが施されている。胎土に砂粒・赤色スコリア粒を含む。焼成は良好。色調は淡褐色。ほぼ完形。3は，土師器の坏片である。推定口径14.8cm，器高3.8cm。丸底で，口縁部が短く立ち上がる。調整は，口縁部ヨコナデ，体部外面はヘラ削り，内面ヘラ磨きが施されている。胎土に砂粒を含む。焼成は良好。色調は褐色。1/4残存。内面に漆が付着。



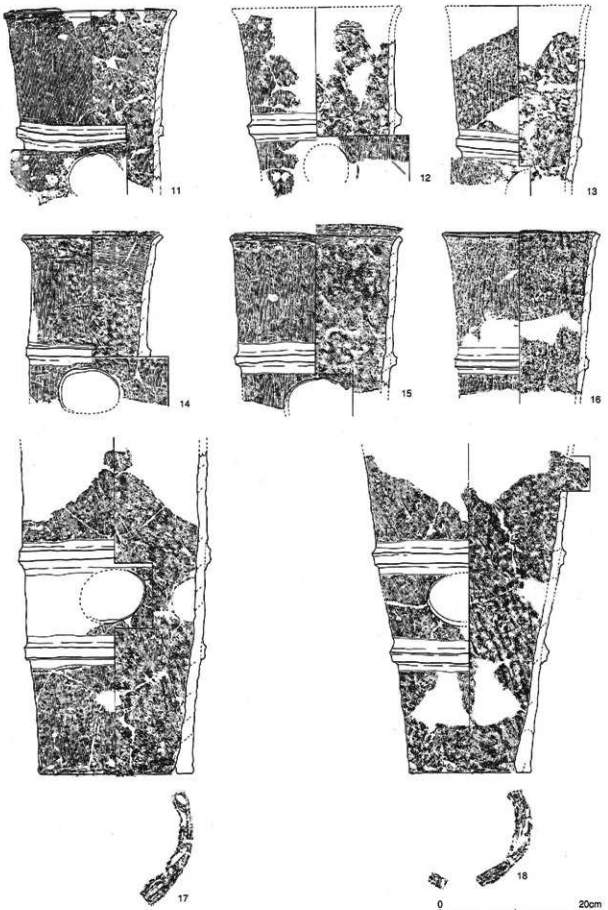
第98図　2号墳周溝内出土遺物（土師器）実測図



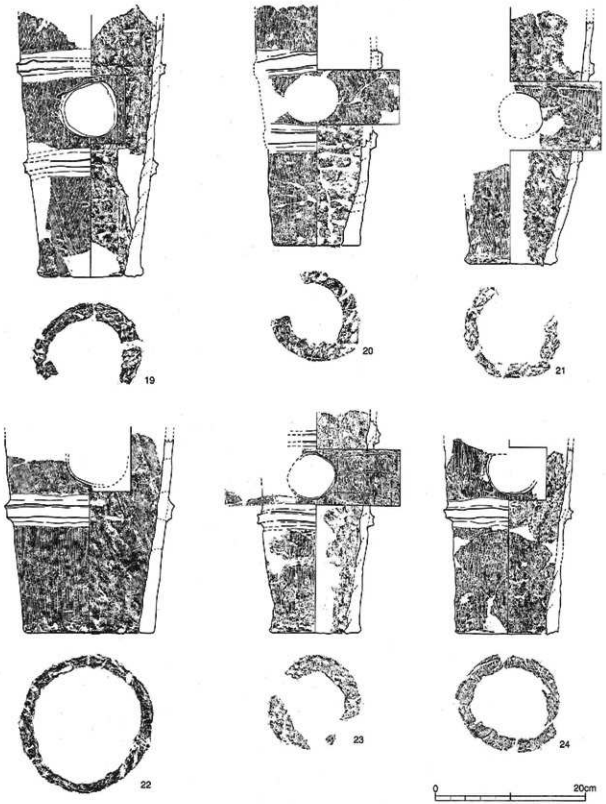
第99図　2号墳周溝内出土円筒埴輪実測図（1）



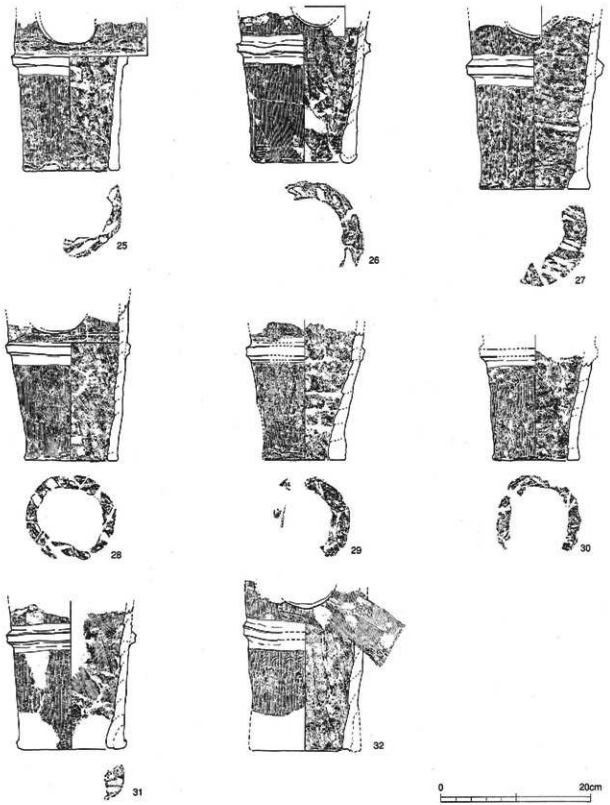
第100図　2号墳周溝内出土円筒埴輪実測図（2）



第101図　2号墳周溝内出土円筒埴輪実測図（3）



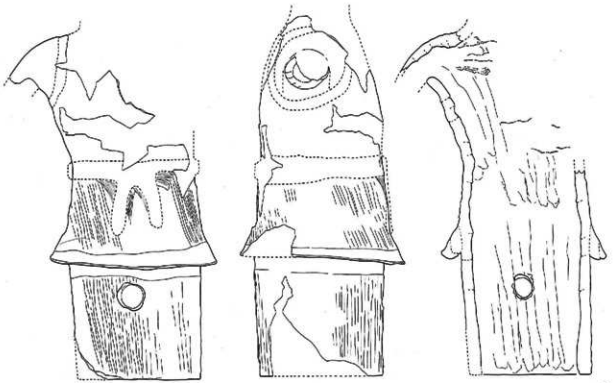
第102図　2号墳周溝内出土円筒埴輪実測図（4）

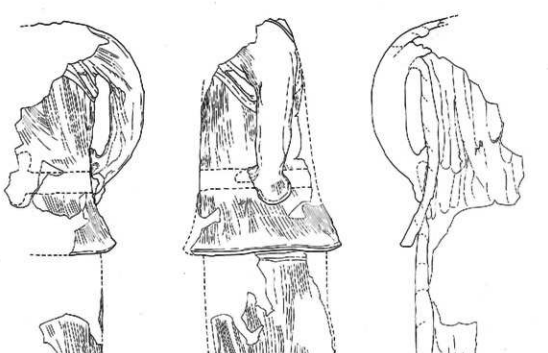


第103図　2号墳周溝内出土円筒埴輪実測図（5）

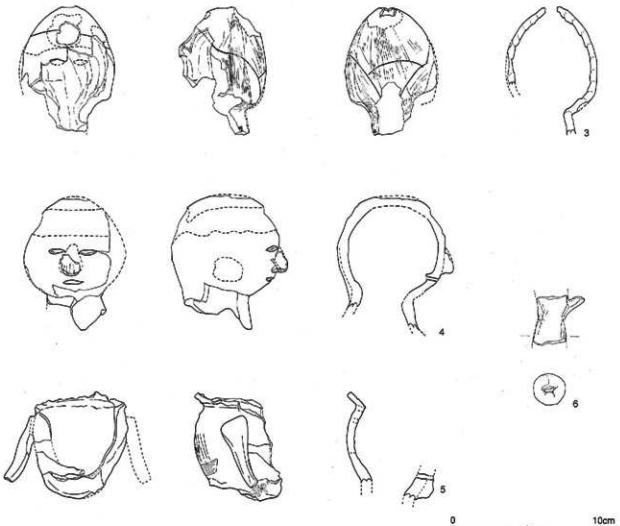
No.	器種	寸法(cm) 口径	器高	底径	突帯高	口縁形態	透孔	調整の特徴（括弧内の筋は2cm当たりの本数）	色調	胎土	焼成	出土位置	備考
1	円筒	22.6	43.3	14.8	0.7	B1	円	a 4（10）	赤褐色	砂粒、小石、赤色スコリア粒	良好	A区中部	埋甘定形、第1段外面に［△］線刻
2	円筒	23.4	34.0	14.4	0.8	B1	円	a 4(13)	淡褐色	砂粒・小石	良好	D区周溝下層	4／5残存、第1段外面に［△］線刻
3	円筒	23.5	43.6	14.8	0.8	A1	円	a 3(13)	赤褐色	砂粒、赤色スコリア粒、小石、金雲母	良好	D区周溝中層	4／5残存、第1段外面に［△］線刻
4	円筒	21.8	40.0	12.1	0.4	B1	円	a 3(12)外面最上ケ前に基底部に横ハケが見られる。	赤褐色	砂粒、金雲母、輝石	良好	Ⅳ-D区南側	3／4残存、第1段外面に［△］線刻
5	円筒	18.4	41.0	11.4	0.6	B1	円	a 3(11)基底部にナデ。	赤褐色	砂粒、赤色スコリア粒、小石	良好	Ⅳ-D区南側	1／2残存、第1段外面に［△］線刻
6	円筒	21.8	42.0	13.0	0.6	A2	円	e（11）	淡褐色	砂粒やや多く含む。赤色スコリア粒、金雲母、小石	良好	Ⅳ-D区南側	1／2残存、第1段外面に［≒］擬銅
7	朝顔形	42.0	63.5	12.5	0.6		楕円	外面タテハケ、内面基部部分のみハケその他はナデ(11)	赤褐色	砂粒、赤色スコリア粒、小石	良好	D区周溝中層	4／5残存、第2段外面に［△］線刻
8	円筒	19.2			0.5	B1	円	a 3(12)	橙褐色	砂粒、赤色スコリア粒、小石、金雲母	良好	D区周溝中層	1／3残存、第1段内面に［△］線刻
9	円筒	21.2			0.7	A1	楕円	a 4（11）	赤褐色	砂粒、金雲母	良好	A E区	1／3残存、第1段外面に籾容象？線刻
10	円筒	20.0			0.5	A2	円	a 3（12）	橙褐色	小石、白色砂粒を多く含む	良好	A区中層	1／6残存、第1段外面に［×］線刻
11	円筒	23.2			0.5	A2	円	a 2'（11）	赤褐色	砂粒、赤色スコリア粒	良好	A区中層	1／2残存、第1段外面に［≒］線刻
12	円筒	22.4			0.7	A1	円	a 3(12)	赤褐色	赤色スコリア粒、小石・金雲母	良好	D区周溝中層	1／3残存、第1段外面に［≒］線刻
13	円筒	19.2			0.5	A2	円	e（11）	淡褐色	砂粒やや多く含む。赤色スコリア粒、金雲母、小石	良好	Ⅳ-D区南側	1／4残存、第1段外面に［≒］線刻
14	円筒	18.0			0.6	B1	楕円	a 3(12)	赤褐色	砂粒、小石・金雲母	良好	D区周溝下層	1／3残存、第1段外面に［△］線刻
15	円筒	22.2			0.7	B1	円	a 4（10）	橙褐色	砂粒、赤色スコリア粒、金雲母	良好	東端	1／6残存
16	円筒	21.9			0.4	A2		e（12）	淡褐色	赤色スコリア粒、小石、白色砂粒	良好	Ⅱ-D区上層	1／3残存
17	円筒			20.0	0.5		楕円	e（12）	褐色	赤色スコリア粒、小石	良好	C区	1／5残存
18	円筒			16.0	0.5		円	a 2(13)	橙褐色	砂粒、赤色スコリア粒、小石	良好	C区	1／3残存、第2段内面に［一］線刻
19	円筒			13.9	0.5		円	（12）、外面殻ハケ前に基底部に横ハケが見られる。	赤褐色	砂粒、金雲母	良好	A区	1／4残存
20	円筒			11.2	0.7		円		淡褐色	砂粒、小石を多く含む	良好	A区中層	1／2残存、第1段外面に［×］線刻
21	円筒			12.2	0.5		円	e（12）	赤褐色	砂粒、赤色スコリア粒、小石	良好	D区周溝中層	1／3残存、第1段外面に［△］線刻
22	円筒			17.0	0.7		円		乳白色	砂粒多い。赤色スコリア粒、小石	良好	B区	1／2残存
23	円筒			11.4	0.5		円	e（12）	淡褐色	赤色スコリア粒、小石、白色砂粒	良好	Ⅱ－D区下層	1／3残存、12と同一個体の可能性あり。第1段外面に［≒］［≒］線刻
24	円筒			13.6	0.6		円	e（12）外面殻ハケ前に基底部に横ハケが見られる。	褐色	砂粒、赤色スコリア粒、小石	良好	Ⅱ-D区中層	1／4残存、第1段外面に［≒］線刻
25	円筒			12.4	0.6		半円？	外面タテハケ、内面ナデ(11)	赤褐色	砂粒、赤色スコリア粒、小石	良好	Ⅳ-D区南側	1／8残存、第1段外面に［△］線刻
26	円筒			14.0	0.7			（12）、外面殻ハケ前に基底部に横ハケが見られる。	赤褐色	砂粒、金雲母	良好	A区中層	1／8残存
27	円筒			14.4	0.8			外面タテハケ、内面ナデ(15)	淡褐色	砂粒を多く含む。小石	良好	D区周溝下層	1／8残存
28	円筒			11.8	0.4		円	外面タテハケ、内面ナデ(12)	赤褐色	赤色スコリア粒、小石・金雲母	良好	D区周溝中層	1／3残存、第1段外面に［△］線刻
29	円筒			10.6	0.6				橙褐色	砂粒、赤色スコリア粒、小石	良好	A区中層	1／6残存、第1段外面に［一］線刻
30	円筒			11.4					赤褐色	砂粒	良好	A区中層	基底部のみ
31	円筒			14.4	0.6			a 1（12）	赤褐色	赤色スコリア粒、小石・金雲母	良好	A区中層	1／8残存
32	円筒			14.6	0.6			外面タテハケ、内面ナデ(11)	赤褐色	砂粒、赤色スコリア粒、小石	良好	Ⅳ-D区南側	1／3残存、第1段外面に［≒］線刻

第14表　2号墳周溝内出土円筒埴輪観察表

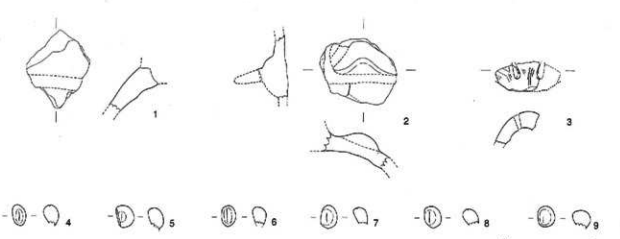




第104図　2号墳周溝内出土形象埴輪（人物）実測図（1）



第105図　2号墳周溝内出土形象埴輪（人物）実測図（2）

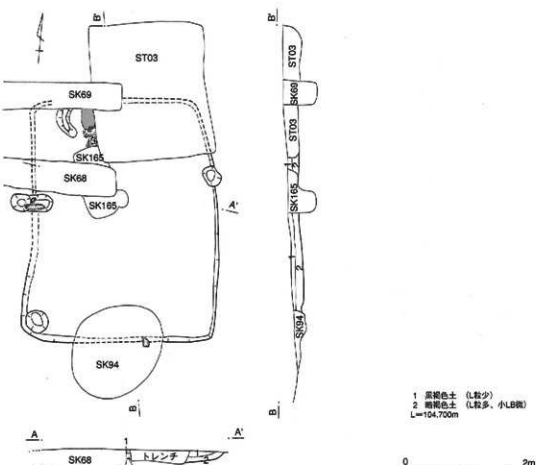


第106図　2号墳周溝内出土形象（馬形）埴輪実測図

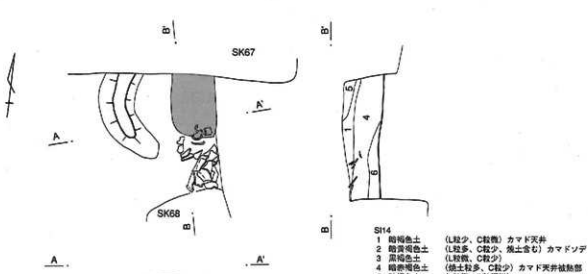
⑥ 竪穴住居跡

SI14

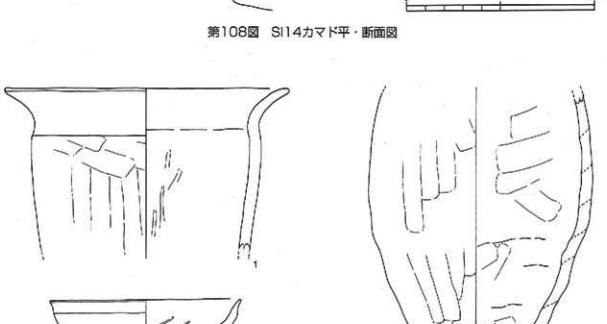
位置 I－C区・C－20杭東側 **主軸方向** N－6°－W **平面形** 長方形 **規模** 東西3.1m×南北－m **覆土の状況** 自然堆積。 **床面** 小ロームブロック混入の暗黄褐色土による貼床を施している。全体にやや軟弱である。 **壁面** 外傾して緩やかに内湾しつつ立ち上がる。ローム層への掘り込みは約15～20cm。 **柱穴** 東西壁に1対の柱穴と，南西コーナーに1本の柱穴が確認された。 **カマド** 北壁，西寄りに所在する。平面形はやや丸みを帯びた方形と見られるが，攪乱のため煙道は検出されず，カマド西側部分のみ確認できた。床面には殆ど掘り方を持たず，黒色土粒の混入する粘土でカマドを構築している。カマド内部は被熱による硬化・赤色化が著しい。 **備考** ST03による攪乱を受け，平面形北側の規模は不明。カマドも大きく攪乱を受けているが，焚き口付近に土師器甕を検出するほか，土師器坏1点を確認する。



第107図 SI14平・断面図



第108図　SI14カマド平・断面図



第109図　SI14出土遺物実測図

遺物（第109図，図版PL40③）　1は，土師器の甑片である。推定口径22.7cm。筒型で，口縁部は大きく外反する。調整は，口縁部ヨコナデ，胴部外面ヘラ削り，内面ヘラミガキが施されている。胎土に石英，赤色スコリア粒，小石を含む。焼成は良好。色調は淡褐色。二次焼成を受け，内外面とも器面が荒れている。1/8残存。2は，土師器の甕片である。推定底径6.0cm。長胴である。調整は，胴部外面ヘラ削り，内面ヘラ

ナデが施されている。胎土に石英，赤色スコリア粒，小石を含む。焼成は良好。色調は淡橙褐色。1/4残存。

3は，土師器の坏片である。推定口径15.4cm，器高3.8cm。丸底で，口縁部が短く外反する。調整は，口縁部ヨコナデ，体部外面は器面が荒れていて不明，内面ヘラミガキが施されている。胎土に砂粒，赤色スコリア粒を含む。焼成は良好。色調は橙褐色。1/8残存。4は，須恵器の鎧片である。頸部に2条の沈線と2段の波状文がめぐる。胎土に微砂粒を含む。焼成は良好。色調は灰色。

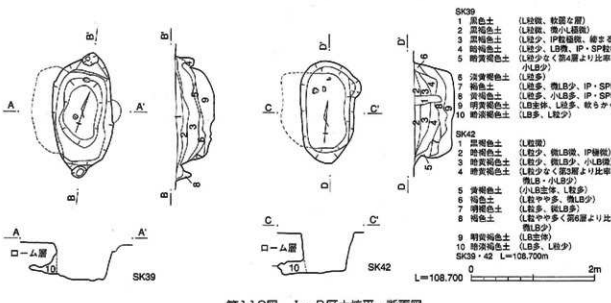
⑦ 土坑

SK39

位置 Ⅲ－B区・F－8杭西側　**平面形** 楕円形　**規模** 短軸1.0m・長軸2.0m　**覆土の状況** 人為堆土。上層は軟弱な堆土。中層は固く締まりのある黒褐色土。下層はロームブロック主体の軟らかく脆い明黄褐色土が15～25cm堆積する。　**床面** 底面中央部に段を有する。長軸両端に柱穴を伴う。　**壁面** 僅かに内湾しつつ外傾して立ち上がる。西側壁に，幅約45cmの袂込を有するL字型土坑。　**遺物** 上層～中層堆土に二軒屋式土器の流入が観察される。　**備考** 底面西壁袂込部分堆土は，ローム粒混入のやや軟弱な暗淡褐色土。側壁袂込土坑のため，土坑墓（再葬墓）の可能性。

SK42

位置 Ⅲ－B区・F－8杭南西　**平面形** 楕円形　**規模** 短軸0.9m・長軸1.65m　**覆土の状況** 人為堆土。下層にロームブロック主体の軟らかく脆い明黄褐色土が10～20cm堆積する。　**床面** 底面はほぼフラット。底面下端は長方形の堀方を呈す。東端にはピット状の張り出し部が見られる。　**壁面** 直線的にやや外傾して立ち上がる。西側壁に幅約50cmの袂込を有するL字型土坑。　**遺物** 中層堆土に二軒屋式土器の流入が観察される。　**備考** 底面西壁袂込部分堆土は，ローム粒混入のやや軟弱な暗淡褐色土。側壁袂込土坑のため，土坑墓（再葬墓）の可能性。



第110図　Ⅰ－B区土坑平・断面図

Ⅳ まとめ

1 弥生時代

① 二軒屋式・十王台式土器について

本遺跡における弥生時代の遺構より出土する土器は，弥生後期後半に位置付けられる二軒屋式土器が大半を占め，一定の割合で十王台式土器が共伴している。器種は壺形土器・甕形土器で構成されるが，壺形土器の構成比が圧倒的で，輪積み製法による成形，胎土に小石や砂を含み，焼成やや不良かつ脆さが見られる，といった特徴を持つ二軒屋式土器が数多く確認される。

頸部から「く」字状に外反し，口縁部幅と胴部幅はほぼ同径，器高は低い。口縁部から頸部にかけて段を有する。文様は，①口縁部から頸部にかけて波状，平行，簾状等の櫛描文ないし縄文を施文 ②頸部段に刺突文や棒状付文を施文 ③胴部に付加条施文による縄文，で構成されるものが代表的である。底部は木葉痕が多く見られるが，布目痕や砂目痕の個体も混在する。

13軒確認された竪穴住居内覆土よりの出土遺物は，二軒屋式土器の破片が大半であり，二次焼成を受けていることから，中型～小型の中頸・太頸形の煮沸具としての用途に供した土器が多量に用いられていたと考えられる。一方，十王台式土器も共伴する特徴が認められ，本遺跡内で確認された資料の中には，二軒屋式土器に比して胴部の最大幅に対する器高が大きく，頸部に数本の突帯が廻る十王台式の土器が確認されている。胎土には砂を含むが小石の包含は僅少で，焼成状態は良好である。輪積み成形で土器の厚さも薄く調整されており，緻密な印象を与えている。竪穴住居（SI01）内より出土した個体は，これらの特徴を典型的に示す大型細頸形の非煮沸具であり，搬入品である可能性が高いものと思われる。本地域の集落群が，十王台文化圏との交流があったことを物語るものといえよう。

住居内より出土した二軒屋式土器を検討してみると，①付加条縄文を有するものの羽状構成はなく，頸部が無文の個体（Ⅰ期）と，②付加条縄文が羽状に構成され，頸部に櫛描文を持ち，一部に棒状付文を有する個体（Ⅱ期）とに分類される。このことから，本遺跡の集落構成は２期に分類され，弥生後期後半の比較的長期間にわたり，集落頭部の田川低地に展開する水田耕作による生産面を背景とした弥生集落が，本台地上に営まれていたものと考えられる。

② 土製紡錘車・石製多孔円盤について

本遺跡からは，様々な形式の土製紡錘車が出土している。その多くが住居内出土であることや，その形状や重量にかなりの個体差があることから，異なる繊維原料から，様々な太さの撚糸を紡ぎ出していたことが窺える。

まず，施文の様態からは，無文・平行沈線文施文の２種に大別される。沈線は，櫛状工具による施文であるが，その意匠は個体により異なる。SI04遺構内出土の土製紡錘車は，中心孔より放射状に平行沈線文を配する文様構成において，十王町民俗資料館収蔵資料（「多賀郡櫛形村伊師本郷十王台南昭和29年10月」注記資料）の土製紡錘車と高い類似性を有する。一方，SI03遺構内出土の土製紡錘車は，櫛状工具による平行沈線文であることは共通性を持ちながらも，その文様構成は抽象的な曲線によることや，側面にも施文を施すなど，豊かな独自性を持つモチーフとなっている。

形状の面からは，SI03遺構内出土の算盤玉形，SI04遺構内出土の薄型円筒形，SI08・SI12遺構内出土の糸巻

形，の３種に分類される。この形状の違いは，繊維原料の違いによるもの，或いは撚り出す糸の太さによるものと想定できる。

また，遺構外出土の資料であるが，薄板状の石材を用い，円盤状に加工したうえ多数の孔を穿った石製多孔円盤(注1)が検出されたことは特筆したい。円盤状の平面中央に穿たれる孔とそれを放射状に取り巻く４個の孔で構成され，本遺跡より出土している他の土製紡錘車に比して格段に軽量であることから，軽質な繊維を原料として極細の繊維を紡ぎ出すための石製紡錘車であると推定される。紡錘車としての用途に供した孔は中心の１孔であり，他の４孔は使用痕が確認されないことや，中心孔に比して小径であることなどから，意匠的なもの或いは重量を調節する目的で穿たれたものであると考えられる（２号墳の墳丘下，Ｅ－14杭南西約５ｍの旧表土中より出土）。

様々な形状や異なる重量を持つ紡錘車の存在は，単一ではない植物原料から異なる径の紡績製品を作り出していたことが想定できることは前述した通りであるが，加えて採用される多様な装飾構成は，十王台文化圏の影響を受けつつも独自の文化を有し，平和的・共存的関係のなかでの生活を営んでいたことが想起される。

いずれにしても，各種の紡錘車の出土が確認されたことは，弥生後期後半期の本遺跡周辺集落において，繊維を獲得するための植物の栽培技術と，紡錘車による紡績技術，さらには織機による織物製作技術を有した集団が生活を営んでいたことを窺うことができる。

③　アメリカ式石鏃について

本遺跡からは，打製石鏃が多く確認されている。竪穴住居内から出土した例も多く，住居内ほぼ中央部に設けられた地床炉からは，石鏃製作に伴う多数の剥片の包含が確認されている。このことは，水稲耕作や畑作等の農業生産と平行して，従来の狩猟・採集による食料獲得も依然として継続していたことを物語るものであろう。

確認された多数の石鏃の中には，東北地方を中心に関東・北陸地方に分布するアメリカ式石鏃が存在する。アメリカ式石鏃は，基部に抉り込みを入れＴ字型に造り出した有茎鏃であるが，その形態から以下の３種に分類される。①基部に深い抉り込みを有するＴ字型有茎鏃（Ⅰ種）。②基部に浅い抉り込みを有する有茎鏃（Ⅱ種）。③幅広の基部を有する有茎鏃（Ⅲ種）。

本遺跡出土のアメリカ式石鏃は，このⅢ種に分類され，二等辺三角形の鏃に幅広の茎が付随する形態で，基底部が斜め後方に張り出して「鰐抉」状の刃を形成したものである。石質はチャート。本県においては，足尾山塊の基盤岩がチャートである。この足尾山塊に存する向山遺跡において，後期旧石器時代より石材を採取していたと見られる遺構が出土しており，栃木県南部の広範囲の遺跡からチャートを材料として石器を製作していることが確認されている。本遺跡出土の石鏃も，足尾地方より産出される石材を利用して製作されたものと思われる。

この種の石鏃は縄文・弥生の複合遺跡より多く出土していることから，本遺跡周辺の集落においても，縄文的生活形態を踏襲しながら，波及してくる農業文化を採り入れ，緩やかな弥生時代への転換を迎えたことが想起されるのである。

No.	遺跡・遺構名	所在地	時期	土器形式	アメリカ式石鏃	扁平片刃石斧	遺構の内容	調査期間
1	東中根遺跡	茨城県ひたちなか市東中根	弥生Ⅴ期	東中根式・天王山式	1		住居跡	1971－1975
2	下木有戸B遺跡	茨城県真壁郡岡城町下木有戸	弥生Ⅴ期	長岡式	1		住居跡3	1990
3	御新田遺跡	栃木県下都賀郡壬生町羽生田字御新田	弥生Ⅳ期	御新田式	1		グリッド内出	1984－1985
4	明城遺跡	栃木県下都賀郡壬生町国谷字明城738他	弥生Ⅴ期～古墳前期	二軒屋式・十王台式	2		竪穴住居跡	1990
5	向原南遺跡	栃木県河内郡上三川町多功上ノ原	弥生Ⅴ期	二軒屋式・十王台式	1		竪穴住居跡(4号住出土)	1990
6	上ノ原遺跡	栃木県河内郡上三川町多功上ノ原	弥生Ⅴ期	二軒屋式・十王台式	1		遺構外出土	1989－1990
7	刈沼遺跡	栃木県宇都宮市刈沼町字大明神　他	縄文後期～晩期	安行1～大洞A式	1		住居跡3	1984－1985・1987
8	本村遺跡	栃木県宇都宮市川田町1387番地　他	弥生Ⅴ期	二軒屋式・十王台式	3	1	住居跡12	1994－2001
9	車堂遺跡	栃木県芳賀郡益子町生田目	弥生Ⅴ期～Ⅵ期	二軒屋式・十王台式	1		住居跡3	1983
10	朝日観音遺跡	栃木県河内郡南河内町大字三王山241	弥生Ⅴ期～Ⅵ期	二軒屋式・十王台式・吉ケ谷式	1		竪穴住居跡(7号住出土)	1985－1986
11	有馬遺跡	群馬県渋川市有馬、八木原	弥生Ⅴ期～古墳前期	樽式		1	集落遺跡内(住居跡83)	1982－1984
12	清里・庚申塚遺跡	群馬県前橋市上青梨子町	弥生Ⅳ期	竜見町式		1	集落遺跡内(住居跡21)	1979－1980
13	新保遺跡	群馬県高崎市新保町、新保田中町	弥生Ⅳ期～Ⅵ期	竜見町式・樽式	1	2	住居内出土(石鏃1・石斧1)遺構覆土・包含物出土(石斧1)	1977－1980
14	新保田中村前遺跡	群馬県高崎市新保田中町字村東、字村前　他	弥生Ⅳ期～古墳前期	竜見町式・樽式・石田川式	1	2	河川跡出土	1984－1988
15	西太田遺跡	群馬県伊勢佐木市安堀町	弥生Ⅳ期～Ⅴ期	竜見町式		1	竪穴住居跡(5号住出土)	1981－1982
16	大野田西遺跡	埼玉県比企郡嵐山町鳩田字大野田592　他	弥生Ⅴ期	吉ヶ谷式		1	集落遺跡内(住居跡25・土坑6)	1993－1994
17	池上・小敷田・池上西遺跡	埼玉県熊谷市・行田市	弥生Ⅲ期	(須和田式)	1	6	住居跡28・方形周溝墓・土坑・溝	1978－1986
18	小敷田遺跡	埼玉県行田市小敷田字桜町230番地　他	弥生Ⅲ期	池上式(須和田式)	1	3	住居跡17・方形周溝墓5・土坑・溝	1983－1986
19	後谷遺跡	埼玉県鴻巣市加納字後谷	縄文晩期	安行3c～3b式	1		包含地出土	1980
20	台の城山遺跡	埼玉県朝霞市台字膝戸	弥生Ⅳ期	宮ノ台式		2	住居跡4	1971
21	下ツ原遺跡	埼玉県秩父市柳田町3612番地3	弥生Ⅳ期	栗林式・竜見町式(下原式)		1	住居跡3	1965
22	常代遺跡	千葉県君津市常代	弥生Ⅲ期～Ⅳ期	池上式・宮ノ台式		4	方形周溝墓155・土壙墓82・土坑21・水路・自然流路	1988－1994
23	清水谷遺跡	千葉県木更津市菅生字清水谷	弥生Ⅲ期	(須和田式)？		1	住居跡1	1974－1975
24	菅生遺跡	千葉県木更津市菅生・睦窓	弥生Ⅳ期	宮ノ台式		1	住居跡6・溝状遺構	1938・1948・1972
25	堀No.2遺跡	千葉県袖ヶ浦市下新田	弥生Ⅳ期～Ⅴ期	久ヶ原式		5	住居跡164・方形周溝墓23	1983－1984
26	滝の口向台遺跡	千葉県袖ヶ浦市吉野田字寺原	弥生Ⅳ期～Ⅴ期	宮ノ台式・久ヶ原式		9	住居跡34・方形周溝墓2・土坑	1988－1990
27	大厩遺跡	千葉県市原市大厩	弥生Ⅳ期	宮ノ台式		14	住居跡56・土坑・Y字溝	1973－1974

第15表－1　アメリカ式石鏃・扁平片刃石斧出土遺跡一覧（関東地方）

No.	遺跡・遺構名	所在地	時期	土器形式	アメリカ式石鏃	扁平片刃石斧	遺構の内容	調査期間
28	城の腰遺跡	千葉県千葉市若葉区大宮町	弥生Ⅳ期	宮ノ台式		21	住居跡66	1976－1977
29	戸崎館址遺跡	千葉県四街道市中野字戸崎	弥生Ⅳ期	宮ノ台式		1	住居跡２	1973－1974
30	飯重新畑遺跡	千葉県佐倉市飯重字新畑	弥生Ⅴ期			1	住居跡6	1973－1974
31	大崎台遺跡	千葉県佐倉市六崎字大崎台	弥生Ⅳ期	宮ノ台式		43	住居跡156・方形周溝墓	1979－1981
32	長田和田遺跡	千葉県成田市長田和田	弥生Ⅴ期			1	住居跡24	1985
33	遠座遺跡	千葉県東金市家之子	弥生Ⅳ期	宮ノ台式		4	住居跡62・方形周溝墓73・土坑167	1977－1979
34	遠野台・長津遺跡	千葉県山武郡芝山町大里	弥生Ⅳ期	宮ノ台式		2	住居跡14	1984－1985
35	飛鳥山遺跡	東京都北区王子１丁目飛鳥山公園内	弥生Ⅳ期	宮ノ台式		2	住居跡8	1957
36	御殿前遺跡	東京都北区西ヶ原、上中里	弥生Ⅴ期後半～Ⅵ期	弥生町式～前野町式		1	住居跡85・方形周溝墓・16・土坑1・濠1	1982－1986
37	馬場遺跡	東京都青梅市師岡町１・２丁目	弥生Ⅳ期	宮ノ台式？		2	住居跡20・鍛冶工房跡3　他	1982－1984
38	観福寺裏遺跡	神奈川県横浜市青葉区荏田町	弥生Ⅳ期終末	宮ノ台式（末期）		1	住居跡・方形周溝墓・環濠	1963
39	観福寺北遺跡	神奈川県横浜市青葉区荏田町	弥生Ⅳ期～Ⅴ期	宮ノ台式（末期）～朝光寺原式（久ヶ原式）		12	住居跡・方形周溝墓・環濠	1988
40	末長遺跡	神奈川県川崎市高津区末長	弥生Ⅴ期	朝光寺原式（久ヶ原式）		1	竪穴住居跡	1966
41	大塚遺跡	神奈川県横浜市都筑区中川町字大塚	弥生Ⅳ期～Ⅴ期	宮ノ台式・旭光寺式		35	住居跡115・環濠2・掘立柱建物跡10	1972－1976
42	折本西原遺跡	神奈川県横浜市都筑区折本町	弥生Ⅳ期	宮ノ台式		30	住居跡・方形周溝墓・環濠	1978－1980
43	山王山遺跡	神奈川県横浜市港北区根岸町字山王山	弥生Ⅳ期～Ⅵ期	宮ノ台式・久ヶ原式・庄内併行形式		4	竪穴住居跡	1981－1983
44	三殿台遺跡	神奈川県横浜市磯子区岡村	弥生Ⅳ期～Ⅴ期	宮ノ台式～久ヶ原式		15	竪穴住居跡	1959－1961
45	峯遺跡群	神奈川県横浜市磯子区磯子町字峯	弥生Ⅴ期	久ヶ原式		1	竪穴住居跡	1983－1984
46	鴨居上ノ台遺跡	神奈川県横須賀市鴨居	弥生Ⅳ期～Ⅴ期初頭？	宮ノ台式～久ヶ原式（鴨居上ノ台式ガ）		6	竪穴住居跡	1977－1978
47	佐原泉遺跡	神奈川県横須賀市佐原	弥生Ⅴ期	久ヶ原式		2	竪穴住居跡	1985－1986
48	赤坂遺跡	神奈川県三浦市初声三戸	弥生Ⅳ期	宮ノ台式		20	竪穴住居跡（石器生産遺構？）	1977・1989－1990
49	大庭築山遺跡	神奈川県藤沢市大庭字築山	弥生Ⅳ期	宮ノ台式		1	竪穴住居跡	1968
50	愛名島山遺跡	神奈川県厚木市愛名字島山	弥生Ⅳ期前半	宮ノ台式（前半）		1	竪穴住居跡	1972
51	砂田台遺跡	神奈川県寒寿野市南矢名	弥生Ⅳ期	宮ノ台式		（未製品を含む）42	竪穴住居跡・環濠・溝	1986－1988
52	三ツ俣遺跡	神奈川県小田原市国府津字三ツ俣	弥生Ⅳ期	宮ノ台式		14	竪穴住居跡・溝	1983－1984
53	山の神遺跡	神奈川県小田原市久野坂下	弥生Ⅳ期前半	宮ノ台式（前半）		1	遺物包含層	1968

第15表－2　アメリカ式石鏃・扁平片刃石斧出土遺跡一覧（関東地方）

④ 磨製石斧について

本遺跡からは，縄文時代からの形態を踏襲した土掘具としての打製石斧や，木材の伐採具としての磨製石斧が出土している。その一方，弥生時代になって出現した農耕具等の木器製作のための加工具としての磨製石斧の形態的特徴を有する石斧が確認されている。2号墳の封土中「F－14」杭付近から出土した扁平な磨製石斧(注2)は，その出土地点周辺の旧表土中から，二軒屋式の壺形土器（付加条の羽状縄文が施文され，棒状付文を有する新期の個体）や前述した石製多孔円盤が出土していることから，弥生時代後期後半の遺構に伴う可能性が高い遺物と推定できる。

大陸系石斧の一形態である扁平片刃石斧は，木器加工の際，削りの工程で使用された横斧である。本遺跡における扁平片刃石斧に類する石器が確認されたことは，弥生文化の象徴である水稲耕作のための農耕具を製作していたことを物語るものではないだろうか。

⑤ 住居内施設「炉」について

本遺跡内に確認された，10軒の竪穴住居（調査区内にプランの大半が確認された例に限る）全てに，地床炉が設けられていた。炉内には，焼土が多量に形成されていとことから，住居内で盛んに火力を使用していたことが分かる。その使用目的は第一義的に調理の用途であろうが，③で前述したように，炉の覆土からは石鏃製作の際に炉内に埋没したと見られる剥片が多く包含されていたことから，住居内で石器の製作も行われていたことが窺われる。なお，どの地床炉からも炉石の存在は確認されなかった。

住居内の炉の敷設位置に関しては，住居主軸中央に位置する例と住居主軸のやや北寄りに位置する例の二種に分類され，住居形成の時期差によるものと考えられる。

⑥ 本遺跡の弥生時代における諸問題

今回，調査を実施した本遺跡のほぼ中央に所在する，本村2号墳の墳丘盛土及び墳丘下旧表土の遺物包含層より多量に出土した二軒屋式土器に，弥生中期の土器が混在することを加筆しておく。住居跡や土坑などの遺構の検出はされなかったものの，本地域には弥生中期にも集落が営まれた可能性を示すものである。

本遺跡で確認された弥生時代の遺構は，ローム層への掘り込みが極めて浅く，竪穴住居の検出を例にとれば，5㎝内外である。一方，旧表土中よりの土器片の検出が顕著であることが指摘できる。このことは，遺構としての検出はできなかったが，旧表土中に留まる遺構が相当数存在するのではないか，と考えざるを得ない。さらに，このような弥生の遺構を攪乱する形で古墳が築造されたことから，盛土層に多数の弥生遺物が包含されるているものと考えられる。

また，紡績技術が十分に定着していたことが，複数の竪穴住居内からの土製紡錘車の検出によって想定される。石鏃を装着した弓矢による狩猟活動を営む一方，水稲耕作や畑作，紡績・織布の技術を獲得し，他文化圏との交易を行っていた弥生人の営みが，田川低地を見下ろす東河田の台地に展開されていた姿が想像される。

（注１）

石製多孔円盤（挿図第46図-1・写真図版PL25①-1）に関しては，国立歴史民俗博物館において，春成秀爾・佐原眞の両氏にご教示いただいた。まず，この石製品が何に用いられたかという点に関してであるが，形状はボタン状の飾りとみられるものの，ボタンは縄文以来日本には存在しないことから，紡錘車として用いられたものではないか，とのことであった。

中央の孔を十字に囲んで4箇所の穴が両面穿孔にて開けられているが，中央の孔のみが磨耗し，他の4箇所の孔は磨耗が認められないことから，これらは重量を軽くするために開けたものと考えられ，これによって細い糸を撚るために用いられたのではないか。本石製品は楕円形であるが，紡錘車は本来丸くなくとも，極端な話，三角形でもよく回り始めればどのような形であっても問題はない。『農耕開始期の石器組成３　北海道・東北・関東』1997国立歴史民俗博物館資料調査報告７　によれば，栃木県内では車堂遺跡において石製の紡錘車の報告例がある，との見解であった。

（注２）

磨製石斧（挿図第47図-5・写真図版PL25③-5）に関しても，石製多孔円盤と同様，春成秀爾・佐原眞の両氏にご教示いただいた。まず，時代に関しては形態的には縄文時代には見られない形状のもので，弥生時代の石斧でよいのではないか，とのことであった。

扁平片刃石斧に類似している。扁平片刃石斧は，使用を重ねていく過程で両刃になっていく石斧が多数見られるが，本石斧もそのような経過を経たものではないか。また，双刃であるが，片方の刃は研ぎ方が甘く，軸もぶれていることから使用した刃先であるかは疑問である。前述の調査報告書によれば，栃木県内には１点も報告はなく，埼玉県や千葉県に数点の類例がある。畿内において１遺跡から数点～数十点の扁平片刃石斧が出土することを考えれば非常に希少な例である。また，その石質も搬入品であることを推察させるもので，栃木県において初例となる史料である，との見解であった。

なお，本石斧は本村２号墳の封土中より出土した。本墳は弥生時代後期の集落跡を整地して築造しており，古墳の封土中及び周囲の埋土中からは多量の弥生土器が出土するのに比して，縄文土器の出土は僅かである。

2　古墳時代

本村古墳群内には，墳丘が残存する古墳として，現在４基が確認されている。耕作に伴って墳丘が消失したものを含めると，本遺跡周辺の台地上には10基近くの古墳が存在していたものと思われる。

今回の調査においては，調査区内に所在する２基の古墳を調査した。本遺跡が立地する田川右岸の台地縁辺上には，古墳時代中期から後期にわたる古墳群が点在している。これらの古墳のうち，古墳時代中期における中核的な古墳群として位置付けられるものが，南南西方向約４kmに位置する塚山古墳群である。本古墳群の築造は，この塚山古墳群の築造時期に並行して，或いはやや遅れて築造されたものと考えられる。

①　遺構（墳丘及び周溝・埴輪）について

調査の結果，本村１号墳は，低台地状の平坦面に築造された直径約32.0m（推定）の円墳であり，幅約4.0m・深さ約0.6～0.8mの周溝が巡るが西側約1/3をJR宇都宮線開通に伴う削平により消失していることを確認した。本村２号墳は，田川右岸の低台地が緩やかに低地に落ち込む緩斜面に築造された直径約25.4mの円墳であり，北西部に一部掘違い状の屈曲を有する幅約1.8m～5.1m・深さ約0.8m～1.8mの周溝が巡ることを確認した。

１号墳は，周溝調査に限定されたことから，墳丘についての詳述は割愛するが，旧表土及び直下のローム層を掘り込んで周溝が形成されていることから，約３mと推定される墳丘は，ほぼフラットな平坦面に順次盛土整形されたものと考えられる。

２号墳は，まず周囲の旧表土を掘り込み，周囲の旧表土面より一段高い平坦面を形成。次に，周溝を掘り込んだ発生土によって堰堤状に盛土を整形し，これにより土砂の流出を防ぎつつ，高さ約1.5mの円形段丘状の平坦面を形成。この平坦面に竪穴式の主体部掘り方を設け，凝灰岩の割石で構成する箱式石棺で形成される埋葬主体部を構築。埋葬主体部を礫及び白色粘土で封入した後，周溝ローム層の発生土により主体部直上に約1.1～1.2mの饅頭形ドームを整形。このドームの周囲に順次盛土を成すことによって，旧表土より約3.1mの墳丘を形成したものと考えられる。

周溝底面は逆台形の断面形を呈し，底面は平坦である。宝木ローム層のＫＰ面が露出するレベルまで掘られている。周溝北西部において，堀幅の食違い面及び周溝底の凹凸面が観察された。周溝の立ち上がりに関しては，墳丘側が約40度で立ち上がるのに対し，周溝外側は約55度で立ち上がる特徴を有する。北側周溝底面直上において，榛名二ツ岳渋川テフラ（Ｈｒ－ＦＡ）の火山灰層が確認されている。

外表施設としては，円筒埴輪（円筒形，朝顔形）・形象埴輪（人物，馬形）が確認された。埴輪列及び掘り方については確認できなかったが，墳丘南西裾部において，埴輪底部破片が直立して埋没する区域が確認できたことや，周溝をほぼ全周する埋土中より大量の埴輪片が出土していること，９基に及ぶ埴輪棺が墳丘裾部・周溝埋土・周溝外縁部に造営されていること，形象埴輪片（馬形の一部）が墳頂部付近の墳丘上から出土していること等から，墳丘裾部を巡る形で円筒埴輪の樹立がなされ，墳頂部に形象埴輪が配置されていたものと考えられる。

②　築造時期について

ここでは，周溝からの多量の埴輪と埋葬主体部よりの副葬品が豊富に出土したことから，築造時期の検討が可能な２号墳について主述し，検討することとしたい。

本墳の特徴の第一としては，後述するように，塚山古墳群に顕著に確認される銀杏葉線刻埴輪が多数確認

No.	古墳名	墳形	全長	埋葬施設	鏡	棺 管玉	棺 小玉等	棺 石釧	内 刀・剣	内 銅鏃	出 鉄鏃	出 矛・槍	土 甲冑	土 鉄斧	遺 刀子	遺 鍬	物 鉄鎌	物 鈴付鉇	物 鈴鋤	物 三環鈴	物 鉦	物 鐸	物 鏡板	物 その他	時期
1	駒形大塚古墳	前方後方	60	木炭槨	画文帯龍虎四獣鏡		○		○	○			○		○	○									2期
2	茂原大日塚古墳	前方後方	36	木棺直葬	素文鏡																				
3	下侍塚古墳	前方後方	84		盤龍鏡？				○			○	○												
4	那須八幡塚古墳	前方後方	68	両小口粘土	変鳳鏡				○					○		○								○	
5	茂原愛宕塚古墳	前方後方	50	舟形木棺	重圏文鏡	○	○								○									○	
6	吉田温泉神社古墳	前方後方	47	木炭槨？					○						○										3期
7	山崎１号墳	前方後方	34	割竹形木棺		○			○							○									
8	朝日観音１号墳	方	15	木棺直葬	青銅鏡											○									
9	吉田新宿６号墳	方	13	割竹形木棺			○								○										
10	文珠山古墳	方			三角縁式	○				○															
11	上侍塚古墳	前方後方	114	粘土槨？	捩文鏡	○			○		○	○	○												4期
12	山王寺大興塚	前方後方	96	箱式木棺	四獣鏡		○		○	○	○			○	○	○	○							○	
13	佐野八幡山古墳	円	46	竪穴式石室			○		○		○		○	○										○	5期
14	神主38号墳	方	11	木棺直葬																					
15	新田山１号墳	円	20	箱式石棺					○				○												6期
16	塚山５号墳	円	10	木棺直葬		○	○																		
17	大和山富士山	前方後円	51	箱式石棺	鏡				○		○	○	○							○				○	
18	桑57号墳	円	36	木棺直葬	変形龍虎鏡				○															○	
19	酢屋２号墳	円	23	箱式石棺					○		○				○									○	
20	谷田１号墳	円	20	箱式石棺			○																		7期
21	鯨田富士山D－15	円	18	箱式石棺																					
22	城南３丁目１号墳	円	12	木棺直葬	乳文鏡				○		○				○		○								
23	本村２号墳	円	24	箱式石棺	乳文鏡		○		○		○				○									○	
24	茶臼塚古墳	前方後円	77		龍鳳鏡										○										
25	雀宮牛塚古墳	前方後円	57		画文帯神獣鏡他	○	○		○		○		○					○	○	○				○	○	8期
26	助戸十二天古墳	前方後円	30		五鈴鏡				○									○	○	○				○	○
27	通岡１号墳	円	20	箱式石棺							○														

第16表　県内竪穴系主体部古墳一覧（2～8期）

～城南３丁目遺跡(1996今平)より転載一部加筆～

されたことが挙げられる。第二に，墳頂部平坦面が広く，竪穴式の主体部が墳頂部より約２ｍの深度で確認されたこと。第三に，主体部内からは武具を中心とする豊富な副葬品が出土したこと。そして第四に，周辺の台地上に本墳よりやや規模の小さい円墳が群在すること。以上の点から本墳は，川田町周辺地域内の主導的な位置付けの中期古墳であると考えられる。

周溝出土の埴輪は，円筒埴輪・朝顔形埴輪・形象埴輪（人物及び馬形埴輪）であるが，多量に出土した円筒埴輪の形式の検討から，本墳造営時に制作された埴輪（墳丘裾南西部に確認された円筒埴輪及び，周溝中層埋土中より多量に出土した埴輪片）と，埴輪棺に用いられた円筒埴輪・朝顔形埴輪とは，同時期のものと考えられる。

本墳の特徴の第一として指摘される円筒埴輪は，塚山系円筒埴輪の特徴を有する。突帯条数は全て二条突帯。下から二段目に透孔が穿たれ，透孔形状は半円形・円形が認められる。透孔周辺には様々な線刻を有するものが多数出土しており，その文様構成は，「銀杏葉形」「交差形」「放射形」が確認されている。口唇部は緩やかに外反する。器高が明らかな資料16点の平均値は約45.0㎝（min40.9㎝～max50.0㎝）。

朝顔形埴輪は，頸部以下三条突帯の円筒部を持ち，下から二段・三段目に円形の透孔が穿たれるものと，頸部以下三条突帯の円筒部を持ち，下から三段目のみに円形透孔が穿たれ，銀杏葉文を有するものの二種が確認された（後者は１個体のみ確認され，器高も64.0㎝と前者に比して小形）。

これらの特徴は，塚山南古墳（全長58.0m・帆立貝式前方後円墳）の円筒埴輪と極めて高い類似性を有する。塚山南古墳は，二条突帯と三条突帯の円筒埴輪が，頸部以下四条突帯朝顔形埴輪と頸部以下三条突帯朝顔形埴輪が，それぞれ使用されている古墳であるが，より規模の小さい（直径約25.4m）円墳である本墳には，小型の二条突帯円筒埴輪及び頸部以下三条突帯朝顔形埴輪の類型が用いられたものと考えられる。

また，北側周溝の最下層において，榛名二ツ岳渋川テフラ（Ｈｒ－ＦＡ）の水性堆積層が広範囲に確認されているが，本テフラ層は６世紀初頭の形成とされる。古墳の築造後，周辺地域に降下した火山灰が周溝底に流入し，堆積したものと思われる。このことから，本墳は塚山南古墳とほぼ同時期の５世紀末～６世紀初頭の築造と考えられる。

古墳の造営後，外表施設として墳頂部及び墳丘裾部を全周囲に巡る位置に設けられていたであろう円筒埴輪，朝顔形埴輪及び形象埴輪（馬形）を二次利用して，相当の期間埴輪棺の造営が相次いで成されたものと考えられる。遺構周辺から，鬼高Ⅱ式土師器（模倣坏）の検出があることから，６世紀後半までの期間に渡り，第二次埋葬施設としての埴輪棺の造営が継続し，祭祀が行われていたものと思われる。

なお，本墳は帆立貝式前方後円墳の可能性も否定できないが，墳丘南部は調査区外であり，墳丘東部及び西部は後世に大規模な削平を受けており，全容解明は困難であった。

③　埋葬施設について

２号墳の埋葬主体部は，南に向かって緩やかに傾斜する旧表土面に盛土を成し，土壙状の整地層を形成した後，掘込みを施して構築されている。主体部構築後は，さらにその上部に２ｍもの厚さで盛土を施して墳丘を形成している。

石棺の構造は，凝灰岩の割石を使用した箱式石棺である。石棺本体を形成する板石は，床面・壁面・天井部ともに内部のみ鑿状工具にて調整された割石を使用している。石質は緻密であるが軟らかく，長岡石と想定される。本墳東側を南流する田川の上流約４kmの長岡町付近の右岸に，現在でも凝灰岩の露頭が観察できる。容易に割石として産出することが可能であることから，本域周辺より水運を利用して搬入されたものと

推定することができよう。

割石の組合せ部分には白色粘土を封入し，十分に密閉が図られていた。床石の上面には礫が敷設され，埋葬されたであろう遺体と床石との緩衝を図ったものと思われる。石棺内部には朱が塗布され，特に頭位置に顕著であった。

天井石に特徴的な配置が見られる。石棺の長軸方向に対し垂直に整然と割石が配されているが，その意匠は南西方向に舳先を向けた舟形の装飾的意図があったと見られ，さながら被葬者を常世へと誘う葬送船の如くである。さらに天井石上部に凝灰岩を配した後は，周囲に礫を廻らしているが，これも同様に舟形を意識した装飾性が強く感じられる敷設状況が観察できる。

石棺上部に被覆される礫には，石棺内部と同様に白色粘土を封入し，埋葬施設内部への雨水等の浸入を防ぐ構造となっている。この構造が正常に機能していたことは，主体部内が非常に乾燥した状態で調査確認され，副葬品の保存状態が良好であったことが，それを証明している。

④ 副葬品について

直刀

石棺内，東壁沿いに２振重なって出土。中心（茎）を北東に，棟を石室内側に向けた状態で埋納されていた。いずれも平造の大刀で，目釘孔は２本穿たれている。はばき元から鋒（帽子）方向にかけて，刀身の約2/3程度に外装（捲）の木質部が残存付着した状態であった。大刀直下には２本の鉄鏃（長頸鏃）が散かれた状態で確認されている。なお，鋒の先端付近に捻込を有する針状の鉄製品が出土。錐状の工具と思われる。

鉄鏃

石棺北側に大量に埋納された長頸鏃は２群の矢束に分かれるが，その全てに矢柄が残存付着しており，完形状態で埋納されたものと考えられる。これに対し，棺内に散在する広根鏃・長頸鏃11点は鉄鏃部分のみの検出で，方向性もないことから，利器のみの状態での埋納と考えられる。いずれにしても，単一の主体部において，このように多量の埋納が成されていることは，被葬者の武人的性格を如実に示すものと捉えられる。

臼玉

主体部中央，西壁寄りの刀子出土位置周辺に２点検出した。後述するとおり，刀子は遺体腰部に相当する位置関係にあることから，腰部若しくは腕部を装飾するもの，或いは刀子の装飾品と考えられる。

乳文鏡

古墳時代倣製鏡の変遷からすれば，本墳出土の乳文鏡は「乳脚紋鏡ｂ系」（森下2002）に属し，中期末葉段階に相当するものと考えられる。

埋葬主体部内の配置状況から，所有者の権威の象徴としての宝器，もしくは儀器として埋納されたものと考えられる。信仰の対象として，或いは祭器として祭祀の場で用いられたであろう鏡が，当時の支配階層の墳墓内に埋納されることは，祭祀権に基づいた王権の有り様を想定させるものである。

丸木弓（弓弭部分）

石棺内長軸上一杯に差渡すように，全長約180cm，反り約15cmの丸木弓が，遺体上に埋納されていたものと思われる。棺北壁付近に，金銅製鋲留金具６点が付加された弓弭部分が，棺南壁付近及び鏡の上部に金銅製鋲留金具４点が検出され，これらを警ぐように西方に反りをもつ形で木質部の残存が確認された。北壁付近に検出された弓弭の保存状態が特に良好であったことは，この部分のみ直接遺体に触れていなかったか，あるいは朱が施されていたことが考えられる。

No.	遺跡・遺構名	所在地	遺跡	遺構	鏡式名	遺存度・面径
1	磯崎東古墳群第2号墳	茨城県那珂湊市磯崎町大字東/四	円墳(径約20.0m)	箱式石棺	珠文鏡	完形7.3cm
2	論田塚古墳群	茨城県北茨城郡内原町大字赤尾関字論田	円墳	箱式石棺	珠文鏡	完形8.7cm
3	林愛宕塚古墳	茨城県結城市大字林字林	前方後円墳(径40.0m)	礫槨または礫床	方格八乳鏡	欠損9.3cm
4	弁天塚古墳	茨城県稲敷郡美浦大字大塚字弁天	円墳(径74.0m)	箱式石棺	方格規矩四神鏡	完形15.2cm
5	三昧塚古墳後円部石槨	茨城県行方郡玉造町大字沖州	前方後円墳(現83.0m)	箱式石棺	変形乳文鏡 変形四獣鏡	完形10.0m 完形19.7m
6	本村2号墳	栃木県宇都宮市川田町	円墳(径約24.0m)	箱式石棺	乳文鏡	完形8.9cm
7	城南3丁目遺跡1号墳	宇都宮市城南3丁目地内	円墳(径約12.0m)	粘土郭	変形獣形鏡	完形9.7cm
8	助戸十二天古墳	栃木県足利市助戸三丁目	帆立貝式古墳(長約30.0m)	木炭郭	内行花文鏡(五花文) 内行花文鏡(六花文) 五獣帯重文鏡 五獣帯重文鏡	完形14.1m 欠損11.2m 完形6.4cm 完形8.3cm
9	茶臼塚古墳	栃木県小山市鏡沼田	前方後円墳(長77.0m)	箱式石棺?	だ龍鏡	完形14.15cm
10	桑37号墳	栃木県小山市寒沢	帆立貝式古墳(長約35.9m)	木棺直葬(割抜式木棺)	方格T字鏡 変形龍虎鏡 獣形鏡	完形8.9m 完形11.0m 完形9.6cm
11	京泉ヲト原古墳群中の行屋大日塚古墳(愛宕山古墳)	栃木県真岡市京泉	円墳(径約17.8m)	組合式箱式石棺	珠文鏡	完形8.3cm
12	大和田笛土山古墳(浅間山古墳)	栃木県芳賀郡二宮町大和田	前方後円墳(推定長51.0m)	箱式石棺	乳文鏡	不明
13	伝 長瀞西古墳	群馬県高崎市剣崎町	円墳(径約25.0m)	竪穴式石室	捉文鏡	完形11.3cm
14	岩鼻二子塚古墳	群馬県高崎市岩鼻町	前方後円墳(長120.0m)	舟形石棺	半円方格四神(五神)鳥獣鏡	完形14.5cm
15	白石稲荷古墳東都・西都	群馬県藤岡市白石	前方後円墳(長140.0m)	礫槨	六獣内行花文鏡 四獣鏡	完形9.4cm 完形6.6cm
16	台所山古墳(間の山古墳)	群馬県伊勢佐木市波志江町字台所山	円墳(径27.0m)	箱式石棺	乳文鏡	完形10.1m
17	御富士山古墳	群馬県伊勢佐木市安堀町冨士附	前方後円墳(長123.0m)	長持形石棺	変形珠文鏡	完形6.0m
18	赤堀茶臼山古墳	群馬県佐波郡赤堀町大字今井字毒島	帆立貝式古墳(長89.0m)	木炭郭	変形六神鏡 内行六花文鏡	完形12.7cm 完形8.1cm
19	片山1号墳	群馬県多野郡吉井町大字片山	前方後円墳?	粘土郭(割竹形石棺?)	九弧内行花文鏡	完形9.8cm
20	長坂重天塚古墳	埼玉県児玉郡美里町大字関	円墳(径60.0m)	粘土郭(割竹形木棺)	方格規矩鏡 六獣形鏡	完形22.5cm 完形11.2cm
21	埼玉稲荷山古墳第1主体部	埼玉県行田市大字埼玉	前方後円墳(長120.0m)	礫郭(舟形木棺)	環状乳神獣鏡	完形15.5cm
22	浅間山1号墳第1主体部	千葉県長生郡睦沢町大字下之郷字堀崎	円墳(径26.0m)	木棺直葬	獣形鏡	完形7.33cm
23	大多喜台古墳(大宮式距宅表山古墳)	千葉県夷隅郡大多喜町下大多喜台	円墳(径25.0m)	木棺直葬	画文帯環状乳神獣鏡	完形15.4cm
24	内裏塚古墳乙石室	千葉県富津市二間塚1980他	前方後円墳(長147.0m)	竪穴式石室	獣形鏡?	完形13.31cm
25	祇園大塚山古墳(大塚山古墳)	千葉県木更津市祇園町神535番地	前方後円墳(長70.0～100.0m)	石棺直葬?	画文帯四仏四獣鏡	完形30.6cm
26	伝 鶏塚古墳	千葉県木更津市永井作1丁目	円墳	石棺直葬(組合式石棺)	画文帯四仏四獣鏡	完形20.83cm
27	鶴巻塚古墳	千葉県木更津市永井作1丁目	円墳	石棺直葬(組合式石棺)	円方形帯六神鏡	完形17.39cm
28	大竹古墳群K13号墳	千葉県君津市大字大竹字三ツ目台	円墳(径24.0m)	木棺直葬	珠文鏡	欠損9.9cm
29	富士見塚古墳	千葉県市原市姉崎町字勾当水上	円墳(径25.0m)	木棺直葬	方格規矩鏡 六獣形鏡	完形9.09cm
30	姉崎二子塚古墳	千葉県市原市姉崎町字二タ子	前方後円墳(長110.0m)	木棺直葬?	き龍文鏡	完形9.10cm
31	持塚1号墳(西広モチ塚古墳)	千葉県市原市西広337番地	円墳(径35.0m)	木棺直葬	一神五獣鏡	完形13.38cm
32	八幡台古墳	千葉県佐倉市臼井台八幡台1丁目	円墳(径20.0m)	木棺直葬	き龍文鏡	完形9.22cm
33	金塚古墳	千葉県我孫子市根戸荒迫1,341他	円墳(径20.0m)	木棺直葬	勾玉文鏡	完形8.07cm
34	多古台遺跡群No3地点8号墳	千葉県香取郡多古町字源氏堀	円墳(径10.0m)	木棺直葬	方格規矩鏡四神鏡	完形10.5cm
35	多古台遺跡群No4地点1号墳	千葉県香取郡多古町字源氏堀	円墳	木棺直葬	重圏文鏡	欠損5.0cm
36	御岳山古墳	東京都世田谷区等々力1丁目	円墳(径約42.0m)	粘土郭	七鈴六弧内行花文鏡	完形約13.3cm
37	野毛大塚古墳第1主体部	東京都世田谷区野毛1丁目	帆立貝式古墳(長82.0m)	粘土郭(割竹形木棺)	内行花文鏡	完形11.5cm
38	八幡塚古墳(西岡14号墳)	東京都世田谷区尾山台2丁目	帆立貝式古墳(推定長33.5m)	木棺直葬(箱形木棺)	乳文鏡(十二乳)	完形12.0cm
39	日吉矢上古墳	神奈川県港北区日吉2丁目	円墳(径約23.5m)	粘土床(組合式木棺)	だ龍鏡 だ龍鏡	完形20.6cm 完形20.6cm
40	岡津古久古墳	神奈川県厚木市岡津古久千騎谷	古墳	木棺直葬(割竹形木棺)	二神二獣鏡	完形11.05cm

第17表　関東地方における竪穴系主体部内出土鏡一覧（古墳時代中期）

No.	遺跡・遺構名	所在地	遺跡	遺構	銅式名	遺存度・面径
1	伝 舟塚古墳(後円部墳頂埋葬施設)	茨城県新治郡玉里大字上玉里	前方後円墳(長88.0m)	箱式石棺	四獣鏡	完形
2	塩天山古墳	群馬県高崎市貝沢町正天	円墳(径約25.0m)	箱式石棺	四獣鏡	完形11.0cm
3	田中一三氏宅内所在古墳	群馬県高崎市八幡町若宮田中一三氏宅内	円墳	竪穴式小石郭	六鈴鏡	完形9.6cm
4	若宮八幡北古墳	群馬県高崎市八幡町若宮田中一三氏宅内	帆立貝式古墳	舟形石棺	乳文鏡	不明
5	大山鬼塚古墳	群馬県甘楽郡甘楽町大字白倉字西大山	古墳	舟形石棺	珠文鏡	完形7.6cm
6	保渡田薬師塚古墳	群馬県群馬町大字保渡田	前方後円墳(長105.0cm)	舟形石棺	四獣内行花文鏡	完形9.0cm
7	姫山北古墳	群馬県太田市大字東長岡字姫山北	古墳(墳形不明29.0m)	竪穴式石室	五鈴鏡	完形5.5cm
8	一夜塚古墳	埼玉県朝霞市大字岡三丁目	円墳(径50.0m)	木炭槨	方格規矩鏡	完形9.3cm
9	どうまん塚古墳	埼玉県川越市大字下小坂	円墳(径24.5m)	粘土槨(組合式木棺)	銘帯文雷十一乳文鏡	完形8.65cm
10	下小坂3号墳	埼玉県川越市大字下小坂字西原	円墳(径30.0m)	粘土槨(舟形木棺)	珠文鏡	完形7.4cm
11	入西石塚古墳組合施設(後円部中央組合)	埼玉県坂戸市善能寺字万海256番地	前方後円墳(長36.0～40.0cm)	木棺直葬	珠文鏡 乳文鏡	完形7.8cm 完形8.9cm
12	白鍬宮墨遺跡第2号円形周溝墓主体部	埼玉県浦和市大字白鍬字宮腰	円墳(径12.4m)	粘土槨(組合式木棺?)	珠文鏡	完形8.0cm
13	姉崎山王山古墳	千葉県市原市姉崎字宮山	前方後円墳(長69.0m)	粘土槨	四獣形鏡	完形10.0cm
14	禅昌寺山古墳	千葉県佐倉市大戸川町113番地	前方後円墳(長60.0～70.0)	木棺直葬	画像鏡あるいは横帯鏡	破片20.4cm
15	請西・大山大31号墳	千葉県木更津市請西字源訪谷1,496他	円墳(径28.0m)	木棺直葬(組合式木棺?)	乳文鏡 珠文鏡?	完形約11.0cm 欠損約9.0cm
16	四留作第一古墳群8号墳	千葉県木更津市大字中尾字東谷	円墳(径約18.0m)	木棺直葬(組合式木棺)	四獣鏡	完形8.0cm
17	潤井戸天王台古墳群29号墳	千葉県市原市大字潤井戸字天王台	円墳(径約20.0m)	木棺直葬(組合式木棺)	乳文鏡	欠損6.7cm
18	亀塚古墳第2主体部	東京都狛江市元和泉1丁目	帆立貝式古墳(長40.0m)	木炭槨	画像鏡	完形20.75cm

第18表　関東地方における竪穴系主体部内出土鏡一覧（古墳時代後期）

漆製品（靫）

主体部石棺上部を舟形に装飾する礫群の西脇に突出する形で配される礫床上に，北を上位に配置される。背中に背負い，鏃身を上向きに収納する矢筒式の盛矢具である「靫」と考えられる。正倉院等に現存する靫や形象埴輪としての靫形埴輪・人物埴輪の背負う靫の造形から想定すれば，木製若しくは竹製の骨格を基に皮革製品で成形したものと思われ，皮革部分に塗布された漆部分のみが残存して検出されたものと考えられる。本体の成形に際しては靫金具に類する出土が見られなかったことから，金属製の材料は使用されていなかったものと思われる。

携帯式靫と考えられ，矢筒正面観は垂直型，材質は洗革製もしくは乾皮製，黒漆と赤漆を塗布した撚糸若しくは革紐を交互に編み込んだ飾板と胴部横帯を綴付けていたものと思われる。本墳の築造時期（5世紀末）

から，栗林氏の分類における第Ⅲ期携帯A式皮革製Ⅰ式1類若しくは洗革製Ⅳ式1類に相当するものと考えられる。洗革製Ⅳ式1類は，三ツ寺遺跡や七廻り鏡塚古墳に出土例が見られ，同一形式のまま存続するとされる（栗林1993）。横帯金具や底板貢金具の使用が見られない形式であることから，本墳出土鞍は洗革製Ⅳ式1類と位置付けられよう。

またこの時期，据置式鞍の最終形が見られるが，胴部横帯に方形鉄地金銅装製横帯金具を有する洗革製Ⅲ式2類における金具には，波状列点文が施されている（宇治二子山南古墳出土例）ことは，本墳埋葬主体部内出土の板状金具の施文と同一形式であるうえで興味深い。

No.	古墳名	所在地	個体数	材質	時期	参考文献
1	下小松98号墳	山形県	1	木製漆塗(1)	後期中葉	現地説明会資料（1991）
2	会津大塚山古墳	福島県	2	織物製漆塗(2)	前期後葉	『会津大塚山古墳』（1964）
3	前橋天神山古墳	群馬県	3	不明(3)	前期後葉	『群馬県史』資料編3（1981）
4	大桝塚古墳	栃木県	1	革製漆塗(1)	中期初頭	『山王寺大桝塚古墳』（1977）
5	本村2号墳	栃木県	1	革製漆塗(1)	中期後葉	本遺跡
6	国分尼塚1号墳	石川県	1	織物製漆塗(1)	前期中葉	現地説明会資料（1984）
7	鼓山古墳	福井県	2	織物製漆塗(2)	前期末葉	『鼓山古墳発掘調査報告』（1965）
8	石山古墳	三重県	1	革製漆塗(1)	前期後葉	『図解考古学事典』（1959）
9	雪野山古墳	滋賀県	2	革製漆塗(1)	前期中葉	『雪野山古墳』（1990）
				織物製漆塗(1)	前期中葉	『雪野山古墳Ⅱ』（1992）
10	波路古墳	京都府	1	織物製漆塗(1)	前期前葉	『波路古墳・波路城跡・荒神社跡』（1988）
11	園部垣内古墳	京都府	1	革製漆塗(1)	前期後葉	『園部垣内古墳』（1990）
12	瓦谷古墳	京都府	1	革製漆塗(1)	前期後葉	『京都府遺跡調査概報』第46冊（1991）
13	西山塚古墳	京都府	2	革製漆塗(2)	中期後葉	現地説明会資料（1992）
14	土保山古墳	大阪府	4	革製漆塗(4)	中期中葉	『土保山古墳調査概報』（1960）
15	亀井古墳	大阪府	1	革製漆塗(1)	中期中葉	『亀井・城山』（1980）
16	備前車塚古墳	岡山県	1	不明(1)	前期初頭	『岡山県史』考古資料（1986）
17	大迫山1号墳	広島県	2	革製漆塗(2)	前期中葉	『大迫山第1号墳発掘調査概報』（1989）
18	琵琶隅古墳	福岡県	1	織物製漆塗(1)	中期？	『日本考古学年報』8（1959）
19	大成洞14号墳	大韓民国	1	革製漆塗(1)	中期前葉	読売新聞（1992.7.4.付）

第19表　鞍出土一覧　～京都府埋蔵文化財情報第45号より転載一部加筆～

板状金具

主体部石棺内より出土した4点の板状金具は，二組一対の方形蟻番金具と考えられる。鉄地金銅張製。表面のみ金銅が施され，鉄地は2㎜程度の折り返しを成す。四隅を鋲状の金具で留め，二重に区画したうえでタガネ彫りで波状列点文が施されている。

類例として，福岡県八女市所在の真浄寺2号墳出土の横矧板鋲留短甲や，宮崎県西都市所在の西都原地下式4号墳出土の横矧板革綴短甲・横矧板鋲留短甲の蟻番金具がある。これらの短甲は，ともに短甲前胴部右脇が開閉式になっており，この右脇部分に二組一対の方形蟻番金具が取り付けられている点が共通している。

本遺跡における出土品は，革製短甲の蟻番部分のみ残存していたものか，紐状の布及び木質もしくは革状の有機物が付着していることから，横矧板鋲留短甲ないし横矧板革綴短甲の蟻番金具を後に帯金具等の用途に転用したものと考えられる。

これらの短甲は主として5世紀代の古墳から出土しており，その規格性や類似性により，大和政権を通じて日本各地にもたらされたものと考えられるものである。このことから，本墳の被葬者は，多量の武器・武

具を副葬品として有していたことと考え合わせてみれば，何らかの形で大和政権と関係を持っていたであろう本県中央部の統合的首長の支配下に属する，本地域を支配する武人的性格を持った首長であったといえよう。

古墳名	西都原地下式４号墳	本村２号墳
所在	西都市大字三宅字東立野　外	宇都宮市川田町本村　外
立地	一ツ瀬川流域　西都原古墳群台地北方	田川流域　宝木台地東縁辺部
墳形(形式)	地下式横穴(地下式墳)	円墳
埋葬施設	粘土床・木棺	組合式箱式石棺
鏡	倣製珠文鏡１(径８．８cm，白銅質)	倣製乳文鏡１(径８．９cm，白銅質)
武器	鉄鏃約４０（広根式鉄鏃１）	鉄鏃６８(広根式鉄鏃６)
	直刀５	直刀２　丸木弓１　刀子１
武具	横矧板革綴短甲１(鉄地金銅張蝶番金具) 横矧板鋲留短甲２	鉄地金銅張蝶番金具４(短甲１領に相当か？) 革製漆塗靱１
玉類	滑石製管玉１１　ガラス製丸玉１１５ 碧玉製管玉１６　ガラス製小玉６４ 硬玉製勾玉１	滑石製臼玉２

第20表　西都原・本村副葬品比較一覧

附記ー西都原地下式４号墳ー

本遺跡出土の板状金具を「短甲蝶番金具」と想定するうえで，比較資料として参考とした西都原地下式４号墳について，その概要を附記したい。

地下式墳は，日向地方（宮崎県中央の平野部以南）に分布する得意な形式の横穴墳墓である。地表に盛土を伴わない場合が大半で，地中に墓壙を掘り込み，主体部を形成する特異な埋葬形態が特徴で，この地方固有の墓制であるといえよう。比較事例として参考にした西都原４号墳は，西都原古墳群台地の北部，本形式の墳墓の北限にあたる一ツ瀬川流域に所在する。

古墳周溝内から竪穴を掘り下げ（地表下約2.7m），南北方向に長方形の玄室（長さ約5.5m，幅約2.2m，高さ約1.6m）を構築したものである。玄室内壁面は全面朱が塗布され，天井部は切妻様式となっている。主体部は粘土床。玄室入口は多数の玉石で閉塞し，竪穴は地表面まで埋め戻してあった。本墳の構築年代は，地下式墳の編年的分類の第１様式に位置付けられ，横穴の内部構造と副葬品から，５世紀半ばと推定される。

第22表に示す副葬品が，主体部に沿って埋納されていた。この副葬武具の短甲３領の開閉部に二組一対の方形蝶番金具が，本村２号墳主体部出土の方形金具に極めて類似する出土品で，特に横矧板革綴短甲のそれが「波状列点文」の施された「鉄地金銅張製」の蝶番金具であった。また，径8.8cmの白銅質倣製鏡，多量の鉄鏃，複数の直刀が埋納されていることが注目される。

大和政権を通じて日本各地にもたらされた可能性の指摘される同一形式の短甲や，大量に埋納される武器・武具などの副葬品が物語るものは，武力によってもたらされたであろう中央集権国家の形成の奔流に，時期を同じくして栃木県河内地区も宮崎県日向地区も同様に飲み込まれていった歴史の証左であろう。

⑤　埋葬頭位及び副葬品の位置関係

第108図は，２号墳主体部の埋葬時復元図である。石棺内法の最大幅は約44cmとなっており，県内で確認された箱式石棺における短軸内法幅の平均約39cmと比して，標準的な規模であると考えられる。

図中の被葬者想定は，関東地方における古墳時代の平均身長（男性）を約163.06cmと想定し（平本1972），副葬品との位置関係を想定したものである。青銅鏡，直刀２振，60点以上に及ぶ鉄鏃を始め豊富な副葬品を有することから，成年男子と想定することは異論のないところであろう。頭位については，第110図に示すと

おり，県内においてはN-30°-W～N-35°-Eが優位であること，特に県中央部に北優位の例が多いことから，北枕と想定した。

以上の想定のもと，被葬者と副葬品の位置関係を考察してみると，直刀は遺体の左脇から左腰部位にかけて戦せられ，頭部の両脇に添えるように左右の肩部に長頸鏃を上にして矢束を背負う形で置かれていたものと考えられる。また，右腰には刀子を添え，足下付近に鏡が置かれ，以上の副葬品を埋納した後，石棺の長軸一杯に渡る約180cm長の丸木弓を埋納したものと思われる。なお，後述する金銅製板状金具が，短甲の一部であると仮定すれば，両膝から両足首にかけての鏡と弓の間に埋納されていたものと考えられよう。

鏡には繊細に編み込まれた繊維質の遺物が鏡背に付着していたことから，布状の袋等にて包まれて埋納されていたものと考えられる。鏡背を上に埋納されていたものの，後に布の腐食や遺体の白骨化に伴い，鏡面を上に転落したのではないだろうか。

ここで疑問となるのは，鏡の位置である。今尾氏が鏡の副葬について，弥生から古墳前記にかけて頭優位の配置であったものが，中期にはその原則から外れる位置に鏡を配置することに注目されている（今尾1989）とおり，城南３丁目１号墳第２主体部出土の鏡においては，刀子とともに左腰部位に置かれている。これに対し，本墳主体部においては，足元の埋葬位置となるが，果たしてこのような頭位に対する逆転配置が有り得るのかは，今後の類例の増加を待って再検討すべきかもしれない。さらに，県内古墳の直刀配置もその殆どが体の右側であることも検討課題である。

また，鉄鏃の出土位置についてであるが，前述した頭部両脇の長頸鏃束状出土の他に，右側頭部・肩部・腕部・脇部に長頸鏃・広根鏃合計８本が，左側胸部から腰部にかけて長頸鏃３点が散乱するが如くに出土している。これは何を物語るものであろうか。想像を逞しくすれば，まさに戦闘に赴いて矢を受け，負傷を負ったうえでの埋葬と考えられなくはないだろうか。なお，短甲の一部と考えられる金銅製板状金具の一部も，棺内に散在し，損傷激しく湾曲した状態で出土していることも，このことを物語るものではないだろうか。

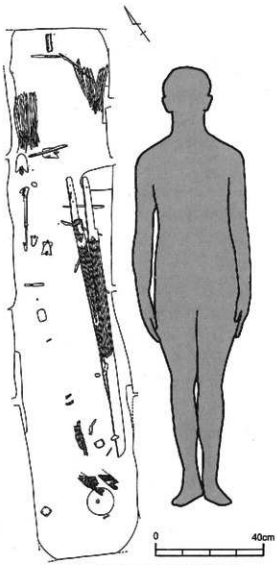
本墳は古墳時代中期における同規模の古墳に比し，副葬品の量・内容ともに非常に豊富であることが分かる。塚山南古墳の築造時期とほぼ同時期と見られることや，塚山５号墳と同様に主体部の要所に豊富に白色粘土を使用していることなど，共通点が指摘できる。また，本墳の南方約2.7kmに所在する城南３丁目１号墳も，鏡を始めとする豊富な副葬品を伴い，白色粘土を使用している点で共通点があり（1996今平），今平氏は塚山古墳群との関連性を指摘している。これらのことから，本墳の被葬者は塚山古墳群の勢力下にあるグループにあり，武力的功績があり鏡を所持或いは下賜されることのあった人物であったと考えられる。

【埋葬頭位に関する第２案】

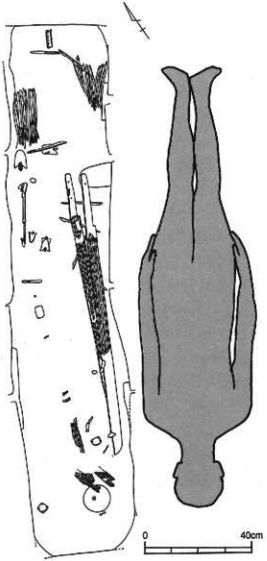
県内における埋葬頭位の例にない事例となるが，本墳主体部の埋葬頭位を南に採った場合，その副葬品との位置関係はどのようになるか，考察を試みた。

第109図は，埋葬頭位を南とした想定図である。まず，直刀は遺体の右側頭部から右膝部にかけて切先を上に向けて置かれ，長頸鏃矢束は左右の下肢部に鏃を下に向けて置かれていたものと考えられる。鏡はセオリー通り頭優位に置かれ，短甲は胸部から頭部にかけての位置，刀子は左腰部に相当する配置となる。丸木弓は左手にて保持するべく西側に湾曲する位置で置かれることとなり，散在する長頸・広根鏃は大腿部以下，下肢部にわたっての位置関係となる。

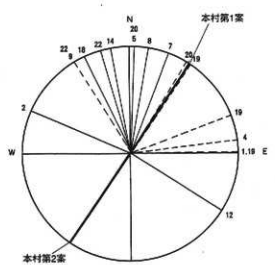
以上のように，逆位相での埋葬を想定すると，頭位を南枕とする以外は鏡の配置・直刀の配置ともに疑問点が解消し，鉄鏃その他の副葬品配置も想定可能な位置関係となった。今後の検討課題とすべき価値ありと提起したい。



第111図　埋葬時復元想定図（第1案）



第112図　埋葬時復元想定図（第2案）



※1　…は照明地域の古墳
※2　番号は第17図No.と一致

第113図　栃木県内古墳の埋葬頭位

⑥ 埴輪棺について

周溝内の埋土中より，6世紀後半期の模倣坏の検出があることから，当該時期に二次的な埋葬施設として，本墳の周囲に埴輪棺が随時造営されたものと考えられる。

2号墳の周囲に9基の埴輪棺が確認できたが，2号墳周溝の南部及び東部にかけて，後世の攪乱により遺構が失われていることを考慮すれば，かつては古墳の周囲に十数基の埴輪棺が存在していた可能性も十分に考えられる。このことは，全長98mを測る塚山古墳を主墳とする塚山古墳群に伴う埴輪棺に匹敵する基数であるばかりでなく，直径30mに満たない1基の円墳に，このように多数の埴輪棺の造営が成された事実は，特筆すべきものであるといえよう。

塚山古墳群内に所在する埴輪棺は，11基が確認されているが，これをその構築位置から分類すると，①古墳群の周囲に点在して埋設されるもの（塚山A群），②前方後円墳周溝外縁付近に埋設されるもの（塚山B群），③円墳周溝内（塚山C群）に埋設されるもの，の三種に分類される。これに対し，本村2号墳所在の埴輪棺は，①墳丘東南裾部に埋設されるもの（本村D群），②周溝北部外縁（本村B群）に埋設されるもの，③周溝西部埋土内に埋設されるもの（本村C群），の三種に分類される。この三種は，それぞれ3基ずつまとまって所在している。これらの所在位置の違いは，主体内部に埋葬される人物の階従若しくは近親関係の差異に由来するものか，或いは構築時期の時間差によるものと考えられる。なお，塚山A群に相当する，古墳の周囲に埋設される埴輪棺は，調査区内（Ⅰ～Ⅴ次調査）からは確認されなかった。

構築時期の差異に関しては，各群相互の関係は不明である。本村C群に関してのみは，構築レベルの深浅関係や切り合いから，周溝底に構築された【8号棺】→周溝中下層埋土に構築された【9号棺】→周溝上中層に構築され，9号棺を切る関係の【7号棺】の順に造営されたことが明らかである。

埴輪棺の構築位置に関して特筆すべきは，墳丘内に構築された4～6号棺の存在である。栃木県内で確認されている埴輪棺28基中，墳丘内部に構築された例は本墳所在の3基のみである。埴輪棺に使用されている円筒埴輪及び朝顔形埴輪に，他群との明確な製作時期の差異が見られないところから，構築時期の差として捉えるよりもむしろ主体部被葬者との親密関係の差異によるものと判断すべきと考える。これら3基の墳丘内部に構築された埴輪棺は，周溝埋土内及び周溝外縁部に構築されたそれと比べ，主体部被葬者との関わりのより深い人物の埋葬施設であったものと考えることができよう。

7～9号埴輪棺が周溝下層埋土より検出されたことを考慮すれば，まず墳丘裾部埴輪列の自然崩落と周溝の自然埋没があり，その後埴輪棺群の造営が行われたものと推定できる。その際，残存する埴輪列から造営に必要なものを選択して使用し，小埴輪片を周溝内に投棄したことによって，周溝中層埋土に大量の埴輪片による遺物包含層が形成されたものと考えられる。このことは，古墳造営時に敷設された埴輪列が墳丘上に殆ど確認できない理由ともなっている。

No.	墳輪棺(古墳)名	所在地	埋設場所	土壙の規模(cm)	棺身(cm) 構成	全長	内法幅	その他の特徴など
1	上田出土の墳輪棺	壬生町	台地上	不明	円筒1	53.5	19.2～32.8	炭化物と粘土が墳輪棺を層状に被覆、棺北側におおきめな石
2	磯岡北9号墳	宇都宮市	周溝外	不詳	円筒2	不詳	不詳	
3	①本村2号墳 1号墳輪棺(北周溝外)	宇都宮市	周溝外縁	179×58	円筒2	95.5	13.5～25.5	西棺身円筒墳輪に銀杏葉線刻あり 西棺身北側と東棺身東側に柱穴
	②本村2号墳 2号墳輪棺(北周溝外)	宇都宮市	周溝外縁	99以上×53	円筒2	約86	14.0～25.5	西棺身円筒墳輪北に柱穴、東棺身は欠損、棺床の破片なし
	③本村2号墳 3号墳輪棺(北周溝外)	宇都宮市	周溝外縁	130×49	円筒2・朝顔1	84.0	10.0～23.0	東棺身円筒墳輪に銀杏葉線刻あり 棺身合わせ口南側・北側及び西棺身西側に柱穴
	④本村2号墳 4号墳輪棺(東南墳丘掘)	宇都宮市	墳丘内	149×51	円筒3	120.0	10.5～29.0	棺身を円筒・朝顔形墳輪で被覆
	⑤本村2号墳 5号墳輪棺(東南墳丘掘)	宇都宮市	墳丘内	147×57	円筒2	約90	14.5～30.0	棺身上部に攪乱を受ける、円筒・朝顔形墳輪で被覆
	⑥本村2号墳 6号墳輪棺(東南墳丘掘)	宇都宮市	墳丘内	151×49	円筒2	約90	10.5～21.5	土壙両端・東南周溝側に柱穴、北棺身は欠損
	⑦本村2号墳 7号墳輪棺(西周溝内)	宇都宮市	周溝内	81×44	円筒2	54.0	10.0～20.0	棺床・棺身閉塞用の墳輪破片を伴わない
	⑧本村2号墳 8号墳輪棺(西周溝内)	宇都宮市	周溝内	約120×約55	円筒2・朝顔1	約100	8.0～24.5	埋没途上の周溝中に構築、棺床墳輪破片なし
	⑨本村2号墳 9号墳輪棺(西周溝内)	宇都宮市	周溝内	135×64	円筒1・馬形1 朝顔1	約103	9.5～24.5	北棺身に馬形埴輪・南棺身に朝顔形埴輪を使用 棺身被覆埴輪破片多量、棺床埴輪破片なし
4	①旧射撃場内古墳 南周溝西埴輪棺A棺	宇都宮市	周溝内	不明	円筒2～3	不明	不明	棺身の北側にある円筒埴輪の原位置は不明
	②旧射撃場内古墳 南周溝西埴輪棺B棺	宇都宮市	周溝内	不明	円筒1	不明	不明	棺身の北側は欠損
	③旧射撃場内古墳 南周溝北埴輪棺	宇都宮市	周溝内	不明	円筒3	160	不明	棺床および棺身全体を円筒埴輪4個体分の破片で被覆
	④旧射撃場内古墳 西周溝西埴輪棺	宇都宮市	周溝内	不明	円筒3	110	13.6～24.0	棺床および棺身全体を円筒埴輪の破片で被覆
	⑤旧射撃場内古墳 東埴輪棺	宇都宮市	周溝外	147×57	円筒3	約130	不明	棺身を円筒・朝顔・短甲形埴輪および白色粘土で被覆
	⑥1号埴輪棺	宇都宮市	周溝外	190×100	円筒2	120	18.8～34.0	土壙内を白色粘土で充填
	⑦2号埴輪棺	宇都宮市	周溝外	140×65	円筒2	100	13.6～30.0	棺床を厚さ3～7cmの白色粘土で固定
	⑧3号埴輪棺(鹿の線刻画のある埴輪棺)	宇都宮市	周溝外	不詳	円筒2	不明	不明	閉塞用の円筒埴輪には銀杏葉線刻あり
	⑨4号埴輪棺	宇都宮市	周溝外	不詳	不明	不明	不明	
	⑩5号埴輪棺	宇都宮市	周溝外	196×55	円筒・朝顔	168	不明	
	⑪塚山6号墳 6号墳輪棺	宇都宮市	周溝内	73以上×47	円筒1	38.2	14.4～22.4	土壙は周溝に約20cmの黄・茶褐色土が堆積した後に構築
5	千が窪古墳	芳賀町	周溝外縁	不明	円筒3	165	16.8～40.4	眉形埴輪2本分の破片で棺床・側面を被覆、副葬品に耳環2
6	①下桑島西原2号墳 1号埴輪棺	宇都宮市	周溝外	112×57	円筒1・朝顔2	82.5	9.4～21.2	土壙は周溝に厚さ20～25cmの黄褐色土が堆積した後に構築
	②下桑島西原2号墳 2号埴輪棺	宇都宮市	周溝外	132×60	円筒1・朝顔1	52.5	12.0～37.2	
7	①上原3号墳 1号埴輪棺	壬生町	周溝内	なし	円筒3	60	12.8～24.0	埋没途上の周溝底に構築
	②上原3号墳 2号埴輪棺	壬生町	周溝内	110×70	円筒2	51	11.6～22.0	棺床および棺身全体を円筒埴輪の破片で被覆
8	琴平塚古墳	宇都宮市	周溝内	不詳	不詳	不詳	不詳	

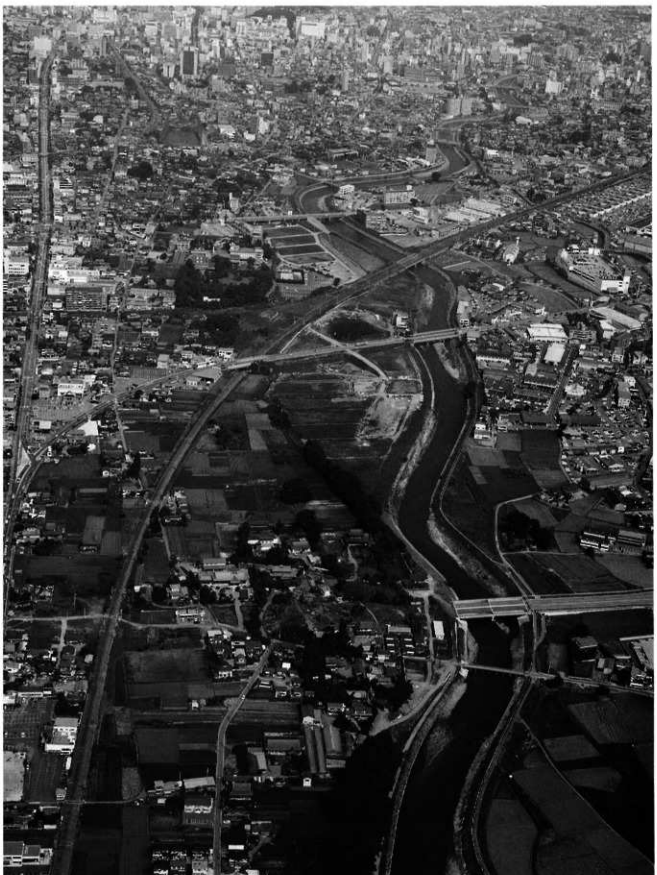
第21表 県内出土埴輪棺一覧表

～栃木県内発見の埴輪棺について(水沼2003)を参考に作成～

参考文献

春成秀爾 1997「農耕開始期の石器組成3」『国立歴史民俗博物館資料調査報告7』
海老原郁雄 2004「アメリカ式石鏃とその周辺」『唐澤考古第23号』唐沢考古会・佐野市
片平雅俊 1995「十王町における十王台式土器」『十王町民俗資料館紀要4』十王町民俗資料館
片平雅俊 1998「十王台南」『瀧田宏氏顕彰事業関連報告書第1集』十王町民俗資料館
平本嘉助 1972『縄文時代から現代に至る関東地方人身長の時代的変化』『人類学雑誌』Vol.80 No.3
日本人類学会
今平利幸 1996「城南3丁目遺跡」『宇都宮市埋蔵文化財調査報告書』第39集 宇都宮市教育委員会
栗林誠治 1993「真朱」『徳島県埋蔵文化財センター研究紀要第2号』財団法人徳島県埋蔵文化財センター
水沼良浩 2003「栃木県内発見の埴輪棺について」『栃木の考古学』栃木県考古学会事務局
小林謙一 1979「地下式横穴の甲冑と大和政権」『日向の古墳展－地下式横穴の謎を探る－』
宮崎県総合博物館
日高正晴 1991「西都原地下式4号墳の墓制的考察」『西都原古墳研究所年報』第7号
白石太一郎 1994「日本出土鏡データ集成2」『国立歴史民俗博物館研究報告第56集』
白石太一郎・設楽博己 2002「弥生・古墳時代遺跡出土鏡データ集成 補遺1」
『国立歴史民俗博物館研究報告第97集』
森下章次 2002「古墳時代倭鏡」『考古資料大観 第5巻 弥生・古墳時代 鏡』小学館
宇都宮大学考古学研究会 2001「塚山西古墳・塚山南古墳」『宇都宮市埋蔵文化財調査報告書第48集』
宇都宮市教育委員会
秋本陽光 2004「栃木県南部における円筒埴輪の一様相」『栃木県考古学会誌第25集』
1999「茨城県における弥生時代研究の到達点」『十王台式土器制定60周年記念シンポジウム資料』
茨城県考古学協会・十王町教育委員会
1993「宮崎県史資料編考古2」宮崎県
1982「九州歴史資料館収蔵資料目録1」九州歴史資料館
1992「京都府埋蔵文化財情報第45号」京都府埋蔵文化財調査研究センター
1998「その後の西都原及び周辺地域における古墳の発掘」『西都原発掘75周年展』宮崎県総合博物館

写真図版



①本村遺跡周辺遠景（南上空から）

①SI03～SI06完掘状況遠景（Ⅲ－B区・西上空から）

①1号墳遠景（北上空から）

②1号墳周溝完掘状況（Ⅳ－C区・垂直上空から）

①Ⅰ－A区完掘全景（北西から）

②Ⅰ－B区完掘全景（西から）

③Ⅰ－C区完掘全景（東から）

④Ⅲ－A区完掘全景（北から）

⑤Ⅲ－B区完掘全景（西から）

⑥Ⅳ－A（W）区完掘全景（南から）

⑦Ⅳ－A（E）区完掘全景（南から）

⑧Ⅳ－B区完掘全景（西から）

①Ⅳ－D区完掘全景（北から）

②Ⅴ区完掘全景（西から）

③SI01完掘状況（南から）

④SI01完掘状況（北から）

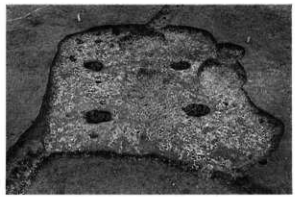
⑤SI01炉完掘状況（南から）

⑥SI01遺物出土状況（南から）

⑦SI01遺物出土状況（西から）

⑧SI02完掘状況（西から）

①SI02遺物出土状況（北から）



②SI03完掘状況（南から）

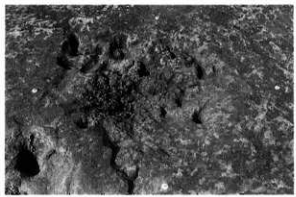
③SI03，SD06完掘状況（南から）

④SI03遺物出土状況（南東から）

⑤SI03土製紡錘車出土状況（南東から）

⑥SI03石鉄出土状況（南東から）

⑦SI04完掘状況（北から）



⑧SI04炉完掘状況（南から）

①SI04土製紡錘車出土状況（南西から）

②SI05完掘状況（南から）

③SI05遺物出土状況（南から）

④SI05炉内遺物出土状況（南から）

⑤SI05・06完掘状況（北から）

⑥SI06遺物出土状況（北から）

⑦SI06炉完掘状況（南から）

⑧SI07完掘状況（南から）

①SI07炉完掘状況（南東から）

②SI08完掘状況（南から）

③SI08遺物出土状況（南から）

④SI09完掘状況（南東から）

⑤SI09遺物出土状況（南東から）

⑥SI10完掘状況（南東から）

⑦SI11完掘状況（北から）

⑧SI11完掘状況（南東から）

①SI12完掘状況（北西から）

②SI12完掘状況（北東から）

③SI12炉東西セクション（南東から）

④SI12炉完掘状況（南西から）

⑤SI13完掘状況（西から）

⑥SK75完掘状況（西から）

⑦石製多孔円盤出土状況（南から）

⑧1号墳遠景（南から）

①2号墳墳頂部東西セクション西部（南から）

②2号墳C区北トレンチセクション（西から）

③2号墳C区サブトレンチNo1セクション（北西から）

④2号墳主体部出土位置（南東から）

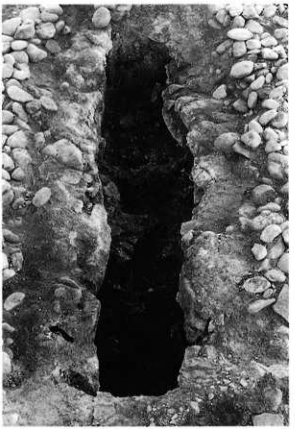
⑤2号墳主体部被覆粘土層確認状況（南西から）

⑥2号墳主体部蓋出土状況（北西から）

⑦2号墳主体部石棺被覆礫除去状況（北西から）

⑧2号墳主体部石棺天井石確認状況（北西から）

①2号墳主体部石棺天井石除去状況（北東から）



②2号墳主体部石棺内部確認状況（北東から）

③2号墳主体部乳文鏡出土状況（北西から）

④2号墳主体部箱式石棺確認状況（北東から）

①2号墳主体部石棺南壁（北東から）

②2号墳主体部石棺北壁（南西から）

③2号墳主体部床面検除去状況（北東から）

④2号墳主体部箱式石棺本体（北西から）

⑤2号墳西周溝遺物出土状況（北西から）

⑥2号墳A区周溝内壺輸出土状況（北東から）

⑦2号墳A区周溝完掘状況（南東から）

①2号墳西周溝完掘状況（西から）

②1号埴輪棺出土状況（北西から）

③1号埴輪棺被覆埴輪片出土状況（北から）

④1号埴輪棺本体出土状況（南から）

⑤1号埴輪棺本体出土状況（東から）

⑥1号埴輪棺下部敷設埴輪片出土状況（北から）

⑦2号埴輪棺被覆埴輪片出土状況及び
SD01セクション（北から）

⑧2号埴輪棺本体出土状況（南から）

①3号墳輪棺被覆埴輪片出土状況（北東から）

②3号墳輪棺本体出土状況（北から）

③3号墳輪棺下部敷設埴輪片出土状況（北から）

④4号墳輪棺被覆埴輪片出土状況（北東から）

⑤4号墳輪棺本体出土状況（南東から）

⑤5号墳輪棺被覆埴輪片出土状況（北西から）

⑦5号墳輪棺本体出土状況（南から）

⑧6号墳輪棺被覆埴輪片出土状況（北西から）

①6号埴輪棺本体出土状況（北西から）

②4・5・6号埴輪棺出土状況（南西から）

③7号埴輪棺被覆埴輪片出土状況（東から）

④7号埴輪棺本体出土状況（東から）

⑤8号埴輪棺被覆埴輪片出土状況（南東から）

⑥8号埴輪棺本体出土状況（南東から）

⑦9号埴輪棺被覆埴輪片出土状況（南東から）

⑧9号埴輪棺本体出土状況（南東から）

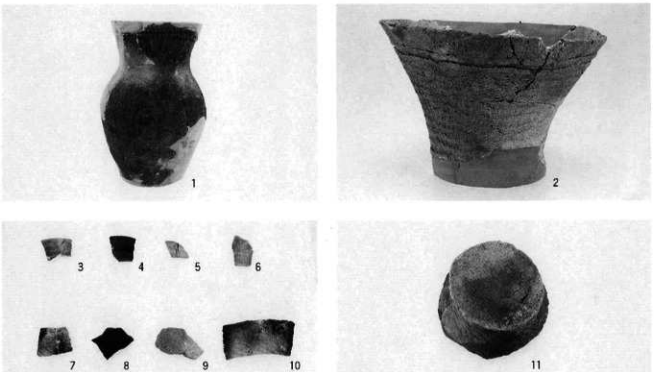
①SK39側壁抉込状況（東から）

②SK39側壁完掘状況（西から）

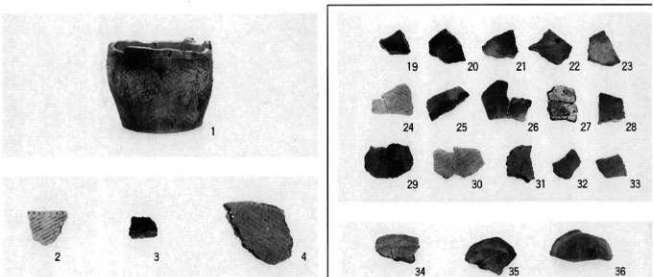
③SK42側壁抉込状況（東から）

④SK42側壁完掘状況（西から）

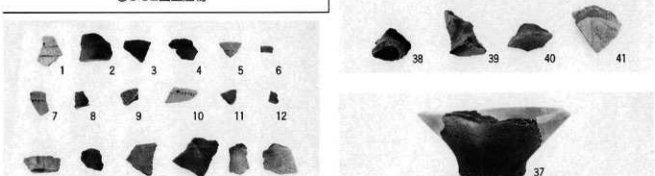
⑤第4次調査発掘参加者



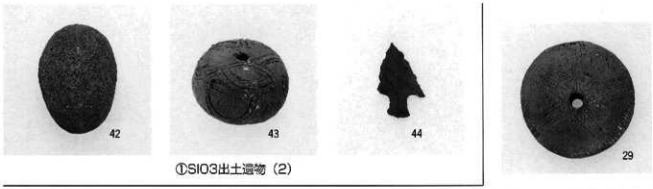
①SI01出土遺物



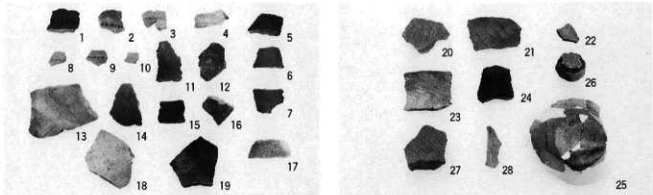
②SI02出土遺物



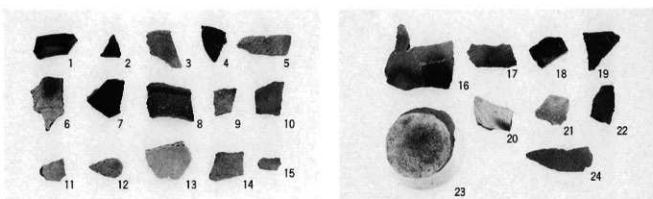
③SI03出土遺物（1）



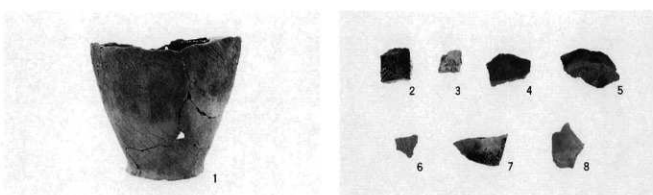
①SI03出土遺物（2）



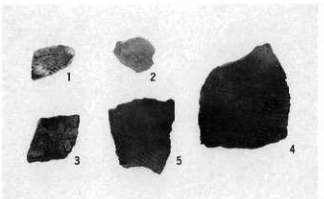
②SI04出土遺物



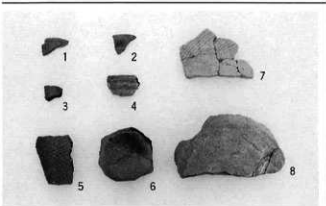
③SI05出土遺物



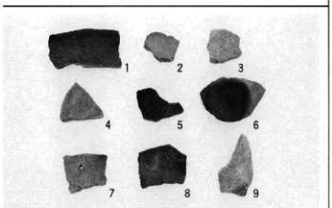
④SI06出土遺物



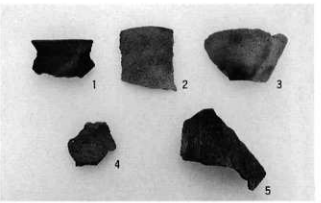
①SI07出土遺物

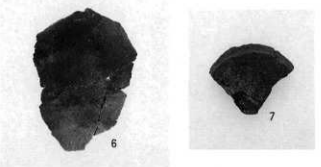


②SI08出土遺物

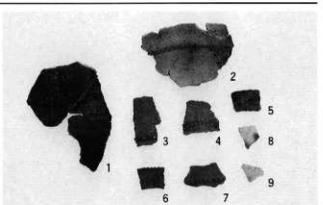


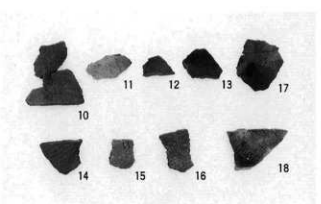
③SI09出土遺物



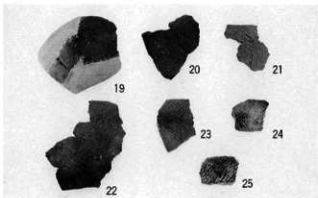


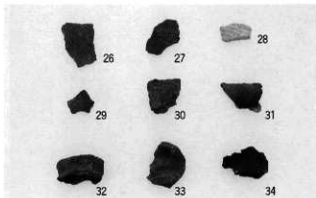
④SI11出土遺物

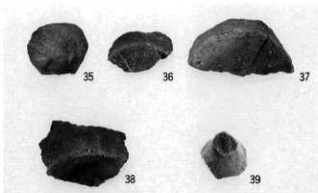




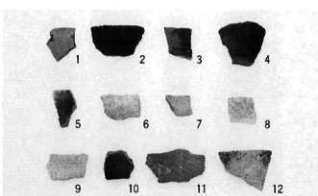
⑤SI12出土遺物（1）

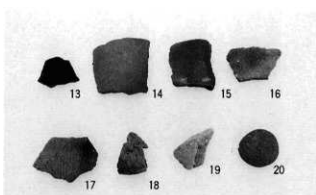




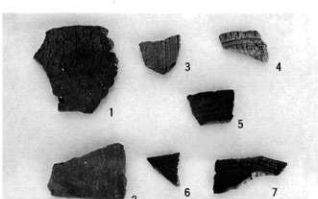


①SI12出土遺物（2）

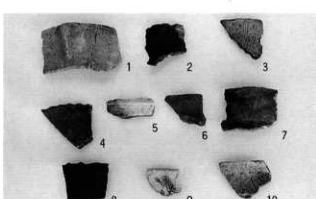




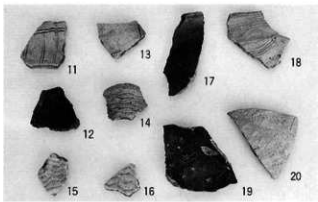
②SK75出土遺物

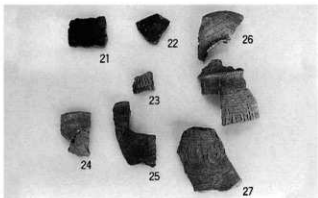


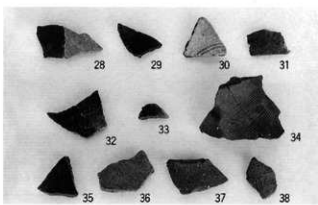
③遺構外出土遺物（縄文土器）

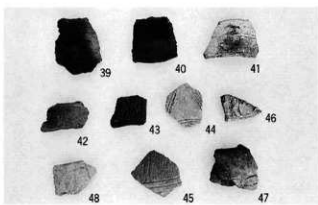


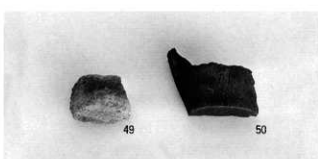
④遺構外出土遺物（弥生中期－1）



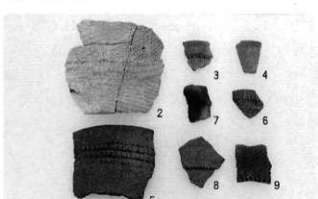




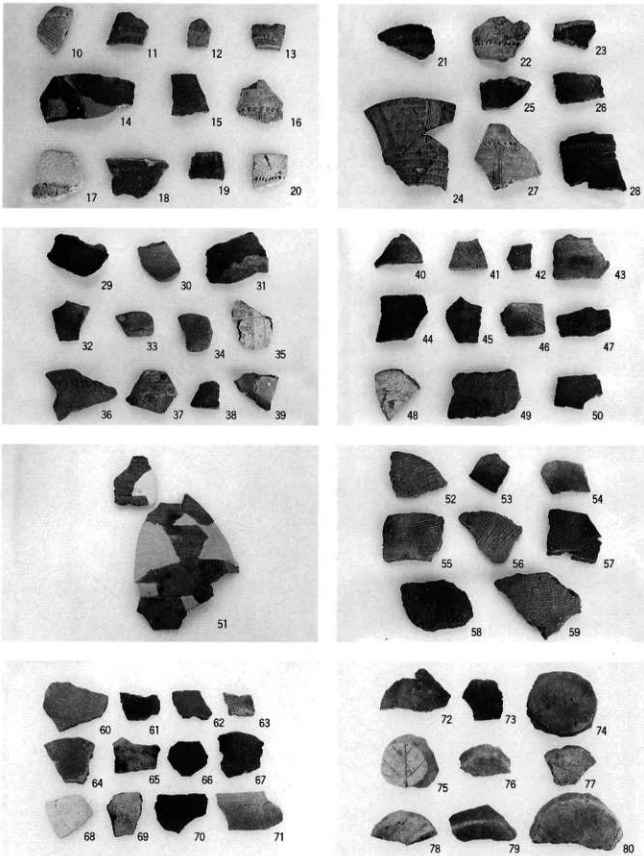




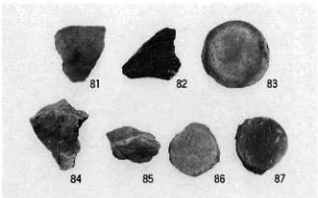
①遺構外出土遺物（弥生中期－2）

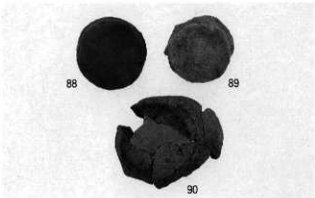


②遺構外出土遺物（弥生後期－1）



①遺構外出土遺物（弥生後期－2）

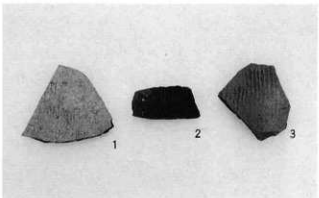




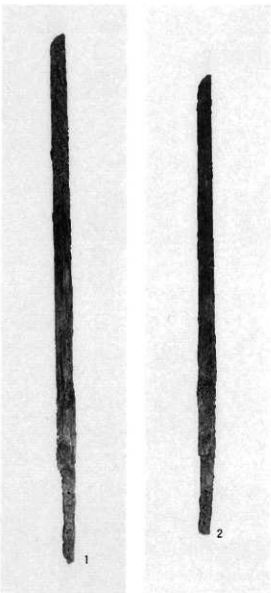
①遺構外出土遺物（弥生後期－3）

②遺構外出土紡錘車

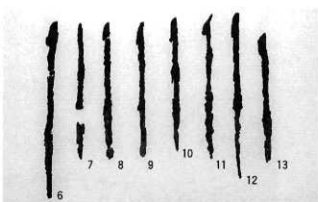
③遺構外出土石鏃・石器

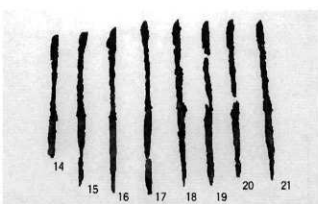


①1号墳出土遺物

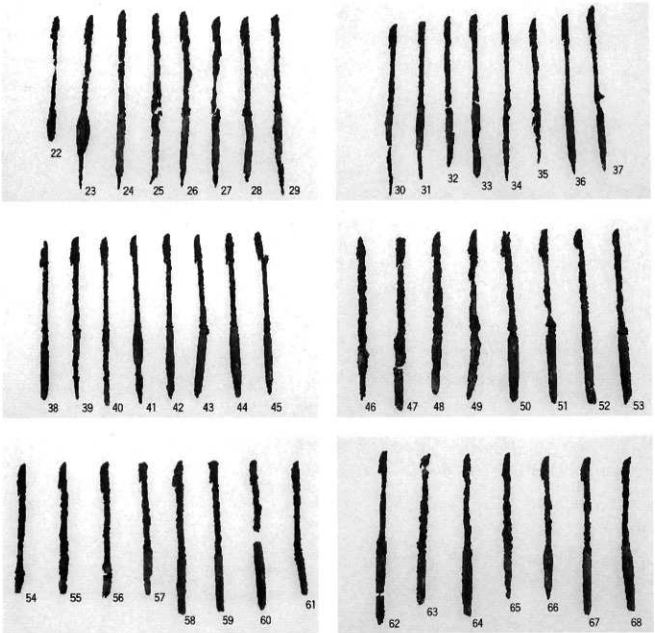


②2号墳主体部出土直刀



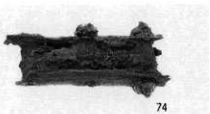


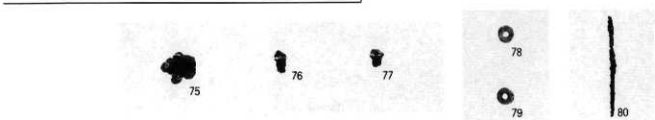
③2号墳主体部出土鉄鏃（1）



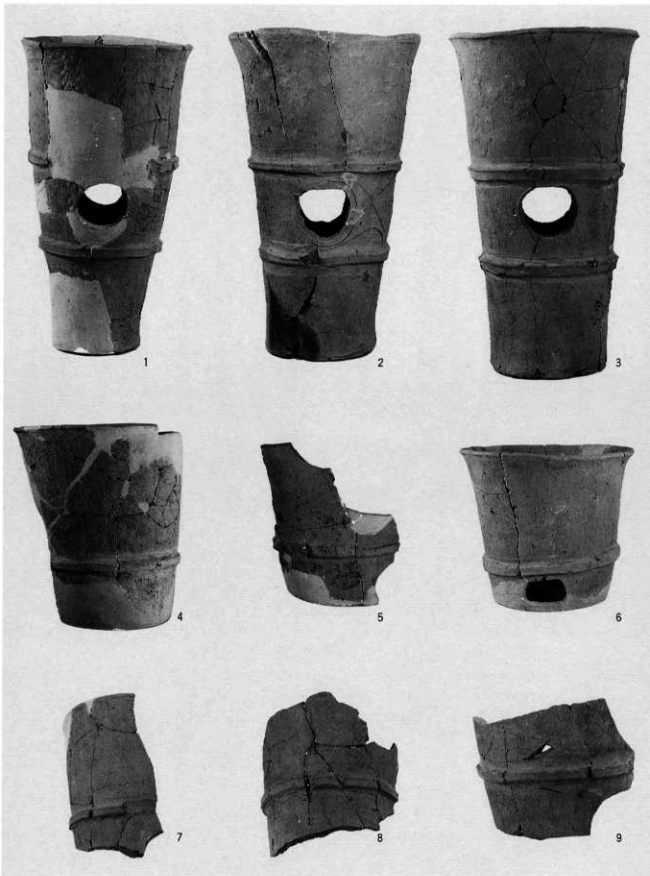
①2号墳主体部出土鉄鏃（2）

②2号墳主体部出土刀子

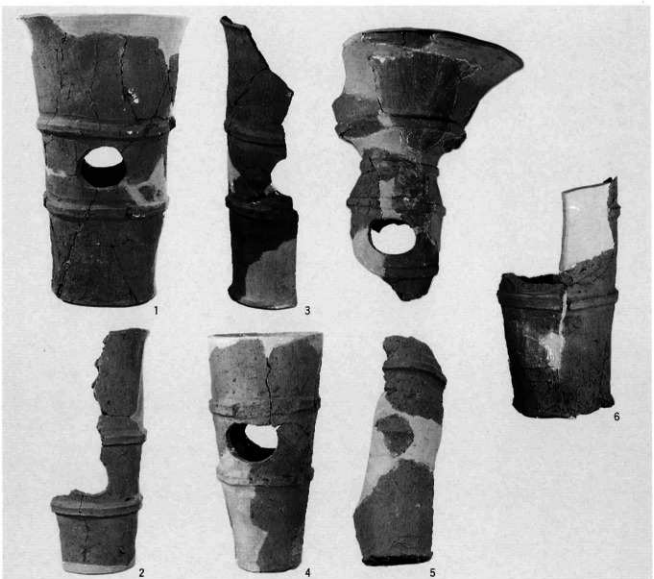




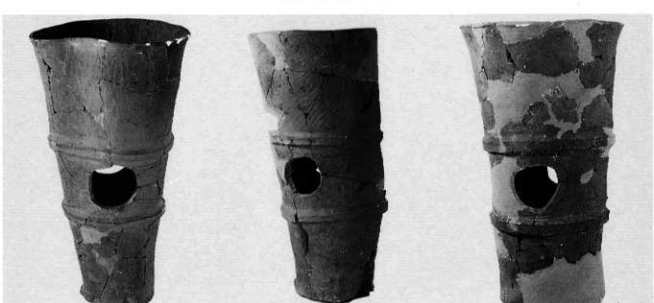
③2号墳主体部出土弓弭・両頭金具・臼玉・針状金具



①1号墳轜棺構成埴輪

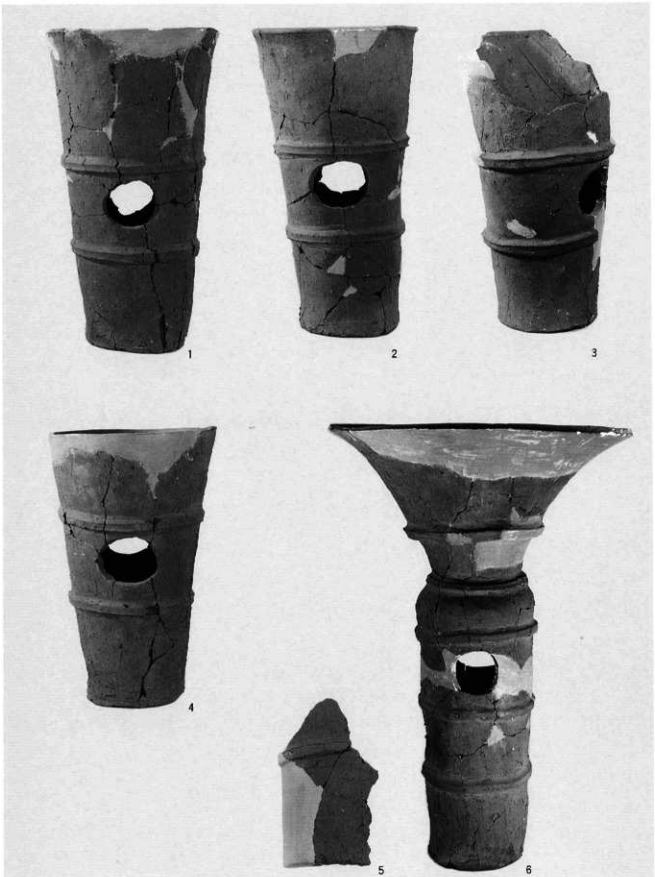


①2号埴輪棺構成埴輪

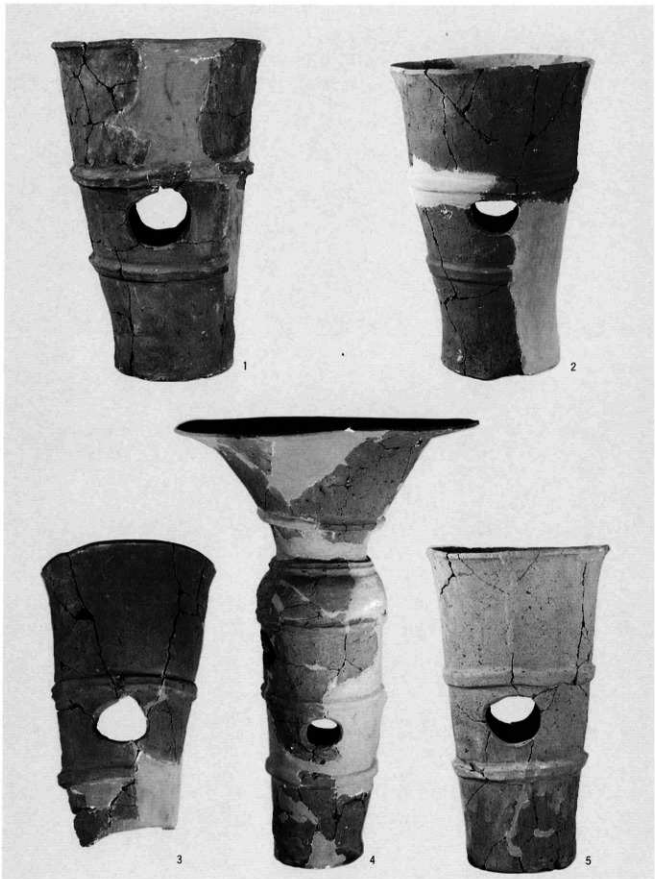


②3号埴輪棺構成埴輪（1）

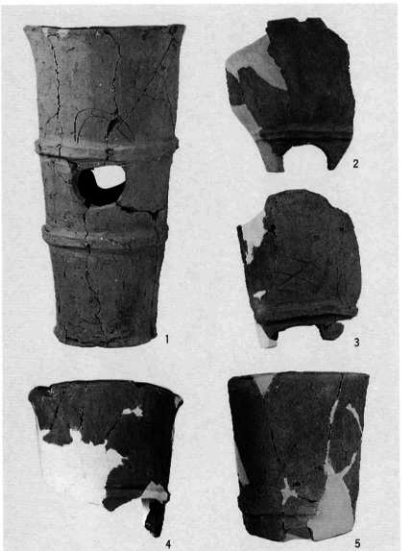
①3号墳葺石構成遺物（2）



①4号遺構構成埴輪

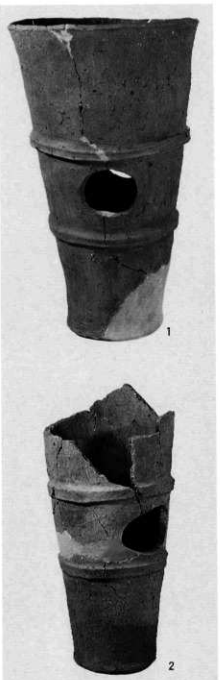


①5号墳鞆楕構成埴輪

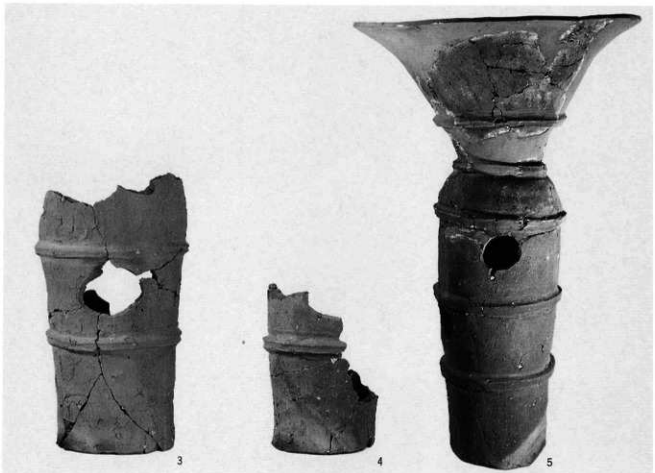


①6号墳輪棺構成墳輪

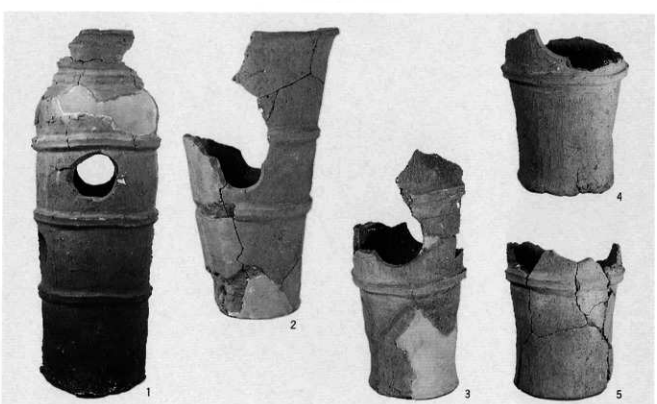
②7号墳輪棺構成墳輪



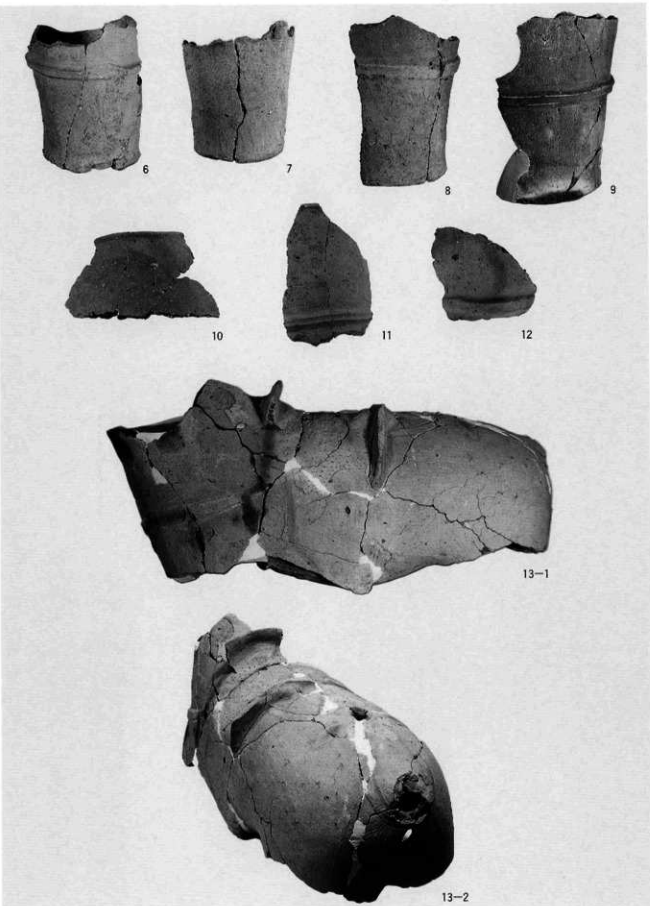
③8号墳輪棺構成墳輪（1）



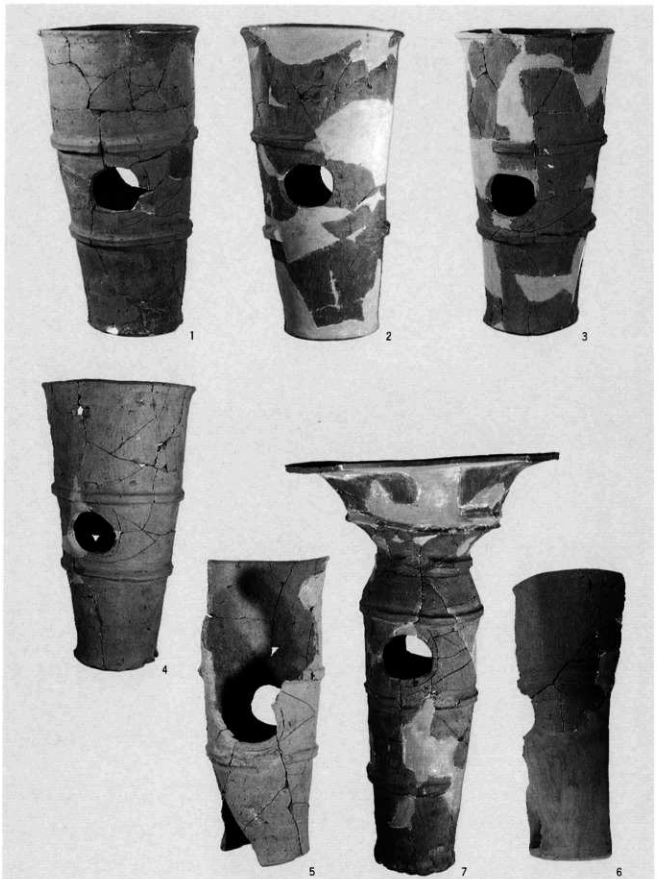
①8号墳輪棺構成埴輪（2）



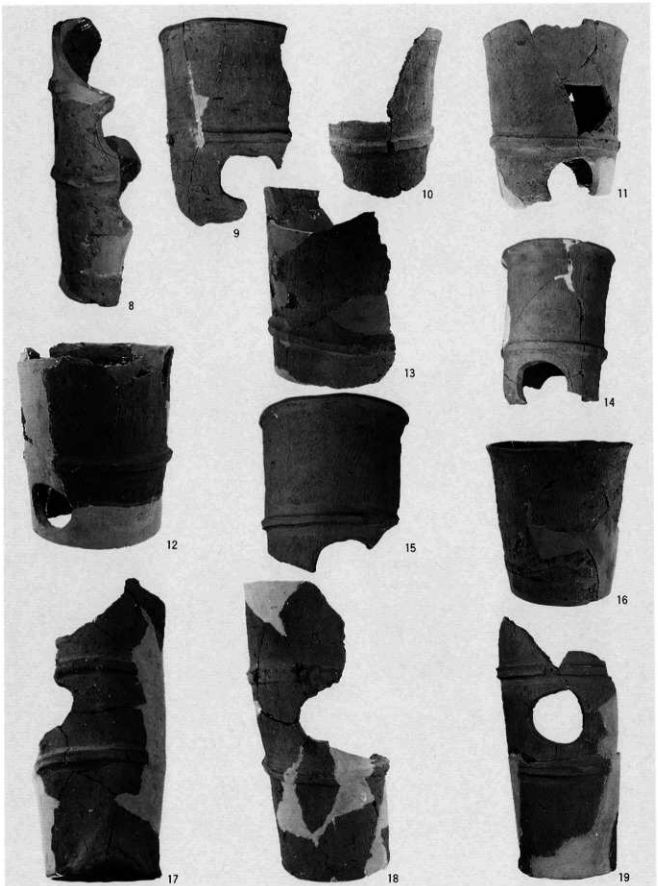
②9号埴輪棺構成埴輪（1）



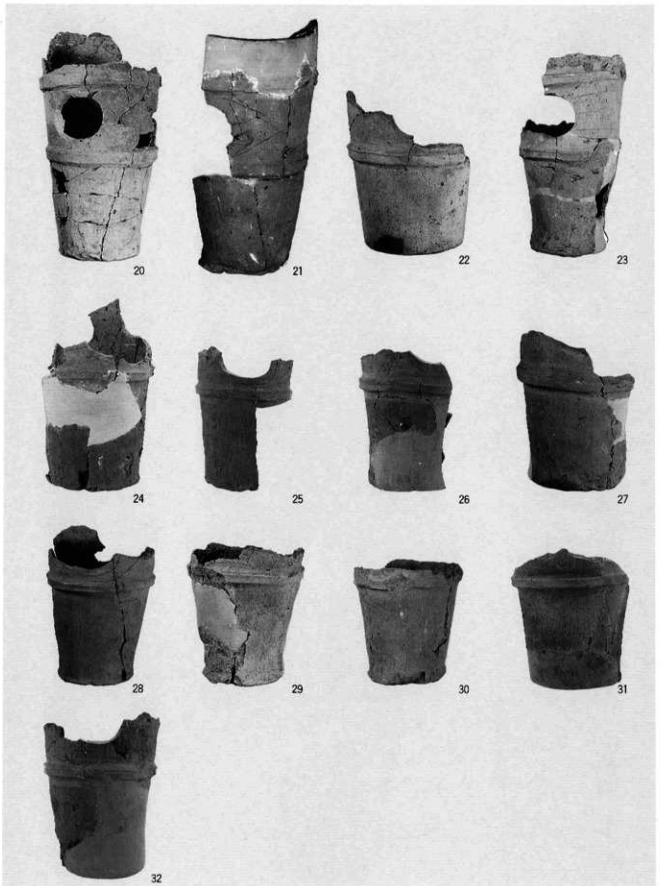
①9号墳輪棺構成埴輪（2）



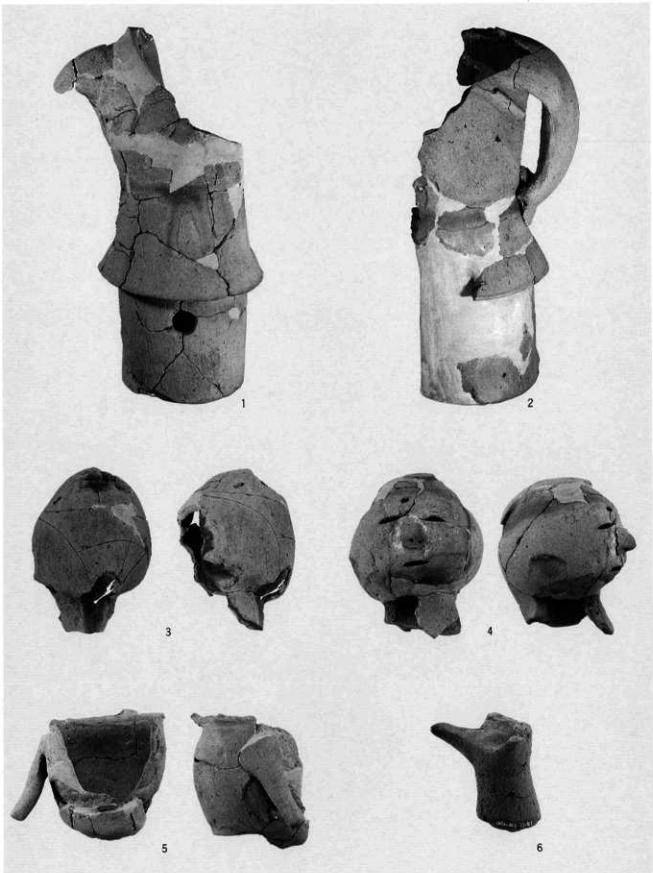
①周溝内出土埴輪（1）



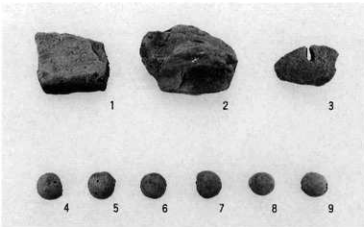
①周溝内出土埴輪（2）



①周溝内出土埴輪（3）

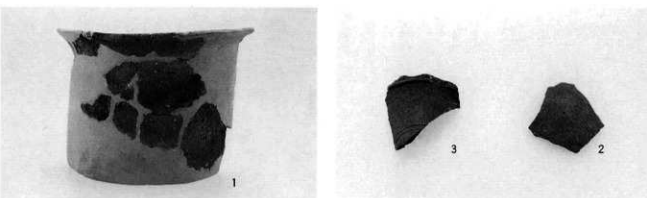


①2号墳出土人物埴輪



①2号墳出土馬形埴輪破片

②2号墳周溝内出土遺物



③SI14出土遺物

報告書抄録

ふりがな	ほんむらいせき
書名	本村遺跡
副書名	
巻次	
シリーズ名	宇都宮市埋蔵文化財報告書
シリーズ番号	第49集
編著者名	富川 努
編集機関	宇都宮市教育委員会
所在地	宇都宮市旭1丁目1番5号 TEL028−632−2764
発行年月日	西暦2004年（平成16年）3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
ほんむらこふんぐん 本村古墳群 ほんむらいせき 本村遺跡	うつのみやし 宇都宮市 ほんむら 本村	09201	3272 3275	36度 32分 5秒	139度 53分 0秒	19940720 ～ 20011003	11,000㎡	都市計画道路建設に伴う調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
本村古墳群	古墳	古墳	古墳 2基 道輪棺 9基 土坑	青銅品（鏡，方形板状金具）・鉄製品（直刀，刀子，鉄鏃，針状鉄製品）・弓弭・靫・白玉・土師器・須恵器・円筒埴輪（朝顔形を含む）・形象埴輪（人物，馬形）	舟形組合式箱形石棺 乳文鏡
本村遺跡	集落跡	弥生・古墳	竪穴住居跡 14軒 土坑	弥生土器・紡錘車（土製，石製）・石鏃・石斧（打製，磨製）	アメリカ式石鏃 扁平片刃石斧

宇都宮市埋蔵文化財調査報告　第49集

本村遺跡（弥生・古墳編）

平成16年3月発行

発　行　宇都宮市教育委員会文化課
（宇都宮市旭1丁目1番5号）
TEL　(028)632－2764

印　刷　㈱松井ピ・テ・オ・印刷
（宇都宮市陽東5丁目9番21号）
TEL　(028)662－2511